富田高石遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その１）報告書

2010

国　土　交　通　省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道17号上武道路は、埼玉県熊谷市西別府から前橋市田口町に至る延長40.5kmの大規模バイパスです。東京～前橋間の大規模バイパスの一環として、17号の渋滞解消と地域活性化を図るために計画されました。起点の熊谷市から国道50号までの延長27.4km区間については、昭和45年度から事業に着手し平成４年２月までに暫定二車線で供用しています。平成６年には、熊谷渋川連絡道路として地域高規格道路の指定を受けています。その後は、事業の進捗に伴い、平成20年６月には前橋市上泉町までの区間が開通し、交通混雑の緩和に寄与するとともに、沿線地域の生活道路として活用されています。

この上武道路が通過する地域には、国指定史跡『大室古墳群』『女堀』をはじめ、本県でも有数の埋蔵文化財が包蔵されています。このため、道路建設に先立っては、埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が、昭和48年度より群馬県教育委員会および当事業団によって行われてまいりました。

平成11年度からは、前橋市今井町の国道50号以北の発掘調査に着手、記録保存の措置が取られました。本書は、そのうちのひとつ前橋市富田町に所在する富田高石遺跡の調査報告書です。旧石器時代から近世の複合遺跡です。古墳時代の竪穴住居跡28軒をはじめとした遺構が検出され、大泉坊川沿いでの暮らしぶり、開発されていく様子を明らかにすることができました。中でも、古墳時代前期と後期の集落と、前方後方形を含む方形周溝墓が特徴となっています。

発掘調査から報告書の作成に至るまで、国土交通省関東地方整備局（旧建設省関東地方整備局）、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等からは、多くのご指導ご協力を賜りました。このたび、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が地域の歴史を解明する上で、多くの人に広く活用されることを願い序とします。

平成22年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長　須田 栄一

例　　　言

1　本書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う富田高石遺跡の発掘調査報告書である。

2　富田高石（とみだ　たかいし）遺跡は、群馬県前橋市富田町1316－１、1354－１～４、1356－１～５、1357－１～６、1359－１、1360－１・２、1376－１番地に所在する。遺跡名は、大字の「富田」と遺跡が広がる小字「高石」によって付けた。調査対象面積は、7,964.8㎡である。

3　事業主体　国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所（調査当時、建設省関東地方建設局高崎工事事務所）

4　調査主体　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5　調査期間　平成12年度　平成12年４月３日～平成13年３月31日
　　　　　　平成13年度　平成13年４月１日～平成13年９月30日
　　　　　　平成14年度　平成14年４月１日～平成14年７月５日

6　調査組織

管理・指導　小野宇三郎、吉田　豊、赤山容造、住谷永市、神保侑史、住谷　進、萩原利通、矢﨑俊夫、水田　稔、能登　健、巾　隆之、右島和夫

事務担当　小山友孝、関　晴彦、中沢　悟、大島信夫、植原恒夫、國定　均、笠原秀樹、小山建夫、竹内　宏、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、岡嶋伸昌、森下弘美、片岡徳雄、佐藤聖行、阿久津玄洋、田中賢一、栗原幸代、大澤友治、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、六本木弘子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田　茂

調査担当　平成12年度　飯塚卓二、女屋和志雄、安藤剛志
　　　　　平成13年度　女屋和志雄、青木さおり
　　　　　平成14年度　洞口正史、新井英樹

7　整理主体　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

8　整理期間　平成16年４月１日～平成17年３月31日　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
　　　　　　平成21年２月１日～平成21年３月31日　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
　　　　　　平成21年11月１日～平成22年２月28日　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

9　整理組織

管理・指導　高橋勇夫、須田栄一、木村裕紀、津金澤吉茂、相京建史、萩原　勉、笠原秀樹、佐藤明人、石坂　茂、右島和夫、西田健彦

事務担当　大木紳一郎、石井　清、佐嶋芳明、國定　均、須田朋子、斉藤恵利子、柳岡良宏、佐藤聖行、今泉大作、栗原幸代、田口小百合、矢島一美、齋藤陽子、高橋次代、今井もと子、内山佳子、若田　誠、本間久美子、北原かおり、狩野真子、武藤秀典

整理担当　平成16年度　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　金子直行、赤熊浩一、大谷　徹、安生素明
　　　　　平成20年度　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　女屋和志雄
　　　　　平成21年度　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　女屋和志雄

10　本書作成の担当者は次のとおりである。

編　集　女屋和志雄　　デジタル編集　齊田智彦

執　筆　第5章　パレオ・ラボ

観察表　金子直行、赤熊浩一、大谷　徹、安生素明、亀田好美、橋本　淳、岩崎泰一

上記以外　女屋和志雄　　遺構・遺物観察指導、助言　新井　潔、友廣哲也、神谷佳明、石守　晃、飯森康広

遺構写真　各発掘担当者　遺物写真　佐藤元彦

保存処理　関　邦一、小材浩一、津久井桂一、増田政子、多田ひさ子、長岡久幸

11　石器・石製品の石材同定は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による。

12　委託業務　種実同定：パレオ・ラボ、遺構図面作成：株式会社横田調査設計

13　発掘調査及び本書の作成にあたり、次の諸氏よりご助言を得た。記して感謝いたします。

前橋市教育委員会　前原　豊、小島純一、高山　剛、大胡町教育委員会　山下歳信　楢崎修一郎

14　出土遺物と記録資料は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡　　例

1　挿図中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は、日本平面直角座標系（国家座標）第IX系である。

2　挿図の縮尺は、特に記載のない限り以下の通りである。

遺構　1/60住居跡　1/30炉・カマド・貯蔵穴　1/120・1/80・1/60・1/30方形周溝墓　1/100・1/40掘立柱建物跡　1/60土坑　1/400・1/80・1/40溝　1/60・1/30道　1/500全体図

遺物　1/3器台・坏・埦・皿・鉢・高杯・深鉢・小型甕・短頸壺・甑・瓶　1/4甕・台付甕・深鉢　1/3尖頭状石器・打製石斧・削器・磨石・凹石・砥石・鉄製品　1/2手捏・垂飾・鉄製品・石製模造品　2/3尖頭器・石鏃・石匙　1/1鉄製品・銭

3　写真図版の縮尺率は、挿図とは一致しない。

4　遺物観察表にある残存状態は、口縁、胴部、底部の各部位を示して全体の割合を数値で表した。ただし、全体が想定できない場合は、(　) 現存値、単位は㎝である。

5　土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」によった。内外面で違う場合は外面で表し、斑模様の場合は中間色で表現している。

7　本書では、テフラの呼称として次の略語を使用する。

浅間A軽石　As-A　1783（天明3）年　浅間B軽石　As-B　1108（天仁元）年　浅間C軽石　As-C　4世紀初頭

8　本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

第1図　国土地理院発行　地形図　1：5万「前橋」

第2図　群馬県　10万分の1　地質図（同作成委員会　1999）

第3図　前橋市発行　地形図　1：1万

目　　次

序・例言・凡例
目次・挿図目次

第１章　遺跡の位置と調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　　1　遺跡の位置
　　2　上武道路と発掘調査
第２章　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　　1　遺跡の位置と地形
　　2　周辺の遺跡
第３章　発掘調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　　1　発掘調査の方法
　　2　調査の経過
　　3　整理作業の経過
第４章　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第２節　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第３節　古墳時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
　　1　概要　　2　竪穴住居跡　　3　方形周溝墓
　　4　壺棺
第４節　平安時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
　　1　概要　　2　溝　　3　道
第５節　中世および近世・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
　　1　概要　　2　掘立柱建物跡　　3　溝
　　4　土坑　　5　井戸　　6　集石
　　7　谷地
観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
第５章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・157
　　1　富田高石遺跡から出土した炭化種実
　　2　石材分析
　　3　プラント・オパール分析
第６章　調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165
第１節　はじめに
第２節　富田高石遺跡の集落変遷
写真図版
抄録・奥付

挿図目次

第1図	富田高石遺跡の位置（上）と上武道路（下）	2
第2図	赤城山麓の地形区分	4
第3図	周辺遺跡	8
第4図	グリッド配置図	9
第5図	基本土層と周辺地形	10
第6図	1号炉遺構図・遺物図（1）	14
第7図	1号炉遺物図（2）	15
第8図	2号・3号・4号・28号・32号・37号土坑遺構図	16
第9図	遺構外遺物図　土器	17
第10図	遺構外遺物図　石器（1）	18
第11図	遺構外遺物図　石器（2）	19
第12図	1号住居跡遺構図（1）	20
第13図	1号住居跡遺構図（2）・遺物図	21
第14図	2号住居跡遺構図（1）	22
第15図	2号住居跡遺構図（2）・遺物図	23
第16図	3号住居跡遺構図（1）	24
第17図	3号住居跡遺構図（2）・遺物図	25
第18図	4号住居跡遺構図	26
第19図	4号住居跡遺物図（1）	27
第20図	4号住居跡遺物図（2）	28
第21図	5号住居跡遺構図（1）	29
第22図	5号住居跡遺構図（2）	30
第23図	5号住居跡遺物図	31
第24図	6号住居跡遺構図（1）	32
第25図	6号住居跡遺構図（2）・遺物図	33
第26図	7号住居跡遺構図（1）	34
第27図	7号住居跡遺構図（2）	35
第28図	7号住居跡遺構図（3）	36
第29図	7号住居跡遺物図（1）	37
第30図	7号住居跡遺物図（2）	38
第31図	8号住居跡遺構図（1）	39
第32図	8号住居跡遺構図（2）	40
第33図	8号住居跡遺物図	41
第34図	9号住居跡遺構図・遺物図	42
第35図	10号住居跡遺構図（1）	43
第36図	10号住居跡遺構図（2）	44
第37図	10号住居跡遺構図（3）	45
第38図	10号住居跡遺物図（1）	46
第39図	10号住居跡遺物図（2）	47
第40図	11号住居跡遺構図（1）	48
第41図	11号住居跡遺構図（2）・遺物図（1）	49
第42図	11号住居跡遺物図（2）	50
第43図	12号住居跡遺構図（1）	51
第44図	12号住居跡遺構図（2）	52
第45図	12号住居跡遺構図（3）	53
第46図	12号住居跡遺物図	54
第47図	13号住居跡遺構図（1）	55
第48図	13号住居跡遺構図（2）	56
第49図	13号住居跡遺構図（3）・遺物図（1）	57
第50図	13号住居跡遺物図（2）	58
第51図	14号住居跡遺構図（1）	59
第52図	14号住居跡遺構図（2）	60
第53図	14号住居跡遺構図（3）	61
第54図	14号住居跡遺構図（4）	62
第55図	14号住居跡遺物図（1）	63
第56図	14号住居跡遺物図（2）	64
第57図	14号住居跡遺物図（3）	65
第58図	14号住居跡遺物図（4）	66
第59図	15号住居跡遺構図（1）	66
第60図	15号住居跡遺構図（2）	67
第61図	16号住居跡遺構図・遺物図	67
第62図	17号住居跡遺構図	68
第63図	18号住居跡遺構図・遺物図	69
第64図	19号住居跡遺構図（1）	70
第65図	19号住居跡遺構図（2）	71
第66図	19号住居跡遺物図	72
第67図	20号住居跡遺構図（1）	73
第68図	20号住居跡遺構図（2）	74
第69図	20号住居跡遺構図（3）・遺物図（1）	75
第70図	20号住居跡遺物図（2）	76
第71図	21号住居跡遺構図（1）	77
第72図	21号住居跡遺構図（2）・遺物図（1）	78
第73図	21号住居跡遺物図（2）	79
第74図	23号住居跡遺構図（1）	80
第75図	23号住居跡遺構図（2）	81
第76図	23号住居跡遺物図	82
第77図	24号住居跡遺構図・遺物図（1）	83
第78図	24号住居跡遺物図（2）	84
第79図	25号住居跡遺構図（1）	84
第80図	25号住居跡遺構図（2）	85
第81図	25号住居跡遺構図（3）・遺物図（1）	86
第82図	25号住居跡遺物図（2）	87
第83図	26号住居跡遺構図（1）	88
第84図	26号住居跡遺構図（2）	89
第85図	26号住居跡遺構図（3）・遺物図	90
第86図	27号住居跡遺構図（1）	91
第87図	27号住居跡遺構図（2）	92
第88図	27号住居跡遺構図（3）	93
第89図	27号住居跡遺構図（4）	84
第90図	27号住居跡遺構図（5）・遺物図（1）	95
第91図	27号住居跡遺物図（2）	96
第92図	27号住居跡遺物図（3）	97
第93図	27号住居跡遺物図（4）	98
第94図	27号住居跡遺物図（5）	99
第95図	28・29号住居跡遺構図（1）	100
第96図	28・29号住居跡遺構図（2）	101
第97図	28・29号住居跡遺構図（3）	102
第98図	28・29号住居跡遺物図	103
第99図	1号方形周溝墓遺構図（1）	104
第100図	1号方形周溝墓遺構図（2）	105
第101図	1号方形周溝墓遺構図（3）・遺物図（1）	106
第102図	1号方形周溝墓遺物図（2）	107
第103図	2号方形周溝墓遺構図・遺物図	108
第104図	3号方形周溝墓遺構図（1）	109
第105図	3号方形周溝墓遺構図（2）・遺物図（1）	110
第106図	3号方形周溝墓遺物図（2）	111
第107図	3号・4号溝遺構図	112
第108図	3号溝遺物図	113
第109図	5号溝遺構図	113
第110図	1号道遺構図・遺物図	114
第111図	1号掘立柱建物跡遺構図	115
第112図	2号掘立柱建物跡遺構図（1）	116
第113図	2号掘立柱建物跡遺構図（2）	117
第114図	3号掘立柱建物跡遺構図（1）	117
第115図	3号掘立柱建物跡遺構図（2）	118
第116図	4号掘立柱建物跡遺構図	118
第117図	5号掘立柱建物跡遺構図	119
第118図	1号・2号溝遺物図	120
第119図	1号・2号溝遺構図	121
第120図	1号・5号・6号・7号・8号・9号土坑遺構図	128
第121図	10号～14号・16号・22号～25号・29号～31号土坑遺構図	129
第122図	33号・34号土坑遺構図	130
第123図	35号・36号・39号土坑遺構図	131
第124図	38号・40号・41号・42号・43号・45号土坑遺構図	132
第125図	44号・46号・48号・49号・50号・51号土坑遺構図	133
第126図	47号・52号・53号・54号土坑遺構図	134
第127図	5号・12号・13号・30号・34号・41号・42号・44号・46号・47号土坑遺物図	135
第128図	1号・2号井戸遺構図・遺物図	136
第129図	1号・2号・3号集石遺構図	137
第130図	谷地、1号・2号ピット遺構図	138
第131図	遺構外遺物図	139
第132図	縄文時代の遺構分布図	166
第133図	古墳時代前期の遺構分布図	167
第134図	古墳時代後期の遺構分布図	169
第135図	平安時代の遺構分布図	170
第136図	中・近世の遺構分布図	171
第137図	古墳時代前期遺物集成図（1）	173
第138図	古墳時代前期遺物集成図（2）	174
第139図	古墳時代後期遺物集成図（1）	175
第140図	古墳時代後期遺物集成図（2）	176
第141図	古墳時代後期遺物集成図（3）	177
第142図	古墳時代前期住居跡集成図	178
第143図	古墳時代後期住居跡集成図	179
第144図	中世遺構配置図	180

第１章　遺跡の位置と調査経過

1　遺跡の位置

富田高石（とみだ　たかいし）遺跡は、群馬県の中央部、前橋市富田町1360－１番地ほかにある。ＪＲ両毛線の駒形駅から北へ3.7km、最近は市街地近郊のために姿をかえつつあるが、米麦養蚕を主としてきた純農村地帯の一角である（第１図）。

発掘調査は、一般国道17号の大規模バイパス、通称「上武道路」の建設に伴うもので、平成12年から同14年にかけて行われた。対象とした面積は7,964.8㎡である。遺跡名は、県と前橋市が協議の上、旧大字の「富田」に小字「高石」をつけて命名した。なお、群馬県遺跡情報システム（WEB版）では、前橋市遺跡番号00287「高石遺跡」として登録されている範囲に含まれる。

2　上武道路と発掘調査

上武道路は、埼玉県熊谷市西別府から群馬県前橋市田口町に至る延長40.5kmの大規模バイパスで、地域の基盤整備と国道17号の混雑緩和のために計画された地域高規格道路である。昭和45年度に交差する国道50号以南の27.4kmがⅠ期工事として事業化され、昭和50年度着工、平成元年度に開通している。

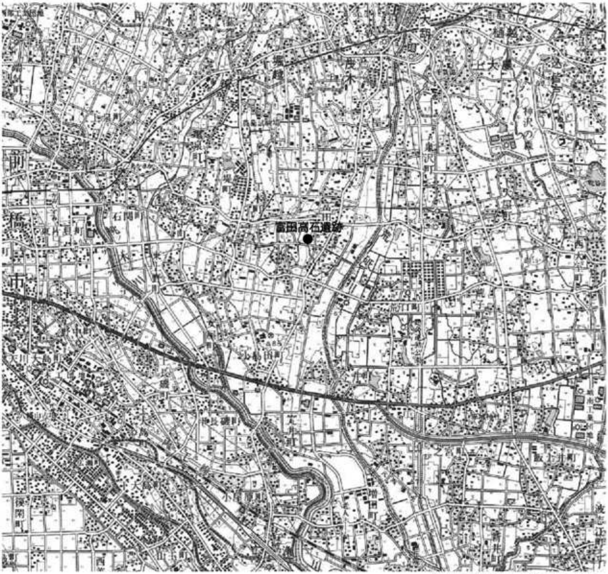
建設に先立っては、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）によって35遺跡、延べ53万4,000㎡が発掘調査され、26冊の発掘調査報告書にまとめられている。関越自動車道新潟線、上越新幹線とあわせて３幹線とよばれる一大事業で、事業の経緯と成果は、『地域をつなぐ　未来へつなぐ-上武道路埋蔵文化財22年の軌跡』（事業団　1995）としてまとめられている。

国道50号以北は、平成元年度、延長13.1kmのうち、前橋市今井町～荻窪町までの4.9km区間、主要地方道前橋大間々桐生線までが事業化された。これがⅡ期工事、７工区と呼ばれている区間である。Ⅰ期工事と同様、建設に先立ち、建設省（現在国土交通省）関東地方建設局と群馬県教育委員会で協議、埋蔵文化財が破壊される地域においては発掘調査を実施することに合意した。その内容が、国土交通省、群馬県教育委員会、事業団の三者で締結した、平成11年４月１日付け「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その１）の実施に関する協定書」である。

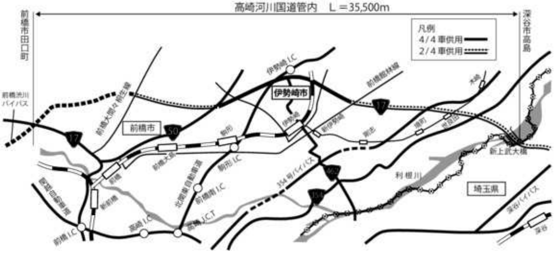
その中には対象遺跡、調査面積、調査費用などが盛り込まれ、事業の完了は、国道50号から前橋市堤町までが整理作業を含めて平成18年３月31日とした。その後、堤町から終点荻窪町までの間を発掘調査の対象とするため協定は変更、７工区は江木町を境として起点側から７－１工区と７－２工区に分けられた。

発掘調査は、平成11年度から事業団が「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その１）」として受託し、４月に前橋市富田町所在富田細田遺跡、８月からは富田西原遺跡という２班体制で開始した。当面の目標として県道前橋今井線までが急務とされたのと、調査開始後、買収が順調に進んだことをうけて、翌12年４月からは調査の体制を増強することになった。今井地区は２班、富田地区では３班という体制がそれで、本遺跡は富田地区のひとつである。

なお、上武道路は、平成16年３月に県道前橋今井線までが暫定２車線で開通し、同20年６月に県道前橋大間々桐生線まで延伸されている。現在は、最後に残る８工区で埋蔵文化財の調査と工事が進行中である。



国土地理院「前橋」１/50000に一部加筆



第１図　富田高石遺跡の位置（上）と上武道路（下）

第２章　遺跡の立地と環境

1　遺跡の位置と地形

赤城山麓の地形　赤城山は、那須火山帯の南端に位置する複合成層火山で、標高 1,828 mの黒檜山を最高峰に、荒山、地蔵岳、鍋割山、鈴ヶ岳など 10 あまりの峰々の総称である。日本百名山の一つで、県内では利根川をはさんで一対の「榛名山」、長野県境に近い「妙義山」と合わせて『上毛三山』と呼ばれている。

火山活動は、古期成層火山形成期（40 ～ 50万年前から13万年前）、新期成層火山形成期（13万年前から４～５万年前）、その後の中央火口丘形成期の３期に分けられている。当初は2,000mを超す成層火山であったものが、噴火と山体崩壊を繰り返して現在の姿に至ったと考えられている。中央火口丘群を形成した後は、現在まで活動は休止しており火山麓扇状地の形成期になっている。

「裾野は長し赤城山」、これは県内で広く普及している『上毛カルタ』の一枚で、裾野の広さは富士山に次ぐといわれている。その裾野も、赤城神社が鎮座する標高500m付近からは険しさを増す。鎮座するのは、山と麓を区別したかのようで多くの輻射谷はこの付近ではじまり、畑や水田が見られる限界である（有末　1984）。一方、裾野の南端は、標高90 ～ 130m前後で高さが数メートルの崖となり、地元では崖のことを「七里ヶ堤」と呼んでいる。これを境として旧利根川の氾濫原である広瀬川低地帯と接し、対岸は前橋台地、さらにその先は関東平野へと続いている。

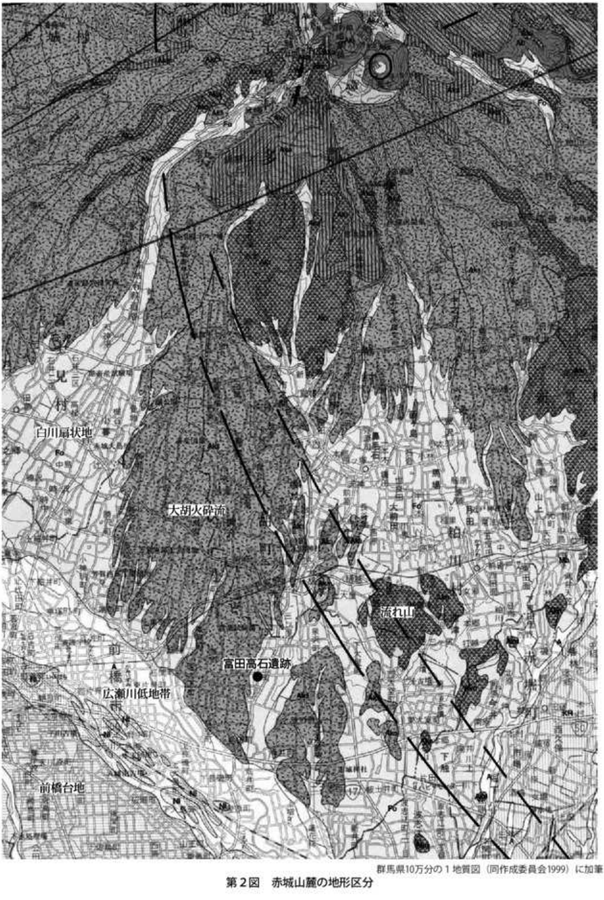
南麓の景観は、荒砥川を境に東西に二分されている。西は、基底に大胡火砕流が堆積する一帯や赤城白川沿いの扇状地が続き、なだらかで遮るものが少ない。一方の東には、山体崩壊で発生した岩屑なだれによってできた「流れ山」と呼ばれる小丘陵が連なり、起伏に富んだところをみせている。多田山、石山、峰岸山などが流れ山の代表格で、南端は権現山、さらに天神山と伊勢崎市の南部にまで達している。東には、唯一山頂から流れ出す粕川をはじめ、神沢川、桂川、早川、鏑木川など西に比べて河川の多いことも特徴で、流域は水田の比率が高い谷底平野となっている。

しかし、昭和27年大正用水、さらに昭和43年群馬用水が完成するまで、南麓は長い間水不足に苦しんだ。苦闘の歴史は古代の女堀にまでたどりつくといってもよい。かつては県内有数の養蚕地帯であったのも、桑に適した地味もあるが、それ以上に水が乏しいからである。そんな中でも谷地田が広がるのは、堤と呼ばれている大小の溜池の存在が大きい。広い裾野とともに南麓らしい景色の一つである。（第１・２図）。

富田高石遺跡の立地　遺跡は、標高105m～ 107m、荒砥川と大泉坊川にはさまれた舌状台地に位置する。その先端部に近く、周囲は支谷で刻まれている。谷地は幅が100m前後、一面の水田である。土地改良されたとはいえ、その姿は古代に遡る。

米麦養蚕が基幹の純農村地帯であったが、戦後はこれに酪農が加わった。最近では大規模な住宅団地「ローズタウン」の分譲など、上武道路開通を契機として変貌が著しい。

明治11年『「上野国郷村帳」』勢多郡富田村の項から引用すると、村は天正年中信沢右近少将高家卿の長男御代丸が中興。地勢は、北に赤城山を遙望し南は村落聯綿として田圃平坦。地味は、真色赤あり黒あり総じて砂にてその質悪し稲粱を植えるとも薄利にして殊更時々旱に苦しむ。物産は、米質中等出来高529石４斗３升、下等出来高386石１斗。薪4330貫目、蚕糸質美出来高32貫目、繭質中等出来高25貫目、



群馬県10万分の１地質図（同作成委員会1999）に加筆

第２図　赤城山麓の地形区分

その他木綿、菜種、芋、茄子、小麦、蕎麦等がある。税地は、田が反別75町４畝23歩。畑57町６反２畝。宅地が反別13町９反４畝16歩。林が反別109町２反１畝６歩とある。

2　周辺の遺跡

群馬県遺跡情報検索システム（WEB版）によると、周辺には遺跡が多い。範囲は、台地だけでなく、まわりの低地にまで及んでいる。その具体像は、上武道路の調査でも明らかとなったが、県道大胡藤岡線、ローズタウンなどの調査成果を加えると、問題は解決するだけでなく、課題も浮かんでくる。

本遺跡では、旧石器時代から近世に至る遺構が検出されている。ここでは検出された内容に沿うように遺跡の周辺を時代別に概観し、地域の状況や課題について述べる（第３図）。

旧石器時代

７工区では、亀泉西久保Ⅱ遺跡（１）を除いた全ての遺跡で遺物が出土した。成果は、『上武道路・旧石器時代編（１）』にまとめられている。これまでは、二之宮谷地遺跡（２）、荒砥北三木堂遺跡（３）など暗色帯からの出土が多かったが、As-BPよりも上層や上泉唐ノ堀遺跡（４）のように３面で出土した遺跡もある。上武道路が通過した箇所と同様、周辺の地域でも遺跡が多いのか注目するところである。

縄文時代

広い裾野が生活の場としては格好の舞台である。遺跡は、前期が馬の背状の丘陵性の台地に多く、中期になると一段高い台地性地帯に移り、水系ごとにまとまりがあると指摘されている（鬼形　1996）。

草創期では、隆線文土器と丸ノミ型石斧が共伴した小島田八日市遺跡（５）がある。その近くには荒砥北三木堂遺跡（３）の無文土器がある。

遺跡の数が最も多いのは前期後半である。７工区では、今井道上Ⅱ遺跡（６）、江木下大日遺跡（７）など、住居跡数軒の遺跡が点在している。時差はわずかで、活発な往来のあったことがわかる。

もう一つのピークは中期後半である。上ノ山遺跡（８）は40軒を超す集落が、五代伊勢宮遺跡（９）では稀少な中期前半の土坑群が注目である。今井白山遺跡（10）は、荒砥川の沖積地と思われていた所で中期後半の集落が検出されている。晩期では貴重な八坂遺跡が、荒砥川と広瀬川の合流点にある(11)。次の時代を考えると、台地上だけでなく広瀬川低地帯（以下低地帯）にも目をむける必要がある。

弥生時代

前後の時代にくらべて遺跡は少ない。ただ、少ないと決定付けるには、慎重に検討し結論付ける必要がある。小規模の遺跡が点在する程度である。荒口前原遺跡（12）はそのひとつで、中期後半の竜見町式と山草荷式が共伴している。

集落形成は、後期も後半、樽式中枢域の周縁に分布する赤井戸式と呼んでいた終末期になってからである。富田東原遺跡（13)、荒砥上ノ坊遺跡（14）などで、７工区では富田宮下遺跡（15)、富田西原遺跡（16）で住居跡が検出されて貴重な一例となった。南麓地域では、後期の集落が欠落し、中期および終末期には外来的要素の強いことが特徴である。また、後期の稀薄さが逆に古墳時代の導入・展開を容易にしたという指摘もある（深澤　2004)。

古墳時代

芳賀東部団地遺跡（17）は、前期と中期で住居跡73軒が検出されている。初期の段階では、川に面するか近いことが必須条件のようで、芳賀団地遺跡群は藤沢川、寺沢川沿いでは亀泉坂上遺跡（18)、萱野遺跡（19)、大泉坊川沿いで本遺跡のほか富田宮下遺跡（15)、富田西原遺跡（16）がある。ただし、荒砥川の西では上流部への動きは鈍く、堀越中道遺跡（20）が目立つ程度である。

低地帯では、石関西簗瀬遺跡（21)、石関西田Ⅱ

遺跡（22）で５世紀代の集落が姿を現し、野中天神遺跡（23）でも可能性が示唆されている。箕井八日市遺跡（24）の豪族居館、組合式石棺の今井神社古墳（25）は、低地帯を一望できる位置にある。また、下流の下増田越渡遺跡（26）、常木遺跡（27）では、方形周溝墓も検出されている。さらに、利根川に近い田口下田尻遺跡で４世紀代にはじまる集落が検出され、これまでの低地帯に対する見方をかえる成果として注目を集めている（齋藤　2006）。弥生時代は可能性にとどまるが、桃ノ木川沿いに住まいを構え、開田していた可能性が高くなってきた。

６世紀前半、低地帯と寺沢川との合流点に全長70ｍの前方後円墳正円寺古墳（28）が作られ、次いで６世紀後半低地帯に桂萱大塚（29）、台地上にはオブ塚（30）と続く。これらは地域の首長墓で、大室古墳群と関連していたとみられている（小林　2002）。

７世紀になると、大日塚（31）、新田塚古墳（32）が続く。周辺には、10～20基前後で群集墳が点在している。終末期古墳は、地域の有力者に限られるといわれるが、堀越古墳（33）と約２㎞の至近距離に萱野Ⅱ遺跡１号墳（34）がある。

『上毛古墳綜覧』（1938）によると、古墳の数は荒砥川の西にある桂萱村79基、芳賀村64基、南橘村45基、木瀬村19基である。これに富士見村の29基を合わせても、365基という荒砥村の半分ほどである。これが地域の実態なのか、課題である。

古代

南麓は、勢多郡として整備された。『和名類聚抄』の地名の部には、勢多郡の郷名として深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深渠、深澤、時澤、藤澤の９郷がある。その位置は、全てではないにしても古墳時代の様子から荒砥地区から低地帯にかけてと考えられている（高島　2007）。現在のところ、二之宮洗橋遺跡（35）で「芳郷」の墨書土器が出土したことから、芳賀郷が二之宮の付近に推定されている。

発見当時は勢多郡衙、現在は寺院跡とみられているのが上西原遺跡（36）である。佐位郡衙とされた国史跡十三宝塚遺跡と建物の構造や配置が類似し、「勢」と押印のある国分寺系瓦や塑像、奈良三彩なども出土している。検討すべき内容を含んでいる。今井道上道下遺跡にある柵で囲まれた方形区画(37)は、富豪層の居館と考えられている（神谷2004）。区画の南には、あづま道（38）と呼ばれる幹道が東西に通過している。

周辺では、「芳郷」墨書のほかに荒砥洗橋遺跡（39）から「大郷長」の墨書土器や「大」の焼印、荒子小学校遺跡（40）からは「識」の銅印が出土している。これらは先の寺院や居館との関連とみられるが、焼印は官衙的な様相をもつ堀越中道遺跡（20）からも出土している。また、茂木山神Ⅱ遺跡（41）では、山ノ上碑の大胡臣を連想させる墨書「大兒万財」が出土している。檜峯遺跡（42）の奈良三彩の小壺のほかにも、富田宮下遺跡（15）で「神功開寶」、富田下大日Ⅲ遺跡（43）で「長年通宝」が出土というように高い頻度である。富豪層とも無縁ではなく、郷の所在を考える手がかりとしておきたい。

弘仁九年（818）、南麓を地震が襲った。『類聚国史』には、山崩れが多発、土砂が谷を埋め、これにより圧死者が多く出たとある。荒砥川沿いでは、上ノ山遺跡（８）で大規模な地割れの跡、今井白山遺跡（10）で噴砂、中宮関遺跡（44）、中原遺跡群（45）では洪水砂で埋没した水田が検出されている。

茶木田遺跡（46）や箕井中屋敷遺跡（47）は、低地帯に点在していた村である。最近も、上流の南橘東原遺跡で古墳時代から古代の集落が検出されている（平成19年７月25日付上毛新聞報道）。今後も数は増えることは確実で、低地帯では一般的な姿として認識すべき時期にきている。

農業分野以外では、八ヶ峰生産址（48）で主体が製炭と製鉄で８世紀の一時期須恵器を焼いている。富田漆田遺跡（49）では9世紀～10世紀の須恵器窯が６基検出されている。集落内で消費する小規模な生産の跡は、上西原遺跡（36）にも類例がある。

中世

天仁元年（1108）浅間山の噴火は、左大臣藤原宗忠の日記『中右記』によれば上野国内壊滅とある。発掘された水田や畠に復旧された跡はなく、記録を裏付けている。その中、台頭したのが淵名系武士団のひとり大胡氏である。重俊を祖とし、『吾妻鏡』に大胡太郎、五郎などの名で登場する御家人で、『法然上人行状絵伝』では、隆義と子の実秀が小屋原の蓮性を介して法然に帰依している。

活躍は12世紀からおよそ14世紀の頃、噴火後の復興や女堀（50）の開削と重なる。基盤は、荒砥川流域から低地帯に及ぶ一帯と考えられている。『長楽寺文書』、『彦部文書』には、「大胡郷内野中村」「大胡郷三俣村」「堰口村」「大胡郷三俣神塚村」など、低地帯でおなじみの地名が並んでいる。これら文献を、どう裏付けるのかが地域の課題である。

女堀は、前橋市上泉町から伊勢崎市国定まで延長約13km、未完の農業用水路である(50)。掘削年代は、荒砥前田Ⅱ遺跡（51）で堤の盛り土下で粕川テフラが検出されたことから、建長三年（1128）に近いことが判明した。これで、浅間山噴火後の復興事業という見解もますます有力である。大正用水、群馬用水の前身、完成していれば、地域がどう変わったろうか。今後も検討が必要である。

前橋市小島田町大門（52）には、阿弥陀像を彫った異形板碑がある。橘清重が、息子のために仁治元年（1240）に建立した供養碑である。同形のものは周辺にも数基あるが、いずれも安山岩製である。近くでは富田東原遺跡(13)の古墓群が知られている。

参考文献

『上野国郡村誌２　勢多郡（２）』群馬県文化事業振興会1978

勢多郡誌編纂委員会『勢多郡誌』1958

前橋市誌編纂委員会『前橋市史　第１巻』1971

群馬県『群馬県史通史編１　原始古代１』1990　『群馬県史通史編２　原始古代２』1991

粕川村教育委員会『粕川村の遺跡―遺跡詳細分布調査報告書―』1985

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

『群馬県遺跡大事典』1999　『群馬の遺跡１～９』2005・2006

第367集「今井道上Ⅱ遺跡」2006

第372集「富田漆田遺跡　富田下大日遺跡」2006

第377集「江木下大日遺跡」2006

第384集「富田細田遺跡・富田宮下遺跡」2006

第395集「荒砥北原Ⅱ遺跡」2006

第402集「笠野Ⅱ遺跡」2007

第418集「上武道路・旧石器時代編（１）」2008

第420集「荻窪南田遺跡・亀泉西久保Ⅱ遺跡」2008

第421集「荒砥北三木堂Ⅱ遺跡」2008

第423集「堤沼上遺跡」2008

第445集「亀泉坂上遺跡」2008

第472集「荒砥前田Ⅱ遺跡」2009

第483集「富田西原遺跡」2010

新里村教育委員会『赤城山麓の歴史地震　弘仁九年に発生した地震とその災害』1991

群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『地域をつなぐ　未来へつなぐ』1995

有末武夫『群馬県の地誌―地誌学の原点とその展開―』有末武夫先生退官記念会実行委員会1984

鬼形芳夫「赤城山麓における縄文文化の展開」『群馬県史研究』1　群馬県史編さん委員会1985

齋藤　聡「思わぬところに古代集落-低地の中のムラ・田口下田尻遺跡-」『埋文群馬』No.45　2006

小林　修「赤城山西南麓の後期首長墓の展開」『群馬考古学手帳』12　群馬土器観の会　2002

群馬県編『上毛古墳綜覧』群馬県史跡名勝天然記念物調査報告書第５輯　1938

高島英之「堤沼上遺跡の墨書・刻書土器」『堤沼上遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008

松田　猛「古代勢多郡の地名と氏族」『赤城村歴史資料館紀要』第４集　2002

神谷佳明「古代上野における富豪層について」『研究紀要』22　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004

近藤義雄「金沢文庫本「念仏往生伝」成立の背景」『信濃』30巻５号　信濃史学会1978　『上州の神と仏』（煥乎堂1996）に所収

前原　豊「赤城山麓の墓あと」『浅間火山灰と中世の東国』平凡社1989

国土地理院「前橋」1/50000に加筆

第３図　周辺遺跡

第３章　発掘調査の方法と経過

1　発掘調査の方法

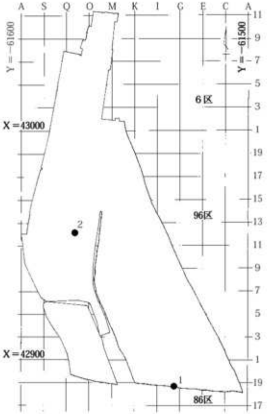
（1）調査区・グリッドの設定

調査の対象面積は、7,964.8㎡である。市道で仕切られていて、東をＡ区、西をＢ区と付けた。その後に市道も対象となり、Ｃ区とした。

グリッドは、５ｍを基準に国家座標第Ⅸ系（日本測地系）を用いて設定した。これは上武道路の統一仕様で、１㎞四方を大区画、その中を100ｍ四方で中区画、さらに中区画を南北５ｍごとに南から１～20、東西５ｍごとに東から西にＡ～Ｔをつけて小区画に細分した。グリッド名称は、南東隅のグリッド杭名で96Ａ１というようにあらわした。これを国家座標系であらわすと、Ｘ＝42900ｍ、Ｙ＝－61500ｍとなる（第４図）。

このグリッド表記は、遺構図の作成をはじめ、遺物の取り上げや注記など、諸作業で使用した。ただし、大区画は、あくまでも諸記録の管理・登録上の扱いで、図面等への記載は省略した。遺跡略称は「ＪＫ43」で、Ｊは上武、Ｋは国道の略称、基点側から数えて43番目の遺跡という意味である。

水準点は、Ａ区が103.00ｍ、105.60ｍ、Ｂ区が105.60ｍである。



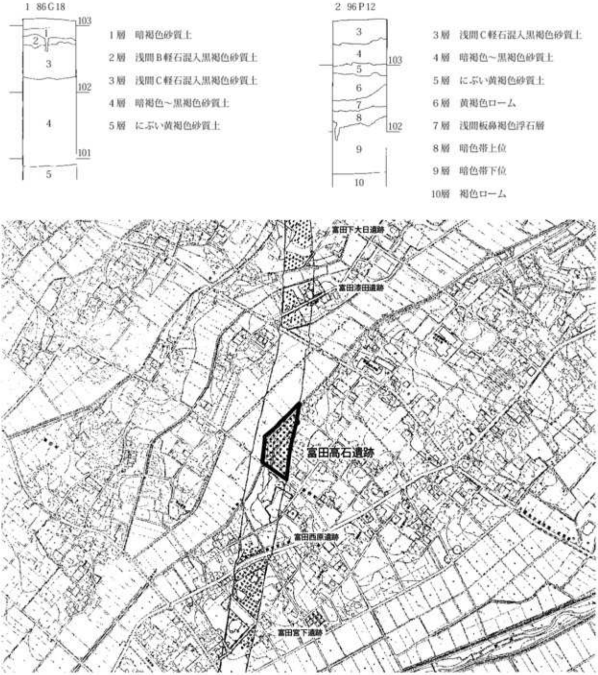
第４図　グリッド配置図

（2）基本土層と遺構確認

基本土層は、１が86Ｇ－18グリッドで、Ａ区の谷地での表土以下の様子を知ることができる。２は台地上の96Ｐ－12グリッド、旧石器確認調査の断面でローム層の堆積状態を表している。

１層　暗褐色砂質土　細粒、均質、密、表土および耕作土、厚さ10～40㎝で安定した状態
２層　浅間Ｂ軽石混入黒褐色砂質土　均質、密
３層　浅間Ｃ軽石混入黒褐色砂質土　均質、密
４層　暗褐色～黒褐色砂質土　均質、密
５層　にぶい黄褐色砂質土　密、ローム漸移層
６層　黄褐色ローム　浅間大窪沢軽石混入
７層　浅間板鼻褐色浮石層（Ａｓ-ＢＰグループ）スコリアと下位に室田パミス相当の粘質土からなる
８層　暗色帯上位
９層　暗色帯下位
10層　褐色ローム　北橘スコリアを含まない
11層　褐色ローム　北橘スコリアを含む
12層　暗褐色ローム

２層は、台地上でも厚さ10㎝前後で堆積していたらしいが土地改良で削平され、Ａ区とＢ区の低地にだ



第５図　基本土層と周辺地形

け残る。そのため台地の中央部では、１層が切土された３層に直接のっている。浅間Ｂ軽石（Ａｓ-Ｂ）は、溝の覆土、川沿いの低地など限られた箇所にだけ見られた。３層は、台地上に広く堆積していて重機による掘削、遺構の確認作業の目安とした土層である。厚い所では黒色の強い上位と暗褐色の下位とに分けることができる。４層とともに住居跡をはじめとした遺構の覆土でもある。４層は黒ボク土で、５層が斑状に混入している。低地では50㎝以上の厚さが一般的であるが、台地上では10㎝前後と薄い。５層はローム漸移層である。台地の縁辺で厚くなる。重機による掘削は５層の上面まで、遺構の確認も５層の上面で行った。

（3）遺構・遺物の記録

遺構の図化は、前記のグリッドを使い、1：20、1：40を基本として平面、遺物出土状態、断面を作成した。遺構図の総枚数は、A２サイズで346枚である。平板と電子平板を併用し、業務の一部は測量会社に委託した。土層の観察は、色調、粒度、夾雑物について農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修「新版標準土色帖」による。報告の際には加筆・訂正をしている。

遺構写真は、土層の堆積状態、遺物の出土状態、完掘を基本にして、35ミリモノクロフィルムとカラーフィルムおよびブローニーモノクロフィルムで担当が地上撮影をした。また、各区の全景は、ラジコンヘリで撮影、測量会社に業務を委託した。

2　調査の経過

富田高石遺跡の調査は、平成12年度～14年度に中断をはさみ、延べ15ヶ月をかけて行われた。12年度はA区、B区の大半を、13年度はB区の宅地を、14年度はB区の残地と市道を調査している。この間、大泉坊川改修、県道前橋今井線構造物工事にかかる箇所を調査している。経過は、次の通りである。

平成12年度　平成12年４月３日～同13年３月31日

A区の全域とB区で用地の買収ができた範囲を対象とした。面積は6,994㎡、調査はローム漸移層面、その下層での旧石器本調査と２面で行い、住居跡21軒、掘立柱建物跡３棟、土坑40基、溝５条、井戸１基、方形周溝墓３基を検出した。調査の概要は、事業団「年報」20に掲載。また、旧石器は、暗色帯から黒色安山岩、黒色頁岩を主とした329点が出土しているが「上武道路・旧石器時代編（１）」（2008）に掲載している。

４月　A区遺構確認。住居跡18軒、溝２条ほかを確認。遺構はロームが分布する範囲に多く、谷地にもある。27日、１号溝から調査開始。

５月　９日１号～４号住居跡の調査開始。２棟の掘立柱建物跡が南北に並び、柱穴からはタヌキとみられる獣骨が出土。溝は、富田西原遺跡D区１号溝と平行し、屋敷跡の可能性が強まる。住居跡は、前期と後期で富田西原遺跡と似ていることが判明。

６月　15日から住居跡掘り方調査を開始、16日調査区全景を空撮。５日から８日まで大泉坊川改修にかかる650㎡を緊急調査。As－B下水田を検出。22日から30日までB区表土掘削。

７月　A区は、住居跡掘り方調査を継続。B区は、住居跡３軒、方形周溝墓３基を検出。10日、２号溝から精査開始。11日から24日まで富田漆田遺跡でトレンチによる遺構確認とC区の表土掘削。

８月　住居跡の掘り方調査、方形周溝墓の調査を継続。方形周溝墓の１号から２基の壺棺を検出、３号は前方後方形と判明。10日B区全景を空撮。４日から31日までA区、B区で旧石器確認調査。暗色帯から剥片が出土、本調査決定。

９月　作業は中断。県道を跨ぐ構造物工事のために、10月11日まで富田漆田遺跡C区を調査。

10月　12日からA区で旧石器確認調査を開始。作業は、建設会社に委託。専業化することで調査の促進と効率化を目的とした。今井道上Ⅱ、富田宮下、富田漆田遺跡とともに発注。

11月　専業班による旧石器確認調査を継続。B区でも暗色帯から剥片が出土。範囲が拡大する。

12月　１日からA区で旧石器の本調査を開始。出土範囲が拡大、最終的には南北40m、東西25mを調査する。22日建設省との工程会議。

１月　A区での旧石器本調査を継続。23日からB区での旧石器確認調査を再開。31日からA区縄文包含層を調査。１号炉を検出。

２月　A区旧石器本調査は、調査範囲を拡張。縄文包含層、１号井戸調査。B区は旧石器確認調査を継続。21日北端の宅地跡の調査開始。溝、土坑、道跡を検出。

３月　A区旧石器本調査を継続。５日からB区旧石

器本調査を開始。遺物は、台地の西側へは広がらず市道の際まで、Ａｓ－ＢＰ下位～暗色帯の上位で出土。３号方形周溝墓の調査。14日３号方形周溝墓の空撮。

平成13年度　平成13年４月１日～同年９月30日

Ｂ区の南端、宅地の跡地616.6㎡が対象である。23号～25号住居跡、41号～43号土坑、２号井戸、１号道を調査。調査の概要は、「年報」21に掲載。

４月　富田漆田遺跡の調査。

５月　14日から17日までＢ区表土掘削。住居跡３軒、土坑３基、井戸１基、道１条を調査。１号溝がさらに南へ続くことを確認。

６月　富田漆田遺跡の調査と平行してＢ区の調査を継続。12日から住居跡掘り方調査を開始、19日から旧石器時代確認調査も行う。

７月　４日調査区全景を空撮。住居跡の掘り方調査を継続、25号住居跡では周堤帯のような高まりが残されていた。

８月　２日、調査を終了。

平成14年度　平成14年４月１日～同年７月５日

Ｂ区の未収地と市道を調査する。面積1,306㎡。26号～29号住居跡、４号、５号掘立柱建物跡、45号～54号土坑、１号～３号集石、５号溝を検出。市道は、これまで調査の対象外としてきたが、重複する遺構が多いこと、下層では旧石器の分布も寸断、その上廃道も決定していたことから協議の上、対象に含めることができた。また、本年度から遺跡掘削工事の業務委託がはじまり、須賀工業株式会社が受託した。調査の概要は、事業団「年報」22に掲載。

４月　表土掘削、住居跡、溝の調査。

５月　住居跡掘り方、土坑調査。

６月　旧石器確認調査。

７月　旧石器本調査。

出土した遺物の数量は、64×42×15㎝の遺物収納箱で48箱である。

３　整理作業の経過

整理は、平成16年度、同20年度、同21年度の３回に分けて行われた。

平成16年度　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に業務を委託。基礎整理、遺物の実測、トレースおよび撮影、遺構図の編集、トレースを実施した。

平成20年度　当事業団で平成21年２月から同年３月の２ヶ月間、編集、版下作成、本文執筆。

平成21年度　当事業団で平成21年11月から同22年２月、版下作成、本文執筆、編集、刊行。

（１）遺物整理

遺物総数は、収納箱48箱である。取り上げ台帳と照合の上、遺構ごとに分類、まず土器の接合を行った。次に復元・彩色し、写真撮影を経て、器械実測により素図作成、それをもとに実測図を作成した。実測した遺物は、土器・土製品456点、石器・石製品36点、金属製品15点のあわせて533点である。掲載を断念した遺物は、出土した遺構・グリッドごとに種類・器種を分類し、集計をした。

金属製品は、当事業団保存処理室でレントゲン撮影、残存状態を確認の上、クリーニングを行った。27号住居跡から出土した炭化した種実は、株式会社パレオ・ラボに同定分析を委託。その成果は、第５章自然科学分析として掲載している。

（２）遺構図・遺構写真整理

遺構図は、通番をつけて台帳を作成した。平面図と断面図は、照合・修正の上トレースをした。さらに編集までを埼玉で行う。群馬では、デジタル編集をするために加筆訂正をして、スキャニング、校正を経て印刷原稿とした。遺物も同様である。

遺構・遺物写真は、ネガに通番をつけ台帳、所定のネガ検索台帳を作成した。これをもとに掲載写真を選択し、デジタル編集し印刷原稿を作成した。

第4章　検出された遺構と遺物

第1節　概要

調査は2面に分けて行われた。1面は、ローム漸移層〜ローム層の上面、2面は確認調査を経た旧石器時代である。検出された遺構の内訳は、住居跡28軒、掘立柱建物跡5棟、土坑54基、溝5条、井戸2基、道1条、炉1基、方形周溝墓3基、集石2基である。遺物は、収納箱48箱である。

なお、48箱には旧石器が含まれている。

第2節　縄文時代の遺構と遺物

概要　土坑6基が散在している。円形と長方形の2つの形状があり、後者は落とし穴で隣接する富田西原遺跡の一部とみて良いだろう。猟場として利用されたのであろうが、貯蔵穴とみられる土坑や炉もあることから、短期間の住まいや集落の縁辺部といった場でもあったのであろう。量が最も多いのは前期後半であるが、少量ながら早期の撚糸文、押型文なども出土している。

1号炉（第6・7図　ＰＬ38・56・57）

位置　96Ｇ－４、谷地に向かう斜面上段に位置する。96Ｉ〜Ｋ－３〜５ライン付近の黒褐色土中には遺物包含層があり、本跡はこれと重複する。硬化した所があり、しかも埋設土器と焼土もあったことから、住居跡としてもプランを検討したが断定できなかった。単独の炉として掲載する。

検出状態　黒浜式土器の深鉢が底部を打ち欠き、口縁を上にしている。据えた状態ではあるが、据え方の穴らしいものは確認できなかった。口縁部が生活面とみられ、脇には縁石として置かれたのか長さ40cmと25cmの棒状をした自然石2点がある。そのさらに先、40cm離れた所には焼土がある。土器は、器高10cmと深鉢の中では小振りな方で、先述したように口縁部、底部は欠いている。使用痕は、下胴部の内面で黒く色調が変化している程度と少ない。

規模　遺物が特に集中する範囲は5ｍ四方である。硬化していたのは黒褐色土の中で、炉よりもレベルが高い。

遺物　深鉢のほかに、周囲では石皿、凹石、スクレイパー、剥片が出土。時期　前期黒浜式期である。

２号土坑（第８図　ＰＬ26）

位置　86ＣＤ－18・19、谷地に面して、地形勾配に直交する。３号土坑とは並列する。

形状　長方形　N73°Ｗ　覆土は黄褐色土で堅く締まり、地山との区別が難しい。底面には、逆茂木用とみられる小ピットが２本あく。直径は20cm前後、深さ20〜30cmである。

規模　長軸230cm・短軸122cm・深さ62cmである。

遺物　覆土から撚糸文と黒浜式土器の細片が出土。

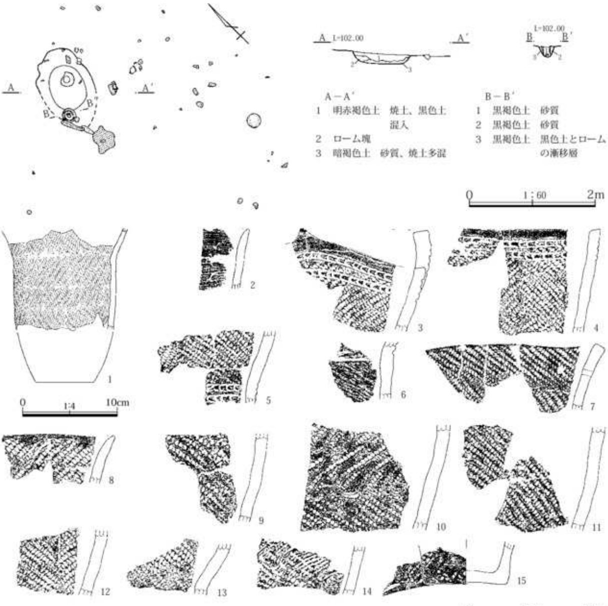
所見　落とし穴である。時期は、出土した土器から前期後半とみられる。

３号土坑（第８図　ＰＬ26）

位置　86Ｃ－19、谷地に面して、地形勾配に直交する。２号土坑とは並列する。

形状　長方形　N60°Ｗ　規模　長軸160cm・短軸75cm・深さ61cmである。出土した遺物はない。

所見　落とし穴である。時期は、覆土の特徴から２号土坑と同じ前期後半とみられる。

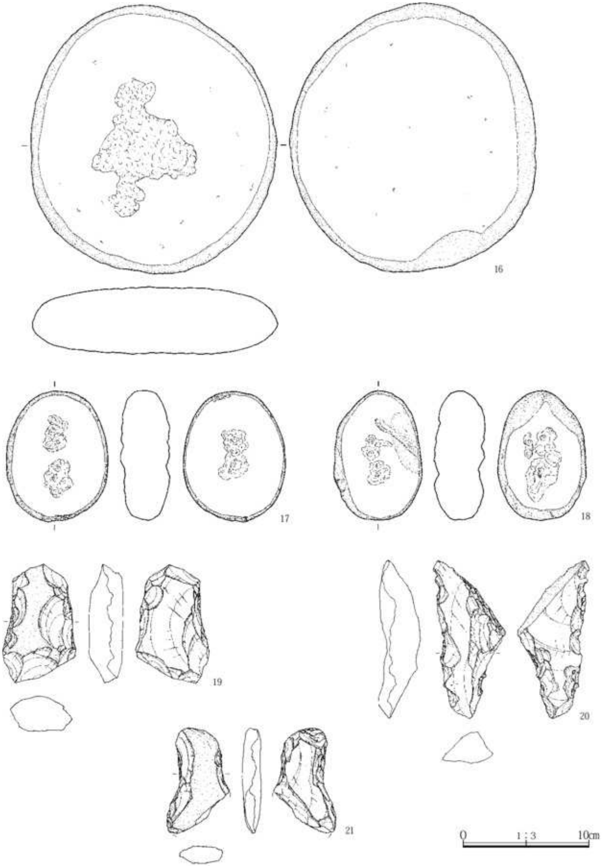


第６図　１号炉遺構図・遺物図（１）

４号土坑（第８図　ＰＬ26）
位置　96Ｋ－14、２号溝が北側半分を削平。
形状　推定円形、断面は袋状。覆土は、壁際がにぶい黄褐色土、中心部は黒褐色土でともに硬く締まる。
規模　長軸77cm・短軸50cm以上・深さ70cmである。
出土した遺物はない。所見　時期を特定できる資料はない。覆土の特徴から時期を判断した。

28号土坑（第８図　ＰＬ28）
位置　96ＭＮ－５・６、１号溝が東側半分を削平。
形状　推定円形、断面は袋状か。
規模　長軸155cm・短軸90cm以上・深さ46cmである。
出土した遺物はない。所見　時期を特定できる資料はない。覆土の特徴から時期を判断した。

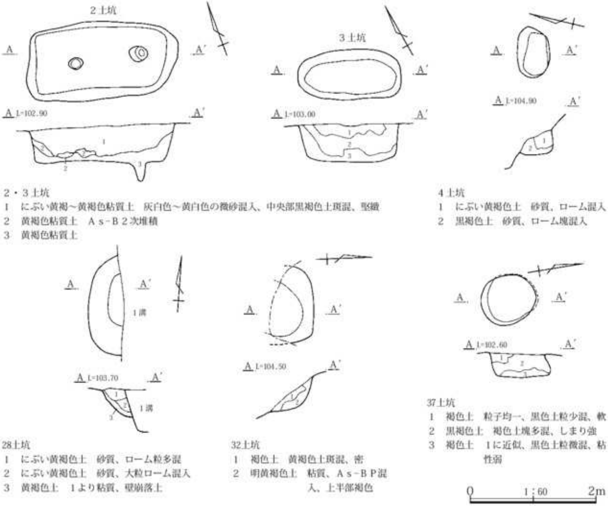
32号土坑（第８図　ＰＬ28・29）
位置　96Ｋ－７、１号掘立柱建物跡などがある削平段斜面で北側半分を検出。
形状　推定円形、底面は地山との区別がむずかしい。
規模　長軸118cm・短軸68cm以上・深さ57cmである。



第７図　１号炉遺物図（２）

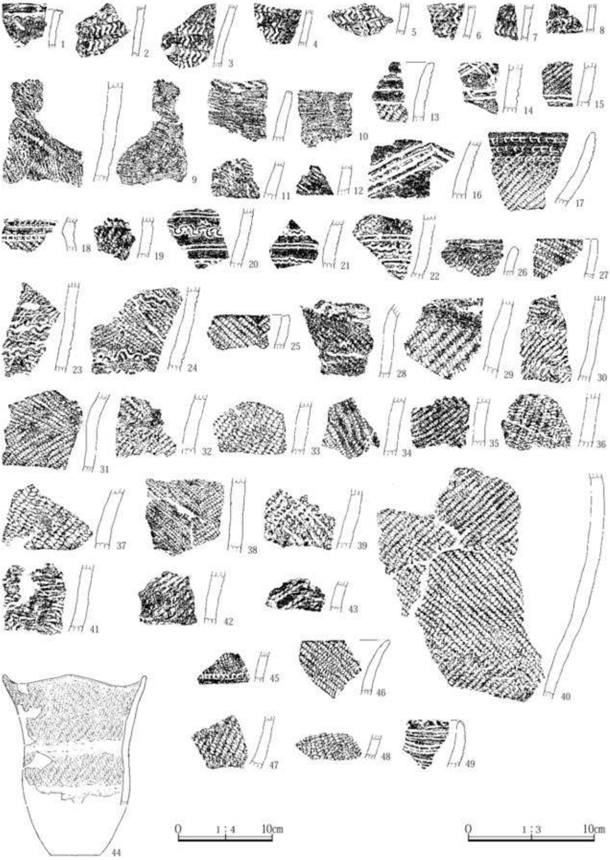
出土した遺物はない。
所見　時期は、覆土の特徴から判断した。

37号土坑（第８図　ＰＬ29）
位置　96Ｊ－３、２号住居跡が重複、本坑が古い。２号住居跡付近には縄文時代の遺物包含層があり、その精査の過程で検出。近くには１号炉がある。
形状　円形、断面は袋状。規模　長軸83cm・短軸78cm・深さ39cmである。出土した遺物はない。
覆土　褐色土、黒褐色土で堅く締まる。
所見　時期は、覆土や周囲で出土した遺物から前期後半とみられる。

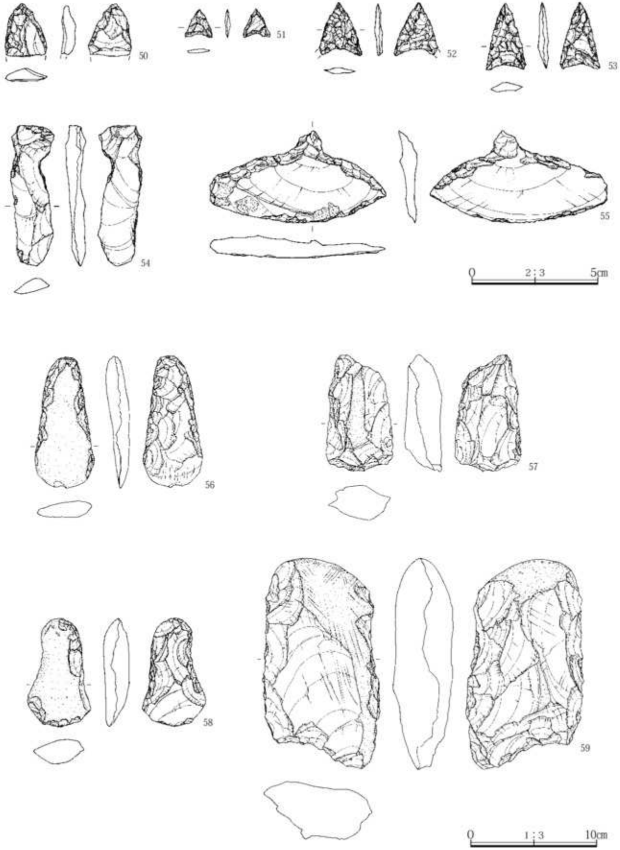


第８図　２号・３号・４号・28号・32号・37号土坑遺構図

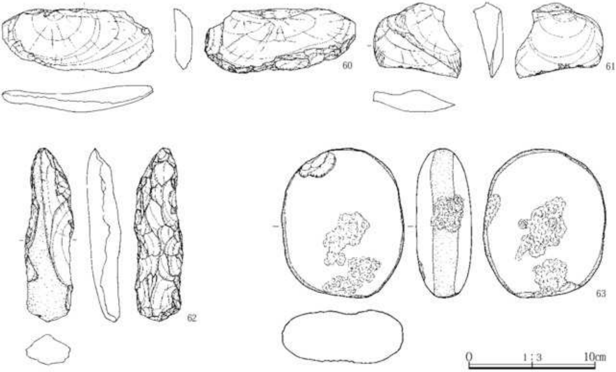
遺物包含層（第９～11図　ＰＬ38・57）
位置　96Ｉ～Ｋ－３～５、谷頭から少し下った、斜面の南東側に堆積したものである。分布状態には違いがみられ、５ライン以北は石器が、４ライン前後は土器と石器が集中する。土器は器形をうかがえるものが１個体だけであるが、破片でも接合するものが多い。この接合状態からわかるように、遺物は至近距離から投棄されたものとみられる。１号炉、37号土坑とは重複、遺物の時期も一致していることから関係が考えられる。１号炉の周囲にある遺物は、特に可能性が高いが特定することができなかった。
出土層位　ローム漸移層～黒褐色土が包含層である。５ラインより北ではソフトロームでも出土。
出土した遺物　短冊形石斧、凹石、磨石、石匙、スクレイパー、黒浜式深鉢。時期　前期黒浜式期



第９図　遺構外遺物図　土器



第10図　遺構外遺物図　石器（１）



第11図　遺構外遺物図　石器（２）

１号炉

遺物番号	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	遺存	図版番号	写真番号
16	凹石	粗粒輝石安山岩	21.20	19.50	5.60	3077.2	完形	7	57
17	凹石	粗粒輝石安山岩	10.40	8.00	4.10	464.2	完形	7	56
18	凹石	粗粒輝石安山岩	10.30	6.90	4.10	377.7	完形	7	56
19	打製石斧	黒色頁岩	9.50	5.90	2.80	172.7	完形	7	56
20	打製石斧	黒色頁岩	8.40	4.90	1.50	62.0	刃部欠損	7	56
21	削器	珪質頁岩	12.50	5.70	3.30	157.1	完形	7	56

遺構外遺物

遺物番号	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	遺存	図版番号	写真番号
50	尖頭器？	黒曜石	2.10	2.60	0.60	1.7	下半部欠損	10	57
51	石鏃	黒色安山岩	1.15	1.10	0.20	0.2	完形	10	57
52	石鏃	黒曜石	2.10	1.70	0.30	0.7	完形	10	57
53	石鏃	黒色安山岩	2.60	1.50	0.40	1.4	完形	10	57
54	石匙？	珪質頁岩	5.60	1.70	0.60	6.0	完形	10	57
55	石匙	黒色頁岩	3.70	7.00	0.90	13.1	完形	10	57
56	打製石斧	黒色頁岩	10.50	4.70	1.90	85.5	完形	10	57
57	打製石斧	黒色頁岩	9.30	5.30	2.90	154.8	完形	10	57
58	打製石斧	細粒輝石安山岩	8.60	5.10	2.10	85.1	完形	10	57
59	打製石斧	灰色安山岩	16.90	9.40	4.80	856.3	完形	10	57
60	削器	黒色頁岩	5.20	11.90	2.10	104.0	完形	11	57
61	削器	黒色頁岩	5.90	6.90	2.30	73.0	完形	11	57
62	尖頭状石器	黒色頁岩	13.80	3.90	2.70	141.5	完形	11	57
63	凹石	粗粒輝石安山岩	11.80	9.70	4.30	681.9	完形	11	57

第３節　古墳時代

1　概要

竪穴住居跡が28軒、前期が14軒、後期が13軒である。これに方形周溝墓３基を検出した。

前期は、台地の中央に集落、西側の斜面に方形周溝墓がある。居住域と墓域を分けた格好である。後期の集落も、前期に重なるが数は斜面の方が多い。墓域は調査区の北東に考えられる。

特記事項としては、前期は全長が24mの前方後方形方形周溝墓、壺棺墓、異形高坏を挙げることができ、後期では遺存状態が良好なカマドに見るものがある。

2　竪穴住居跡

１号住居跡（第12・13図　ＰＬ４・39）

位置　86ＡＢ-18

重複関係　ない。

形状　推定方形､調査区の壁にかかり北西隅を検出。

規模　2.72m以上　2.63m以上　0.38m

面積　7.15㎡以上

主軸方位　N15°W

覆土　暗褐色土と黒褐色土

炉　焼土の分布が２箇所ある。

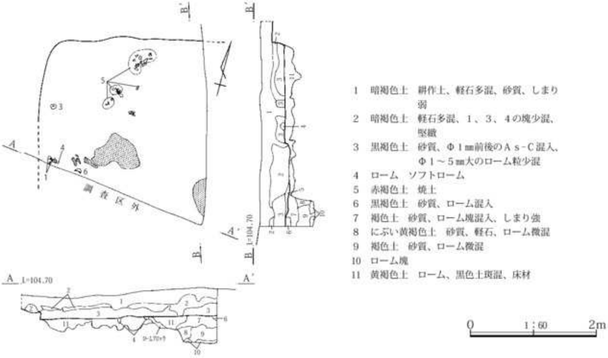
柱穴　Ｐ１が主柱穴、長軸・短軸・深さは36・23・43㎝である。

周溝　ない。

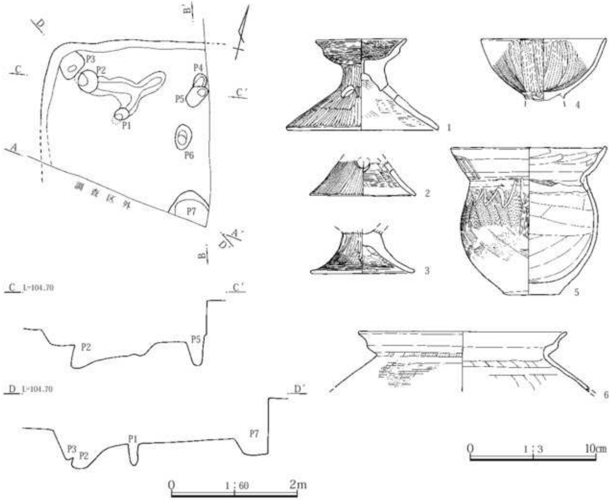
床面　Ａｓ-ＢＰが混入する黄褐色土の貼り床、厚さ１～２㎝。中央部は堅緻で高い。壁際は２～３㎝低い。掘り方に断面が袋状をした土坑がある。

遺物と出土状況　大型の個体が少ない。Ｓ字状口縁台付甕、小型甕、高坏、器台、３の器台は脚部だけを転用。土器のほかに炭化物が出土。

所見　古墳時代前期



第12図　１号住居跡遺構図（１）



第13図　１号住居跡遺構図（２）・遺物図

２号住居跡（第14・15図　ＰＬ４・５・39）

位置　96ＩＪ－３・４　重複関係　１号土坑、24号土坑、２号掘立柱建物跡よりも古い。

形状　方形、カマドを含む東壁から１ｍ弱が撹乱されている。北東隅の掘り方からプランを推定する。

規模　4.90m　4.60m　0.24m

面積　22.54㎡

主軸方位　N78°W

覆土　全体はロームと黒褐色土の混土が分布。北の壁際から約１ｍ幅の範囲は、中位に床面に傾斜する厚さ１～２㎝、レンズ状の焼土層がある。炭化材も混じり、焼失した土屋根が倒壊した跡か。

カマド　撹乱され消失している。東壁の南東寄りに焼土塊があり、甕、甑が出土。

貯蔵穴　南東隅　円形　長軸・短軸・深さは76・65・45㎝である。

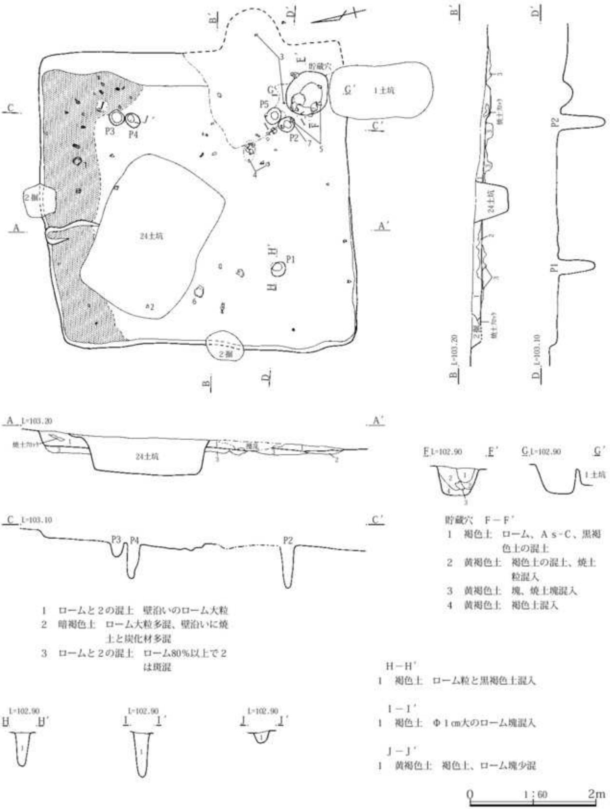
柱穴　４本のうち24号土坑が重複する北西隅をのぞいて３本を検出。長軸・短軸・深さは、Ｐ１が25・18・46㎝、Ｐ２が25・23・47㎝、Ｐ３が24・21・57㎝、柱間はＰ１とＰ２が230㎝、Ｐ２とＰ３が235㎝である。

周溝　はっきりとした掘り方はない。壁際が軟らかくしみ状に低い。

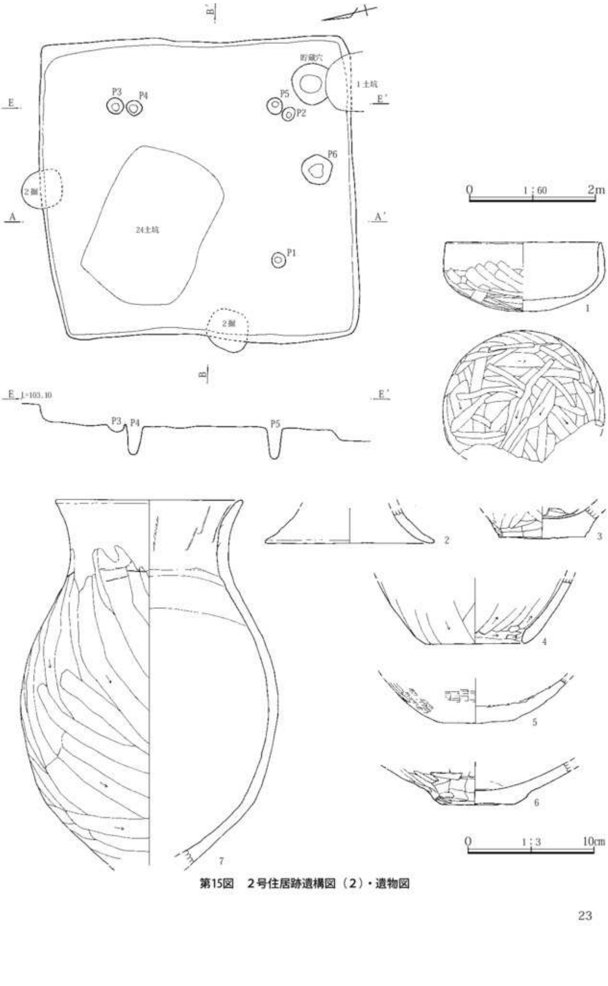
床面　南半分は硬く、北側はやや軟弱。南西隅は焼けている。南壁の中央部に入り口の跡。一段低い方形の掘り込みがあり、周囲は土手で区画。

遺物と出土状況　甕、坏、高坏、甑、貯蔵穴と柱穴

の周囲に大型の破片、北壁側は混入した小破片、７の甕はカマドで使用、粘土が付着。掲載していないが、グリッドで取り上げた縄文時代の遺物が混入している。土器のほかに、垂木とみられる炭化材、炭



第14図　２号住居跡遺構図（１）



第15図　2号住居跡遺構図（2）・遺物図

化したヨシ科の茎が出土している。炭化材は、最大のものは長さが４㎝､樹皮付きの丸木材。植物茎は、屋根材らしく、押しつぶされているものが多い。

所見　古墳時代後期、６世紀前半

３号住居跡（第16・17図　ＰＬ５・39）

位置　96ＨＩ－４～６　重複関係　29号土坑、２号掘立柱建物跡よりも古い。

形状　推定長方形、西側は土地改良により床下まで撹乱。プランは掘り方調査による推定。

規模　5.90m　4.82m　0.20m

面積　推定28.43㎡　主軸方位　N50°E

覆土　褐色土と黄褐色土で埋没、床面との区別が難しい。

カマド　撹乱されていて不明。貯蔵穴　確定できない。出土した遺物から、29号土坑に可能性がある。

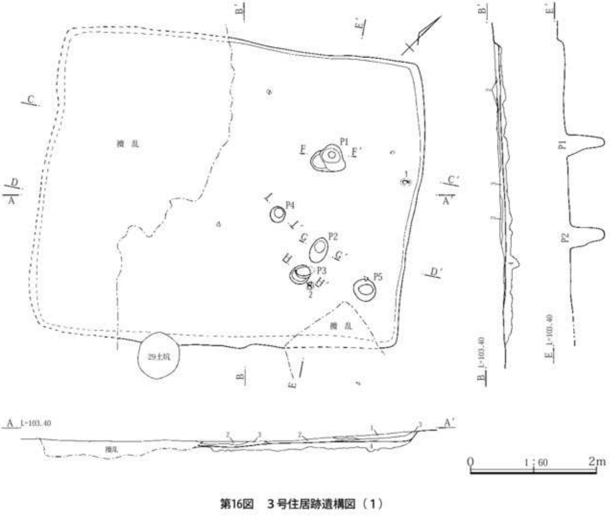
柱穴　Ｐ１とＰ２が主柱穴、推定４本主柱穴であるが、西側の２本は撹乱が深くて掘り方でも検出されていない。長軸・短軸・深さは、Ｐ１が35・23・64㎝、Ｐ２が40・25・55㎝、柱間が145㎝である。

周溝　ない。

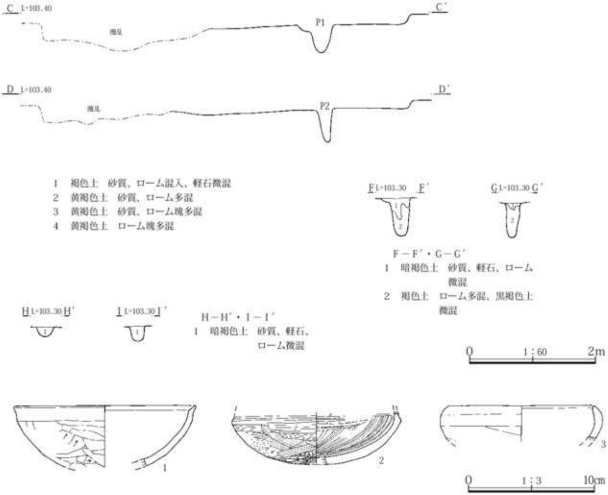
床面　ロームブロックを多く含む黄褐色土による貼り床。

遺物と出土状況　甕、坏、非掲載の中に甑の破片がある。坏は､口縁の形状に内斜と内湾の２つがある。

所見　古墳時代後期、撹乱された箇所が多くて、プランの大半は推定である。遺物も少なく、１の坏や甕の特徴から時期を判断した。



第16図　３号住居跡遺構図（１）



第17図　３号住居跡遺構図（２）・遺物図

４号住居跡（第18～20図　ＰＬ５・６・39・40）

位置　96ＥＦ－６

重複関係　ない。形状　方形

規模　3.24m　3.09m　0.40m

面積　10.01㎡　主軸方位　N27°W

覆土　自然埋没、As-Cを含む黒褐色土

炉　中央部の北、Ｐ４の脇に焼土の分布。

柱穴　対角線上にはない。Ｐ２とＰ５が対にあるが、Ｐ５は壁にかかる。Ｐ４は炉と隣接。長軸・短軸・深さは、Ｐ２が37・28・30cm、Ｐ４が150・30・10～18cm、Ｐ５が28・27・27cmである。Ｐ４は焼土を切っていて、住居廃棄後の土坑の可能性もある。

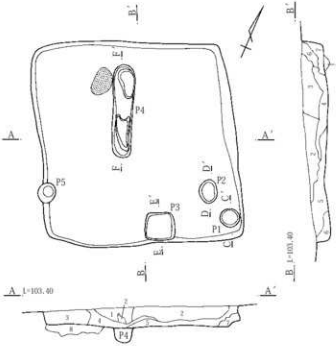
周溝　ない。

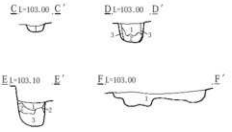
貯蔵穴　位置としては南東隅にあるＰ１に可能性がある。円形　長軸・短軸・深さは30・29・12cm。Ｐ３は南壁の中央部寄り、壁にかかる。方形　長軸・短軸・深さは46・43・37cmである。

床面　地山の黒褐色土を踏み固める。掘り方はない。

遺物と出土状況　Ｓ字状口縁台付甕、小型甕、壺、高坏、器台、Ｐ２の周囲に集中。北西側に残された炭化材は、垂木とみられ中心から外に向かって放射状に広がっている。良好なものは、みかん割りの板材であることがわかる。また、14のＳ字状口縁台付甕の中からは200粒以上の炭化米が出土した。貯蔵、調理用の両者の用途が考えられる。

所見　古墳時代前期、焼失住居、小規模なために竪穴状遺構の可能性もある。





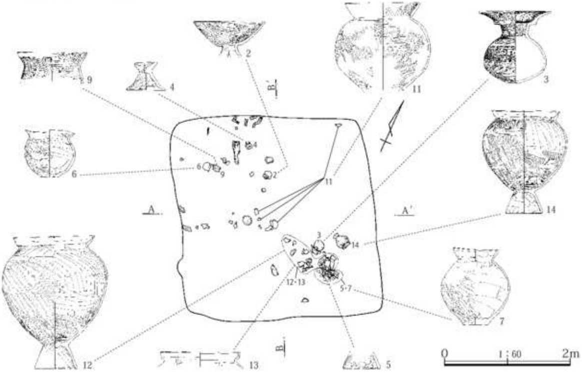
C－C′
1　黒色土　砂質、Ａｓ－Ｃ少混、Φ１～２cm大のローム多混

D－D′
1　黒色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、にぶい黄褐色土斑混、しまり弱
2　黒色土　砂質、Ａｓ－Ｃ少混
3　地山の黒褐色土

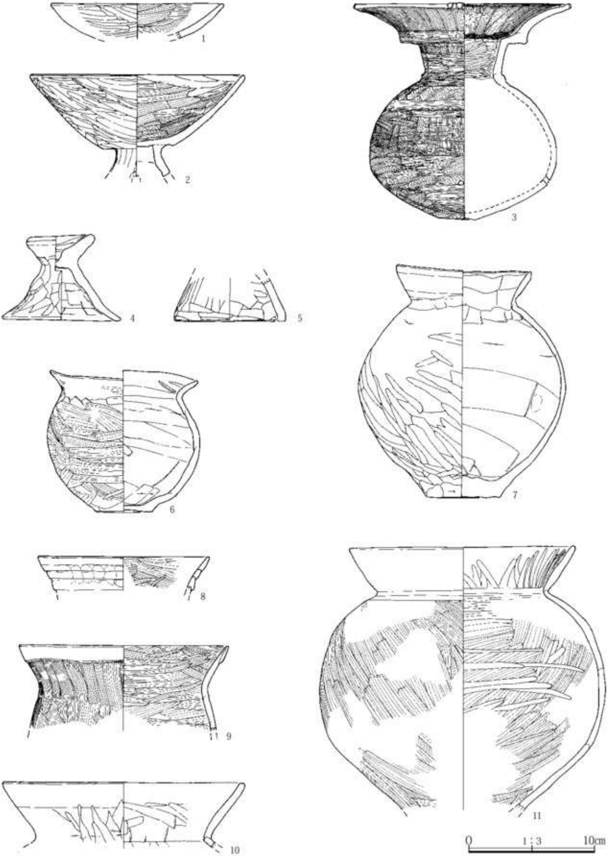
E－E′
1　黒色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、堅緻
2　黒色土　砂質、にぶい黄褐色土の斑点あり
3　黒色土　砂質、堅緻

F－F′
1　黒色土　Ａｓ－Ｃ混入、にぶい黄褐色土のΦ１cm大の斑混

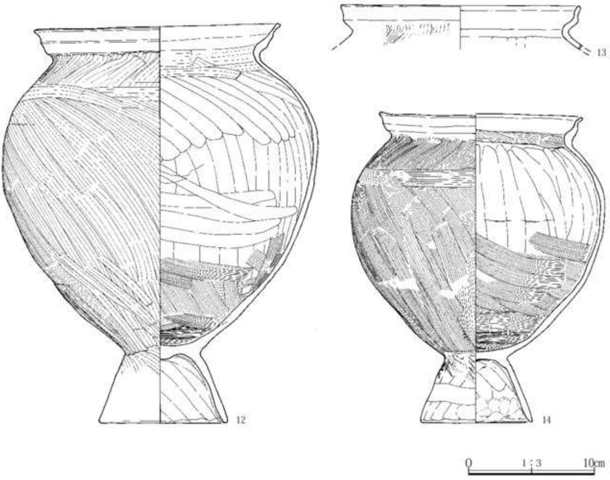
1　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ混入
2　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ混入
3　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ混入
4　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ、ローム混入
5　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム混入
6　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム微混
7　黒褐色土　砂質、ローム混入、三角堆積
8　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ混土



第18図　４号住居跡遺構図

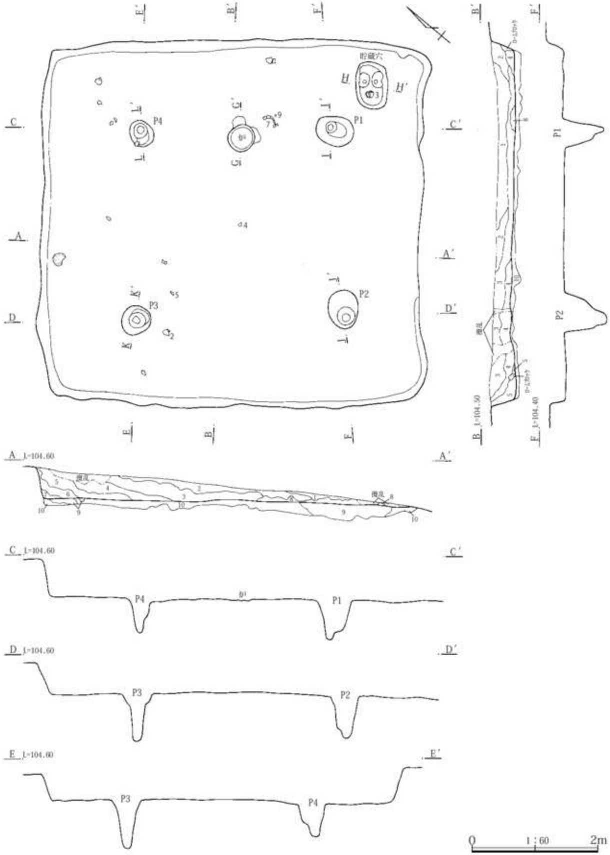


第19図　４号住居跡遺物図（１）



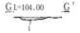
第20図　４号住居跡遺物図（２）

５号住居跡（第21～23図　ＰＬ６・７・40）
位置　96Ｇ～Ｉ-7・8
重複関係　ない。
形状　方形
規模　5.97m　5.78m　0.39m
面積　34.50㎡
主軸方位　N42°W
覆土　自然埋没、黒褐色土、黄褐色土、下位にロームブロックを多く含む。
炉　中央部の北寄り　円形　長軸42cm・短軸42cm・深さ４cm、縁が甕を囲んでいたかのように焼けて硬化、その中で焚き口なのか、西側だけが途切れる。
柱穴　主柱穴４本、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が18・17・64cm、Ｐ２が28・27・66cm、Ｐ３が25・24・74cm、Ｐ４が22・22・53cm、柱間はＰ２とＰ３が325cmのほかは300cmである。
周溝　全周、幅10～15cm、深さ10cm前後である。
貯蔵穴　南東隅　長方形　長軸74cm・短軸50cm・深さ24cm、出土した遺物はない。
床面　ロームブロックを多く含む黄褐色土の貼り床、平坦で堅緻。掘り方は、特に規則的ではないが壁沿いが溝や土坑のように一段深くなる。
遺物と出土状況　遺物は僅少、大型の破片は少ない。甕、小型甕、器台、高坏、８の刀子は掘り方で出土。北西の壁際で工作用の台石が出土。石皿のように平坦で片面には長軸方向の擦り跡が残されている。特別な加工はないが、万能の工作用の台とみられる。
所見　古墳時代前期



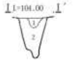
第21図　５号住居跡遺構図（１）

1　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ、ローム粒混入
2　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、ローム粒少混
3　にぶい黄褐色土　ローム粒、２混入
4　にぶい黄褐色土　３と同質、ローム粒多く明るい
5　にぶい黄褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ少混、３よりもローム多混
6　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、Φ５㎜以下のローム粒少混
7　６のローム粒が大粒で多混
8　明黄褐色土　ロームと２の混土、ローム90％以上で塊状
9　褐色土　砂質、ローム
10　黄褐色土　黒色土、ローム混入



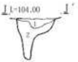
炉　G－G'
1　褐色土　被熱、焼土粒多

貯蔵穴　H－H'
1　褐色土　砂質、ローム微粒混入、住居フク土
2　暗褐色土　砂質、ローム粒斑混
3　黄褐色土　堅い塊混入、地山の可能性もある



I－I'
1　暗褐色土　砂質、ローム斑混
2　にぶい黄褐色土　砂質、ローム混入

J－J'
1　暗褐色土　砂質、Φ１～10㎜大のローム少混
2　黄褐色土　砂質、1が少混、下部粘性をおび塊状、しまり弱

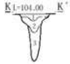


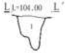
K－K'
1　褐色土　砂質、ローム微量少混
2　暗褐色土　砂質、Φ１～10㎜大のローム少混
3　黄褐色土　砂質、１が少混、下部粘性をおび塊状、しまり弱

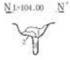
L－L'
1　褐色土　砂質、ローム微量少混

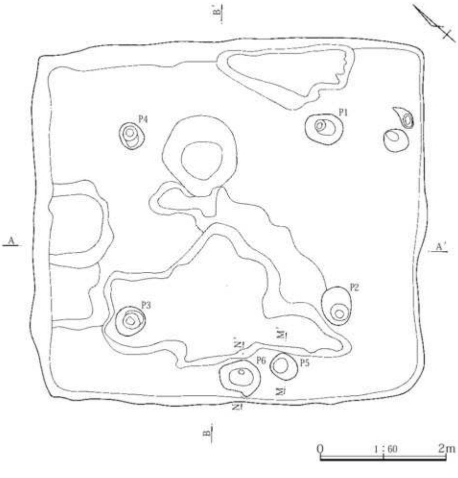
M－M'
1　黄褐色土　ローム塊混入
2　褐色土　砂質、ローム多混

N－N'
1　黄褐色土　ローム、黒色土多混、しまり弱
2　褐色土　砂質、ローム塊混入
3　褐色土　砂質、ローム混入、しまり弱

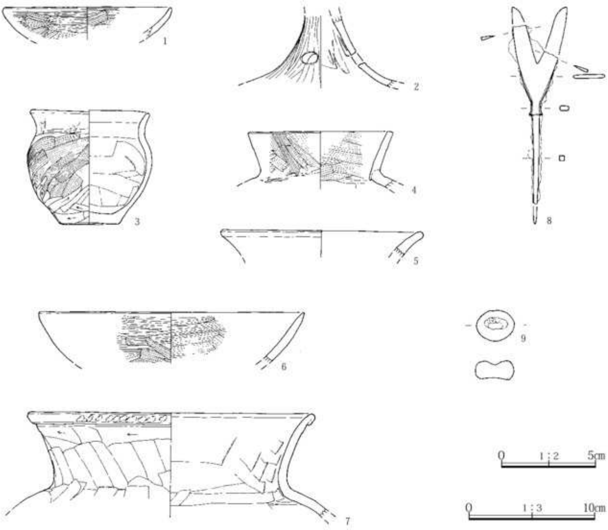






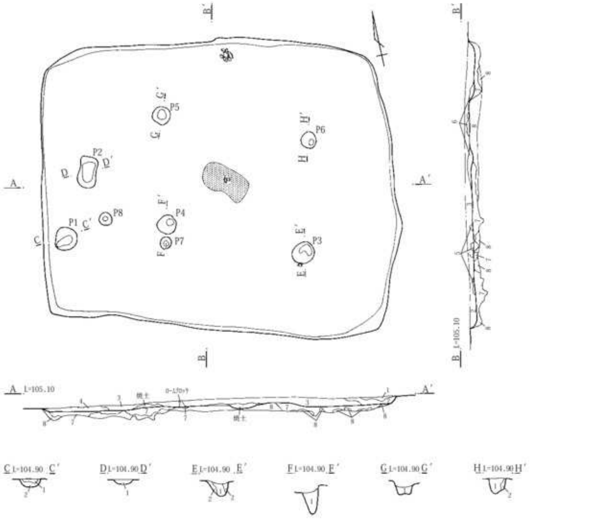


第22図　５号住居跡遺構図（２）



第23図　５号住居跡遺物図

６号住居跡（第24・25図　ＰＬ７・８・40）
位置　96Ｊ～Ｌ-17・18　重複関係　ない。
形状　長方形、東側が広い。
規模　5.64m　4.60m　0.13m
面積　25.94㎡
主軸方位　N78°W
覆土　自然埋没、暗褐色土、にぶい黄褐色土
炉　中央部　浅い掘り方の地床炉　西へ70cm離れて別の焼土が分布。
柱穴　４本、長軸・短軸・深さは、Ｐ３が37・30・36cm、Ｐ４が28・28・59cm、Ｐ５が26・26・30cm、Ｐ６が26・23・31cm、柱間はＰ３とＰ４が215cm、Ｐ４とＰ５が170cm、Ｐ５とＰ６が238cm、Ｐ６とＰ３が170cmである。
周溝　ない。
貯蔵穴　西側にあるＰ１、Ｐ２に可能性がある。長軸・短軸・深さは、Ｐ１が37・35・18cm、Ｐ２が50・27・６cmである。
床面　にぶい黄褐色土の貼り床、堅緻、ロームが混入。掘り方は、一面に浅い土坑状のものが連続していて、柱穴の位置で区別はしていない。
遺物と出土状況　遺物は僅少、甕、小型甕の破片が多く出土。
所見　古墳時代前期、床面に焼土のあることから、調査所見では焼失住居とみている。



１　暗褐色土　砂質、ローム塊混入、撹乱か
２　にぶい黄褐色土　砂質、軽石微混、ローム塊混入
３　暗褐色土　砂質、ローム混入、Ａｓ-Ｃ混土微混
４　黒褐色土　砂質、ローム塊混入、軽石微混
５　ローム塊
６　赤褐色土　焼土
７　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混
８　黄褐色土　ローム

Ｃ－Ｃ'
１　暗褐色土　Ａｓ-Ｃ混土、ローム混入
２　黄褐色土　ローム、暗褐色土混入

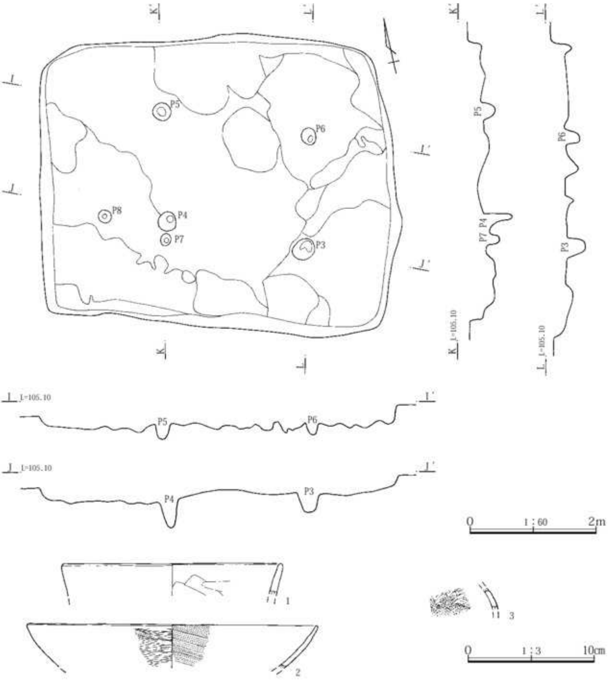
Ｄ－Ｄ'
１　暗褐色土　ローム混入

Ｅ－Ｅ'～Ｈ－Ｈ'
１　褐色土　砂質、暗褐色土とローム混入
２　黄褐色土　ローム

第24図　６号住居跡遺構図（１）

７号住居跡（第26～30図　ＰＬ８・９・41）
位置　96Ｈ～Ｊ-９・10　重複関係　ない。
形状　方形　規模　6.94m　6.82m　0.55m
面積　47.33㎡　主軸方位　N52°Ｅ
覆土　自然埋没、７層は壁に貼り付くようにあり、壁を養生した土か。

カマド　東壁中央部の南寄り、矩形に掘り残したロームを芯にして粘土などを貼付して作る。掘り方で検出された袖の際に点々とあるピットは、撹乱ではなく、崩落防止の杭の跡と解釈した。壁の奥と左右は強く焼け、使用時の様子を感じさせるが天井は



第25図　６号住居跡遺構図（２）・遺物図

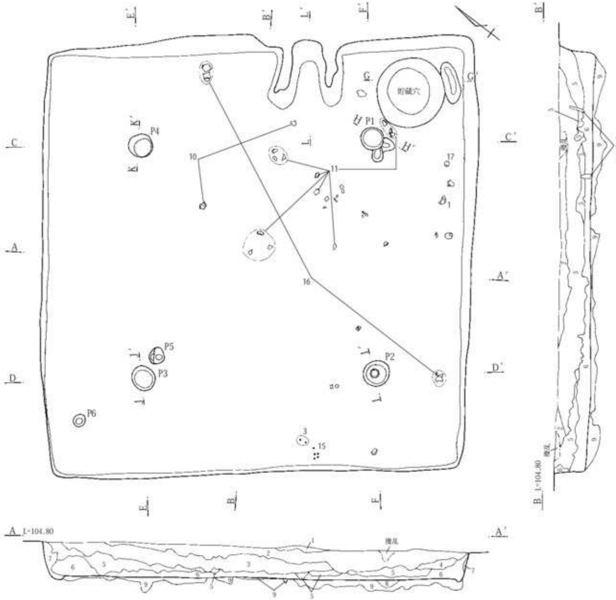
落ち、支脚、両袖石は抜かれて、故意に破壊したようである。支脚が一方に寄ることから２穴式である。
柱穴　Ｐ１～Ｐ４の４本が主柱穴、Ｐ３とＰ４の中間に補助柱穴１本、掘り方の南西壁から1.20mの箇所に底面を搗き固めたピット２本がある。長軸・短軸・深さは、Ｐ１が38・38・60cm、Ｐ２が40・40・50cm、Ｐ３が38・35・62cm、Ｐ４が37・35・63cm、Ｐ５が27・22・26cm、Ｐ６が20・18・13cm、柱間はＰ３とＰ４の360cmを除いたほかは365cmである。南西壁のほぼ中央部は他よりも20cmほど低く、入り口と見られる。
周溝　ない。掘り方で根太の跡を検出。両端に小ピットがあいている。
貯蔵穴　南東隅　方形　長軸・短軸・深さは107・

106・112㎝である。壁との間に粘土の帯がある。

床面　褐色土、ロームと暗褐色土との混土による貼り床、平坦、中央部は堅緻。掘り方では、主柱穴とは別なピットが壁に沿って検出された。根太の長さに一致していることから床張りに関連したものとみられる。

遺物と出土状況　甕、坏、甑、須恵器高坏、手づくね、碧玉製管玉、図示していないが拳程度の角閃石安山岩の割石、磨石も出土している。また、覆土からは多量の角閃石安山岩の卵大〜拳大の割石が出土している。

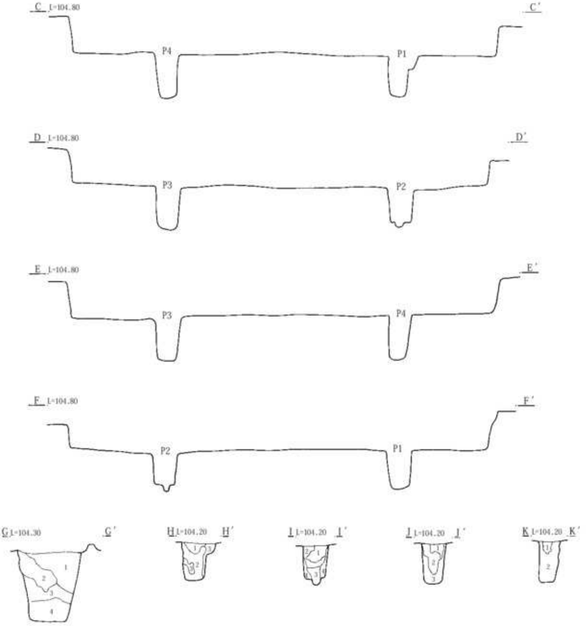
所見　古墳時代後期、６世紀前半



1　にぶい黄褐色土　Ａｓ－Ｂ混入、アッシュを除く軽石部分
2　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、３より明るい
3　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、にぶい黄褐色土斑混
4　にぶい黄褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、微砂混入
5　にぶい黄褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、微砂混入
6　黄褐色土　砂質、ローム粒多混、中央部塊状、壁際細粒
7　５とΦ３㎝大のローム塊の混土　周溝に伴う壁の土留めの痕跡か
8　にぶい黄褐色土　砂質、ローム混入、床を補修したものか
9　褐色土　ローム、暗褐色土斑混

0　1：60　2m

第26図　７号住居跡遺構図（１）

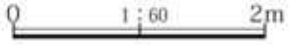


貯蔵穴　G－G′
1　黄褐色土　ローム多混、黒褐色土塊混入
2　黒褐色土　砂質、ローム塊多混、焼土混入
3　褐色土　粘質、焼土、ローム塊、黒色土塊混入
4　黄褐色土　ローム

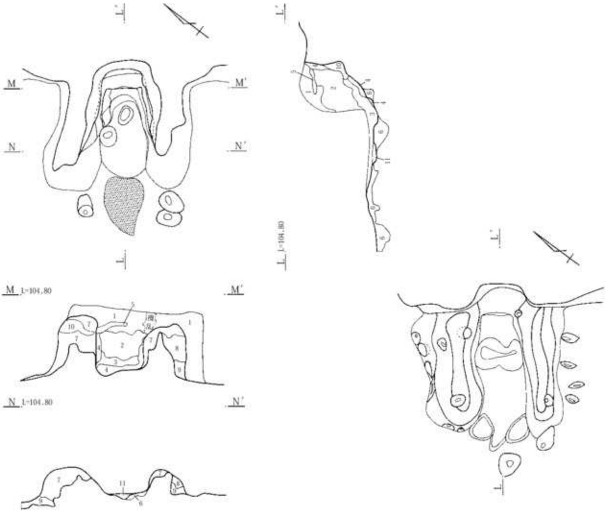
H－H′
1　にぶい黄褐色土　砂質
2　黄褐色土　砂質、Ａｓ－ＢＰ多混
3　暗色帯

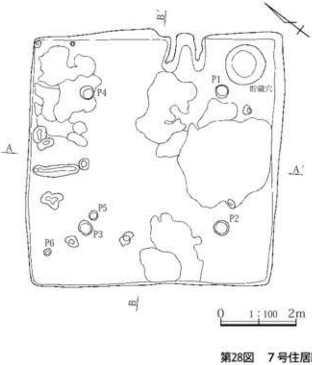
I－I′
1　にぶい黄褐色土　砂質、黒褐色土混入全体に黒い
2　黄褐色土　砂質、Ａｓ－ＢＰ粒多
3　明黄褐色土　粘性弱、暗色帯の塊混入、しまり弱
4　にぶい黄橙色土　粘性強、攪拌されている

J－J′・K－K′
1　褐色土　砂質
2　黄褐色土　砂質、地山のＡｓ－ＢＰ、暗色帯混入
3　黄褐色土　砂質、２よりも暗色帯など粘質土塊



第27図　７号住居跡遺構図（２）

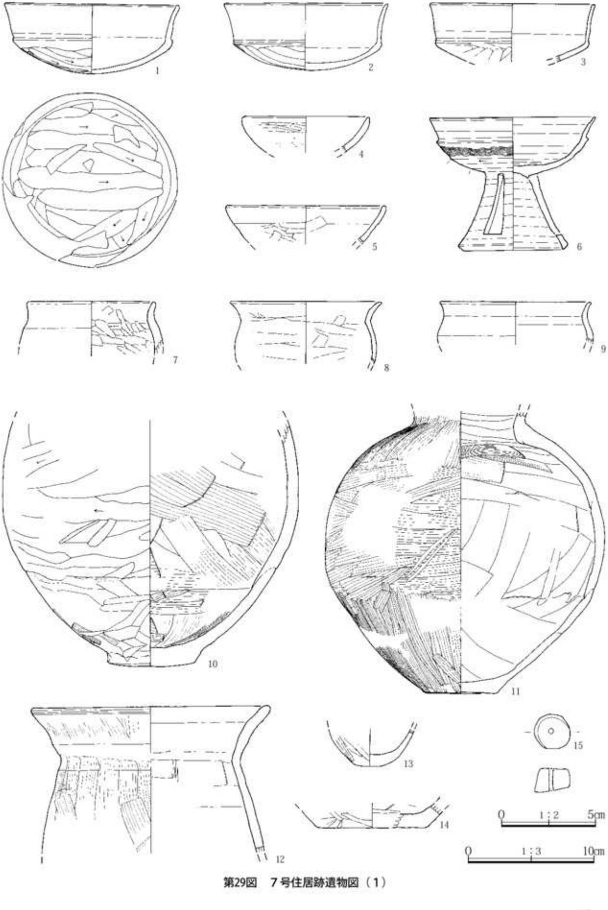




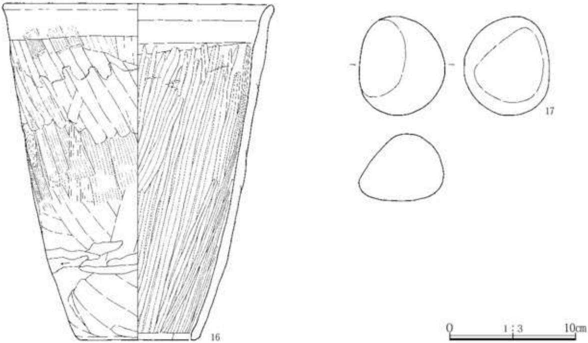
カマド
1　褐色土　砂質、ローム、焼土、粘土混入、壁外からの流入土
2　にぶい黄褐色土　砂質、Φ１～10㎜大の粘土、焼土粒少混
3　暗褐色土　砂質、２とローム粒斑混、灰と焼土多混
4　２とロームの混土　焼土粒混入
5　暗褐色土　にぶい黄褐色土粒多混
6　被熱した褐色土（火床面）
7　にぶい黄褐色土　砂質、Φ１㎝大ローム粒少混
8　灰黄褐色粘土　灰が混入、９との境に薄い層を作る
9　ロームとにぶい黄褐色砂質土の混土
10　ソフトローム
11　灰

0　1：30　1m

第28図　７号住居跡遺構図（３）



第29図　7号住居跡遺物図（1）



第30図　７号住居跡遺物図（２）

８号住居跡（第31～33図　ＰＬ９・10・41・42）

位置　96Ｋ～Ｍ-７・８　重複関係　南辺は２号掘立柱建物跡に伴い掘り方まで削平されている。

形状　方形､南辺は掘り方に残る痕跡から推定する。

規模　5.16ｍ以上　5.92ｍ　0.62ｍ

面積　30.54㎡以上　主軸方位　Ｎ１°Ｗ

覆土　自然埋没後、さらに人為的に埋め戻した形跡がある。上位に遺物が混入している。

炉　中央部の北　地床炉　円形　長軸82cm・短軸64cm・深さ７cm、縁石を残している。

柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が26・20・50cm、Ｐ２が20・13・64cm、Ｐ３が18・16・62cm、Ｐ４が20・18・53cmである。Ｐ１とＰ３には、荷重で傾くことを考慮した住居跡の内側に段がある。柱間は、Ｐ１とＰ２が300cm、Ｐ２とＰ３が340cm、Ｐ３とＰ４が320cm、Ｐ４とＰ１が325cmである。

周溝　全周していたとみられるが南側は削平。幅10cm前後、深さは５～15cmである。

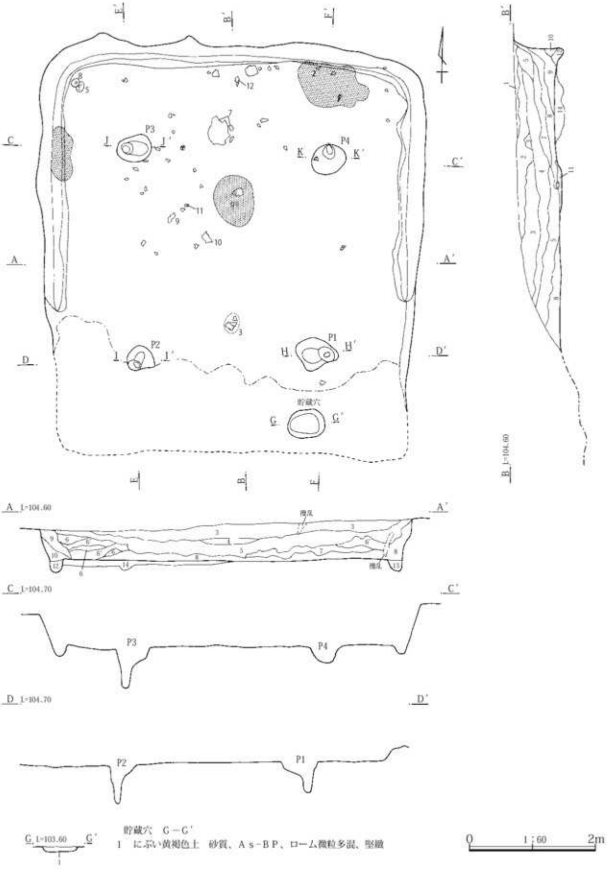
貯蔵穴　南東隅から１ｍ離れている。方形　長軸・短軸・深さは60・44・10cm、出土した遺物はない。

床面　黒褐色土、Ａｓ-ＢＰ、ロームの斑状混土による貼り床。平坦、堅緻。掘り方は、土坑状のものが一面に連続している。壁際が一段低い。

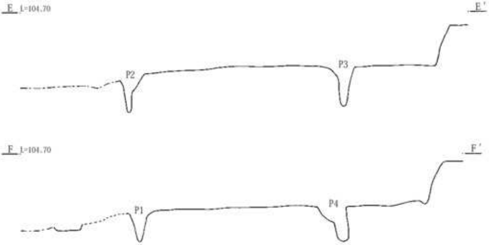
遺物と出土状況　覆土の上位で大型の破片が多く出土している。Ｓ字状口縁台付甕、壺、甑、器台、蓋、手づくね、９の大型の壺は10号住居跡と接合する可能性がある。図示していないが磨石、台石が出土。

所見　古墳時代前期

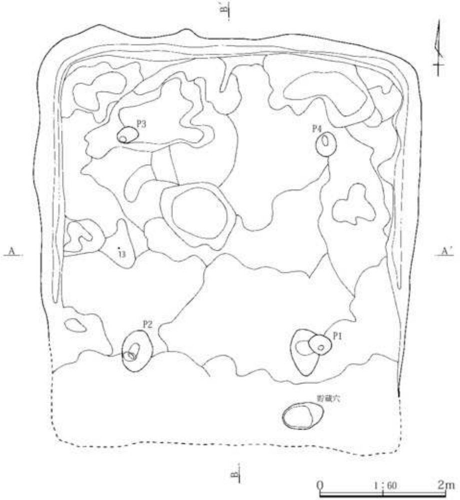
1　にぶい黄褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ混入
2　黒褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ、ローム混入
3　にぶい黄褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ微混、ローム塊、黒色土塊混入
4　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ微混、黒色土混入、ローム塊多混
5　暗褐色土　砂質、ローム多混、焼土・炭化物微混
6　黒褐色土　砂質、ローム塊混入
6'　黄褐色土　砂質、ローム多混
※黒褐色土・黄褐色土が交互に堆積、人為的に埋め戻したものか
7　褐色土　ローム多混、黒色土、ローム塊混入
8　褐色土　ローム、黒色土多混、ローム塊混入
9　暗褐色土　砂質、ローム多混、三角堆積
10　褐色土　砂質、ローム多混、三角堆積
11　焼土　炉跡
12　にぶい黄褐色土　Ａｓ-ＢＰ、黒褐色土との混土、周溝フク土
13　にぶい黄褐色土　12と同質、混入物多い
14　黒褐色土　Φ１～３cm大ローム塊多、Ａｓ-ＢＰ少混



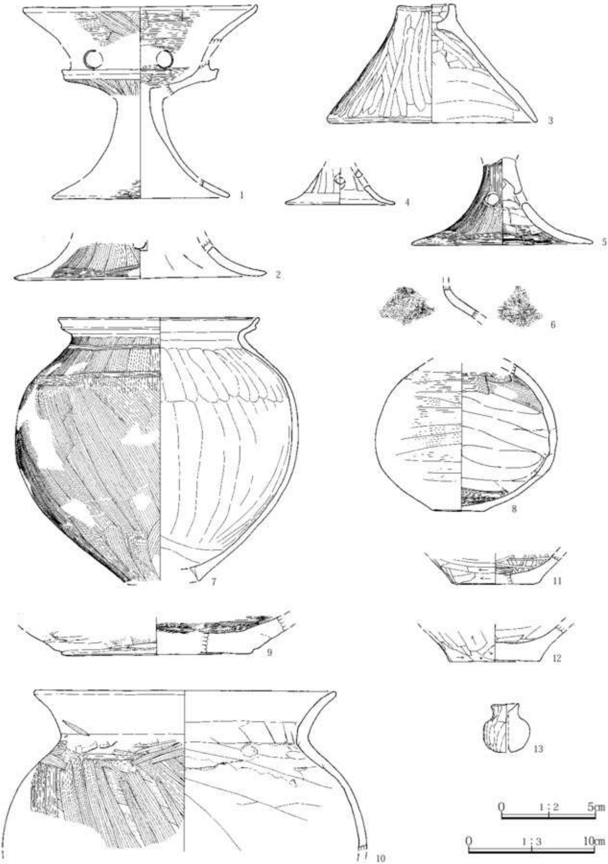
第31図　８号住居跡遺構図（１）



H－H'～K－K'
1　にぶい黄褐色土　砂質、Φ１㎝前後のローム粒少混
2　黄褐色土　砂質、全体は塊状、黒褐色土、暗褐色土等との混土



第32図　８号住居跡遺構図（２）



第33図　８号住居跡遺物図

９号住居跡（第34図　ＰＬ10・42）

位置　96Ｎ－８・９

重複関係　31号土坑、１号溝より古い。

形状　推定方形、１号溝の重複で東側を消失。

規模　4.00m　2.18m以上　0.18m

面積　8.72㎡以上

主軸方位　Ｎ１°Ｅ

覆土　Ａｓ－Ｃが混入する黒褐色土、暗褐色土で自然埋没。

炉　西壁寄りの焼土分布に可能性がある。

柱穴　掘り方の中央部に２本のピットがある。長軸・短軸・深さは、Ｐ２が20・15・19㎝、Ｐ３が16・14・30㎝である。

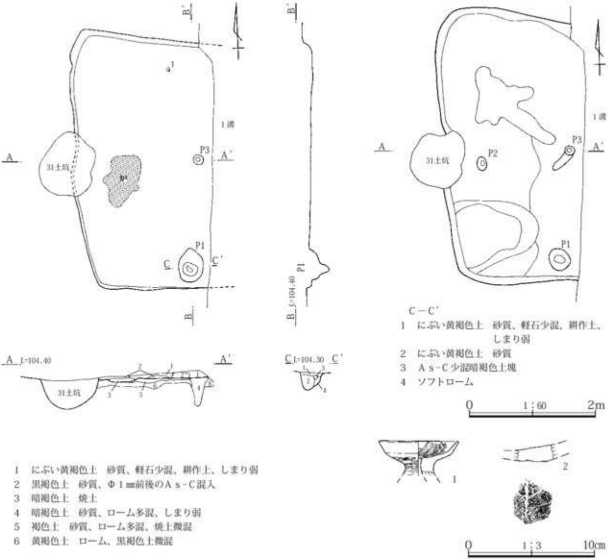
周溝　ない。

貯蔵穴　南辺の中央寄りにピットがある。楕円形長軸・短軸・深さは53・38・31㎝である。

床面　褐色土、黄褐色土による貼り床、地山との区別は難しく、硬さを基準とした。掘り方は土坑のようにしっかりしたものではない。南西隅のように浅く窪む程度で、しかも不規則である。

遺物と出土状況　遺物は僅少、器台、甕

所見　古墳時代前期



第34図　９号住居跡遺構図・遺物図

10号住居跡（第35～39図　ＰＬ10～12・42・43）

位置　96ＬＭ－９～11

重複関係　南西を１号溝が削平、溝より古い。

形状　隅丸方形

規模　6.56m　6.34m　0.52m

面積　41.59㎡　主軸方位　N70°W

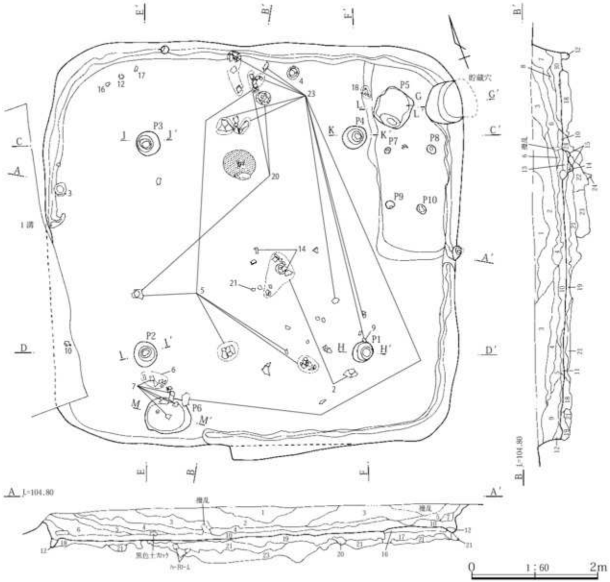
覆土　人為埋没、黒褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土、ロームブロックを多く含む。

炉　中央部北　地床炉　円形　長軸51cm・短軸43cm・深さ２cm、南側に縁石が残されている。

柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が33・30・56cm、Ｐ２が40・35・53cm、Ｐ３が38・37・65cm、Ｐ４が38・34・69cmである。柱間は、Ｐ１とＰ２が350cm、Ｐ２とＰ３が320cm、Ｐ３とＰ４が335cm、Ｐ４とＰ１が335cmである。

周溝　全周、幅、深さともに10cm前後。

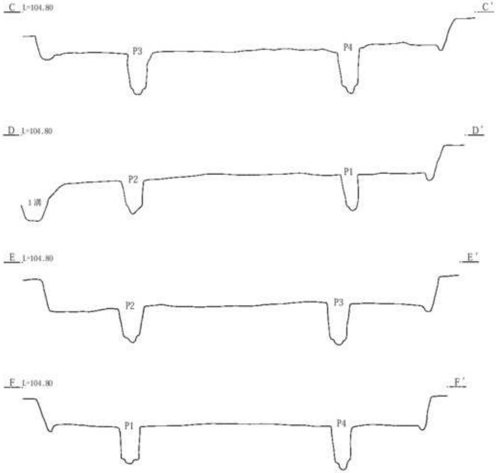
貯蔵穴　北東隅　方形　長軸・短軸・深さは80・66・37cm、半分が壁に食い込んで横穴状となる。Ｐ５は方形、長軸・短軸・深さは58・56・20cmである。ベッド状の中にも壁にかかるものとは別に、方形の浅い掘り込みがある。

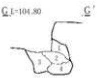


第35図　10号住居跡遺構図（１）

床面　にぶい黄褐色土、黄褐色土による貼り床、北東隅がベッド状となる。南北320cm・東西120cm・高さ10cm、２本、２列のピットと貯蔵穴らしい掘り込みがある。棚という調査時の所見である。

1　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ混入
2　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ混入、ローム塊多混
3　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ混入、ローム微混
4　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ混入、ローム微混
5　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ混入、ローム多混
6　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混、軽石混入
7　黒褐色土　砂質、軽石多混
8　黒褐色土　７にローム塊混入
9　褐色土　ローム多混、黒色土、Ａｓ-Ｃ混入
10　にぶい黄褐色土　ローム多混、黒色土微混
11　にぶい黄褐色土　砂質、ローム混入
12　にぶい黄褐色土　砂質、ローム塊混入、周溝フク土
13　暗赤褐色土　砂質、焼土、炭多混、カマドフク土
14　明赤褐色土　焼土
15　赤褐色土　焼土
16　明黄褐色土　ローム、ベッド状遺構貼床材
17　黄褐色土　ローム、黒色土斑混、ベッド状遺構貼床材
18　黄褐色土　ローム多混、黒褐色土斑混、しまり弱
19　にぶい黄褐色土　ローム、黒色土微混
20　にぶい黄褐色土　19に黒色土斑混
21　黄褐色土　ローム
22　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混
23　褐色土　ローム、ハードローム塊混入
24　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混





貯蔵穴　G－G'
1　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混
2　褐色土　砂質、ローム多混
3　暗褐色土　砂質、ローム、軽石微混
4　黒褐色土　砂質、ローム斑混

0　1：60　2m

第36図　10号住居跡遺構図（２）

遺物と出土状況　住居中央部と炉のまわりに集中。折り返し口縁・単純口縁の甕、壺、直口壺、高坏、器台、坩、坏、磨石が出土。

所見　古墳時代前期

H－H'
1　黄褐色土と黒褐色土との混土　柱痕
2　黄褐色土　砂質、ローム塊少混

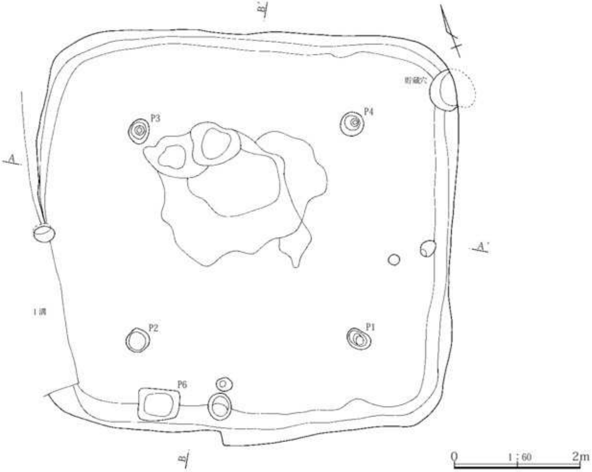
I－I'
1　黄褐色土と黒褐色土との混土　全体に均質
2　１と同質　明るい

J－J'
1　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ、Ａｓ-ＢＰの微砂混
2　黄褐色土　砂質、塊状ローム混入

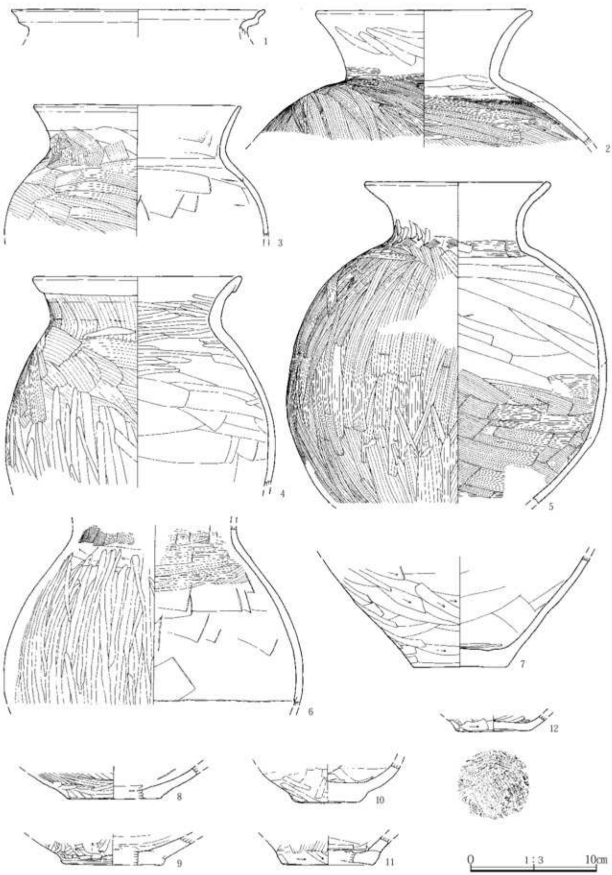
K－K'
1　にぶい黄褐色土　ローム粒混入、しまり弱、柱痕
2　ローム　黒褐色土と１の混土
3　ロームを主とするにぶい黄褐色土との混土

L－L'
1　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ微混、ローム塊混入

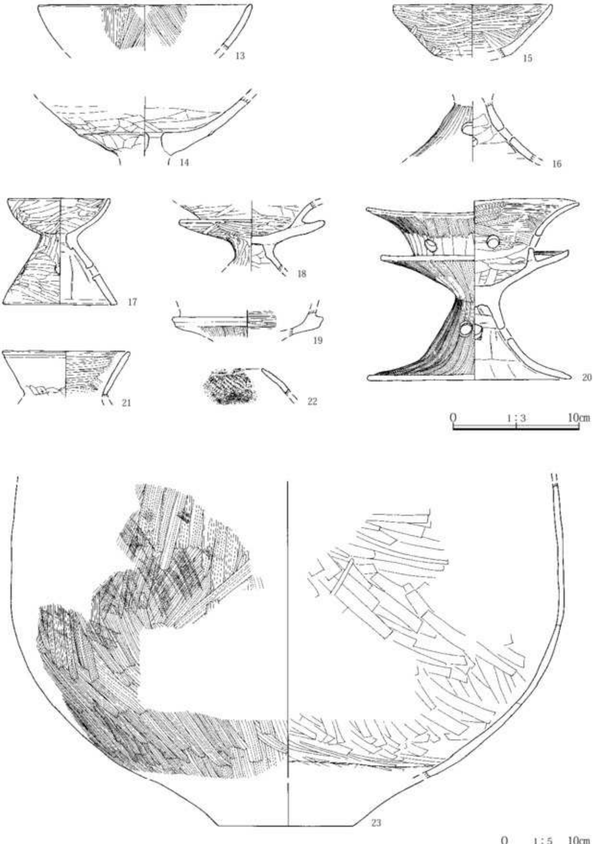
M－M'
1　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混
2　褐色土　砂質、ローム塊多混



第37図　10号住居跡遺構図（３）



第38図　10号住居跡遺物図（１）



第39図　10号住居跡遺物図（２）

11号住居跡（第40 ～ 42図　ＰＬ12・13・43・44）

位置　96ＬＭ-12・13

重複関係　ない。

形状　長方形

規模　6.25m　4.94m　0.22m

面積　30.87㎡

主軸方位　N28°　E

覆土　大粒のロームや焼土の混入が目立つ。

床面　ソフトロームまで掘り込み暗褐色土、黄褐色土による貼り床、平坦、中央部に薄い硬化面がみられるほかは全体に軟弱。掘り方はない。

炉　中央部北　円形　長・短軸92cm・深さ12cm、ほかに焼土が炉の南、西、北東の４箇所ある。

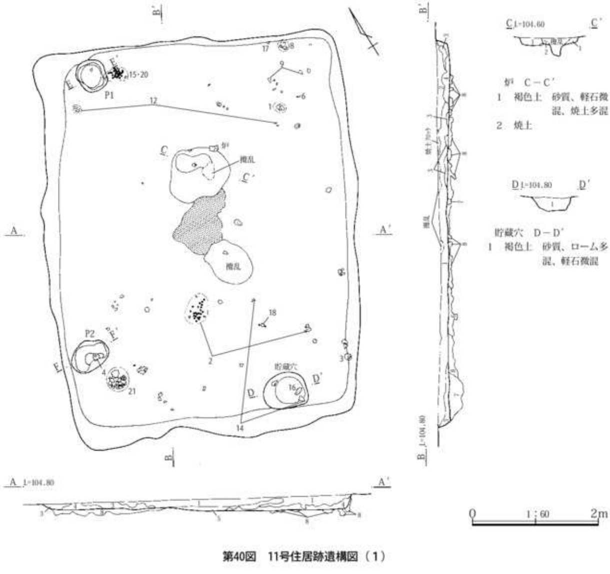
柱穴　対角線上にはない。長軸・短軸・深さは、Ｐ１が50・44・15cm、Ｐ２が61・46・26cmである。

周溝　ない。

貯蔵穴　南東隅から西へ0.60m　方形　長軸・短軸・深さは70・55・25cmである。

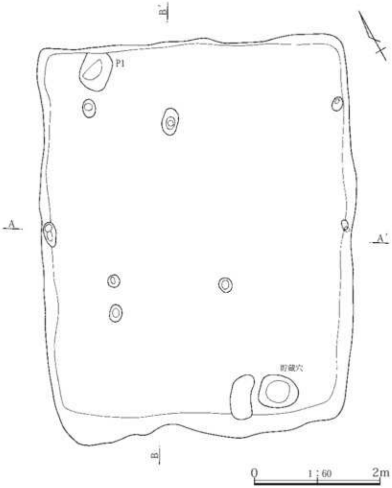
遺物と出土状況　壁際に小型の器種が残されていた。Ｓ字状口縁台付甕、甕、直口壺、坏のほか、図示していないが鉢、磨石が出土。また、北西隅の床上５cmに灰白色の粘土塊、混入ではなく仮置きしたような状態。

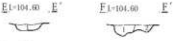
所見　古墳時代前期



第40図　11号住居跡遺構図（１）

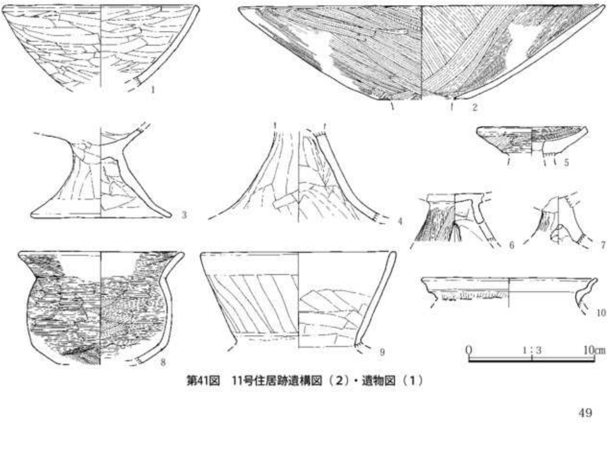
1　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、ローム粒少混
2　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、１と同質、ローム粒多
3　２と黄褐色土の混土
4　２と黄褐色土の混土　３より黄褐色土多混
5　１とローム塊　焼土との混土
6　褐色土　砂質、ローム混入、焼土多混
7　褐色土　砂質にローム斑混、黒色土塊混入
8　にぶい黄褐色土　ロームと暗褐色土の混土



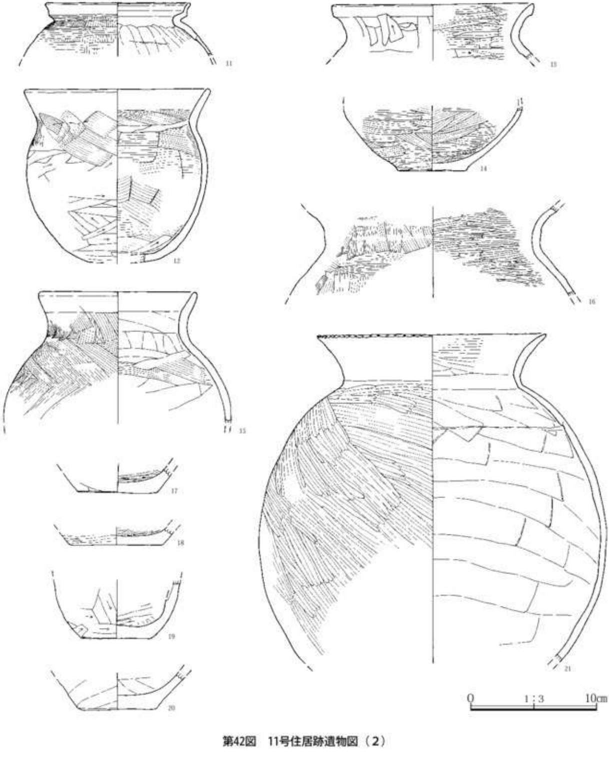


E－E'
1　にぶい黄褐色土　砂質、ローム混入

F－F'
1　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入
2　にぶい黄褐色土　砂質、ローム混入、軽石微混



第41図　11号住居跡遺構図（２）・遺物図（１）



第42図　11号住居跡遺物図（２）

12号住居跡（第43～46図　ＰＬ13・14・44）

位置　96Ｌ～Ｎ-13～15

重複関係　１号溝、２号溝より古い。

形状　方形　規模　6.00m　5.80m　0.52m

面積　34.80㎡　主軸方位　N70°Ｅ

覆土　人為埋没、２層以下はカマドで使用した粘土が卵大～拳大の大きさで混入するほか、全体がロームと暗褐色土の攪拌されたような混土の状態。

カマド　東壁南寄り、わずかに掘り残したロームを

土台にして暗褐色粘土に黒褐色土、暗褐色土など混ぜて袖を作り、両袖口だけに石を組む。焚き口の石は崩落しているが、天井の半分と支脚を残す。支脚の位置からすると１穴式である。

柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が53・44・69㎝、Ｐ２が36・29・63㎝、Ｐ３が46・31・58㎝、Ｐ４が32・27・72㎝、Ｐ５が26・21・80㎝、柱間はＰ１とＰ２が315㎝、Ｐ２とＰ４が326㎝、Ｐ４とＰ５が323㎝、Ｐ５とＰ１が336㎝である。

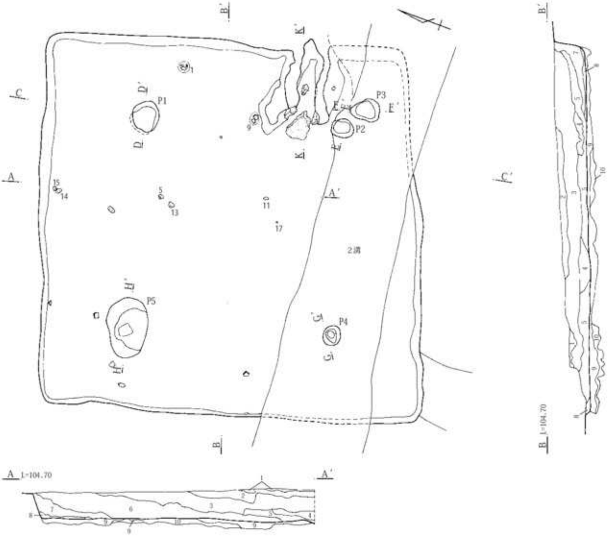
周溝　ない。

貯蔵穴　２号溝との重複で消失。

床面　にぶい黄褐色土による貼り床、平坦、堅緻。

遺物と出土状況　坏、高坏、須恵器𤭯、ヒスイ製垂玉、磨石、軽石、刀子、５の高坏は小型でミニチュアか、17の垂飾は７号住居跡管玉と同質。

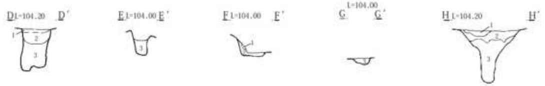
所見　古墳時代後期、６世紀前半



1　暗褐色土　軽石多混、耕作による撹拌土
2　にぶい黄褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ少混、ローム塊少混
3　にぶい黄褐色土　ローム粒、暗褐色粘質土斑混
4　３と同じ混土　暗褐色粘質土が５～10㎝大
5　３と同じ混土　３よりもロームや暗褐色粘質土が大粒
6　暗褐色土　砂質、ローム大粒で多い
7　にぶい黄褐色土　砂質、ローム微粒多混
8　ロームを主に黒褐色土との混土
9　にぶい黄褐色土　砂質、ローム斑混
10　黄褐色土　ローム

0　1：60　2m

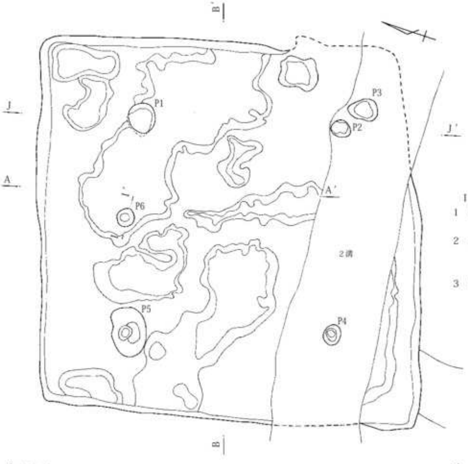
第43図　12号住居跡遺構図（１）

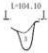


D－D′・E－E′・G－G′
1　暗褐色土　軽石多混、耕作による撹拌土
2　にぶい黄褐色土　砂質、As-C少混、ローム塊少混
3　褐色土　砂質、ローム塊多混、暗褐色土混入

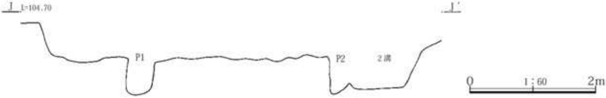
F－F′
1　灰褐色土　粘土
2　褐色土　砂質、ローム塊多混、暗褐色土混入

H－H′
1　暗褐色土　軽石、ローム粒少混
2　暗褐色土　1と同質、ローム粒は多く明るい
3　褐色土　ローム塊多混、軟、底面は堅緻

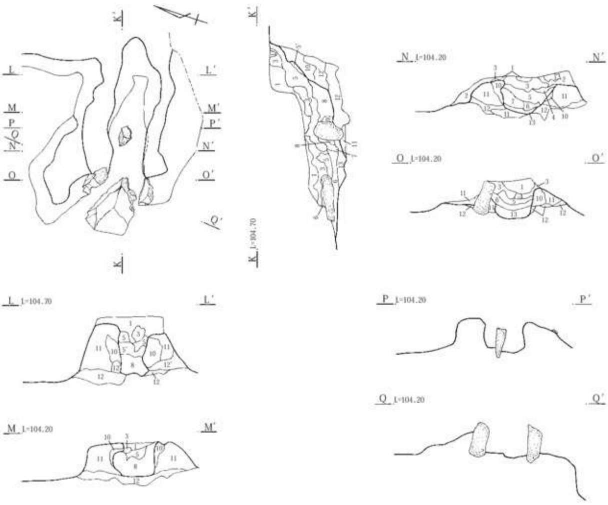




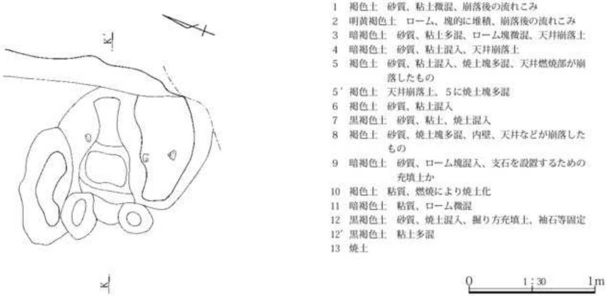
I－I′
1　暗褐色土　軽石多混耕作による撹拌土
2　にぶい黄褐色土　砂質、As-C少混、ローム塊少混
3　褐色土　砂質、ローム塊多混、暗褐色土混入



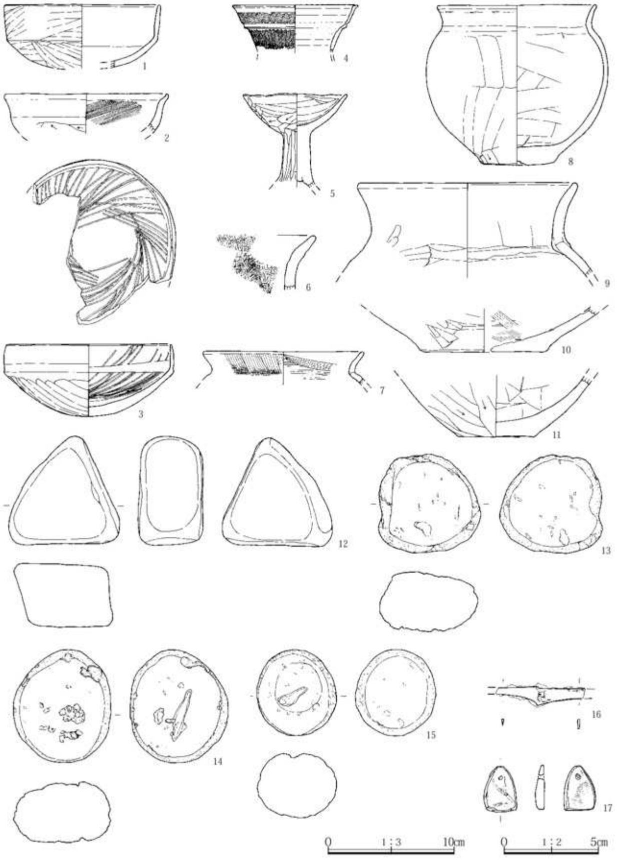
第44図　12号住居跡遺構図（2）



カマド
1　褐色土　砂質、粘土微混、崩落後の流れこみ
2　明黄褐色土　ローム、塊的に堆積、崩落後の流れこみ
3　暗褐色土　砂質、粘土多混、ローム塊微混、天井崩落土
4　暗褐色土　砂質、粘土混入、天井崩落土
5　褐色土　砂質、粘土混入、焼土塊多混、天井燃焼部が崩落したもの
5'　褐色土　天井崩落土、5に焼土塊多混
6　褐色土　砂質、粘土混入
7　黒褐色土　砂質、粘土、焼土混入
8　褐色土　砂質、焼土塊多混、内壁、天井などが崩落したもの
9　暗褐色土　砂質、ローム塊混入、支石を設置するための充填土か
10　褐色土　粘質、燃焼により焼土化
11　暗褐色土　粘質、ローム微混
12　黒褐色土　砂質、焼土混入、掘り方充填土、袖石等固定
12'　黒褐色土　粘土多混
13　焼土



第45図　12号住居跡遺構図（３）



第46図　12号住居跡遺物図

13号住居跡（第47～50図　ＰＬ 15・16・45）

位置　96Ｊ～Ｌ-14～16

重複関係　南東隅に２号溝が重複、２号溝より古い。

形状　方形　規模　6.06m　5.70m　0.54m

面積　34.54㎡　主軸方位　N17°　E

覆土　自然埋没、にぶい黄褐色土、暗褐色～黒褐色土、床面近くに１㎝大のローム粒が多く混入。

炉　北西寄り　地床炉　円形　長軸50㎝・短軸41㎝・深さ３㎝。

柱穴　４本、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が75・61・45㎝、Ｐ２が82・60・81㎝、Ｐ３が54・47・60㎝、Ｐ４が92・80・62㎝、柱間はＰ１とＰ２が308、Ｐ２とＰ３が308、Ｐ３とＰ４が310、Ｐ４とＰ１が307㎝である。

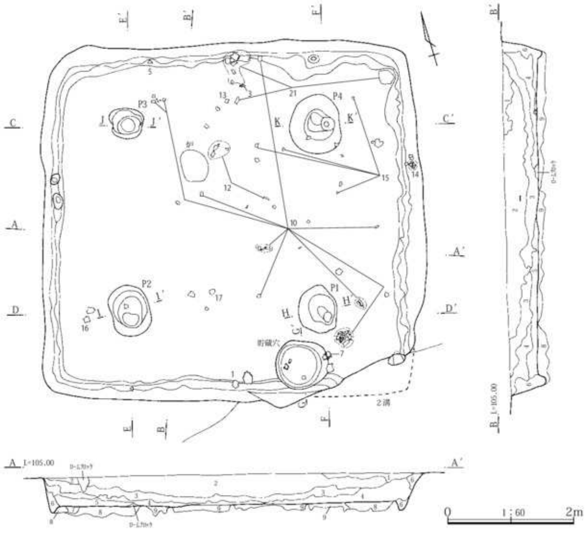
周溝　全周、幅10～17㎝、深さ10～15㎝。

貯蔵穴　南東隅　方形　長軸・短軸・深さは82・75・57㎝である。

床面　褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土による貼り床。平坦で堅緻。西壁沿いに平行して、ピットが連続する細い溝がある。間仕切りも考えたが用途は不明、検出は床面よりも上である。

遺物と出土状況　中央部で多い。破片がほとんどである。台付甕、甕、壺、鉢、高坏、器台７は異形の高坏、坏部は３つに仕切られている。壺は故意に割っている。８号、10号の住居跡にも同一個体らしい破片がある。図示したほかに甑の底部破片がある。

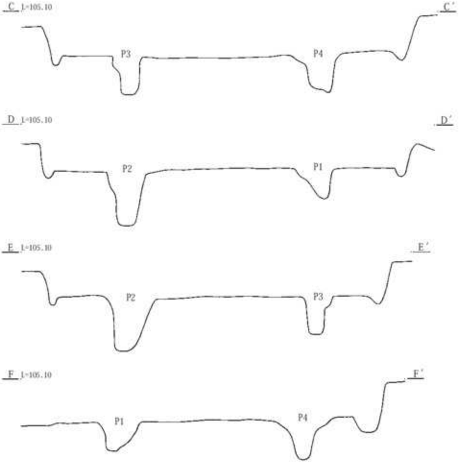
所見　古墳時代前期

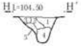


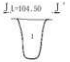
第47図　13号住居跡遺構図（１）

1　暗褐色土　軽石多混、軽石はＡｓ－Ｂが主
2　にぶい黄褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、
3　暗褐～黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、２よりＡｓ－Ｃ多混
4　３でも暗褐色土が特に多い部分
5　褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、１cm大のローム塊多混
6　にぶい黄褐色土　砂質、ローム粒、小塊多混
7　黒褐色土　砂質、ローム塊混入、しまり弱
8　褐色土　ロームと暗褐色土斑混
9　にぶい黄褐色土　ローム多混、暗褐色土斑混

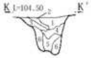
貯蔵穴　Ｇ－Ｇ′
1　暗褐色土　砂質、ローム混入
2　暗褐色土　砂質、ローム多混、ローム塊混入
3　黄褐色土　ローム、暗褐色土斑混
4　褐色土　砂質、ローム混入
5　黄褐色土　ローム







Ｊ－Ｊ′
1　暗褐色土　砂質、ローム斑混



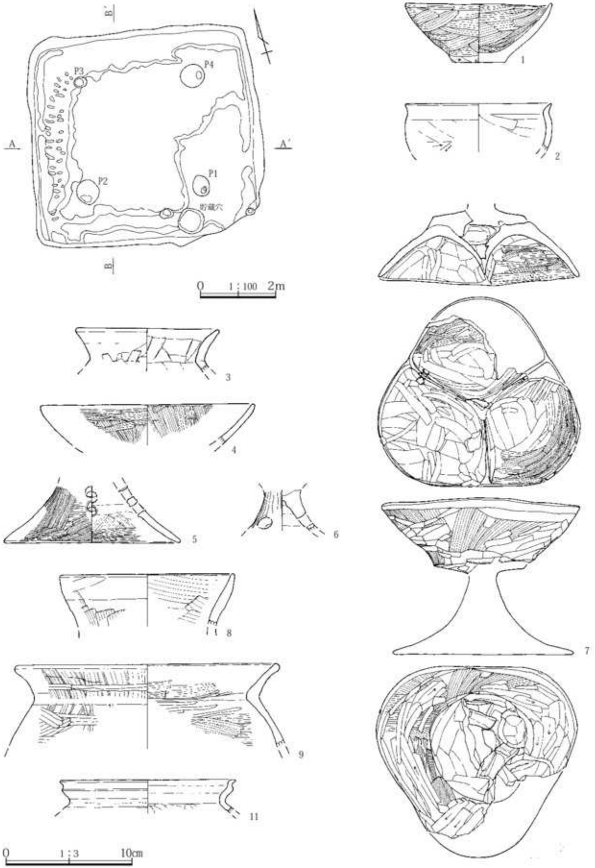
Ｈ－Ｈ′
1　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム混入
2　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム塊混入
3　褐色土　砂質、ローム多混
4　にぶい黄褐色土　ローム、黒色土斑混
5　褐色土　ローム、黒色土微混

Ｉ－Ｉ′
1　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム塊混入
2　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、ローム斑混
3　黄褐色土　ローム、黒色土微混
4　黄褐色土　ローム、黒色土混入、しまり強

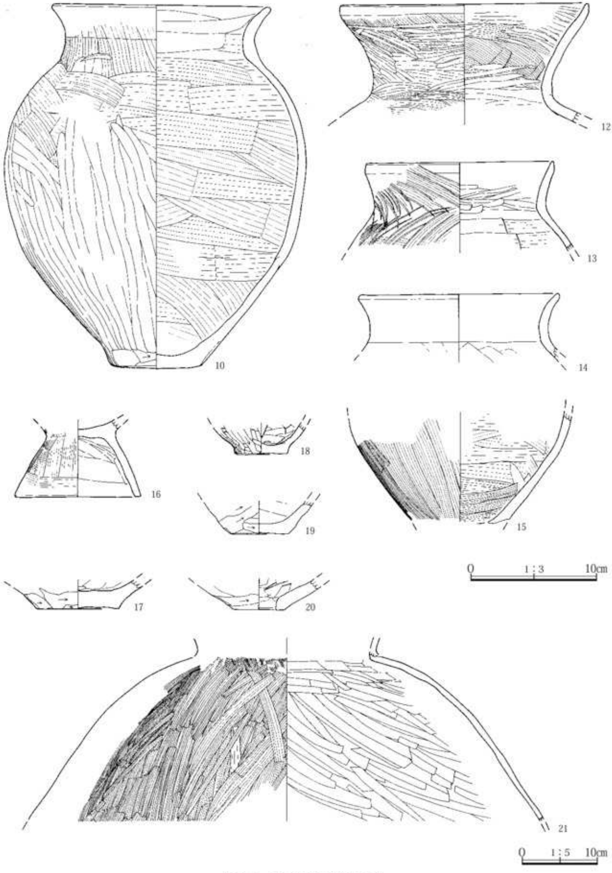
Ｋ－Ｋ′
1　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム混入
2　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム塊混入
3　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、ローム斑混
4　暗褐色土　ローム斑混
5　にぶい黄褐色土　ローム、黒色土斑混
6　黄褐色土　ローム、黒色土混入、しまり強

0　1:60　2m

第48図　13号住居跡遺構図（２）



第49図　13号住居跡遺構図（３）・遺物図（１）



第50図　13号住居跡遺物図（２）

14号住居跡（第51～58図　ＰＬ16・17・46～48）

位置　96Ｌ～Ｎ-17・18

重複関係　15号住居跡より新しい。

形状　方形

規模　5.68m　5.56m　0.46m

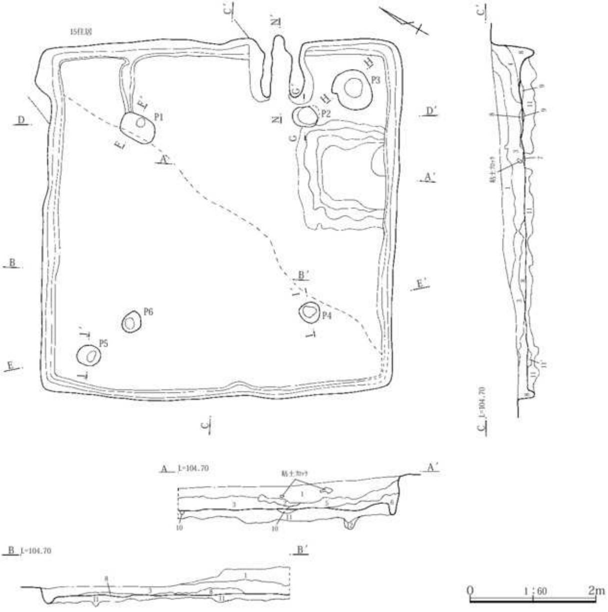
面積　31.58㎡

主軸方位　N60°E

覆土　人為埋没、ロームを多く含む黒褐色土、暗褐色土、中位には粘土のブロック。焼土と炭化材が床面に点在。

カマド　東壁中央部南寄り、矩形に掘り残したロームを芯にして粘土を貼付して作られている。袖口に石を組み、支脚には甕が架けられていた。間口40㎝、奥行き80㎝である。大小の甕、並列２穴式。

柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が56・39・43㎝、Ｐ２が41・31・76㎝、Ｐ３が66・56・70㎝、Ｐ４が33・33・80㎝、柱間は、Ｐ１とＰ２は265㎝、Ｐ２とＰ４は306㎝、Ｐ４とＰ６が280㎝、Ｐ６とＰ１は318㎝である。



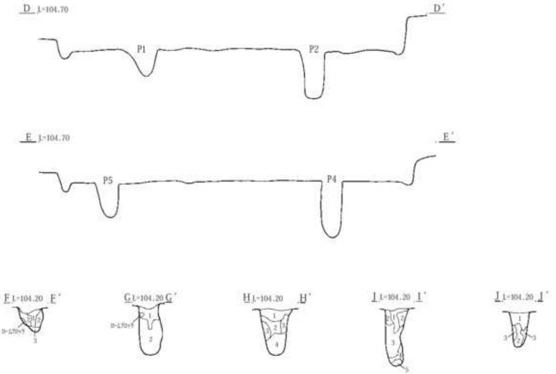
第51図　14号住居跡遺構図（１）

周溝　全周、幅８～17cm、深さ10cm前後。

貯蔵穴　東南隅　円形　長軸・短軸・深さは66・56・70cmである。

床面　黄褐色土と黒褐色土、ロームとの混土による貼り床、平坦、堅緻。南辺の東寄りに入り口、間口105cm、奥行き110cm、コの字、土手状に粘土を貼付

1　黒褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ混入、黒色土塊、ローム塊多混
2　灰褐色土　粘土堆積層
3　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ混入、ローム斑混、炭化物微混
4　暗褐色土　Ａｓ-Ｃ混入、ローム粒多混
5　褐色土　砂質、ローム塊混入、軽石、炭化物微混
6　にぶい黄褐色土　ローム多混、褐色土斑混、焼土微混、周堤帯
7　炭
8　暗褐色土　炭片、焼土粒、小ローム塊少混、３より黒み強い
9　焼土
10　黒褐色土　砂質、ローム混入、軽石微混
11　黄褐色土　ローム、黒褐色土斑混、しまり強
11'　褐色土　11に近いが暗褐色土多混
12　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混



F－F'
1　黒褐色土　砂質、ローム混入、焼土微混、柱痕
2　黒褐色土　砂質、ローム塊多混
3　褐色土　砂質、ローム多混

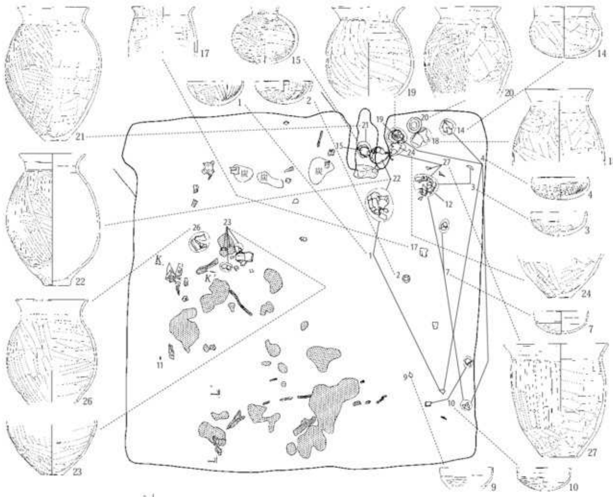
G－G'
1　暗褐色土　砂質、ローム塊多混
2　黄褐色土　ローム

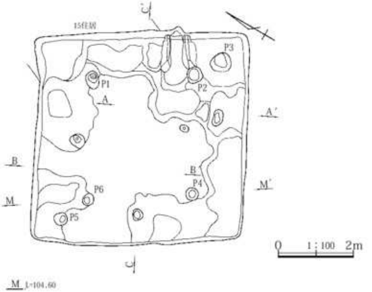
H－H'
1　黒褐色土　砂質、ローム多混、焼土微混
2　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混
3　黄褐色土　ローム
4　明黄褐色土　ローム、地山か

I－I'
1　暗褐色土　ローム粒、軽石混入、軟
2　褐色土　１よりローム粒多混、軽石少混、軟
3　褐色土　２に近いがローム塊少混、軟
4　黄褐色土　ローム塊を主とする、軟
5　黄褐色土　軽石混入、堅緻

J－J'
1　暗褐色土　Ａｓ-Ｃ、ローム粒、ローム塊混入
2　暗褐色土　１よりローム塊少混、軟
3　褐色土　ローム多混、暗褐色土混入

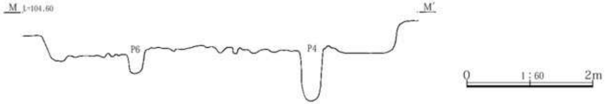
第52図　14号住居跡遺構図（２）





K－K'
1　暗褐色土　炭化物、ローム粒、焼土粒混入、軽石少混
2　褐色土　焼土粒、ローム塊混入、炭細片微混
3　黄褐色土　ローム多混、暗褐色土、焼土粒少混

L－L'
1　黒褐色土　上位にローム粒、軽石、炭片多混
2　暗褐色土　ローム粒、ローム塊、焼土粒混入
3　暗褐色土　２に近いが焼土少混、ローム塊多混

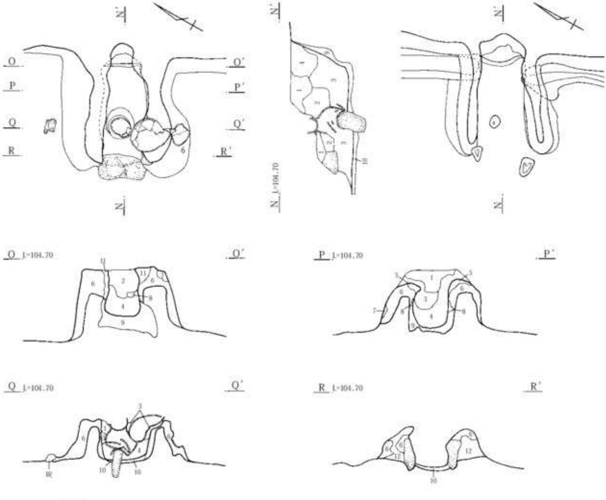


第53図　14号住居跡遺構図（３）

して区画。

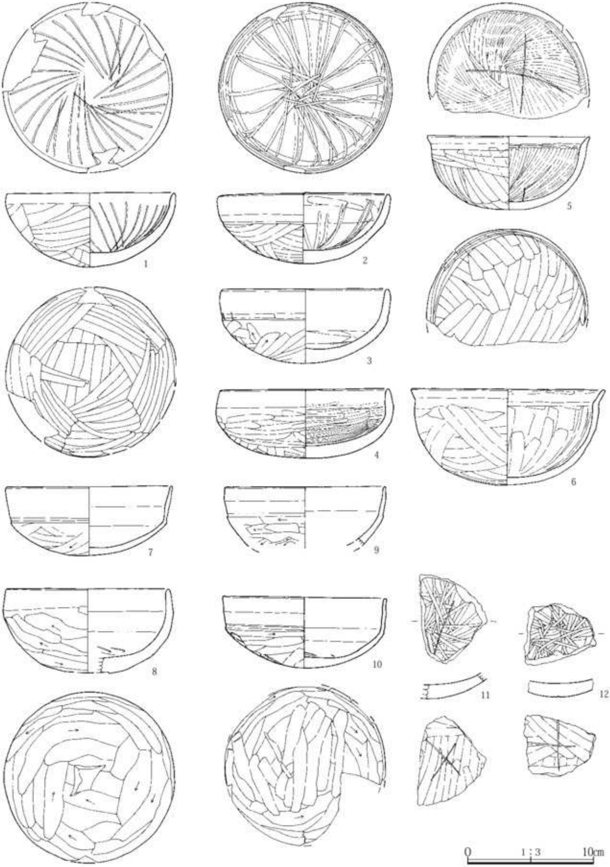
遺物と出土状況　カマドと貯蔵穴のまわりに集中、甕、小型甕、甑、坏、器台、炭化物は９点を取り上げ。壁に直交、ほぼ等間隔で残存。被災落下した垂木で２本ひと組にみえる。太さ４～８㎝、丸木と半割材が混在。付着した土には焼土が混入。

所見　古墳時代後期、６世紀前半、カマド、入り口など使用時の状態を残している。

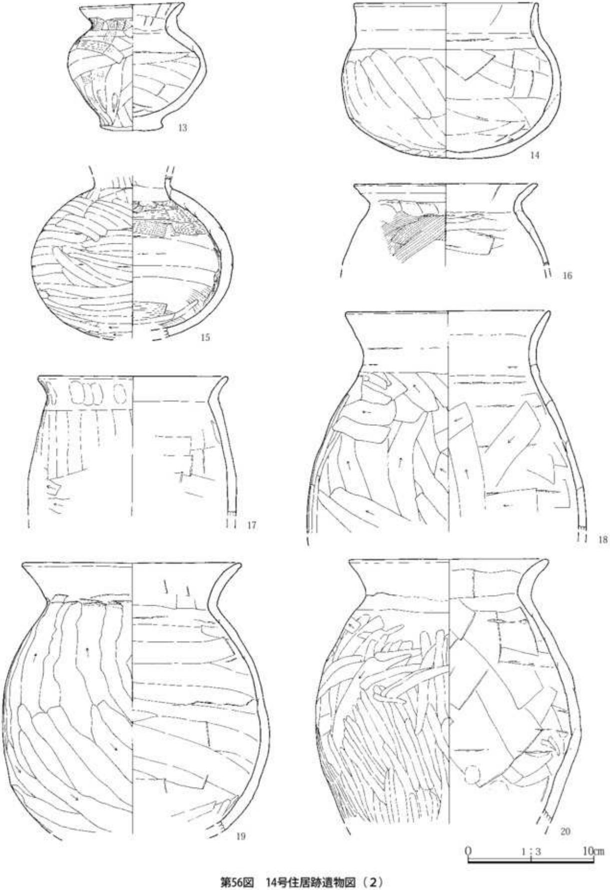


カマド
1　暗褐色土　砂質、焼土、炭、粘土混入
2　１より暗く焼土多混
3　１に袖から流出した粘土混入
4　多量の灰と暗褐色砂質土の混土
5　６と大粒の焼土、ローム混入
6　褐色粘土　緻密、スサ入り
7　崩れた６に焼土　ローム粒混入
8　焼土塊　９の一部が特に赤化
9　ローム　暗褐色土混土、ローム赤化
10　灰を主とする焼土との混土
11　６の一部　全体に被熱で淡く赤化
12　粘土　スサを混ぜて袖石を被覆

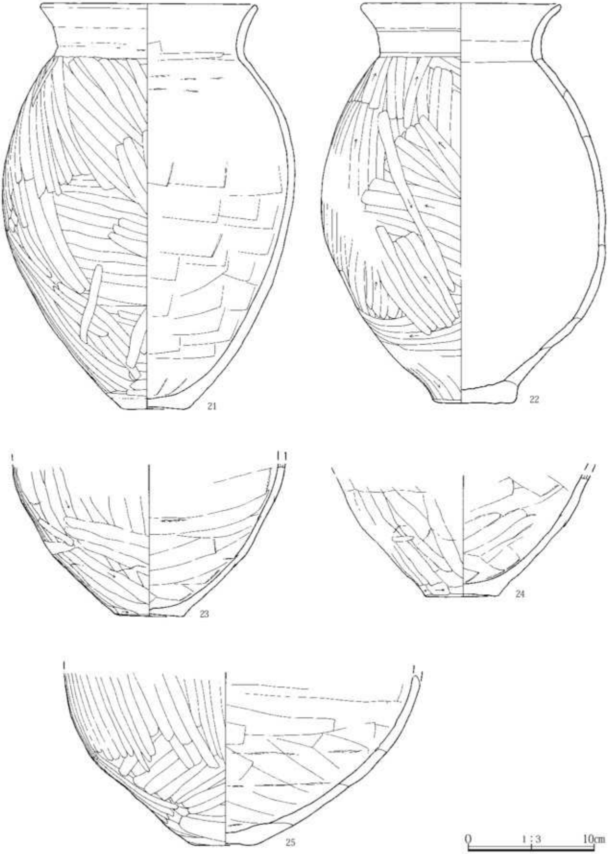
第54図　14号住居跡遺構図（４）



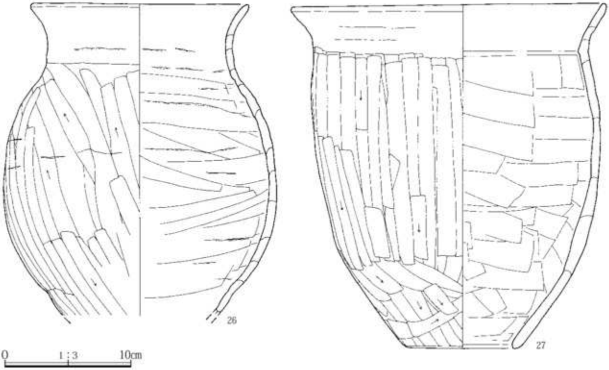
第55図　14号住居跡遺物図（１）



第56図　14号住居跡遺物図（２）



第57図　14号住居跡遺物図（３）



第58図　14号住居跡遺物図（４）

15号住居跡（第59・60図　ＰＬ17）

位置　96ＬＭ-18

重複関係　14号住居跡より古い。

形状　推定方形

規模　3.30m　2.27m以上　0.28m

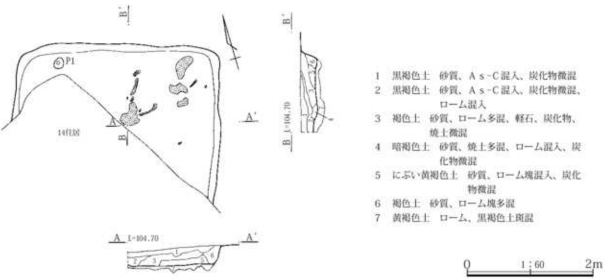
面積　7.49㎡以上

主軸方位　N72°W

覆土　自然埋没、黒褐色土、褐色土、Ａｓ-Ｃが混入。

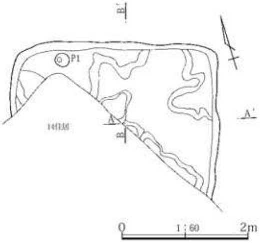
炉　中央部の焼土に可能性がある。他の焼土は、焼失した屋根材に伴うものである。

柱穴　検出した範囲にはない。北西隅のピットは、



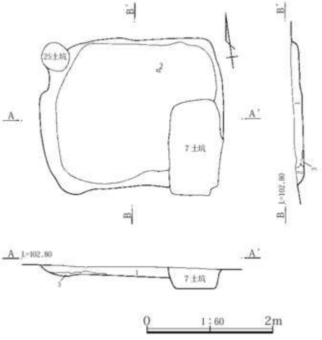
第59図　15号住居跡遺構図（１）

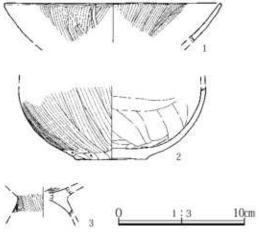
直径16cm、深さ25cmである。
周溝　ない。
貯蔵穴　検出した範囲にはない。
床面　黄褐色土による貼り床、平坦、やや堅緻。
遺物と出土状況　焼土を伴い炭化材だけが出土。中心から放射状に分布。９点を取り上げた。直径５cmほど、垂木とみられる丸木と板状のものとがある。
所見　古墳時代前期、焼失住居。時期は覆土の特徴で決定した。



第60図　15号住居跡遺構図（２）

16号住居跡（第61図　ＰＬ17・18・48）
位置　96ＧＨ－４　重複関係　南東隅にある７号土坑、北西隅にある25号土坑より古い。
形状　方形　規模　2.91m　2.31m　0.15m
面積　6.72㎡　主軸方位　Ｎ83°Ｗ
覆土　自然埋没、Ａｓ－Ｃが混入する黒褐色土
炉・周溝　検出した範囲にはない。
柱穴　平面図の記録はないが、断面Ａには南壁にかかりピット１本がある。調査所見には、25号土坑に近い、北西隅寄りにもピット１本があると記載されている。
床面　ローム層まで掘り込まず、黒褐色土に薄い硬化面が認められた。
遺物と出土状況　遺物は僅少、図示したほかに壺、高坏の破片がある。



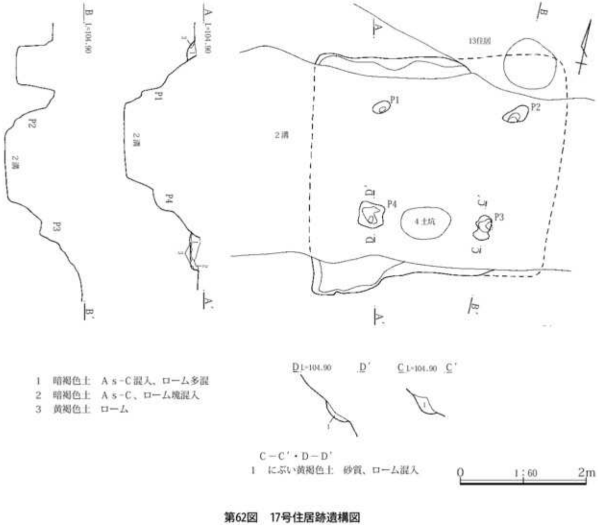


１　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ混入
２　暗褐色土　１にローム混入
３　黄褐色土　ロームと１の混入

第61図　16号住居跡遺構図・遺物図

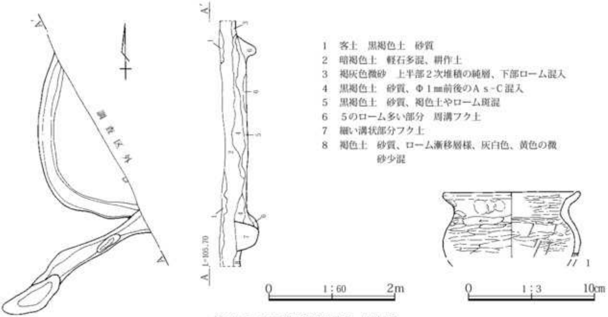
所見　古墳時代前期、時期は出土した遺物で決定した。炉がなく、柱穴も不明である。規模も小さい。これらの特徴は、４号住居跡と共通する。ともに谷地に続く斜面にあって竪穴状の遺構であろうか。

17号住居跡（第62図　ＰＬ18）
位置　96Ｋ-14
重複関係　２号溝が東西に横断していて、残るのは南北の両辺とも50cmほどの範囲である。北東隅には13号住居跡が重複、３つの遺構の中では最も古い。掘り方では、２号溝の法面にかかり縄文時代の４号土坑が重複している。法面で検出した２号溝２号・３号土坑は、本住居跡の柱穴に変更した。
形状　方形
規模　3.40m　2.82m以上
面積　9.58㎡以上　主軸方位　N11°W
覆土　暗褐色土
炉　削平部分に推定。
柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が30・17・73㎝、Ｐ２が44・23・82㎝、Ｐ３が39・23・62cm、Ｐ４が38・37・53cm、柱間はＰ１とＰ２が204cm、Ｐ２とＰ３が172cm、Ｐ３とＰ４が185cm、Ｐ４とＰ１が172cmである。
周溝・貯蔵穴　検出した範囲にはない。
床面　ローム漸移層まで掘り込む。詳細は不明。
遺物と出土状況　遺物は僅少。
所見　古墳時代前期、時期は覆土の特徴、13号住居跡との重複関係で決定した。



第62図　17号住居跡遺構図

18号住居跡（第63図　ＰＬ18・48）
位置　96ＨＩ-13・14、調査区の壁にかかり、南西隅を検出。重複関係　南壁には、番号のない溝がかかる。溝が新しい。
形状　推定方形、周溝によりプランを決定、深さは断面図で計測。
規模　1.92m以上　1.10m以上　0.39m
面積　2.11㎡以上　主軸方位　Ｎ７゜Ｅ
覆土　Ａs-Ｃが混入する黒褐色土、３層褐灰色砂層はＡｓ-Ｂの２次堆積か。範囲は、２号溝の近くまで２mほどの幅がある。
炉・柱穴　検出した範囲にはない。
周溝　全周するか。幅15～18cm、深さ14cm
床面　ローム漸移層まで掘り込む、土器が出土したあたりに硬化面がある。ロームを直接踏み固めたものではなく、薄く貼り床をしている。
遺物と出土状況　遺物は僅少、甕、小型甕
所見　古墳時代後期、覆土の特徴と掲載した甕から判断した。

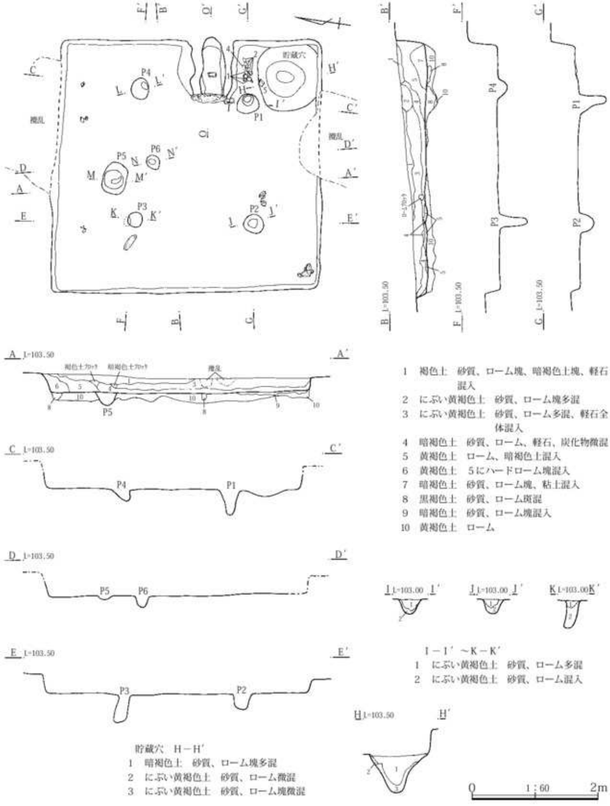


第63図　18号住居跡遺構図・遺物図

19号住居跡（第64～66図　ＰＬ18・19・48）
位置　96ＱＲ-11・12　重複関係　ない。
形状　方形　規模　4.20m　3.97m　0.43m
面積　16.67㎡　主軸方位　Ｎ80゜Ｅ
覆土　自然埋没、にぶい黄褐色土、黄褐色土
カマド　東壁中央部、矩形に掘り残したロームに粘土を貼付して作る。良好な遺存状態で、焚き口に鳥居状の石組み、内部に支脚を残す。全長95cm、焚き口は幅30cm、高さ推定20cm。支脚高は15cmである。石は、粗粒輝石安山岩を使用、一部に高さ調整のハツリの跡がある。顕著な変色とタールが付着。
柱穴　4本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が36・31・40cm、Ｐ２は31・29・24cm、Ｐ３は28・23・43cm、Ｐ４は33・28・22cm、柱間はＰ１とＰ２が197cm、Ｐ２とＰ３が184cm、Ｐ３とＰ４が208cm、Ｐ４とＰ１が164cmである。Ｐ５、Ｐ６は用途が不明。
周溝　掘り方の南西隅で検出。間仕切り溝を北辺中央、Ｐ２と西壁の間で検出。幅が20cm前後、深さ５～15cmである。貯蔵穴　南東隅　方形　長軸・短軸・深さは100・93・59cmである。
床面　ロームを多量に含む黒褐色土と暗褐色土による貼り床、平坦、堅緻。
遺物と出土状況　カマドのまわりから北壁沿いに多

い。坏、高坏、磨石、敲石、軽石製砥石、台石、砥石は強い凹面、砥面の幅は少なく、用途は刀子程度のものか。高坏は、10号住居跡と接合。

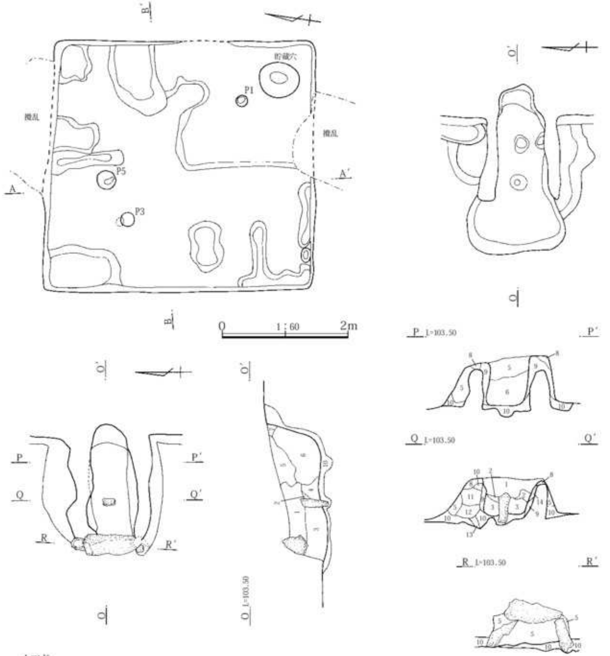
所見　古墳時代後期、６世紀前半



第64図　19号住居跡遺構図（１）

L－L'
1　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混
2　にぶい黄褐色土　砂質、ローム塊多混

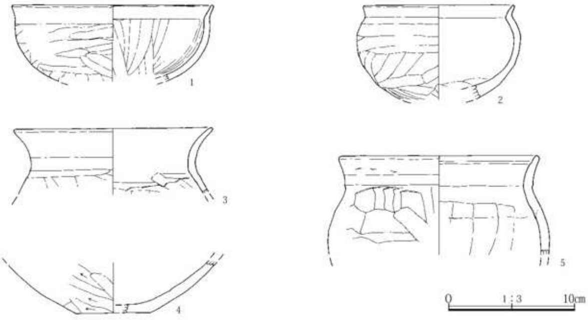
M－M'・N－N'
1　黒褐色土　砂質、ローム微混
2　暗褐色土　砂質、ローム斑混



カマド
1　暗褐色土　砂質、ローム微粒多混
2　１と灰色粘土の混土　粘土の方が多、焼土粒少混
3　袖、天井から崩落した灰色粘土
4　灰色粘土とΦ１～３㎝のローム粒との混土
5　灰色粘土　シルト質、緻密
6　崩落した５と焼土　灰の混土
7　にぶい黄褐色土　Φ１㎝前後のローム粒混入
8　にぶい黄褐色土と５の混土
9　被熱淡く赤化した５、11、12の内壁で貼付
10　11と黒褐色土の混土
11　ソフトローム　12とともに袖の芯材
12　11に少量の黒褐色土が混入
13　黒褐色土　ローム混入
14　焼土　ロームの表層が被熱で焼けたもの

0　1：30　1m

第65図　19号住居跡遺構図（２）



第66図　19号住居跡遺物図

20号住居跡（第67 ～ 70図　ＰＬ19・20・48）

位置　96Ｎ～Ｐ-12 ～ 14

重複関係　東西に２号溝､北西隅に36号土坑が重複、本住居跡が最も古い。

形状　方形

規模　8.70ｍ　8.60ｍ　0.63ｍ

面積　74.82㎡　主軸方位　Ｎ68°Ｗ

覆土　人為埋没、黒褐色土を主として暗褐色土、褐色土、ロームを含む。

炉　南西寄り　Ｐ１から50㎝　円形　長軸62㎝、短軸58㎝、深さ９㎝

柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が104・71・84㎝、Ｐ２が85・80・47㎝、Ｐ４が64・47・51㎝、Ｐ５が92・77・94㎝、柱間はＰ１とＰ２が433㎝、Ｐ２とＰ４が471㎝、Ｐ４とＰ５が394㎝、Ｐ５とＰ１が443㎝である。Ｐ４とＰ５では、新旧２本が重複。

周溝　全周、幅15 ～ 20㎝、深さ13 ～ 25㎝、掘り方では壁と柱穴の間に間仕切り溝が検出された。

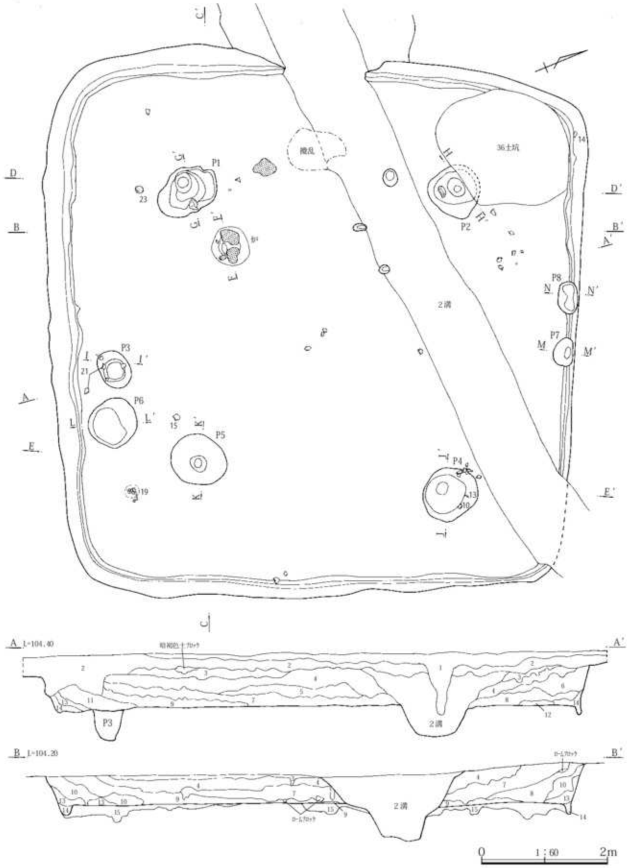
貯蔵穴　南辺にＰ６　円形　長軸・短軸・深さは77・75・46㎝である。

床面　にぶい黄褐色土による貼り床、平坦、堅緻。掘り方では壁際が一段低くなり、その中に周溝が二重にめぐる。ずれは、北壁で最大60㎝である。建て替えの跡で、新旧がある柱穴の状況とも一致する。

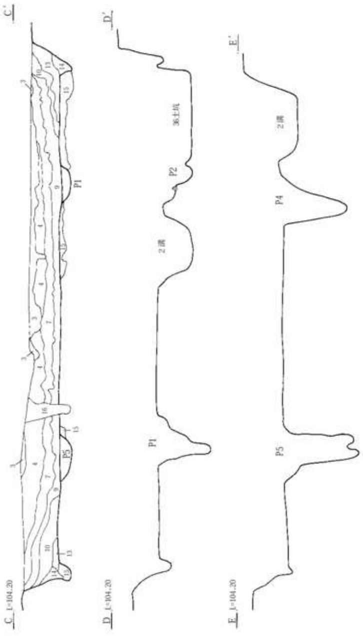
遺物と出土状況　甕、器台、高杯、軽石製砥石、須恵器蓋、砥石は手持ちの筋砥、大型の甕胴部の破片は13号住居跡のものと同一個体か。

所見　古墳時代前期

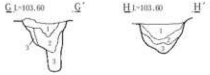
1　暗褐色土　砂質、表土、軽石微混
2　黒褐色土　砂質、軽石、炭化物微混
3　にぶい黄褐色土　砂質、軽石、ローム微混
4　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃとローム塊微混
5　黒褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ混入
6　暗褐色土　砂質、ローム斑混、軽石微混
7　黒褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ混入、ローム微混
8　黒褐色土　砂質、ローム斑混、軽石微混
9　褐色土　砂質、軽石混入、ロームと暗褐色土の混土
10　黒褐色土　砂質、軽石、ローム微混
11　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混、黒色土塊混入
12　黒褐色土　砂質、ローム塊、黒色粘質土混入
13　黄褐色土　ローム
14　褐色土　砂質、ローム多混
15　にぶい黄褐色土　砂質、ローム斑混
16　暗褐色土　２～５混入

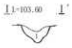


第67図　20号住居跡遺構図（１）



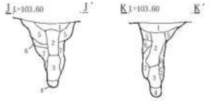
炉　F－F'
1　暗褐色土　砂質、焼土多混、ローム混入



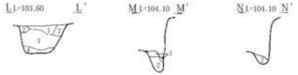


G－G'・H－H'
1　黒褐色土　砂質、ローム混入、軽石微混
2　褐色土　砂質、ローム斑混
3　黄褐色土　ローム

I－I'
1　にぶい黄褐色土　砂質、ローム塊混入



J－J'・K－K'
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊、軽石少混
2　黒褐色土～暗褐色土　ローム粒、ローム塊、軽石混入、軟
3　暗褐色土　ローム塊混入、軟
4　褐色ローム　堅緻
5　暗褐色土　１よりローム粒、ローム塊多混、軽石少混、軟
6　褐色土　ローム多混、軟
7　黄褐色ローム　ローム塊多混、堅緻

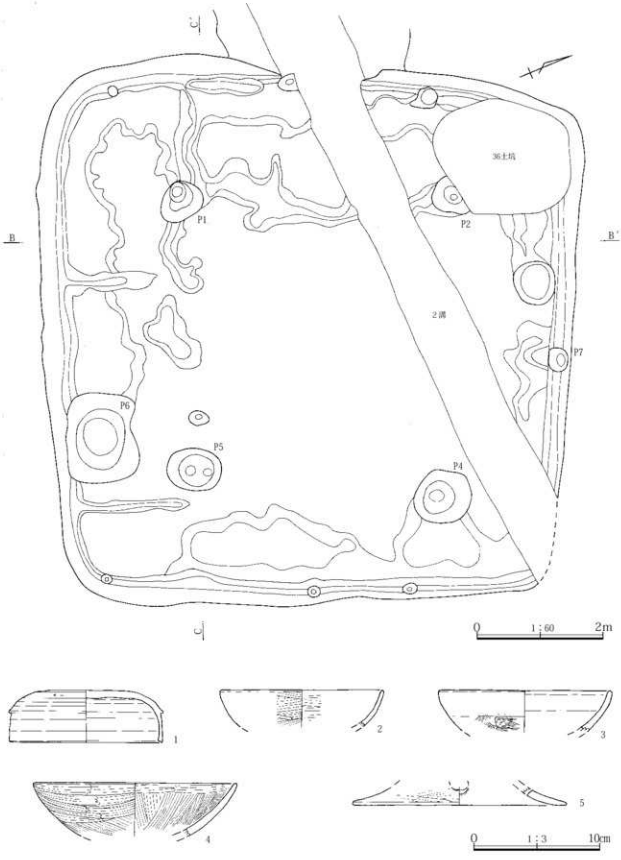


M－M'・N－N'
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊、軽石少混
2　暗褐色土　１よりローム粒、ローム塊多混、軽石少混、軟

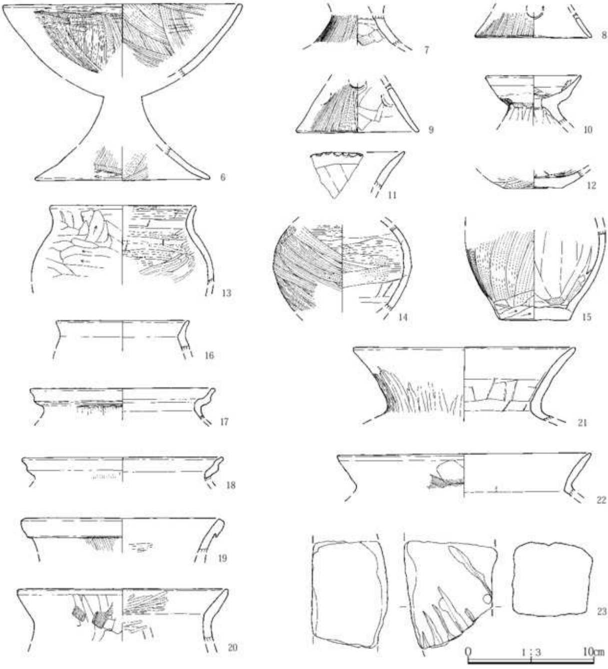
L－L'
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊、軽石少混
2　暗褐色土　１よりローム粒、ローム塊多混、軽石少混、軟
3　褐色土　ローム多混、暗褐色土少混、軟
4　褐色土　Ｐ４の６に近い、暗褐色土混入

0　1：60　2m

第68図　20号住居跡遺構図（２）



第69図　20号住居跡遺構図（3）・遺物図（1）



第70図　20号住居跡遺物図（２）

21号住居跡（第71～73図　ＰＬ20・21・49）

位置　96ＳＴ-13

重複関係　中央部を２号溝が横断､本住居跡が古い。

形状　推定方形、西側は断面記録からすると削平。

規模　4.38m　3.00m以上　0.24m

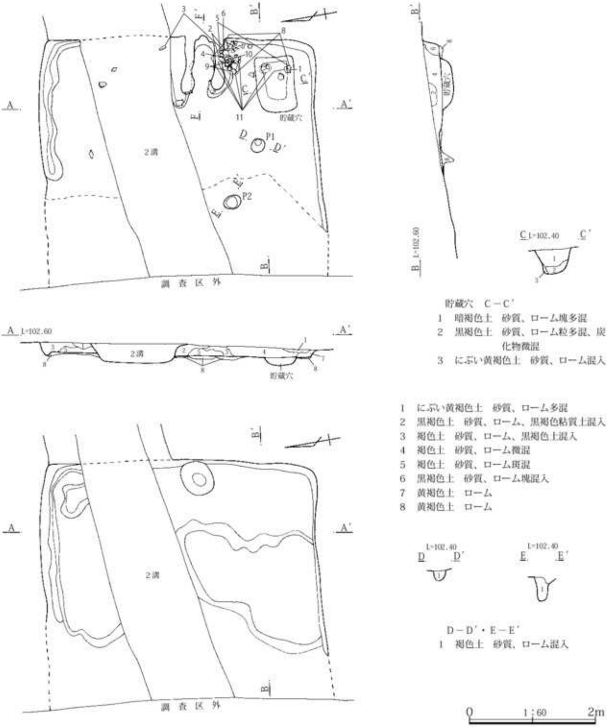
面積　13.14㎡以上　主軸方位　N78°W

覆土　人為埋没、黒褐色土と褐色土

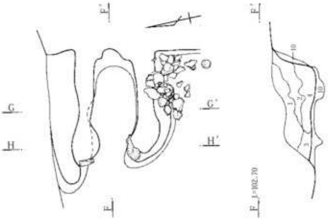
カマド　東壁中央部、ロームは掘り残さないで主に粘土だけで作る。全長85cm、焚き口の幅30cm、袖口は鳥居状の石組みで補強、支脚は抜かれていた。

柱穴　２本を検出。長軸・短軸・深さは、Ｐ１が22・20・20cm、Ｐ２が27・21・32cm。推定する住居の規模からすると、４本組には不適当な位置である。

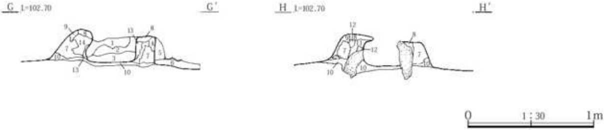
周溝　北壁と東壁の一部にめぐる。幅６～８㎝、深さ５～10㎝。貯蔵穴　南東隅　長方形　長軸・短軸・深さは87・60・40㎝である。
床面　黄褐色土による貼り床、平坦、堅緻。
遺物と出土状況　カマドまわりが原位置で甕、小型甕、坏が出土。ほかに壺、坏、台石、砂岩製の筋砥石。砥石は長さ12㎝の固定式、細い筋が数条平行。未掲載の台石は、板状の粗粒安山岩、表裏に研磨・敲打痕。壺は１号方形周溝墓からの流れ込みである。
所見　古墳時代後期、６世紀前半

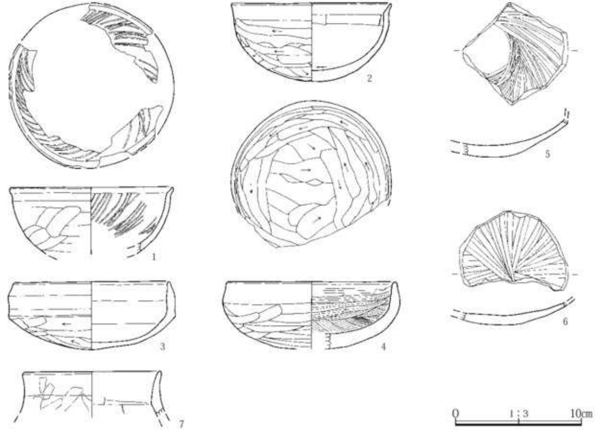


第71図　21号住居跡遺構図（１）

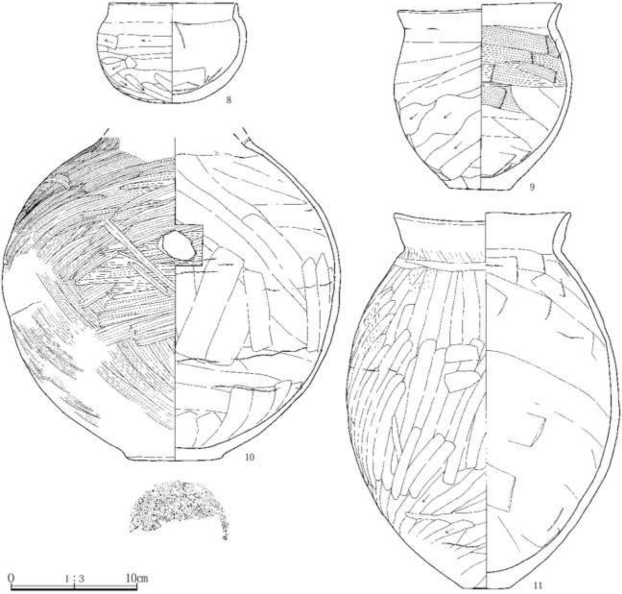


カマド
1　にぶい黄褐色粘土と褐色土の混土
2　褐色土　ローム粒、焼土塊混入
3　褐色土　ローム粒多混
4　褐色土　砂質、Φ１～３㎝大焼土混入
5　暗褐色粘土　右袖からの崩落
6　にぶい黄褐色土　斑状にローム、焼土混入
7　黒褐色粘土　粘性強
8　褐色土　Φ１～５㎜大の焼土混入
9　褐色土　ローム少混
10　暗褐色土とロームの混土　袖石をすえる養生土
11　暗褐色土　ローム混入
12　攪乱でほぐれた８
13　焼土塊
14　暗赤褐色粘土　７が熱で変色





第72図　21号住居跡遺構図（２）・遺物図（１）



第73図　21号住居跡遺物図（2）

23号住居跡（第74～76図　ＰＬ21・49・50）

位置　96ＯＰ－２・３

重複関係　カマドの前に43号土坑、南東隅から北西方向に１号道が横断。本住居跡が最も古い。

形状　推定方形、西側は地形勾配で消失。

規模　5.49m　2.75m以上　0.27m

面積　15.09㎡以上　主軸方位　N72°　E

覆土　暗褐色土と黒褐色土

カマド　東壁中央南寄り、同位置で造り替えをしている。図示したのが新期で、主に粘土で作る。焚き口に組まれていた石は住居内に散在、支脚だけが残る。残存長90cm、焚き口の幅35cm、支脚高18cmである。古期は、左袖はそのままで、右袖の外側床面に粘土の帯が残されている。新期よりも約20cm広い。

柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が60・34・42cm、Ｐ２が56・34・32cm、Ｐ３が38・38・48cm、Ｐ４が36・28・36cm、柱間がＰ１とＰ２が285cm、Ｐ２とＰ３が290cm、Ｐ３とＰ４が260cm、Ｐ４とＰ１が310cm。Ｐ１とＰ２は底面に段差、壁側が深い。Ｐ２の底面からは坏の半分が出土。

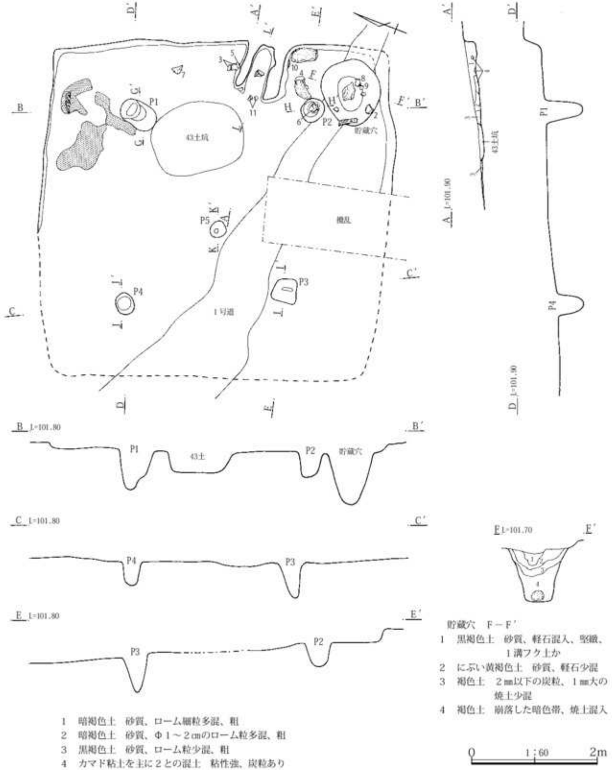
周溝　東壁、カマドの左側にだけある。幅10cm前後、

深さ６～10㎝である。

貯蔵穴　東南隅　楕円形　長軸・短軸・深さは100・90・80㎝である。カマドの袖石は底面に据えたものか。西壁で炭化材がまとまって出土。角材が多い。

床面　ロームの上に薄い貼り床、硬化している。P1と北壁との間、１ｍ四方に炭化物と焼土が分布。３号住居跡と似た状況である。

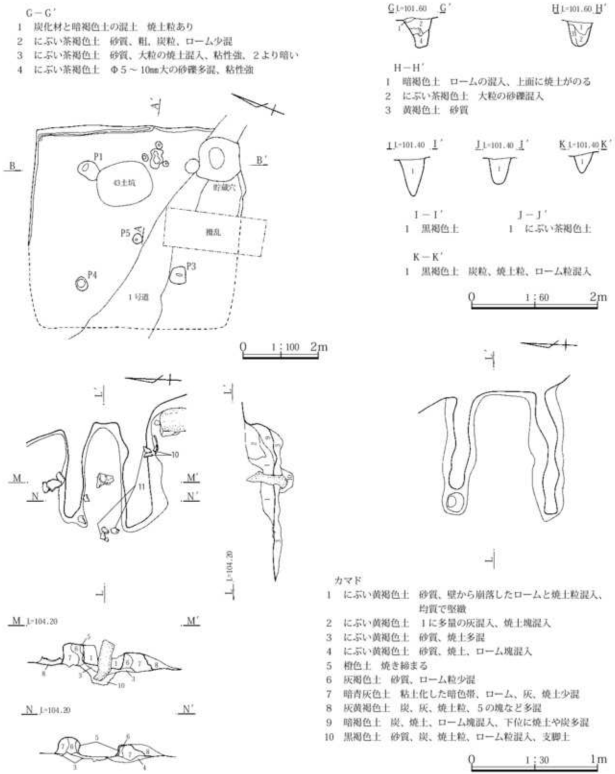
遺物と出土状況　カマドのまわりで甕、坏が出土。



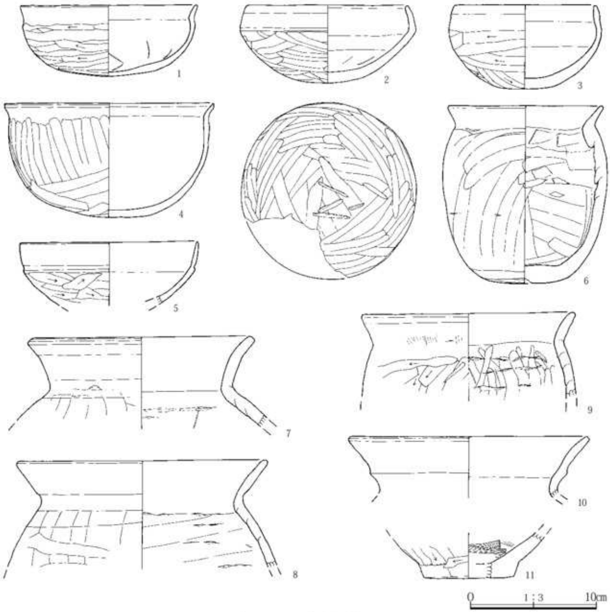
第74図　23号住居跡遺構図（１）

坏は壁の棚から滑落したものか。カマドの石を抜き取る際に散乱したものか。P２内の坏は、底から数cm浮いている。口縁部が上、割れて花弁状に見える。柱とのすき間に入れ、地鎮具のようにしたものか。断面図を記録しないまま取り上げた。

所見　古墳時代後期、６世紀前半



第75図　23号住居跡遺構図（２）



第76図　23号住居跡遺物図

24号住居跡（第77・78図　ＰＬ21・22・50）

位置　86ＭＮ－19・20

重複関係　１号溝より古い。

形状　推定方形、宅地造成に伴う攪乱が多く、検出した北西隅と貯蔵穴からプランを推定。

規模　3.02m以上　2.82m以上　0.17m、4.50m四方の規模と推定。

面積　8.51㎡以上　主軸方位　N90°E

覆土　暗褐色土、ロームが多く混入する褐色土。

カマド　東壁中央部に推定、１号溝に流れ込んで焼土、炭化物の集中箇所。側には袖石もある。

柱穴　掘り方を含めて４本に可能性がある。長軸・短軸・深さは、Ｐ１が35・34・22㎝、Ｐ２が28・26・36㎝、Ｐ３が27・22・29㎝、Ｐ４が　28・23・10㎝である。Ｐ３からは口縁部を欠いた小型甕が出土。口縁部を上にしていて据えたとみられる。

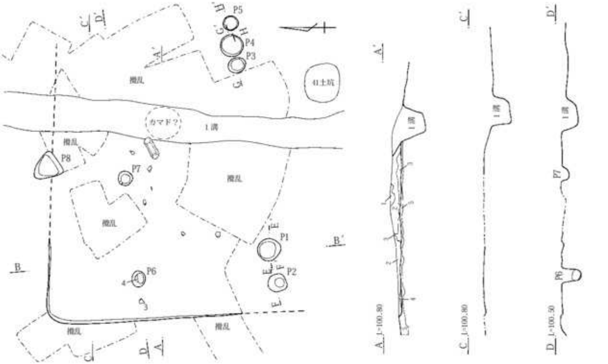
周溝　ない。

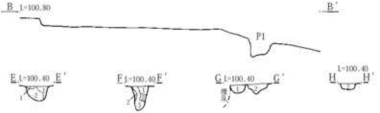
貯蔵穴　41号土坑が該当　方形　長軸・短軸・深さは、60・58・70㎝である。

床面　東側がローム削り出しのまま、西側がローム漸移層に貼り床、中央部に薄い硬化面がある。

遺物と出土状況　遺物は僅少。Ｐ６からは口縁部を欠いた坩が出土。埋没土との前後関係がはっきりとしないままに取り上げている。

所見　古墳時代後期、プランは不確定要素が強い。





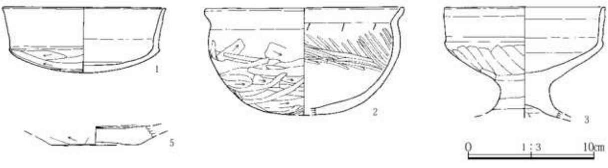
1　褐色土　ローム粒多混
2　暗褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混入、密
3　２と同質　軽石少なく明るい
4　ローム　住居の床面
5　堅緻

Ｅ－Ｅ′
1　暗褐色土　ローム漸移層様、ローム粒、軽石混入、軟、粘性強
2　１とＡｓ－ＹＰの斑混

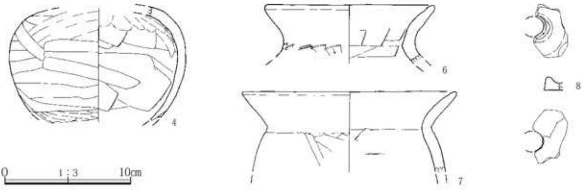
Ｆ－Ｆ′
1　暗褐色土　砂質、粗、炭化物、Ａｓ－ＹＰ混入
2　Ａｓ－ＹＰを主に１斑混
3　褐色土　密、粘性強

Ｇ－Ｇ′・Ｈ－Ｈ′
1　暗褐色土　砂質、被熱した粘土、ローム粒多混
2　暗褐色土　ローム漸移層様、ローム粒、軽石混入、軟、粘性強

0　1：60　2m



第77図　24号住居跡遺構図・遺物図（１）



第78図　24号住居跡遺物図（２）

25号住居跡（第79～82図　ＰＬ22・50・51）

位置　96ＱＲ－３・４　重複関係　１号道より古い。

形状　推定方形、西半分は大泉坊川の崖線にかかり消失。最大107㎝の壁高、外側には周堤帯とみられる高まりが残されていた。

規模　4.22m　2.74m以上　1.07m

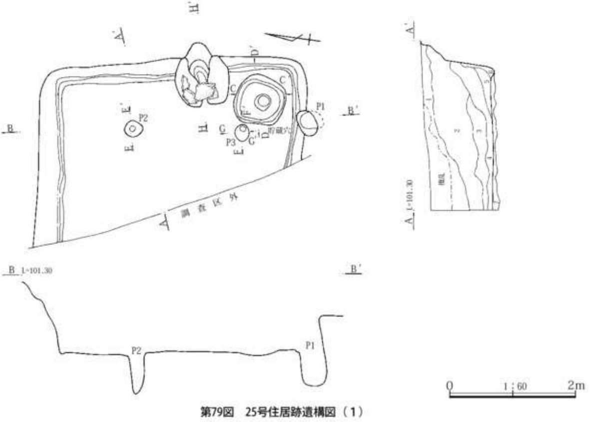
面積　11.56㎡以上　主軸方位　N76°E

覆土　自然堆積、褐色土、黒褐色土、暗褐色土

カマド　東壁の中央部、全長は120㎝、うち煙道が70㎝を占める。本体は長さ50㎝、焚き口の幅30㎝と小振りである。焚き口には鳥居状に石が組まれ、石は左袖の補強にも使われている。煙道の角度は50度と急である。

柱穴　推定４本主柱穴のうち２本を検出。長軸・短軸・深さは、Ｐ１が28・26・70㎝、Ｐ２が26・22・70㎝、柱間185㎝である。

周溝　全周しているか、幅が８㎝前後、深さ５㎝前



第79図　25号住居跡遺構図（１）

後である。

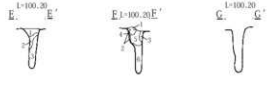
貯蔵穴　南東隅　方形　長軸・短軸・深さは78・75・70㎝である。

床面　ロームまで削平、暗褐色土に黒褐色土、ロームを混ぜて貼り床をする。平坦、堅緻。

遺物と出土状況　カマド周辺の甕を除くと、覆土の中位に流れ込んだものである。

所見　古墳時代後期、６世紀前半

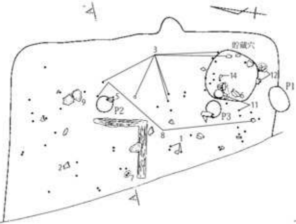
1　褐色土　砂質、軽石多混
2　黒褐色土　砂質、軽石混入、にぶい黄褐色土斑混、均質、密
3　褐色土　砂質、微砂の薄い互層
4　褐色土　３より少し明るい、均質、３が斑混
5　暗褐色土　均質
6　にぶい黄褐色土　ローム、黒褐色土混入
7　暗褐色土　黒褐色土、ローム斑混、焼土少混

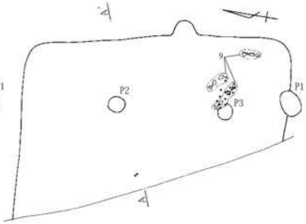


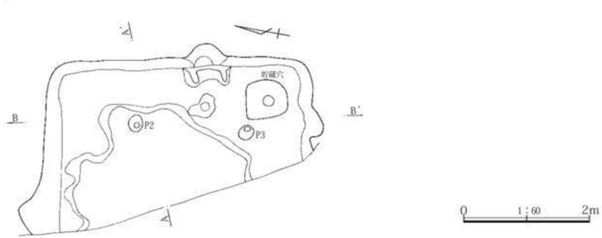
E－E′
1　褐色土　砂質、炭粒、焼土粒混入
2　暗褐色土　砂質、ローム粒少混
3　褐色土　砂質、ロームの崩れたものが入りこんだか

貯蔵穴　C－C′
1　黄褐色土　砂質、攪乱か
2　暗褐色土　砂質、ロームΦ５㎜～７㎜、焼土粒、炭化粒少混、上位に多い
3　黒褐色土　砂質、ロームΦ１㎝～２㎝、20％混、焼土粒少混
4　褐色土　粘質、ローム塊と２・３の混土

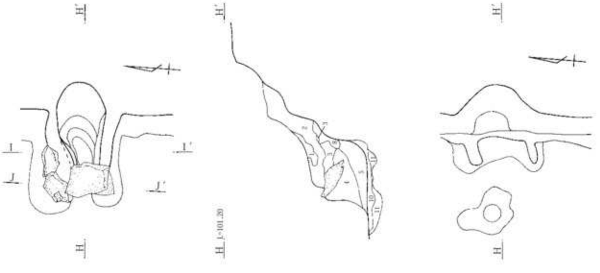
F－F′
1　黒褐色土　砂質、炭、焼土粒混入
2　黄褐色土　砂質、木材と穴との間を埋めたロームか
3　褐色土　粘質
4　黄褐色土　砂質、炭粒、焼土粒混入
5　暗褐色土　砂質、黒土とローム混入
6　暗褐色土　５と同質、しまり弱

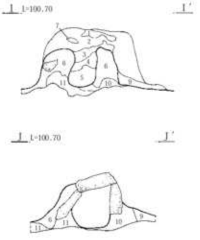






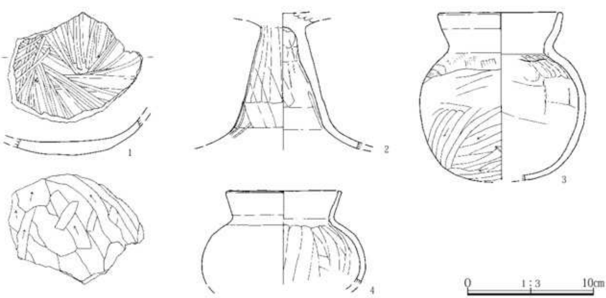
第80図　25号住居跡遺構図（２）





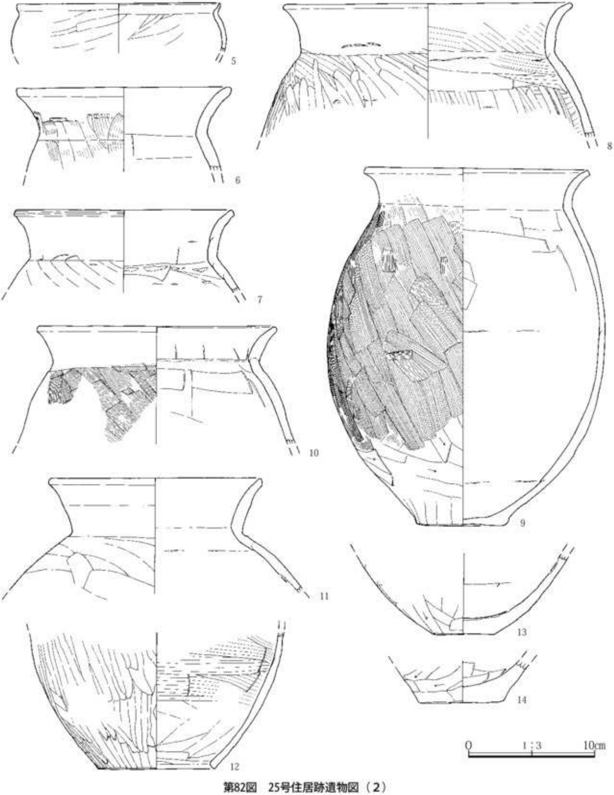
カマド
1　黒褐色土　砂質、ローム塊Φ３㎜、灰、焼土粒、炭混入
2　暗褐色土　砂質、ローム塊Φ５㎜～１㎝、10%混入、焼土粒、炭、灰少混
3　褐灰色土　砂質、焼土Φ１㎝少混
4　黒褐色土　砂質、焼土Φ３㎝～５㎝ローム塊、30%混入
5　褐色土　ローム、焼土、炭混
6　黒褐色土　砂質、焼土、ローム塊Φ５㎜混入
7　灰黄褐色土　砂質、灰塊混入
8　暗褐色土　砂質、ローム塊20%、焼土粒混入
9　暗褐色土　砂質、焼土、炭、ローム塊Φ各５㎜～１㎝
10　褐色土　砂質、ロームに黒褐色土Φ３㎝、20%混入
11　にぶい黄褐色土～黒褐色土　砂質、焼土塊、炭Φ各５㎜～１㎝、50%混入

0　1:30　1m



0　1:3　10cm

第81図　25号住居跡遺構図（３）・遺物図（１）



第82図　25号住居跡遺物図（２）

26号住居跡（第83～85図　ＰＬ22・23・51）

位置　96ＱＲ－８・９　重複関係　ない。　　規模　4.72m　4.43m　0.40m

形状　方形、西側に耕作による撹乱が多い。　　面積　20.90㎡　主軸方位　N72°E

覆土　人為埋没か、褐色土と暗褐色土が混入するロームの状態で細かに分かれている。

カマド　東壁の中央部、全長115cm、焚き口幅28cm、焚き口には鳥居状に石が組まれ、石は左袖の補強にも使われている。Ｐ２の南にカマドと同質の黒色粘土を詰めた穴がある。

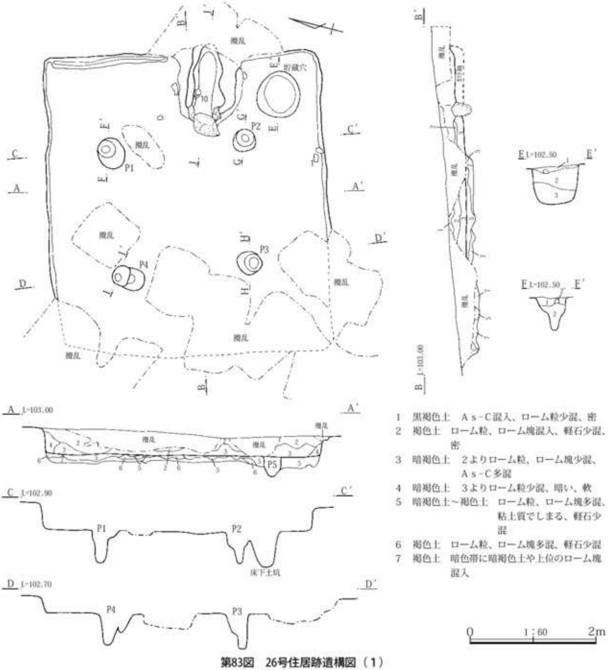
柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が38・36・25cm、Ｐ２が30・24・21cm、Ｐ３が36・30・23cm、Ｐ４が39・37・21cm、柱間はＰ１とＰ２が206cm、Ｐ２とＰ３が180cm、Ｐ３とＰ４が198cm、Ｐ４とＰ１が196cmである。

周溝　東壁、カマドの北側で検出。幅15cm前後、深さ５cm前後である。貯蔵穴　南東隅　方形　長軸・短軸・深さは72・67・61cmである。

床面　暗褐色土、黒褐色土の混土による貼り床。

遺物と出土状況　遺物は僅少、西側は撹乱、カマドの周囲で坏、須恵器坏、甕、鉄器が出土。

所見　古墳時代後期、６世紀前半



第83図　26号住居跡遺構図（１）

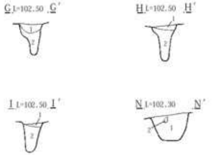
貯蔵穴　E－E′
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊、焼土粒、黒色粘土混入
2　暗褐色土　上位に小さなローム塊、黒色粘土片、焼土粒少混、軟
3　暗褐色土　１の暗色帯に暗褐色土混入

F－F′
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊混、軽石少混
2　褐色土　暗色帯に暗褐色土少混
2′ ２と同質なローム塊

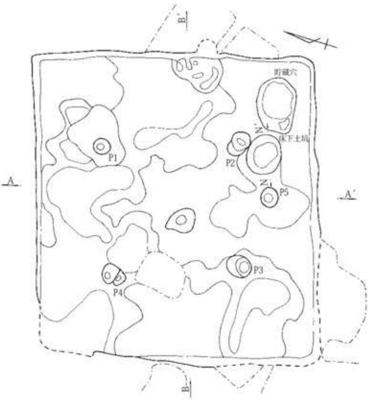
G－G′
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊混、軽石少混
2　褐色土　暗色帯に暗褐色土少混

H－H′
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊混入、軽石少混
2　褐色土　Ｐ１・２に比べ、暗色帯ローム少混、上位ローム多混、明るい、ローム塊混入

I－I′
1　暗褐色土　Ｐ１の１に近いが、ローム粒多く明るい、Ａｓ-Ｃ混入
2　褐色土　暗色帯に暗褐色土少混



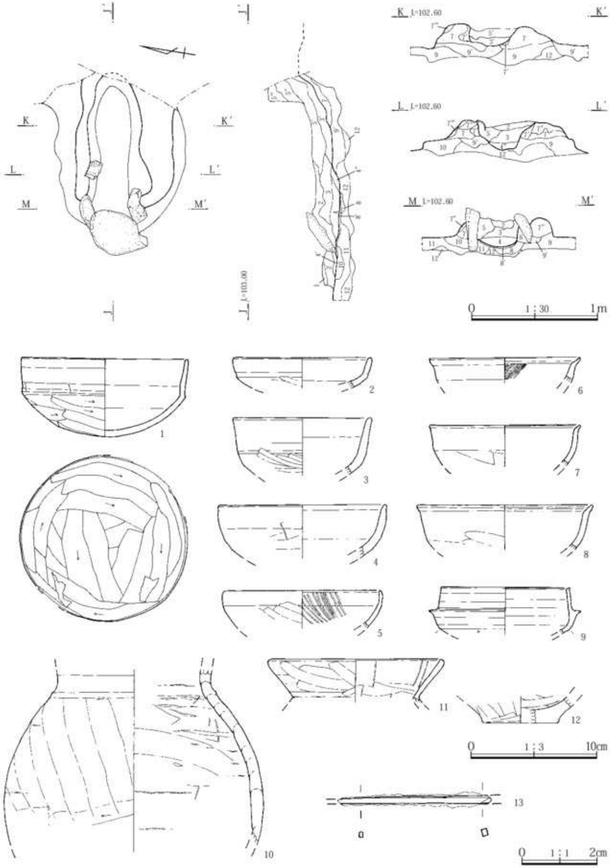
床下土坑　N－N′
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊混入、黒褐色土斑状少混、軟
2　黒褐色土　塊状ローム粒少混、軟



カマド
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊混。軽石少混
2　暗褐色土　軽石、ローム粒、黒色粘土塊、焼土粒塊少混
3　暗褐色土　２に比べ焼土粒多混、一部塊、２より粘土質
3′ 暗褐色土　焼土塊多混、黒色粘土分が３より多い
4　赤褐色土　焼土粒、焼土塊多混。下位は少し灰混入
4′ 褐色土　焼土粒少混
4″ 褐色土　４に近いが焼土少混、ローム多混
5　暗褐色土　黒色粘土多混、焼土粒少混、密
5′ 黒褐色土　５と同質
5″ 暗赤褐色土　黒色粘土、焼土粒、ローム粒、灰混入
5‴ 暗赤褐色土　黒色粘土、焼土粒少混
6　暗褐色土　粘質、焼土粒、ローム粒少混、密
7　暗赤褐色粘質土　粘質強、ローム粒微混、密
7′ にぶい赤褐色土　７に焼土粒、焼土塊を特に多混
7″ ７と同質の黒みの強い粘土　焼土粒、灰混入
7‴ 暗褐色土　７にローム粒、焼土粒、黄色っぽい軽石少混
8　赤褐色土　ローム粒、焼土粒、暗褐色土、ローム塊混、軟
8′ 灰褐色土　８に灰多混（使用面）
9　褐色土　ローム塊多混、焼土粒、軽石、粘土混入
9′ 暗褐色土　黒色粘土少混
10　褐色土　貼床、堅緻、焼土粒少混
10　暗褐色土　ローム粒、粘土、灰混入、貼床の一部、堅緻
12　褐色土　ローム、焼土粒、暗褐色土微混

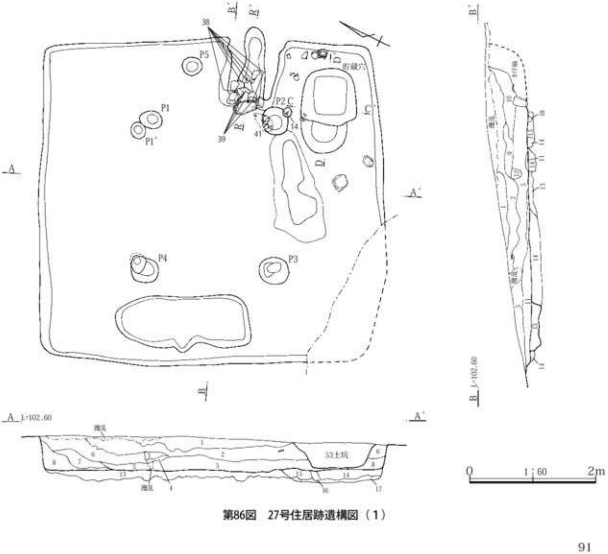
0　1：60　2m

第84図　26号住居跡遺構図（２）



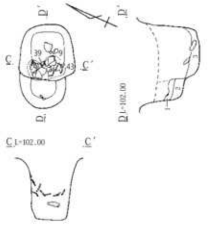
第85図　26号住居跡遺構図（３）・遺物図

27号住居跡（第86～94図　ＰＬ23～25・51～54）
位置　96ＱＲ－６・７　重複関係　28号住居跡より新しく、53号土坑より古い。形状　方形
規模　5.40m　5.09m　0.54m
面積　27.48㎡　主軸方位　N63°Ｅ
覆土　１・２層と５層で時差がある。２層に遺物が投棄されている。
カマド　東壁の中央南寄り、天井は褄が抜けた程度、支脚も残る、良好な状態である。全長116cm、焚き口幅28cm、支脚高15cm。焚き口には鳥居状に石が組まれ、石は左袖の補強にも使われている。
柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が40・30・42cm、Ｐ２が42・36・33cm、Ｐ３が42・40・43cm、Ｐ４が32・24・39cm、柱間がＰ１とＰ２が215cm、Ｐ２とＰ３が225cm、Ｐ３とＰ４が215cm、Ｐ４とＰ１が210cmである。
周溝　ない。
貯蔵穴　南東隅　同位置、造り替えによる新旧３基がある。方形か→方形→長方形の順に変遷。方形のものは、長軸・短軸・深さが85・85・94cmである。この中位から遺物が出土。
床面　中央部、柱穴の内側に硬化面、掘り方は、４基の土坑を検出、北壁際では焼土、灰を埋めたような箇所もみられた。
遺物と出土状況　多くは２層下位に含まれ、中央部にある一部は破片のものと口縁を上にして並べたような状態。ただし、カマドから貯蔵穴のものは原位置で壁際に立てかけた状態である。
所見　古墳時代後期、６世紀前半

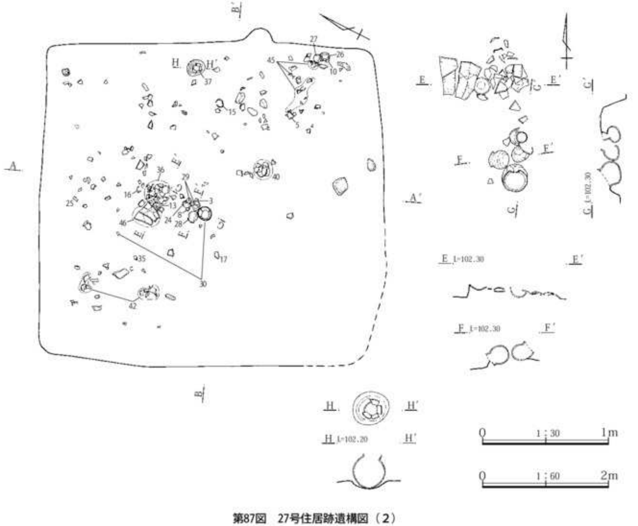


第86図　27号住居跡遺構図（１）

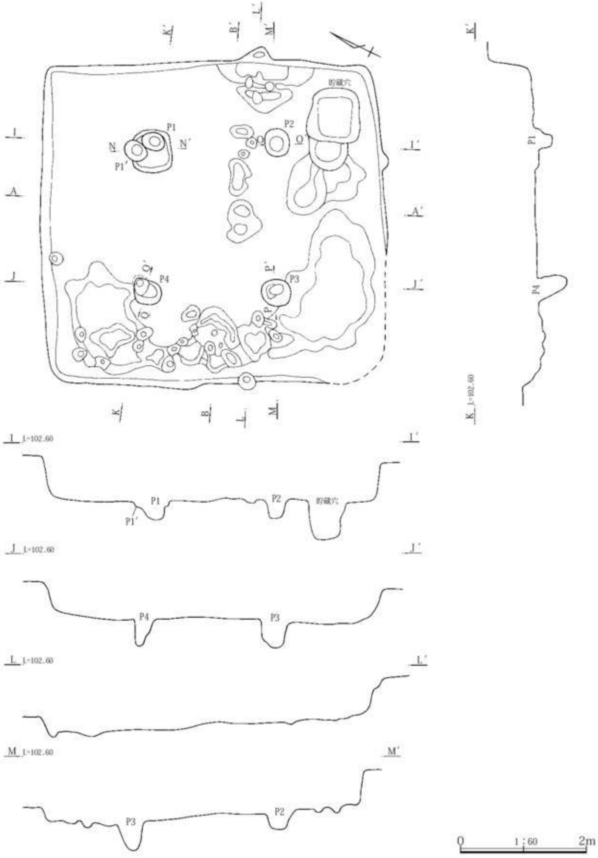
1　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ多混、焼土粒、ローム粒塊斑混
2　暗褐色土　混入物１と同じだが、1/3位と少量、粒度均一
3　黒褐色土　２とＡｓ-Ｃ混入、ローム塊、焼土混、しまり弱
4　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ微混、ローム粒塊少混
5　暗褐色土　２との境面特にローム塊多混、焼土粒塊、Ａｓ-Ｃ少混、密
6　暗褐色土　焼土塊、ローム塊（Φ20～30㎜）、Ａｓ-Ｃ混入、粗粒
7　暗褐色土　Ａｓ-Ｃ、ローム塊、焼土塊、最も多混、粗粒、軟
8　にぶい黄褐色土　ローム塊（Φ10～20㎜）多混、密、Ａｓ-Ｃ極少
9　黒色土　Ａｓ-Ｃ多混、13層の塊が一部層状、５層の塊、焼土粒少混、粗粒
10　黒褐色土　12より少ないが、Ａｓ-Ｃ多混、ローム粒塊、焼土粒少混、均質
11　褐色土　15より黒み帯びるが、混入物同じ
12　にぶい黄褐色土　細粒、Ａｓ-Ｃ、ローム、褐色土混入、上面に黒色土塊
13　にぶい黄褐色土　ローム塊（Φ30㎜）、ローム粒塊、Ａｓ-Ｃ混入、密
14　黒褐色土　ローム塊（Φ10㎜）、暗色帯塊、焼土粒、カマド粘土、Ａｓ-Ｃ混入、密
15　にぶい黄褐色土　八崎軽石、カマド粘土、ローム塊、焼土混入、密
16　灰黄褐色土　八崎軽石、ローム粒塊、暗褐色土混入
17　にぶい黄褐色土　暗色帯、ローム塊混入、焼土粒、Ａｓ-Ｃ少混



貯蔵穴　Ｄ－Ｄ′
1　暗褐色土　焼土塊、ローム塊、灰、炭混入、八崎軽石少混、密
2　黒褐色土　同上と八崎軽石混入、１に比べ、しまり弱
3　黒褐色土　赤色焼土粒多混、褐灰色焼土塊（Φ20～40㎜）灰、ローム塊、カマド粘土混入、粘質、密



第87図　27号住居跡遺構図（２）



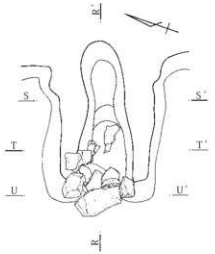
第88図　27号住居跡遺構図（3）

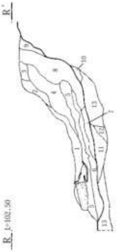
0　1：60　2m

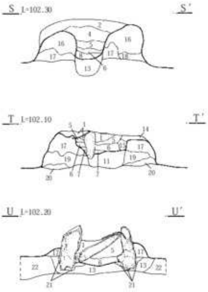
N－N′
1　暗青灰色土　黒色土粒まじり暗褐色土、黒灰色の焼土灰塊20％混入、しまり弱
2　褐色土　混入物極少、しまり弱
3　にぶい黄褐色土　混入物極少、堅緻

O－O′
1　黒褐色土　ローム粒塊まじり、粘性弱、しまり弱
2　褐色土　混入物極少、しまり弱

P－P′・Q－Q′
1　褐色土　Ａｓ－Ｃ混黒色土まじりローム。しまり弱、粗粒
2　暗褐色土　ローム粒塊、Ａｓ－Ｃ混入、しまり弱、粗粒
3　黒褐色土　ローム粒塊まじりのバサバサした質感、しまり弱



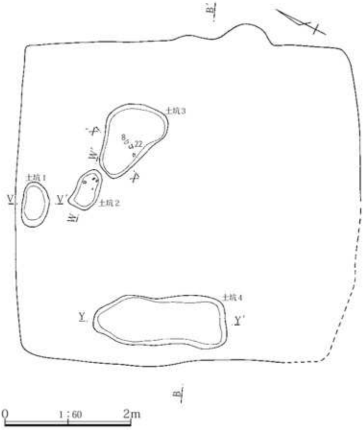


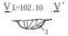


カマド
1　灰黄褐色土　Ａｓ－Ｃ、灰、ローム粒混入、細粒
2　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ、ローム粒、焼土粒混入
3　黒色土　Ａｓ－Ｃ、灰色土粒塊、カマド粘土混入
4　黒色土　カマド粘土主体、５ほど固くないが、密にしまる
5　黒褐色土　焼土、灰まじりカマド粘土、崩土と思われるが堅緻
6　灰褐色土　焼土、灰主体、灰層
7　暗褐色土　Ａｓ－Ｃ、ローム粒、焼土粒混入
8　黒褐色土　被熱ローム塊、焼土塊、灰が塊状に混在するカマド粘土
9　暗褐色土　ローム塊（Φ30mm）、焼土、灰まじり黒褐色土。カマド粘土塊混入
10　黒褐色土　ローム粒、カマド粘土混入
11　黒褐色土　焼土塊（Φ20mm）、ローム粒塊、灰混入
12　にぶい黄褐色土　ローム粒塊主体の中に、焼土微混
13　褐色土　焼土塊とローム塊多混
14　黒褐色土　焼土粒、灰まじり暗褐色土
15　黒褐色土　焼土、黒色粘土塊混入、粘性強
16　黒色土　焼土塊、被熱ローム塊、灰多混、カマド粘土
17　黒色土　被熱黒色粘土、袖構築材
18　黒褐色土　ローム塊（Φ５～10mm）、八崎軽石（？）混暗褐色土、堅緻
19　黒褐色土　ローム塊、カマド粘土粒塊、焼土灰微混暗褐色土
20　褐色土　暗色帯粘質土とローム、焼土粒少混
21　暗褐色土　ローム粒、Ａｓ－Ｃ、焼土粒少混、袖石設置埋土
22　にぶい黄褐色土　ローム粒塊、Ａｓ－Ｃ混入、密

0　1：30　1m

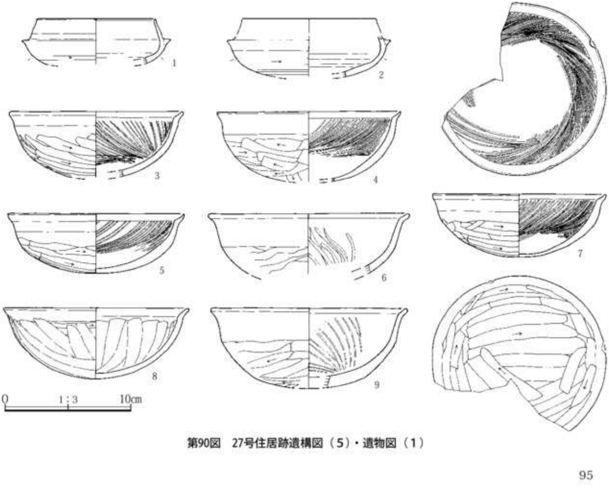
第89図　27号住居跡遺構図（４）



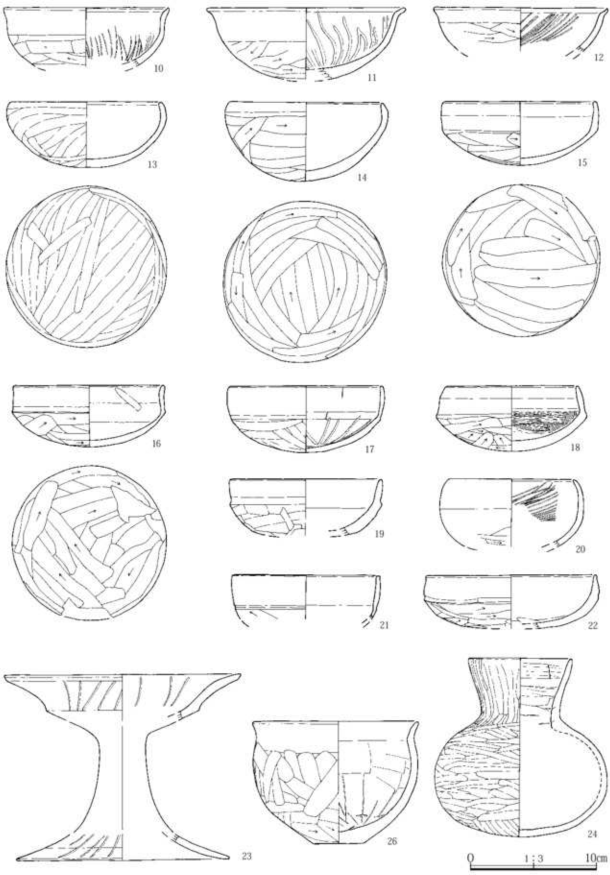


土坑１　V－V'
1　暗褐色土　Ａｓ-Ｃ、焼土微粒混、黒褐色土、粒度疎ら、しまり強
2　暗褐色土　Ａｓ-Ｃ１より多混、焼土粒少混、黒褐色土
3　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ、焼土粒１・２より少なく、細粒で均一

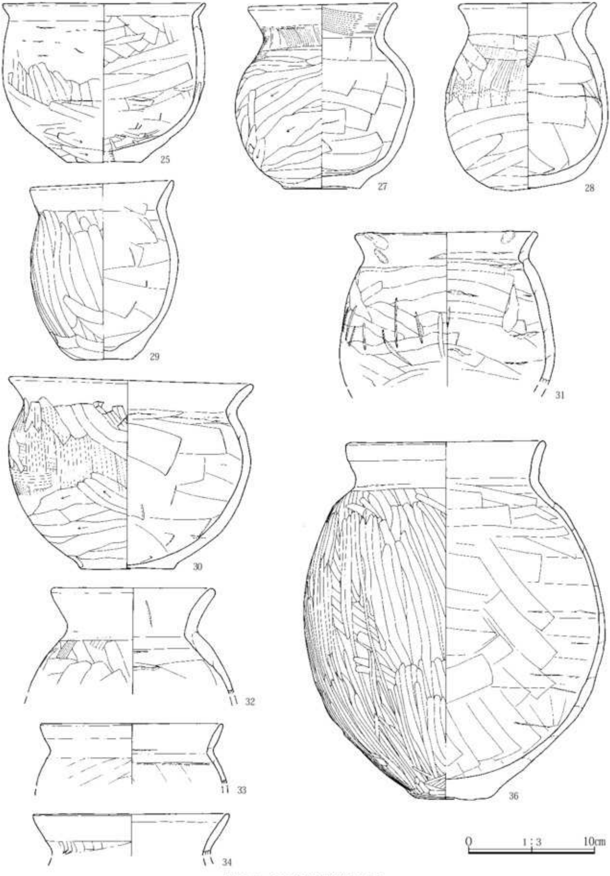
土坑３　X－X'
1　黒色土　Ａｓ-Ｃ、ローム粒、炭混入、しまり弱
2　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ、ローム塊、炭、灰混入、暗褐色土
3　黒褐色土　掘りすぎ、焼土塊、炭、灰、Ａｓ-Ｃ混入



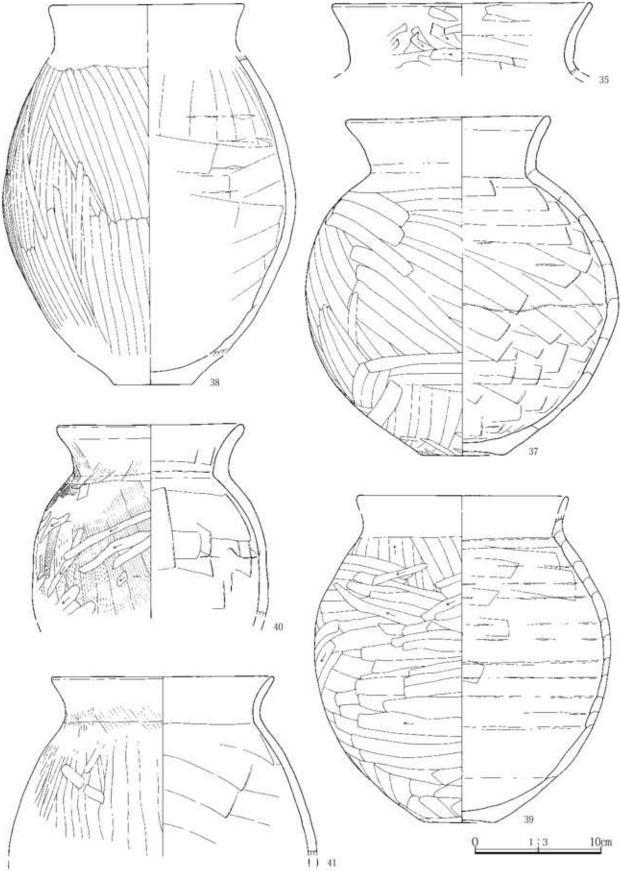
第90図　27号住居跡遺構図（５）・遺物図（１）



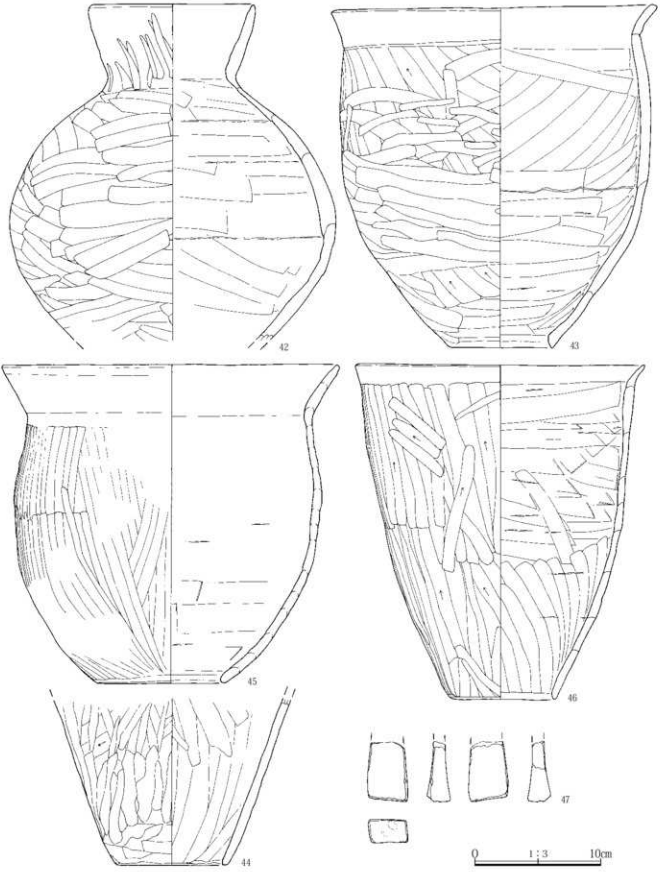
第91図　27号住居跡遺物図（２）



第92図　27号住居跡遺物図（３）



第93図　27号住居跡遺物図（４）



第94図　27号住居跡遺物図（５）

28号住居跡（第95～98図　ＰＬ25・54）

位置　96ＮＯ－９・10　重複関係　29号住居跡よりも古い。形状　方形、南西側は掘り方からの推定。

規模　3.48m　3.35m　0.15m

面積　11.65㎡　主軸方位　N77°E

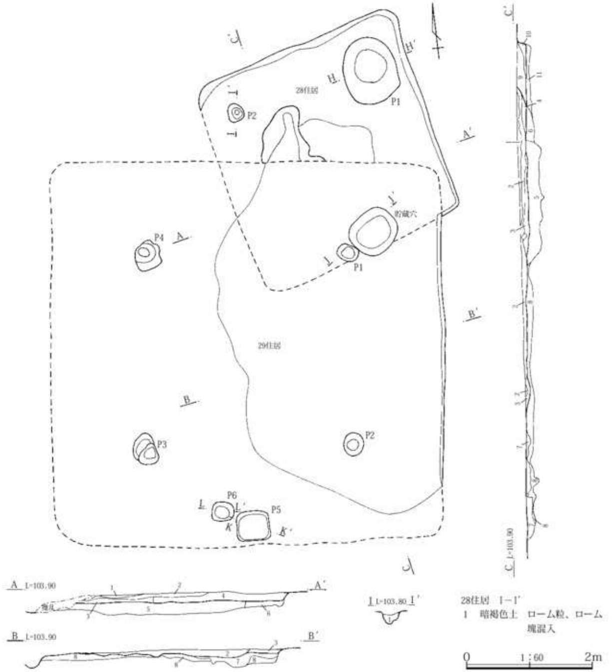
覆土　暗褐色土、黒褐色土、褐色土で自然埋没。

炉　床が残る範囲にはない。

柱穴　北西寄りにＰ２がある。長軸・短軸・深さは30・26・18cmである。締まりのない覆土で、新しい穴との調査所見もある。Ｐ３は掘り方で検出、長軸・短軸・深さは28・25・34cmである。これを東に延長した壁に小ピット１本がある。

周溝　ない。

貯蔵穴　北東隅のＰ１に可能性がある。楕円形　長軸・短軸・深さは、92・80・16cm。



第95図　28・29号住居跡遺構図（１）

床面　中央部に硬化面がある。

遺物と出土状況　遺物は少ない。29号住居跡と混在。硬化面の範囲に器台、高坏、坏の破片がある。

所見　古墳時代前期

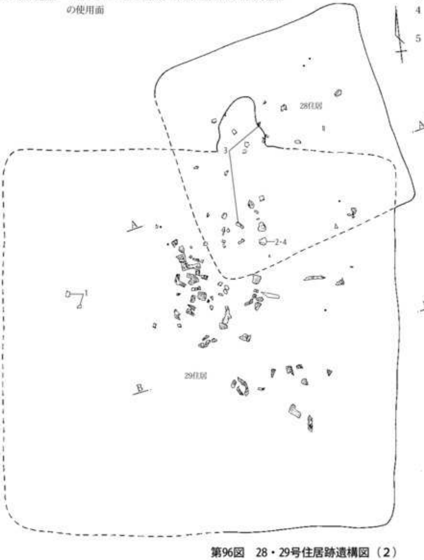
29号住居跡（第95～98図　ＰＬ25・54）

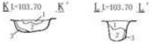
位置　96Ｎ～Ｐ－８～10　重複関係　28号住居跡よりも新しい。形状　推定方形、西側の幅約2.5mは道で削平。壁は、柱穴の位置から推定する。規模　6.00m　3.67m以上　0.11m　面積　22.02㎡以上　主軸方位　Ｎ６°Ｅ　覆土　暗褐色土が主な覆土。カマド　北壁の中央部に推定。道路造成で跡形もな

1　暗褐色土　軽石、ローム粒混入
2　黒褐色土　軽石１より多混、ローム粒少混、炭片混入
3　褐色土　ローム粒混入、小さなローム塊、軽石少混
4　褐色土　軽石少混、ローム粒、ローム塊混入
5　褐色土　ローム主体　暗褐色土まじり、軟
6　黄褐色土　地山のロームと同質、１度掘り崩れただけの部分か
7　暗褐色土　８より明るい
8　褐色土　ローム主体、ローム塊混入、暗褐色土まじり
9　黒褐色土　２とほぼ同質、炭はあまり目立たず
10　暗褐色土　ローム塊多混
11　黄褐色土　５よりローム多く堅緻、貼床、上面に薄い黒褐色土の使用面

29住居　J－J'
1　暗褐色土　ローム粒、軽石、小ローム塊混入
2　暗褐色土　１より明るく、ローム塊多混、軟
3　褐色土　ローム、暗褐色土まじり、均質
4　暗褐色土　ローム粒塊少混、上位は明るくローム多混
5　褐色土　地山のロームか、密

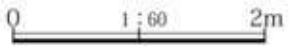
28住居　H－H'
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊混入
2　暗褐色土　１より黒みが強いローム粒、ローム塊、軽石少混
3　暗褐色土　１よりもローム塊大きく多混、炭片混入



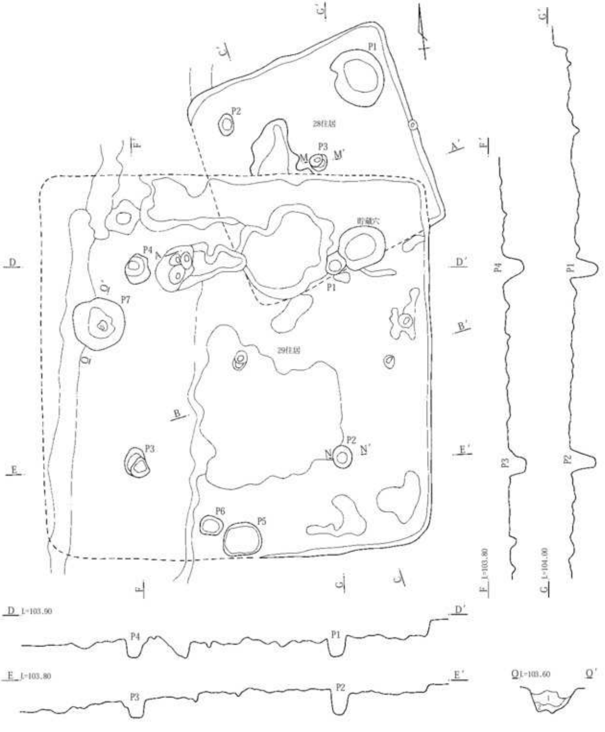


29住居　K－K'
1　黒褐色土　ローム粒、軽石少混
2　暗褐色土　ローム粒、小ローム塊混入、軽石微混
3　褐色土　ローム多混、ローム、暗褐色土まじり

29住居　L－L'
1　褐色土　ローム、暗褐色土まじり、小ローム塊混入
2　暗褐色土　ローム粒まじり
3　褐色土　ローム多混、軟



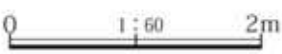
第96図　28・29号住居跡遺構図（２）



29住居　N－N'
1　暗褐色土　ローム粒、軽石混入
2　褐色土　ローム、暗褐色土まじり、ローム塊多混
3　褐色土　ローム、暗褐色土まじり

29住居　O－O'
1　暗褐色土　ローム粒、ローム塊少混、軟、耕作土か
2　暗褐色土　１より明るい土でローム塊混入

28住居　M－M'
1　褐色土　ローム多混、暗褐色土まじり、ローム塊少混



第97図　28・29号住居跡遺構図（３）

く壊され、推定位置の手前側の２m四方に石を含め、焼土、粘土が塊となって散乱。

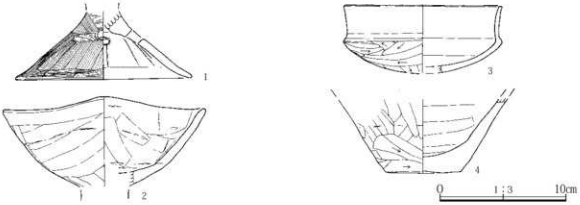
柱穴　４本主柱穴、長軸・短軸・深さは、Ｐ１が30・29・44cm、Ｐ２が34・28・45cm、Ｐ３が36・30・41cm、Ｐ４が28・25・46cmである。柱間は、Ｐ１とＰ２が318cm、Ｐ２とＰ３が306cm、Ｐ３とＰ４が318cm、Ｐ４とＰ１が318cmである。 周溝　ない。

貯蔵穴　Ｐ１の南西の土坑に可能性がある。方形 長軸・短軸・深さは、82・80・50cmである。Ｐ２の脇のものは柱穴よりも新しい。

床面　ロームが主体の暗褐色土の貼り床。

遺物と出土状況　住居の中央部に焼土と炭化材が点在。これに土器が混在する。

所見　古墳時代後期　焼失住居



第98図　28・29号住居跡遺物図

３　方形周溝墓

１号方形周溝墓（第99～102図　ＰＬ35・36・55）

位置　96Ｑ～Ｓ-12～15、台地の西側斜面、２号・３号方形周溝墓とは35m離れ、単独の様相である。

重複　２号溝が中央部を横断している。南溝の中に２号壺棺、東溝の縁にかかって１号壺棺がある。２号壺棺は、溝の底面に掘り込まれ、１号壺棺は地表面から掘り込まれている。形状　方形、南北方向が長い。長軸方位　N25°E

規模　全長は長軸11.20m、短軸10.35m、方台部は長軸8.95m、短軸7.60m。

方台部　盛り土は残存していない。周溝は方台部からの流入で半分強が埋没、盛り土を暗示する。

溝　全周する。全体に直線的で四隅は丸い。東の上幅が116～140cm、西が上幅160cm前後、南が上幅１m前後、北が135～165cmである。下幅は70～100cmである。断面は、内側が急で、外側が緩やかである。北東隅と南西の隅寄りが長軸150cm前後で土坑のように一段低くなる。西溝は中央部付近が長く、同じように窪んでいる。しかし、はっきりとした土坑というのではなく、10cm程度の深さである。

埋葬施設　確認されていない。

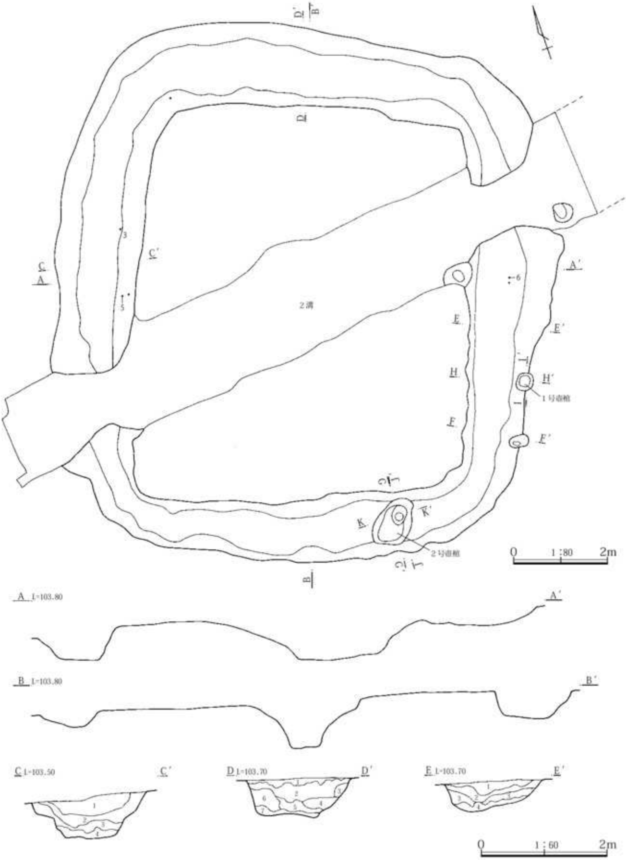
遺物出土状態　方台部の西中央、溝の上場近くでＳ字口縁台付甕のミニチュア、その北で器台が出土。２点とも方台部からの崩落とみられる。

時期　古墳時代前期、５はヘラ整形だけで刷毛目がない。脚裾も折り返していない。これを指標にすると４世紀後半、Ａｓ-Ｃ降下後である。

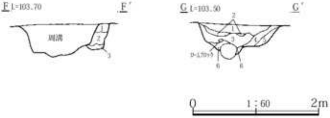
２号方形周溝墓（第103図　ＰＬ36・55）

位置　６ＮＯ-４～６、台地の西斜面、３号方形周溝墓の南１mにある。１号方形周溝墓とは別の一群を構成するものであろう。重複　ない。

形状　推定方形。西側が斜面の傾斜で消失。規模も



第99図　１号方形周溝墓遺構図（１）

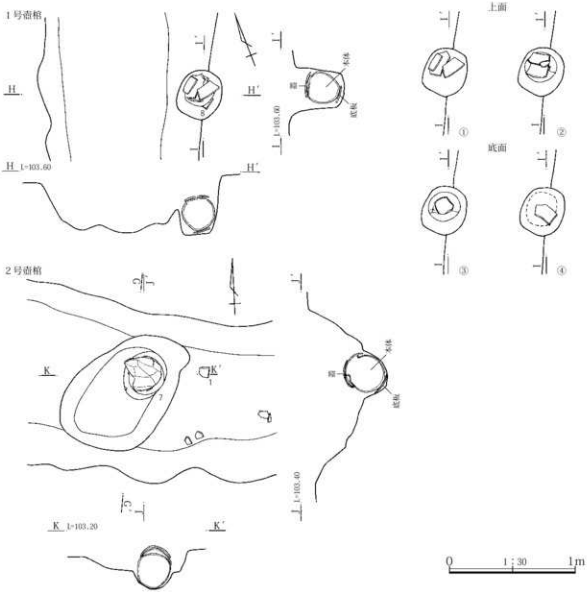


C－C′・E－E′
1　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混土、ローム混入
2　褐色土　砂質、ローム混入
3　にぶい黄褐色土　砂質、ローム塊混入
4　黄褐色土　暗褐色土とローム斑混

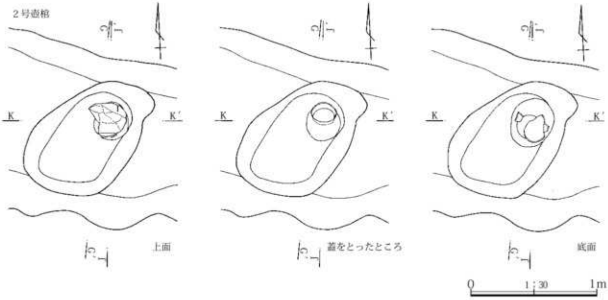
F－F′
1　黒褐色土　砂質、ローム粒混入
2　黒褐色土　砂質、ローム混入
3　にぶい黄褐色土　ロームと暗褐色土斑混

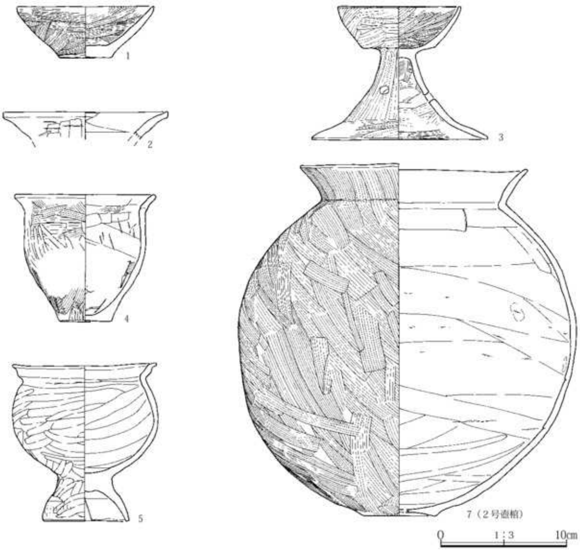
D－D′
1　表土
2　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ混土、ローム混入
3　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混、軽石微混
4　暗褐色土　砂質、ローム多混、軽石微混
5　褐色土　暗褐色土とローム混土
6　にぶい黄褐色土　砂質、ローム混入、軽石微混
7　黄褐色土　暗褐色土とローム斑混

G－G′
1　暗褐色土　砂質、軽石微混、ローム塊混入
2　褐色土　砂質、ローム多混
3　黒褐色土　砂質、軽石混入、ローム塊多混
4　褐色土　砂質、軽石微混
5　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混
6　褐色土　暗褐色土とローム斑混

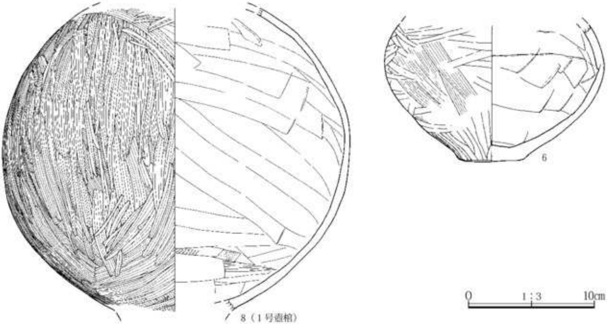


第100図　１号方形周溝墓遺構図（２）





第101図　1号方形周溝墓遺構図（3）・遺物図（1）



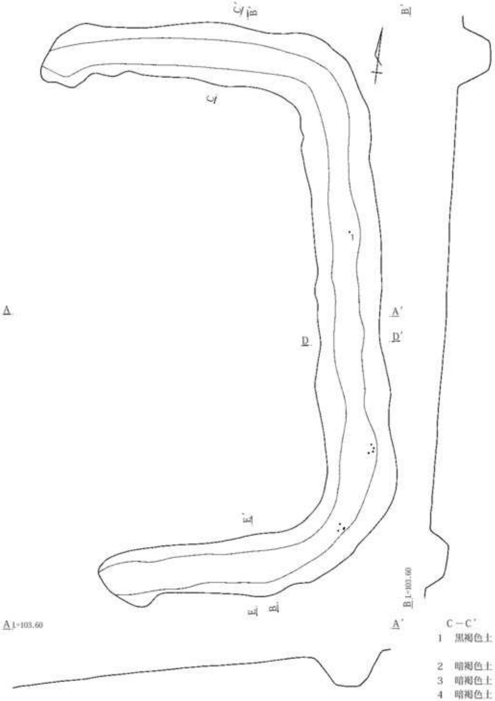
第102図　１号方形周溝墓遺物図（２）

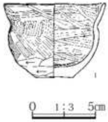
推定。長軸方位　N13°W
規模　全長は長軸9.30m、短軸4.80m、方台部は長軸7.86m、短軸4.08m。
方台部　盛り土は残存していない。
溝　全周していたとみられる。上幅75～106㎝。底面は凹凸が少なく、土坑状に深くなる箇所はない。
埋葬施設　不明。
遺物出土状態　東周溝でＳ字口縁台付甕破片と鉢のミニチュアが完形で出土。
時期　古墳時代前期

３号方形周溝墓（第104～106図　ＰＬ36・37・55）
位置　６Ｌ～O－６～11、台地の西斜面、２号方形周溝墓の北１ｍにある。２号方形周溝墓と一群を作るとみられる。
重複　方台部西側に40号土坑が重複、北周溝に道跡が検出されている。
形状　前方後方形　長軸方位　Ｎ４°Ｗ
規模　全長は23.40m、前方部は長さ6.80m。前端の幅5.40m、方台部は長軸13.20m、短軸11.90m以上。
方台部　市道にかかる東断面では、薄いが盛り土のあるのがわかる。
溝　全周していた可能性がある。検出したのは北から南にかけて、南西隅が途切れている。西側は斜面の傾斜で消失か。上幅は、前方部の南が推定1.05m、西が1.55～2.30m、東も同規模かとみられる。方台部は、北が2.34～2.94m、同規模で東に続いている。西側は削平されていて計測ができない。
埋葬施設　確認できない。
遺物出土状態　前方部の西溝で高坏、方台部の北溝で完形の鉢３点、坩１点、そこから離れてＳ字口縁台付甕の破片が縄文土器や石器に混じり出土。
時期　古墳時代前期、Ａｓ－Ｃ降下前

４　壺棺

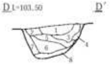
１号壺棺（第99～101図　ＰＬ35・55）

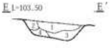




C－C′
1　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム混入
2　暗褐色土　砂質、ローム塊混入
3　暗褐色土　砂質、ローム微混
4　暗褐色土　砂質、ローム斑混
5　黄褐色土　ローム、暗褐色土斑混

D－D′
1　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム混入
2　暗褐色土　砂質、ローム混入
3　暗褐色土　砂質、ローム塊混入
4　褐色土　砂質、ローム塊多混
5　暗褐色土　砂質、ローム粒混入
6　にぶい黄褐色土　砂質、ローム粒多混
7　暗褐色土　砂質、ローム微混
8　黄褐色土　ローム、暗褐色土斑混

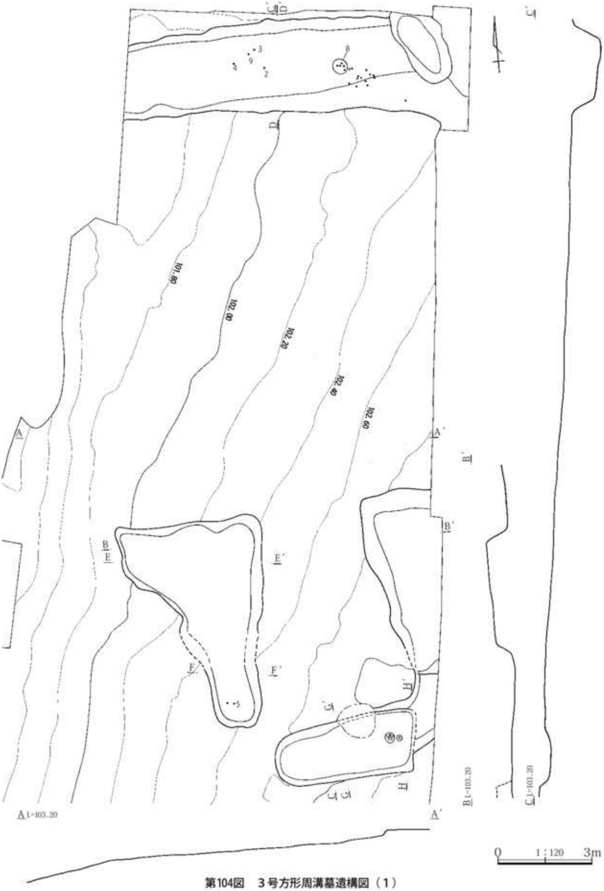




E－E′
1　黒褐色土　砂質、Ａｓ－Ｃ、ローム混入
2　黒褐色土　砂質、ローム混入
3　暗褐色土　砂質、ローム斑混
4　黄褐色土　ローム、暗褐色土斑混

0　1:80　2m

第103図　２号方形周溝墓遺構図・遺物図



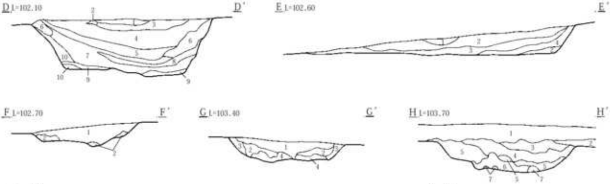
第104図　３号方形周溝墓遺構図（１）

位置　96Q-13、１号方形周溝墓の東溝の縁にかかる。

埋納状態　長軸40cm・短軸35cmの楕円形、断面円筒状の土坑に据えられている。壺は、上から蓋、本体、底板の三重にある。蓋は、本体とは別個体の大型破片を２枚ひと組で井桁に置いている。本体は口縁を上にしているが頸部以上を打ち欠き、底部を穿孔している。底板は、壺の破片の下に薄く黄褐色土を敷いている。また、土坑との隙間は、ローム粒が混入した暗褐色土で埋まっている。

内部の状態　土は洗浄していない。遺物や骨片を含んでいない。

時期　古墳時代前期



D－D′
1　暗黄褐色土　暗褐色土、ローム粒、Ａｓ-Ｃ混入
2　暗黄褐色土　１と同質、堅緻
3　暗褐色土　ローム粒、Ａｓ-Ｃ混入
4　暗褐色土　３よりローム多混、黄色っぽい、１層より暗い
5　暗褐色土　ローム粒混入、Ａｓ-Ｃ多混
6　暗褐色土　ローム粒混入、軽石粒微混
7　暗黄褐色土　暗褐色土粒、ローム粒、黒褐色土小塊、ローム小塊混土
8　暗褐色土　ローム粒、軽石粒混入
9　Ａｓ-Ｃ　黒色土が混入
10　暗褐色土　ローム粒、ローム小塊混入

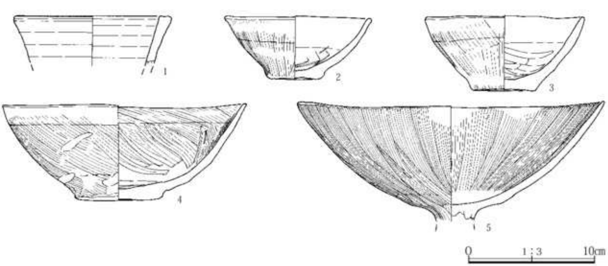
E－E′
1　暗褐色土　ローム粒混入
2　黄暗褐色土　１にローム粒多混
3　黄褐色土　ロームと暗褐色土の混土
4　暗褐色土　ローム小塊、ローム粒斑混

F－F′
1　暗褐色土　砂質、ローム混入、軽石微混
2　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混

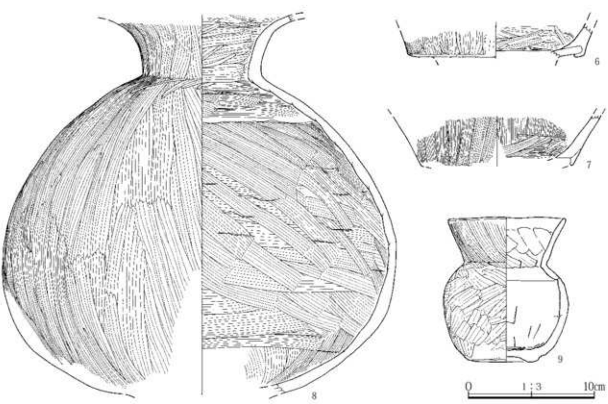
G－G′
1　黒褐色土　砂質、ローム斑混、軽石混入
2　暗褐色土　砂質、ローム斑混
3　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混
4　にぶい黄褐色土　ローム、黒褐色土多混

H－H′
1　灰黄褐色土　表土
2　黒褐色土　砂質、軽石多混
3　黒褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ混土
4　黒褐色土　砂質、ローム斑混、軽石混入
5　暗褐色土　砂質、ローム斑混
6　にぶい黄褐色土　ローム、黒褐色土多混
7　褐色土　ローム、Ａｓ-ＢＰ多混

0　1：60　2m



第105図　３号方形周溝墓遺構図（２）・遺物図（１）



第106図　３号方形周溝墓遺物図（２）

２号壺棺（第99～102図　ＰＬ36・55）

位置　96Ｒ-12、１号方形周溝墓の南溝内、南東寄りにある。周溝を調査中に底面の近くで、蓋の土器片で存在がわかる。

埋納状態　溝の中に南北方向の方形をした土坑がある。壺は、北寄りに直径30cm、円筒形のピットを掘り据えられている。壺は、上から蓋、本体、底板の三重にある。蓋と底は同一個体、くの字口縁の甕か球胴形をした壺の胴部を使う。本体は、単口縁の壺で口縁を方台部に向け、壁にもたせかけるように置く。土坑は、長軸105cm・短軸80cm・深さ15cmである。

内部の状態　土は洗浄していない。遺物や骨片を含んでいない。

時期　古墳時代前期

第４節　平安時代

１　概要

溝３条、道１条を検出。竪穴住居跡はなく、水田に続くとみられる用水路と斜面を縦走する道の跡である。水田は、富田漆田遺跡分となる谷地にあり、その縁辺部がＢ区の北端に続いている。

２　溝

３号溝（第107・108図　ＰＬ34・35・54）

位置　６ＰＱ－７・８、谷地の縁辺部にある。４号溝とは東3.50mの位置で平行している。左右に１ｍ前後、位置を変えながら３時期乃至それ以上の変遷がある。断面でいうと６層が最も古く、次いで７～９層、最後が５層という順になる。

規模　検出長約９ｍ、幅70～80㎝、深さ20㎝前後である。北へ傾斜している。南は調査をしていない。

走向　南北

覆土　流水による細砂を含み、中でも６層は一部がラミナ状となる。11層はＡｓ－Ｂが混入している。

遺物　６層から石と板碑が混在して出土。投棄したとみられる。板碑は掲載したものが唯一有銘で最大、ほかにも個体は別であるが無銘のものが細片まで含めると10点あまり出土している。

所見　時期は、覆土では上限をＡｓ－Ｂ降下に近づけたいが、遺物からみると下限は中世後半の頃まで下るのではないだろうか。

４号溝（第107図　ＰＬ34）

位置　６ＰＱ－６～８、谷地の縁辺部にある。３号溝とは平行している。

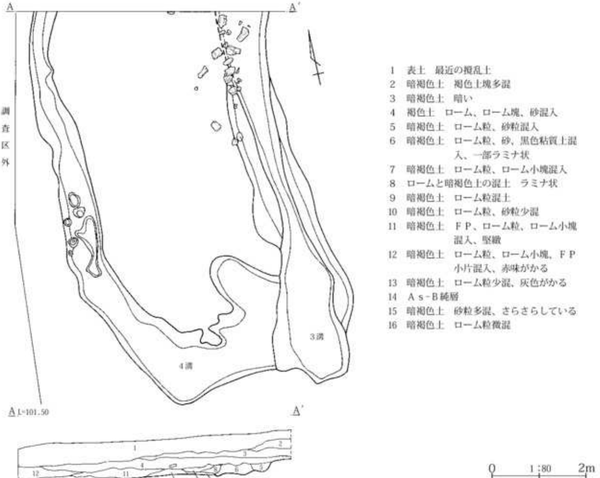
規模　検出長９ｍ、幅40～75㎝、深さ20㎝前後である。北へ傾斜している。南は調査をしていない。

走向　南北、緩く弧を描いている。

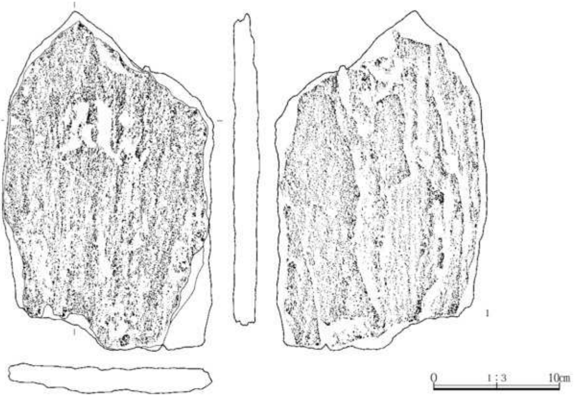
覆土　上層にＡｓ－Ｂの１次堆積、下層に砂を多く含んだ暗褐色土。

出土した遺物はない。

所見　古代の灌漑用の水路、台地の際を回り込むようにある。



第107図　３号・４号溝遺構図



第108図　３号溝遺物図

５号溝（第109図　ＰＬ35）

位置　96ＲＳ－７～９　東端は、26号住居跡の手前、撹乱で途切れている。さらに続いていたのかは不明である。西端は大泉坊川の崖に達している。

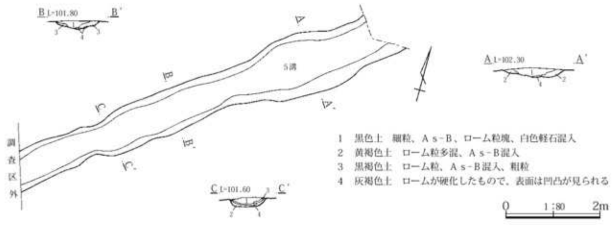
規模　検出長8.76m、幅82 ～ 90cm、深さ11 ～ 16cm、西への緩い下り勾配である。

走向　Ｎ50°Ｅ、直線的

覆土　上層にＡｓ－Ｂが混入した黒色土、下位に黒褐色土か黄褐色土のいずれかがあって、中間には硬化したロームがレンズ状にある。硬化の原因は、水が流れたことによると指摘されている。

出土した遺物はない。

所見　直線的であること、しかも地形の傾斜に対して直交していることから道の可能性がある。硬化面をはさんで２時期の変遷がある。



第109図　５号溝遺構図

３　道

１号道（第110図　ＰＬ37）

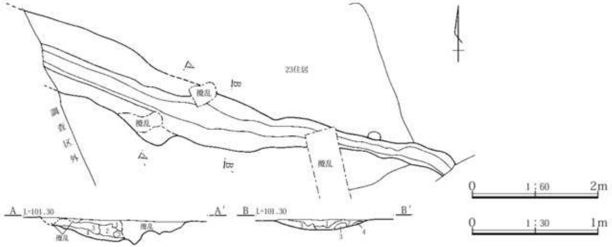
位置　96Ｐ～Ｑ-１～３　東は、硬化面の痕跡が１号溝にまで達している。西は、崖沿いに曲がる様子で、谷地ではなく台地上を北に向かう。23号・25号住居跡と重複、１号道が新しい。

規模　検出長14.50ｍ、硬化面の幅60㎝前後、検出面からの深さ30㎝、東西両端の高低差は約1.20ｍと急である。硬化面は、幅、状態ともに一定していて、3号住居跡貯蔵穴の箇所では粘土を貼って路面が作られている。そのほかでは削り出したロームをそのまま路面としていて、移植ごてで敲くと金属的な音がするほどの硬さである。長期間にわたって使われていた様子である。

走向　北西から南東方向、ほぼ直線的である。

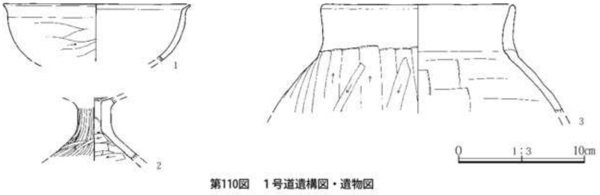
覆土　上層にＡｓ-Ｂが混入した暗褐色土、下位はローム粒との混土化が顕著。４層と３層と間にわずかな時差がある。坏、高坏、甕が出土。道に伴う明確な出土遺物はない。

所見　Ａｓ-Ｂとの関係ははっきりとしないが、時期は古代末から中世にかかる頃であろうか。覆土の様子は、５号溝とよく似ている。



Ａ－Ａ′
1　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｂ混入、粗
2　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ混入、粗、ローム粒少混
3　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ少混、粗、ローム粒多混、２より明るい
4　３とΦ１～２㎝大のローム粒との混土　砂質

Ｂ－Ｂ′
1　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ混入、粗、ローム粒多混
2　暗褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ少混、粗、ローム粒多混、１より明るい
3　２とφ１～２㎝大のローム粒との混土　砂質
4　ローム塊



第110図　１号道遺構図・遺物図

第５節　中世および近世

１　概要

掘立柱建物跡５棟、溝２条、土坑39基、井戸２基集石２基を検出した。北と南を溝で区画した屋敷の時期と、その後の地下式坑が点在する時期とに分けられる。

２　掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第111図　ＰＬ32）

位置　96Ｊ～Ｌ－２・３、２号掘立柱建物跡とは前後に並列、南３mにある。

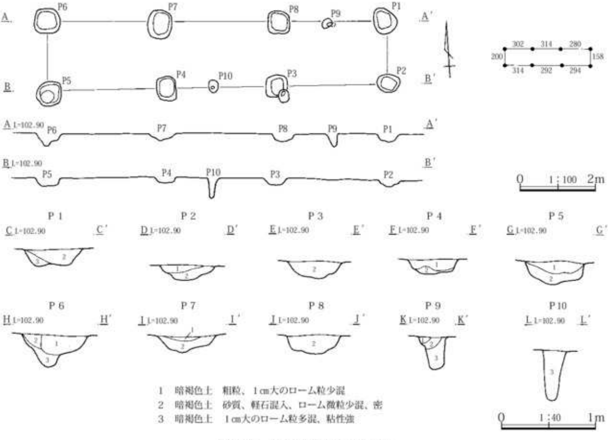
重複した遺構はない。

規模　東西棟　梁間１間（2.00m、1.58m）、桁行３間（9.00m、8.96m）、棟方向はほぼ東西である。

柱穴　方形の掘り方の中に直径が20cm前後の柱痕がある。柱間は、下記の模式図のとおりである。南の桁行にあるＰ10は扉の柱とみられる。

遺物　Ｐ３、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ８から獣骨が出土。

所見　時期を特定できる資料はない。２号掘立柱建物跡との関係では、庇も考慮したが柱筋がずれていることから別棟の建物跡とした。

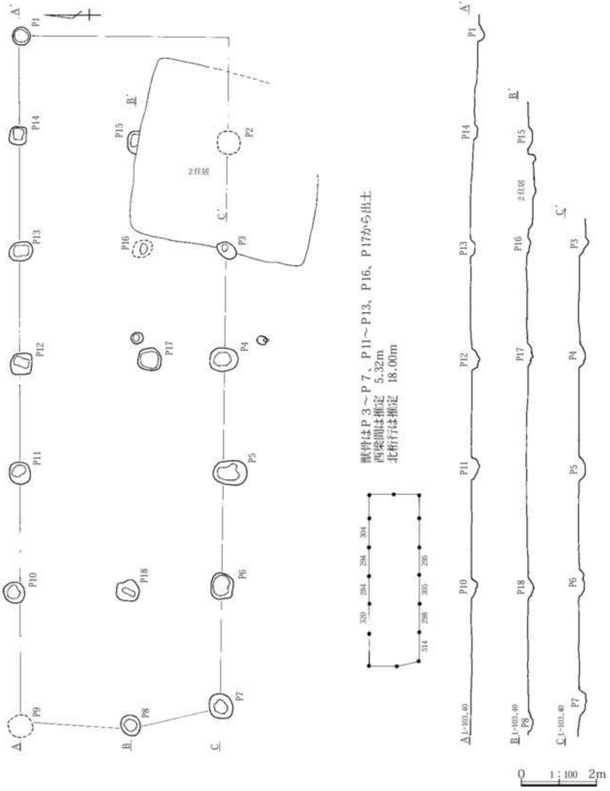


第111図　１号掘立柱建物跡遺構図

２号掘立柱建物跡（第112・113図　ＰＬ32）

位置　96Ｉ～Ｌ－３～５、削平段にあり、１号掘立柱建物跡とは前後に並列、北３mにある。２号住居

跡、24号土坑と重複、本跡が新しい。
規模　東西棟　梁間２間、桁行６間
柱穴　方形の掘り方の中に直径15cm前後の柱痕がある。覆土は、暗褐色土に大粒のローム粒が混入していて、締まりが弱い。中には攪乱を思わせる状態の箇所もある。何本かでは白くて石灰のような土が混

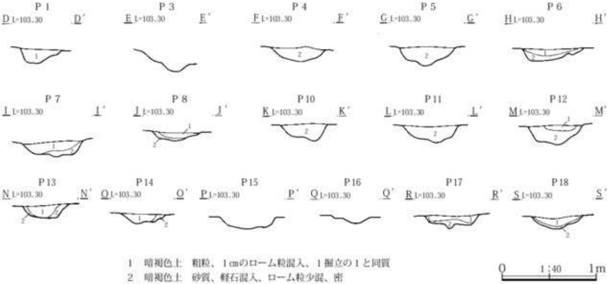


第112図　２号掘立柱建物跡遺構図（１）

入している。これに獣骨も混入していた。調査の当初は、覆土の様子から撹乱された、しかも新しい時代の建物跡とみていたが、覆土全体にわたっての特徴であることから撹乱ではないと判断した。

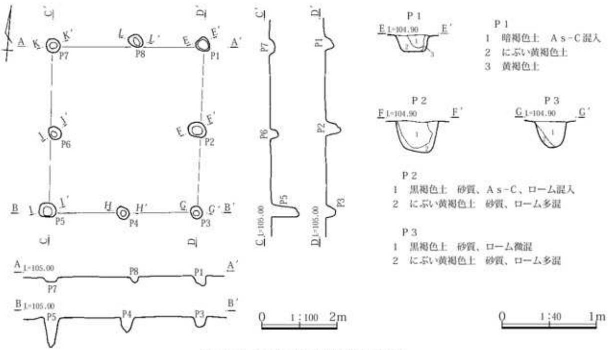
遺物　獣骨が10本の柱穴から出土。獣骨の部位は、頭骨、肢骨があり、一体分ではなくバラバラの状態。混入ではなく、埋納したとみられる。

所見　時期を特定できる資料はない。柱痕のあることから掘立柱建物跡とみたが、３ｍと広い柱間に対して掘り込みが20cm未満と浅くて疑問が残る。しかし、上面が大幅に削平されたとみるには、盛り土など現場に残されていた状態からは無理がある。



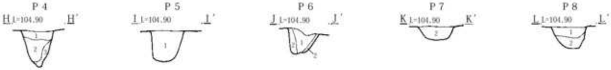
第113図　２号掘立柱建物跡遺構図（２）

３号掘立柱建物跡（第114・115図　ＰＬ33）



第114図　３号掘立柱建物跡遺構図（１）

位置　96ＩＪ-11・12　重複している遺構はない。
規模　梁間２間（４m）、桁行２間（4.40m）、南北がわずかに長い。南西隅が70cmと深いのを除いて、およそが30cm前後と浅い。棟方向　Ｎ５°Ｗ
柱穴　直径が40cm前後、南西隅が70cmと例外的に深いのを除いて、およそが25～30cmと浅い。北東隅は、柱痕様に底面が硬化。
出土した遺物はない。
所見　１号・２号溝とは平行、直交の位置関係にある。



P４
1　暗褐色土　Ａｓ-Ｃ混入
2　にぶい黄褐色土（柱痕）
3　黄褐色土

P５
1　黒褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ混入、ローム微混

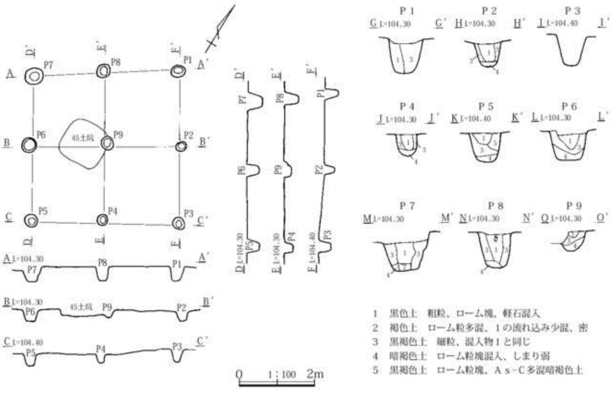
P６
1　黒褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ、ローム混入
2　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混

P７・P８
1　褐色土　砂質、ローム多混、軽石微混
2　黒褐色土　砂質、Ａｓ-Ｃ、ローム混入

0　1:40　1m

第115図　３号掘立柱建物跡遺構図（２）

４号掘立柱建物跡（第116図　ＰＬ33）
位置　96ＭＮ-18・19　Ｐ９が45号土坑と重複、本跡が新しい。



第116図　４号掘立柱建物跡遺構図

規模　方２間等間、南北方向がわずかに長い。南北の梁間は3.80m、西桁行3.80m、東桁行４mである。

棟方向　N33°W

柱穴　直径30cm前後の円形が多い。

出土した遺物はない。

所見　時期を特定できる資料はない。建物の規模、柱穴の様子が５号掘立柱建物跡と類似する。

５号掘立柱建物跡（第117図　PL33）

位置　96MN-16、重複している遺構はない。

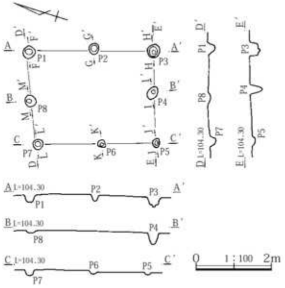
規模　南北棟、梁間２間、桁行２間、南北の梁間2.40m、西桁行3.12m、東桁行3.20mである。

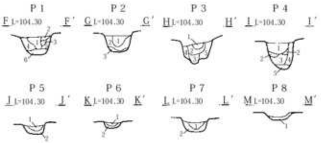
棟方向　N19°W

柱穴　直径25～35cmの円形か楕円形、深さは５～26cm。旧石器の調査で上位のほとんどが削平されているため、深さは倍近いとみられる。柱間は、梁間が106～134cm、桁行が142～170cmである。柱痕は、直径が15cm前後で埋土にはロームが多く混入されている。この埋土とは別に、P１、P４では底面に１層敷かれているのが顕著にみられる。ほかでも丁寧に造作されている。

出土した遺物はない。

所見　時期を特定できる資料はない。柱穴の規模、棟方向が４号掘立柱建物跡と類似する。





P１
1　黒褐色土　ローム塊（Φ５mm）、As-C混暗褐色土、粒度不均一、しまり弱
2　にぶい黄褐色土　ローム粒混暗褐色土、しまり弱
3　黒褐色土　１と類似、ローム塊微混
4　にぶい黄褐色土　粗粒、ローム粒塊多混、しまり弱
5　褐色土　ローム塊、ローム粒多混、しまり弱
6　黄褐色土　粗粒、ローム多混に４・５が混入

P２
1　黒褐色土　ローム塊（Φ５mm）、As-C混、粒度不均一、しまり弱
2　にぶい黄褐色土　粗粒、ローム粒塊多混、しまり１より弱
3　黄褐色土　ローム地山に２と思われる土微混、柱痕あり

P３
1　黒褐色土　ローム粒多混
2　黒褐色土　ローム塊混入
3　黒褐色土　２よりローム塊少なく、ローム粒多混、しまり弱
4　にぶい黄褐色土　ローム粒塊多混
5　黒褐色土　ローム塊（Φ10mm）混入、４より黒味帯びしまり弱

P４
1　黒褐色土　ローム塊（Φ５mm）、As-C混黒褐色土、粒度不均一、しまり弱
2　黒褐色土　ローム多混、堅緻
3　黒色土　ローム塊（Φ20mm）混入、密
4　黒褐色土　ローム塊（Φ30mm）、ローム粒塊多混、しまり弱
5　黒色土　ローム塊（Φ40mm）多混、密

P５
1　黒褐色土　ローム塊（Φ５mm）混入、黒味帯びしまり弱
2　黒褐色土　ローム塊多混暗褐色土

P６
1　黒褐色土　ローム粒混暗褐色土、密
2　黒褐色土　ローム粒混黒褐色土、密

P７・８
1　黒褐色土　ローム塊（Φ20mm）混入、堅緻
2　黒褐色土　ローム粒塊混入、堅緻

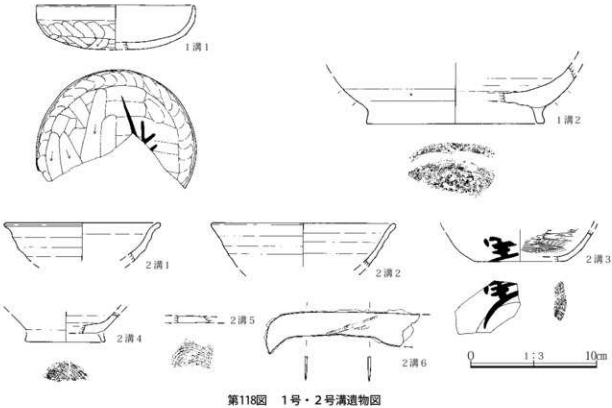
0　1:40　1m

第117図　５号掘立柱建物跡遺構図

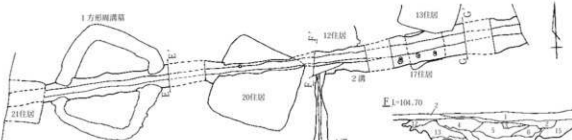
３　溝

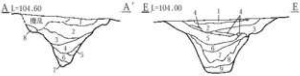
１号溝（第118・119図　ＰＬ34・54）
位置　96ＭＮ－９～14、北端は２号溝とＴ字形に接続。南端は調査区外にまで達する。富田西原遺跡Ｄ区で検出された１号溝と接続するものとみられる。
重複　９号・10号・24号住居跡より新しい。７ラインと８ラインの間で削平段を縦断、新旧は不明。
規模　検出長38m、幅60～80cm、深さ40～60cm、南への下り勾配、南北では約１mの高低差がある。これを解消するためとみられる、10cmあまりの段差が底面にある。５ラインから北では底面に波板状をした掘削痕がしっかりと残る。細砂が波の間に溜まる箇所もあるが常時、水の流れていた様子はない。
覆土　攪拌されたようにみえて、人為的な埋め戻しを感じさせる。Ａ断面の中位には八崎軽石のブロックがある。土塁の痕跡か、溝を埋めた跡なのか。
遺物　縄文時代と古墳時代の遺物が混入。小破片が多い。１は底部外面に墨書、２は瓶か。剥片14点、磨石１点、手づくね土器１点が出土。
所見　方形区画を縦に二分している。

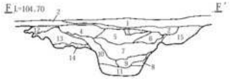
２号溝（第118・119図　ＰＬ34・54）
位置　96Ｉ～Ｔ-13・14、１号溝とは96M-14グリッドでＴ字形に接続、併存。西は谷地に達する。東は台地の中央にまで続くのか。延長線上には宅地の筆境、さらには市道がある。
重複　12号・13号・14号・20号・21号住居跡、４号土坑、１号方形周溝墓より新しい。
規模　検出長57m、上幅３m前後、深さ1.1～1.2m。
走向　東西、方位はＮ83°Ｅ
覆土　土塁を暗示する、南側からの流れ込みが多い。
遺物　縄文時代、古墳時代の遺物が混入。剥片４点、石皿破片１点などが出土。中には６号・12号住居跡と接合する土器の破片も含む。平安時代の甕、灰釉陶器の破片があり、内黒の埦外面に字体不明の墨書土器、鉄製鎌が出土。
所見　屋敷の外堀に相当。



第118図　１号・２号溝遺物図



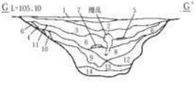




1溝　A－A′
1　黒褐色土　砂質、ローム微混、軽石混入、２より明るい
2　黒褐色土　砂質、ローム混入、軽石、礫微混
3　暗褐色土　砂質、ローム微混、軽石混入
4　暗褐色土　砂質、ローム微混、軽石混入、３より明るい
5　褐色土　ローム主体
6　暗褐色土　砂質、ローム塊多く、斑混
7　黄褐色土　ローム
8　黒褐色土　Ａｓ-Ｃ混入（住居フク土）

2溝　E－E′
1　暗褐色土　砂質、軽石（Ａｓ-Ａ？）微混
2　暗褐色土　砂質、軽石、ローム微混
3　黒褐色土　砂質、黒色土塊、軽石、ローム混入
4　褐色土　砂質、ローム斑混、軽石微混
5　にぶい黄褐色土　砂質、ローム、軽石混入、炭化物微混
6　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混、炭化物微混
7　にぶい黄褐色土　砂質、ローム混入、Ａｓ-ＢＰ多混
8　褐色土　砂質、ローム多混、Ａｓ-ＢＰ多混
9　褐色土　砂質、暗褐色土とローム斑混、Ａｓ-ＢＰ多混、ハードローム塊混入、しまり弱

2溝　F－F′
1　盛土
2　表土
3　暗褐色土　砂質、ローム混入
4　暗褐色土　砂質、軽石混入、ローム、炭化物微混
5　にぶい黄褐色土　砂質、ローム塊、軽石混入
6　にぶい黄褐色土　砂質、ローム混入、明るい
7　黒褐色土　砂質、ローム塊、黒色土微混、軽石混入
8　ローム塊
9　褐色土　砂質、ローム塊多く斑混
10　褐色土　砂質、ローム微混
11　褐色土　ローム塊混土
12　黒褐色土　砂質、ローム、軽石混入
13　黒褐色土　砂質、ローム塊混入
14　にぶい黄褐色土　砂質
15　住居フク土　Ａｓ-Ｃ混入



1溝　B－B′
1　灰黄褐色土　砂質、ローム塊多混、攪乱か、盛土か
2　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混、黒色土粒微混
3　暗褐色土　砂質、ローム塊、黒色土多混

1溝　C－C′
1　暗褐色土　ローム、細砂混入、軽石少混
2　暗褐色土　１より明るく、軽石多混、ローム粒、細砂混入、軟
3　褐色土　ローム多混

1溝　D－D′
1　暗褐色土　軽石混入、上位軽石、下位ローム粒多混
2　褐色土　ローム粒多混
3　黒褐色土　砂質、軽石、ローム粒少混
4　ロームと黒褐色土の混土　砂質、ローム多混、密
5　黒褐色土　砂質、密、縞状、ローム混入

2溝　G－G′
1　にぶい黄褐色土　砂質、川砂多混、ローム微混
2　暗褐色土　砂質、ローム、軽石混入
3　暗褐色土　砂質、ローム、軽石、ローム塊混入
4　暗褐色土　砂質、川砂混入
5　黒褐色土　砂質、周辺住居跡（古墳）のフク土流出
6　暗褐色土　砂質、ローム、軽石、ローム塊混入
7　黒褐色土　砂質、周辺住居跡（古墳）のフク土流出
8　褐色土　砂質、ローム、軽石混入、炭化物微混
9　褐色土　砂質、軽石混入、ローム塊、黒色土微混
10　褐色土　砂質、ローム多混
11　黄褐色土　ローム主体、暗褐色土混入
12　褐色土　砂質、ローム多混、軽石、ローム塊混入
13　黄褐色土　砂質、ローム塊多混、黒色土塊斑混
14　黒褐色土　砂質、ローム塊混入、黒色土多く斑混

0　1：400　10m

0　1：80　2m

第119図　1号・２号溝遺構図

4　土坑

39基を掲載する。検出した54基のうち、縄文時代の７基、掘立柱建物跡の柱穴に変更となった15号・17号～21号・26号・27号の８基を除外した。時期が明らかになったものは少なく、時代不明のものまで含んでいる。

地下式坑は、13基を検出した。台地の縁辺部に集中する傾向である。遺存状態は良好で、天井、入り口、壁に残る掘削痕などに見るべきものがある。一時的に使われたものもあったろうが、壁の一方に副室をつけたもの、明らかに拡張してＹ字形になったものがある。使用期間の長さは、堅く締まった入り口の階段からも読み取ることができる。

ただし、出土遺物という点では皆無に等しく、時期の特定に課題を残した。政和通宝とかわらけが出土した34号土坑は、例外ともいえる存在である。上限は中世、下限は38号土坑のようにビニールまで出土した土坑もある。

方形や円形をした土坑は、遺構同士の重複、覆土の様子から中世にあててみた。２号掘立柱建物跡の周囲にあることから附属施設のような関係も考えられるが、24号土坑は２号掘立柱建物跡よりも新しい。

最後に２基ある井戸は、深さが対照的である。崖寄りにある2号井戸では、掘削時のものであろうか、壁に足を掛けた跡と見られる穴があいていた。

１号土坑（第120図　ＰＬ26）
位置　96Ｉ－３、２号住居跡を切る。地形勾配に対して直交。
形状　長方形、壁は垂直に近く、硬化している。床はロームまで掘り込まれ、平坦で硬化している。
長軸方位　Ｎ10°Ｅ
規模　長軸160 cm・短軸85cm・深さ28cm
覆土　黒褐色土で自然埋没。
遺物　土器細片。
所見　６号・７号土坑と同一方向。墓坑か。

５号土坑（第120図　ＰＬ26・54）
位置　96ＨＩ－３・４
形状　円形、断面は袋状で硬化。床はロームまで掘り込まれ、住居跡のように硬化している。
規模　長軸130cm・短軸120cm・深さ52cm
覆土　黒褐色土と黄褐色土の互層状態、各層の厚さは10cm弱、人為的に埋没。
遺物　坏、高坏
所見　２号住居跡の貯蔵用土坑か。時期は出土した遺物で判断をしたが、決め手を欠く。

６号土坑（第120図　ＰＬ26）
位置　96ＦＧ－６・７
形状　長方形
長軸方位　Ｎ12°Ｅ
規模　長軸166cm・短軸96cm・深さ24cm
覆土　黒褐色土に暗褐色土が斑点状に混入。
出土した遺物はない。
所見　１号・７号土坑と同一方向。墓坑か。

７号土坑（第120図　Ｐ26）
位置　96ＧＨ－４、16号住居跡を切る。
形状　長方形
長軸方位　Ｎ10°Ｅ
規模　長軸148cm・短軸80cm・深さ16cm
遺物　人頭大の石が覆土の中位にある。
所見　１号・６号土坑と同一方向、墓坑か。

８号土坑（第120図　ＰＬ27）
位置　96Ｈ－６
形状　円形
規模　長軸43cm・短軸36cm・深さ74cm
覆土　暗褐色土とにぶい黄褐色土、２層の中位にカマドの袖石として使用した人頭大の石が含まれる。
出土した遺物はない。

所見　石は礎石で、柱穴の可能性がある。９号・54号土坑とあわせ掘立柱建物跡として検討したが、プランを確定することはできなかった。

９号土坑（第120図　ＰＬ27）
位置　96Ｇ－６
形状　円形
規模　長軸46cm・短軸36cm・深さ42cm
覆土　にぶい黄褐色土、ロームが混入している。
出土した遺物はない。
所見　柱穴の可能性がある。８号・54号土坑とあわせ掘立柱建物跡として検討したが、プランを確定することはできなかった。

10号土坑（第121図　ＰＬ27）
位置　97Ｅ－７
形状　円形
規模　長軸46cm・短軸42cm・深さ40cm
覆土　黒褐色土
出土した遺物はない。
所見　形状と深さが11号・12号土坑と類似、柱穴の可能性がある。掘立柱建物跡として検討したが、プランを確定することはできなかった。

11号土坑（第121図　ＰＬ27）
位置　96Ｅ－７
形状　円形
規模　長軸39cm・短軸34cm・深さ51cm
覆土　黒褐色土、にぶい黄褐色土
出土した遺物はない。
所見　形状と深さが10号・12号土坑と類似、柱穴の可能性がある。掘立柱建物跡として検討したが、プランを確定することはできなかった。

12号土坑（第121図　ＰＬ27・54）
位置　96Ｅ－８
形状　円形
規模　長軸25cm・短軸23cm・深さ55cm
覆土　黒褐色土で埋没。
遺物　常滑甕胴部破片
所見　形状と深さが10号・11号土坑と類似、柱穴の可能性がある。掘立柱建物跡として検討したが、プランを確定することはできなかった。

13号土坑（第121図　ＰＬ27・54）
位置　96ＨＩ－10
形状　円形
規模　長軸138cm・短軸123cm・深さ29cm
覆土　黒褐色土、にぶい黄褐色土で埋没。
遺物　古墳時代坏、埦
所見　中世の土坑の可能性がある。

14号土坑（第121図　ＰＬ27）
位置　96Ｉ－10
形状　円形
規模　長軸45cm・短軸35cm・深さ53cm
覆土　黒褐色土、にぶい黄褐色土で埋没。
出土した遺物はない。
所見　３号掘立柱建物跡の延長線上、柱穴の可能性がある。周囲に類例がなく単独の土坑とした。

16号土坑（第121図　ＰＬ27・28）
位置　96Ｋ－10
形状　円形
規模　長軸44cm・短軸28cm・深さ42cm
覆土　黒褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土で埋没。
出土した遺物はない。
所見　３号掘立柱建物跡の近くにあり、柱穴の可能性がある。14号土坑と同じく周囲に類例がなく、単独の土坑とした。

22号土坑（第121図　ＰＬ28）
位置　96Ｊ－12
形状　円形
規模　長軸34cm・短軸28cm・深さ72cm
覆土　黒褐色土で埋没。

出土した遺物はない。
所見　３号掘立柱建物跡の近くにあり、柱穴の可能性がある。23号土坑とあわせプランを検討したが確定できず、単独の土坑とした。

23号土坑（第121図　ＰＬ28）
位置　96Ｊ-12
形状　円形
規模　長軸44cm・短軸34cm・深さ26cm
覆土　黒褐色土で埋没。
出土した遺物はない。
所見　３号掘立柱建物跡の近くにあり、柱穴の可能性がある。22号土坑とあわせプランを検討したが確定できず、単独の土坑とした。

24号土坑（第121図　ＰＬ28）
位置　96ＩＪ-３・４、２号住居跡を切る。２号掘立柱建物跡の南東隅にかかるが、本坑が新しい。
形状　長方形
長軸方位　N46°W
規模　長軸233cm・短軸166cm・深さ43cm
覆土　褐色土、黒褐色土、暗褐色土で埋没。３層以下で埋没した後に１・２層分が窪んだか、一部を掘り返している。
出土した遺物はない。
所見　形状は43号土坑と類似、時期は覆土にＡｓ-Ｂが混入していることから中世とみられる。

25号土坑（第121図　ＰＬ28）
位置　96Ｈ-４、16号住居跡の北西隅に重複、住居跡よりも新しい。断面の記録はない。覆土は、調査時の担当所見である。
形状　円形
規模　長軸45cm・短軸42cm・深さ66cm
覆土　黒褐色土で埋没。
出土した遺物はない。
所見　16号住居跡の貯蔵穴か、掘立柱建物跡の柱穴の可能性がある。柱穴としては、29号・30号土坑とともにプランを検討したが確定することができなかった。

29号土坑（第121図　ＰＬ28）
位置　96Ｈ-５、３号住居跡を切る。
形状　円形
規模　長軸72cm・短軸64cm・深さ26cm
遺物　坏
所見　推定の南壁にかかる位置で、３号住居跡貯蔵穴の可能性がある。また、25号・30号土坑とともに掘立柱建物跡のプランを検討したが、確定することができなかった。

30号土坑（第121図　ＰＬ28・54）
位置　96Ｈ-５、29号土坑の東1.60ｍにある。
形状　円形
規模　長軸54cm・短軸52cm・深さ30cm
遺物　こね鉢口縁部破片
所見　柱穴の可能性がある。25号・29号土坑とともに掘立柱建物跡のプランを検討したが、確定することができなかった。

31号土坑（第121図　ＰＬ28）
位置　96Ｍ-９、９号住居跡西壁に重複。本坑が新しい。
形状　円形、埦状の断面
規模　長軸93cm・短軸76cm・深さ40cm
覆土　黄褐色土で埋没。
出土した遺物はない。
所見　底面が凸凹しており、人為的なものではなくしみ状土坑の可能性もある。

33号土坑（第122図　ＰＬ29）
位置　96ＯＰ-18・19、台地の西斜面
形状　縦長方形、天井は一部を残して崩落。南に３段の階段式の入り口がある。段差は30～35cm、踏み面は25～33cmである。東壁の中央部には、Ｔ字形の張り出し部が付く。隅に用途不明のピットがあ

る。床は平坦、壁面は内傾、鋤跡が残る。刃幅17～18cm、刃先は平らである。
長軸方位　Ｎ２°Ｅ
規模　軸長436cm、地下室の奥行き296cm、地下室の横幅186cm、地下室の高さ88cm、深さ134cm。張り出し部は間口90cm、奥行き150cmである。
覆土　天井が崩落して一気に埋め戻したものか。担当所見では、天井は掘り残したロームではなく、黒褐色土とロームを互層にした盛り土構造かと推定。出土した遺物はない。
所見　地下式坑、時期を特定できる資料はない。張り出し部は、副室として新しく掘られたものである。

34号土坑（第122図　ＰＬ29・54）
位置　96Ｎ-18・19
形状　縦長方形、天井は一部を残して崩落、南に円形の土坑をつけて入り口としている。段差は１段、地下室との段差は約60cmである。床は平坦、ただし隅などに水平にピットがあくことから土間ではなく、床張りも考えられるか。壁は内傾、鋤跡が良く残る。
長軸方位　Ｎ３°Ｅ
規模　軸長355cm、地下室の奥行き237cm、地下室の横幅173cm、地下室の高さ90cm、深さ122cm
覆土　１層～９層は、33号土坑で推定した盛り土構造の天井か。同様な互層状態で、特にロームが目立つ。11層は、入り口を覆うように堆積している。
遺物　政和通宝１点、かわらけ破片１点が出土。
所見　地下式坑、時期は出土した遺物から中世の可能性がある。

35号土坑（第123図　ＰＬ29）
位置　６Ｎ-１
形状　縦長方形、西に入り口の階段がある。段差は３段である。また、入り口を共有して掘り直し、北壁側がＴ字形に張り出している。床は平坦、張り出しとの段差はない。壁は内傾、角形の鋤跡が一面に残る。また、壁を養生した支柱の跡が張り出し部の左隅でみられた。
長軸方向　Ｎ69°Ｗ
規模　軸長398cm以上、地下室の奥行き323cm以上、地下室の横幅155cm、地下室の高さ95cm、深さ140cm。張り出し部は間口150cm、奥行き160cmである。
覆土　崩落した天井のロームが床に密着、その後も短期間で埋没。
遺物　古墳時代の甕破片、カマドに使用した人頭大の石が出土。
所見　地下式坑、時期を特定できる資料はない。

36号土坑（第123図　ＰＬ29）
位置　96Ｏ-14、20号住居跡の北西隅に重複、住居跡よりも新しい。
形状　方形、南側に入り口が付くとみられる。20号住居跡を利用したため、天井はロームではなく盛り土構造である。
規模　地下室の奥行き220cm、地下室の横幅180cm、深さ106cm
覆土　２層以下が地下室を埋め、残っていた入り口を１層が一気に埋めている。
遺物　20号住居跡から混入した土師器、石器が出土。
所見　地下式坑、時期を特定できる資料はない。

38号土坑（第124図　ＰＬ29）
位置　96Ｌ-19、キャリーの通過で、入り口が陥没したことから発見される。
形状　縦長方形、南にくの字に折れて、２段の階段式による入り口がある。天井は完全に残されていた。
長軸方位　入り口はほぼ南北、主体部はＮ12°Ｅ
規模　軸長307cm、地下室の奥行き168cm、地下室の横幅148cm、地下室の高さ95cm、深さ144cm
覆土　天井が残っていたため、内部は空洞だったらしく締まりが弱い。中にはビニールも混入していた。出土した遺物はない。
所見　地下式坑、周囲にあるものと、構造や掘削の特徴に違いはない。時期については、周囲にあるものと同じく中世頃とするか、覆土にビニールが混入していることから現代という２つの見方ができる。

39号土坑（第123図　ＰＬ29）
位置　96Ｉ－４、２号住居跡の柱穴と重複、新旧関係は不明。
形状　円形、２基が連結した格好である。規模の計測は、北側にある大型のもので行う。
規模　長軸60cm・短軸40cm・深さ16cm
出土した遺物はない。
所見　上面では円形をしていたが、底面は凸凹していてしみ状土坑の可能性がある。

40号土坑（第124図　ＰＬ30）
位置　６Ｎ－10、３号方形周溝墓の方台部上で検出。本坑が新しい。
形状　推定方形、北西隅が撹乱されている。
長軸方位　Ｎ39°Ｗ
規模　長軸166cm・短軸160cm・深さ46cm
覆土　暗褐色土で自然埋没。
遺物　甕が１点出土。
所見　覆土の特徴は３号・４号溝と類似、時期は中世か。

41号土坑（第124図　ＰＬ30・54）
位置　86Ｍ－19、24号住居跡の推定プラン内にある。
形状　上面が方形、中段以下は円形、ロート状となって細くなる。
規模　長軸60cm・短軸54cm・深さ70cm
覆土　暗褐色土で埋没。１層は堅く締まり、カマドの粘土が混入。２層とは異質、人為的に埋めている。遺物は坏が出土している。
所見　推定する24号住居跡の東南隅にあたり、周囲の住居跡にならうと貯蔵穴の可能性がある。

42号土坑（第124図　ＰＬ30・54）
位置　96Ｒ－５・６
形状　縦細形、南東端にくの字に折れて、階段式の入り口がある。西端は大泉坊川の崖にかかり未確認。先端に近いとみられる。
長軸方位　Ｎ60°Ｅ
規模　長軸398cm・短軸68cm・深さ58cm、天井は崩落、床面の近くだけが残る。
覆土　ほかでみられるような互層ではなく、黒褐色土だけで埋没。一気に埋まったとみられる。
遺物　古墳時代坏のなかに砥石、土器細片が出土。
所見　地下式坑、時期を特定できる資料はない。

43号土坑（第124図　ＰＬ30）
位置　96ＯＰ－３、23号住居跡の中央部近くに重複、本坑が新しい。
形状　隅丸方形、西側が直線、東側は緩く弧を描く。北西寄りの底面に小ピットの跡がある。
長軸方位　Ｎ34°Ｗ
規模　長軸146cm・短軸111cm・深さ32cm
覆土　人為埋没らしく、攪拌されたような状態。全体にＡｓ－Ｂが混入している。
遺物　覆土中位の４層上面で土師器甕破片が出土。
所見　形状と覆土が24号土坑と類似、時期は覆土にＡｓ－Ｂが混入していることから中世とみられる。

44号土坑（第125図　ＰＬ30・54）
位置　96Ｎ－17、46号土坑と重複、本坑が古い。
形状　横長方形、南に入り口がある。
長軸方位　Ｎ54°Ｗ
規模　軸長160cm、地下室の奥行き133cm、地下室の横幅252cm、地下室の高さ97cm
遺物　坏
所見　地下式坑、時期を特定できる資料はない。

45号土坑（第124図　ＰＬ30）
位置　96ＭＮ－18、４号掘立柱建物跡のプラン内にありＰ９と重複、本坑が古い。
形状　方形
長軸方位　Ｎ88°Ｅ
規模　長軸117cm・短軸108cm・深さ17cm
出土した遺物はない。
所見　出土した遺物もなく用途は不明。形状と規模は40号土坑に類似。時期は覆土の特徴から中世か。

46号土坑（第125図　ＰＬ30・31・54）
位置　96N-17、44号土坑と重複、本坑が新しい。44号土坑の南壁にトンネルがあいて発見される。天井が完全に残る。
形状　縦長方形、北に44号土坑を利用した入り口がある。床面は、44号よりも20cm低い。壁面には、横方向に抉ったような鋤痕がそのまま残る。
長軸方位　N22° E
規模　軸長216cm、地下室の奥行き164cm、地下室の横幅116cm、地下室の深さ88cm、深さ108cm
覆土　床から天井まで隙間無く堆積、８層が床に敷かれたようだとある。10層は天井からの剥落で、これを境に上下で時差があったのか。
遺物　砥石
所見　地下式坑、時期を特定できる資料はない。

47号土坑（第126図　ＰＬ31・54）
位置　96ＲＳ-11
形状　縦方形、西に入り口がある。入り口は段のない斜面で、角度は約20度である。
長軸方位　N70° E
規模　軸長364cm、地下室の奥行き218cm、地下室の横幅193cm、地下室の高さ101cm、深さ119cm
覆土　14層が崩壊した天井、大小のブロックが目立つ。６層以下は人為埋没か。５層は入り口から流れ込んだ水性堆積の細砂がラミナ状にある。
遺物　甕
所見　地下式坑、時期を特定できる資料はない。

48号土坑（第125図　ＰＬ31）
位置　96M-20、６M-１、49号～51号土坑と隣接。
形状　長方形、市道敷にあり、上面は大きく削平。
長軸方位　N25° E
規模　長軸147cm・短軸75cm・深さ10cm
覆土　砂が混入していて締まっている。
出土した遺物はない。
所見　時期は中世か。覆土の砂はＡｓ-Ｂの可能性がある。

49号土坑（第125図　ＰＬ31）
位置　96M-20、６M-１、48号・50号・51号土坑と隣接。
形状　長方形、市道敷にあり、上面は大きく削平。
長軸方位　N27° E
規模　長軸274cm・短軸147cm・深さ28cm
覆土　３層が48号土坑の１層に類似。
出土した遺物はない。
所見　時期は中世か。

50号土坑（第125図　ＰＬ31）
位置　96M-20、６M-１、48号・49号・51号土坑と隣接。
形状　長方形、市道敷にあり、上面は大きく削平。
長軸方位　N15° E
規模　長軸223cm・短軸78cm・深さ24cm
覆土　単一層で埋没。
出土した遺物はない。
所見　時期は中世か。

51号土坑（第125図　ＰＬ31）
位置　96M-19・20、48号～50号土坑と隣接。
形状　長方形、市道敷にあり、上面は大きく削平。
長軸方位　N22° E
規模　長軸345cm・短軸113cm・深さ17cm
覆土　２層は48号土坑１層と類似。
出土した遺物はない。
所見　時期は中世か。

52号土坑（第126図　ＰＬ31）
位置　96ＲＳ-６・７
形状　縦細形、南東に斜面の入り口がある。
長軸方位　N42° W
規模　軸長408cm、地下室の奥行き288cm、地下室の横幅90cm、深さ53cm
出土した遺物はない。
所見　地下式坑、時期を特定できる資料はない。

53号土坑（第126図）

位置　96Q－６、27号住居跡の南辺中央に重複、本坑が新しい。掘り込みが浅い上に、住居跡の調査を優先したため断面の記録はない。

形状　円形、底面に円形の浅い掘り込みがある。

規模　長軸132cm・短軸120cm以上・深さ21cm

遺物　図示の石は、住居跡に伴うものである。

所見　時期は不明。

54号土坑（第126図　ＰＬ31）

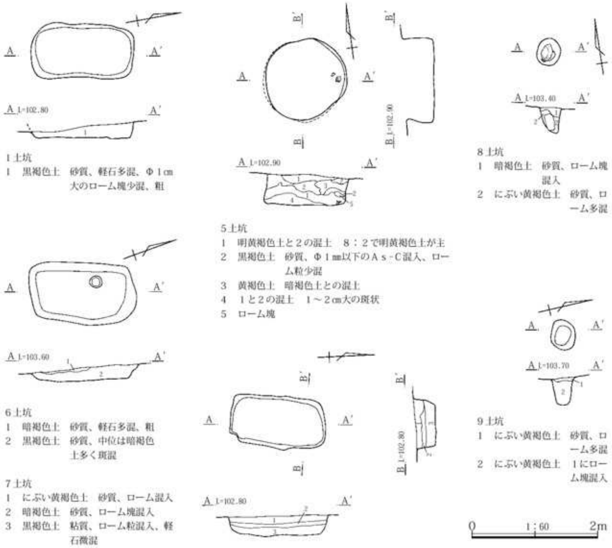
位置　96H－５

形状　円形

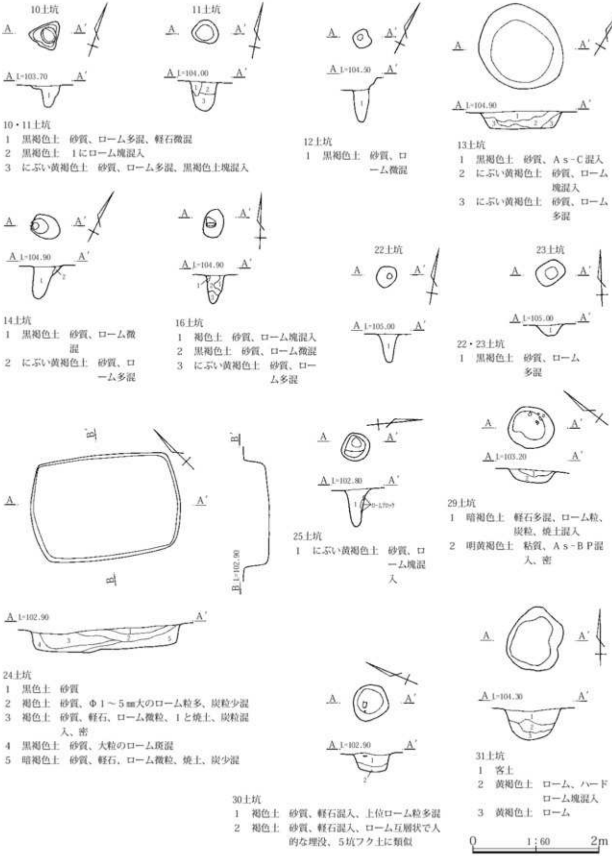
規模　長軸86cm・短軸81cm・深さ18cm

出土した遺物はない。

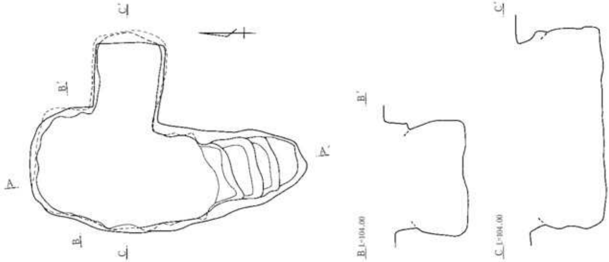
所見　柱穴の可能性がある。８号・９号土坑とあわせ掘立柱建物跡として検討したが、プランを確定することはできなかった。

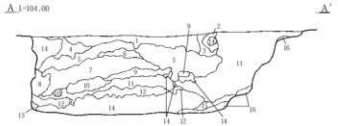


第120図　１号・５号・６号・７号・８号・９号土坑遺構図

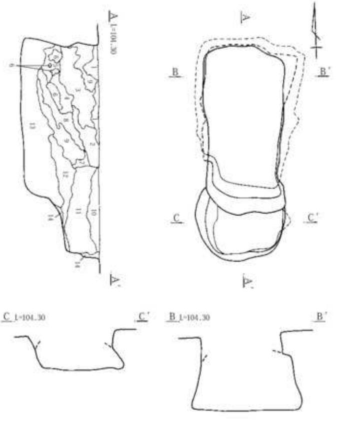


第121図　10号～14号・16号・22号～25号・29号～31号土坑遺構図

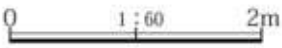




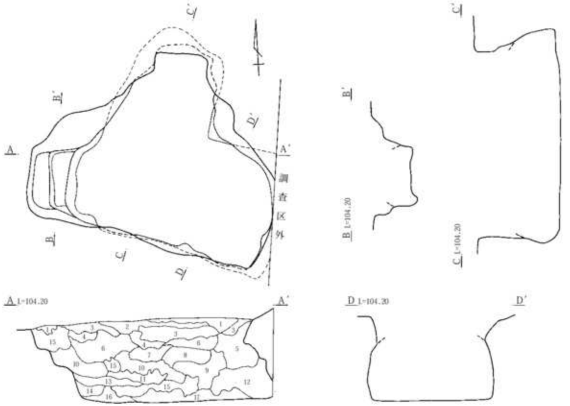
33土坑
1　黒褐色土　砂質、暗褐色土斑混、軽石混入
2　にぶい黄褐色土　ローム、暗褐色土混入
3　灰黄褐色土　砂質、ローム微混、粘性強
4　暗褐色土　砂質、ローム斑混、黒色土混入、軽石微混
5　暗褐色土　砂質、ローム斑混
6　褐色土　ローム、暗褐色土多混、黒色土塊混入
7　黒褐色土　砂質、軽石多混、ローム、ハードローム塊混入
8　黒褐色土　砂質、ハードローム塊多混
9　にぶい黄褐色土　ローム、暗褐色土多混
10　黄褐色土　ローム、暗褐色土塊混入
11　黒褐色土　砂質、ローム塊多混
12　黒色土　砂質、ローム塊混入
13　灰黄褐色土　砂質、ローム混入
14　黄褐色土　ローム、天井崩落土
15　暗褐色土　砂質、ローム混入、ハードローム塊多混
16　黄褐色土　ローム、暗褐色土斑混



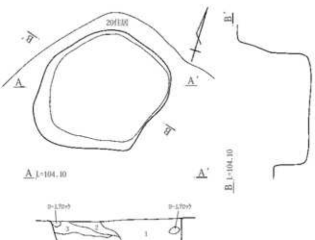
34土坑
1　にぶい黄褐色土　砂質、軽石、ローム混入
2　褐色土　砂質、ローム塊多混、軽石混入
3　黒褐色土　砂質、ローム塊混入、軽石微混
4　灰黄褐色土　砂質、黒褐色土と褐色土斑混、ローム粒混入
5　灰黄褐色土　４にローム塊多混
6　明黄褐色土　ローム、天井崩落土
7　にぶい黄褐色土　砂質、ローム塊混入、軽石、炭化物微混
8　黒褐色土　砂質、ローム塊混入、軽石微混
9　明黄褐色土　ローム、天井崩落土
10　にぶい黄褐色土　砂質、軽石混入、ローム微混
11　黒褐色土　砂質、軽石多混、ローム塊混入
12　暗褐色土　砂質、ローム塊多混
13　黒褐色土　砂質、ローム塊混入
14　黄褐色土　ローム、黒褐色土混入

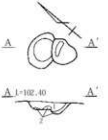


第122図　33号・34号土坑遺構図



35土坑
1　にぶい黄褐色土　砂質、軽石微混
2　褐色土　砂質、ローム塊混入、軽石微混
3　暗褐色土　砂質、黒褐色土混入、ローム塊微混
4　黄褐色土　砂質、ローム塊多混
5　黒褐色土　砂質、ローム多混
6　にぶい黄褐色土　砂質、ローム混入
7　暗褐色土　砂質、ローム塊混入
8　褐色土　砂質、ローム斑混、ハードローム塊混入
9　黄褐色土　ローム、黒褐色土少斑混、ハードローム塊多混、天井崩落土
10　黒褐色土　砂質、ローム多混
11　黄褐色土　ローム、黒褐色土微混、天井崩落土
12　黒褐色土　砂質、ローム塊多混
13　黒褐色土　砂質、ローム微混
14　暗褐色土　砂質、ローム多混、ハードローム塊混入
15　黄褐色土　ローム、天井崩落土
16　黒褐色土　砂質、ローム塊混入
17　にぶい黄褐色土　砂質とロームの混土、ローム塊混入



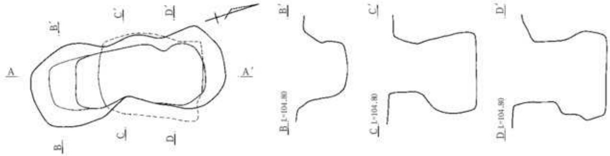


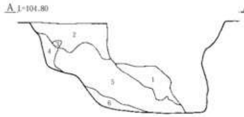
39土坑
1　黒褐色土　焼土、炭少混
2　黄褐色土　ローム主体、黒色土少混

36土坑
1　黒褐色土　砂質、黒色粘質土混入、ローム微混
2　黒褐色土　砂質、ローム混入、軽石微混
3　にぶい黄褐色土　砂質、ローム多混
4　黒褐色土　砂質、ローム塊多混、しまり強

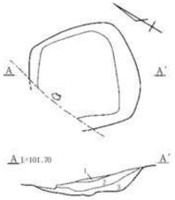
0　1：60　2m

第123図　35号・36号・39号土坑遺構図

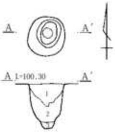




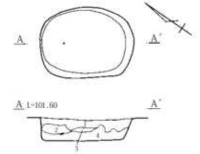
38土坑
1　黄褐色土　ローム、天井崩落土
2　褐色土　砂質、ローム粒多混
3　ローム塊
4　褐色土　砂質、ローム粒、黒色土粒多混
5　黒褐色土　砂質、ローム粒多混、しまり弱
6　黒褐色土　砂質、軽石多混、ローム混入、しまり強



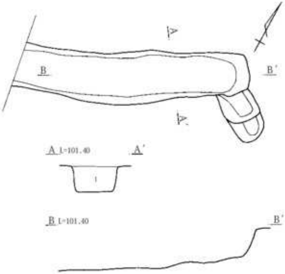
40土坑
1　黄褐色土　暗褐色土、ローム多混
2　暗褐色土　ローム粒多混、黄色みがかっている
3　暗褐色土　ローム塊、黄褐色多混



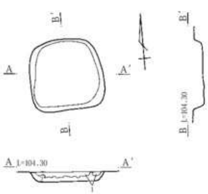
41土坑
1　暗褐色土　砂質、24住カマドの被熱した粘土、ローム粒多混
2　暗褐色土　砂質、粘性強、１よりも黒い
3　暗褐色土　砂質、粗粒、壁からのローム粒等混入



43土坑
1　黒褐色土　にぶい黄褐色土との混土、Ａｓ－Ｃ、Ｈｒ－ＨＰ、ローム混入
2　１と同質　全体に均質、混土化
3　Ｈｒ－ＨＰ多混ローム塊
4　にぶい黄褐色土　Ｈｒ－ＨＰ混入



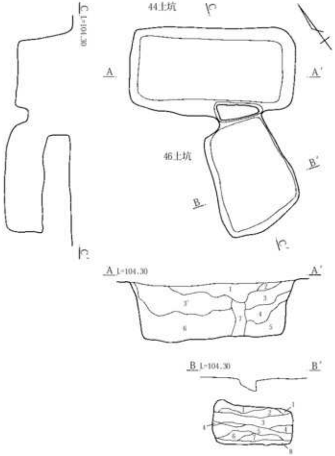
42土坑
1　黒褐色土　砂質、ローム、暗褐色土斑混、軟



45土坑
1　暗褐色土　Ａｓ－Ｃ、ローム粒混入、黒みの強い部分斑混
2　褐色土　ローム、暗褐色土まじりローム塊混入

0　1：60　2m

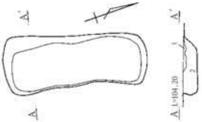
第124図　38号・40号・41号・42号・43号・45号土坑遺構図



48土坑
1　暗褐色土　ローム塊、砂混入、密

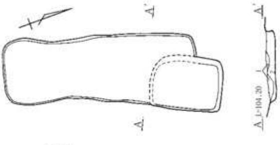
49土坑
1　黒褐色土　As-C多混、ローム塊少混、しまり弱
2　黒褐色土　ローム塊、白色粒、黒色土塊混入、粒度不均一
3　暗褐色土　軽石、ローム塊混入、粒度不均一

44土坑
1　黒褐色土　As-C多混、堅緻、３層斑混
2　黒褐色土　As-C多混、堅緻、１より明るい、粒度不均一
3　暗褐色土　As-C、1・2層1/3位混入、密、２層斑混
3'　暗褐色土　As-C３より少なく、しまり弱、ローム塊混入
4　にぶい黄褐色土　砂質、As-C微混、ローム粒塊少混
5　暗褐色土　As-C４よりさらに少なく、ローム塊等粒度不均一
6　にぶい黄褐色土　炭少混、ローム塊混入、しまり弱、最も明るい
7　にぶい黄褐色土　ローム塊主体暗褐色土、堅緻、上位中心に軽石混黒色土塊

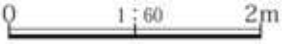


50土坑
1　暗褐色土　軽石、炭片、ローム塊混入、黒み帯びる
2　黒褐色土　ローム塊、黒色土塊、白色軽石混入、粒度均一

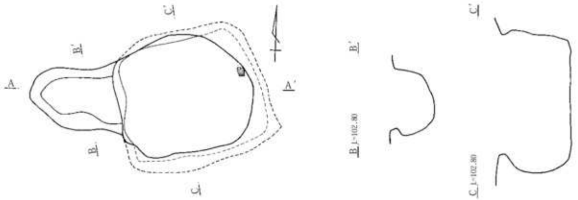
46土坑
1　暗褐色土　ローム粒塊多混、黒色土、砂粒少混
2　黒色土　ローム粒塊（φ10～15mm）軽石（φ20mm）混入
3　黒褐色土　ローム粒塊（φ10～15mm）軽石（φ20mm）、炭化物混入、しまり弱
4　黒褐色土　ローム粒塊（φ2～10mm）多混、しまり弱
5　黒褐色土　３よりローム少混、しまり弱
6　黒色土　ローム粒塊多混、しまり弱
7　黒褐色土　ローム塊（φ25mm）少混、しまり強
8　黒色土　ローム粒塊混入、貼床に見えるが、しまりない

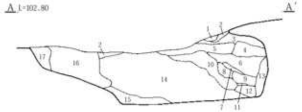


51土坑
1　暗赤灰色土　砂質、軽石、ローム粒塊混入
2　にぶい黄褐色土　ローム塊、上位砂混入、密

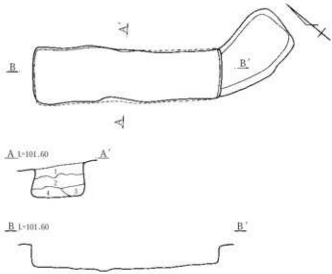


第125図　44号・46号・48号・49号・50号・51号土坑遺構図

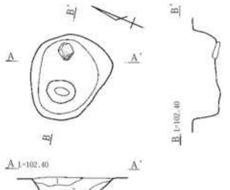




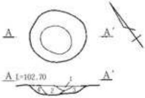
47土坑
1　褐色土　Ａｓ-ＢＰ混ローム主体２次堆積土
2　暗褐色土　ローム粒混土
3　暗褐色土　２と同質、ローム塊混入
4　にぶい黄褐色土　３と同質、ローム塊は大粒、密
5　褐色土　砂質、ラミナ状、粒度不均一
6　黄褐色土　ローム主体、９と近似、しまり９より強
7　黄褐色土　６と同質、黒色土塊多混
8　黄褐色土　Ａｓ-ＢＰ、ローム塊混入
9　黄褐色土　大小のローム塊からなる
10　黒褐色土　ローム混入、しまり弱、粒度均一
11　９と12混土
12　９と暗色帯粘質土　ローム塊φ10㎜ 混入、粒度不均一、しまり弱
13　暗色帯粘質土　ローム塊φ２～３㎜混入、軟
14　黄褐色土　天井崩落土、大小のローム塊からなる
15　にぶい黄褐色土　暗色帯、ローム粒混入（φ５㎜）
16　褐色土　ローム塊混入、粒度均一、堅緻
17　褐色土　ローム塊16より多混、明るい、堅緻



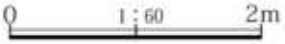
52土坑
1　黒褐色土　砂質、軽石、砂多混、ローム粒塊混入、しまり弱
2　黒褐色土　砂質、軽石、砂、１より少だが多混、ローム塊混入、しまり弱、１より黒み有
3　黒褐色土　軽石、砂混黒色土、ローム粒塊混入、しまり弱
4　暗褐色土　砂質、ローム塊、ローム多混、褐色土、黒色土小塊混入



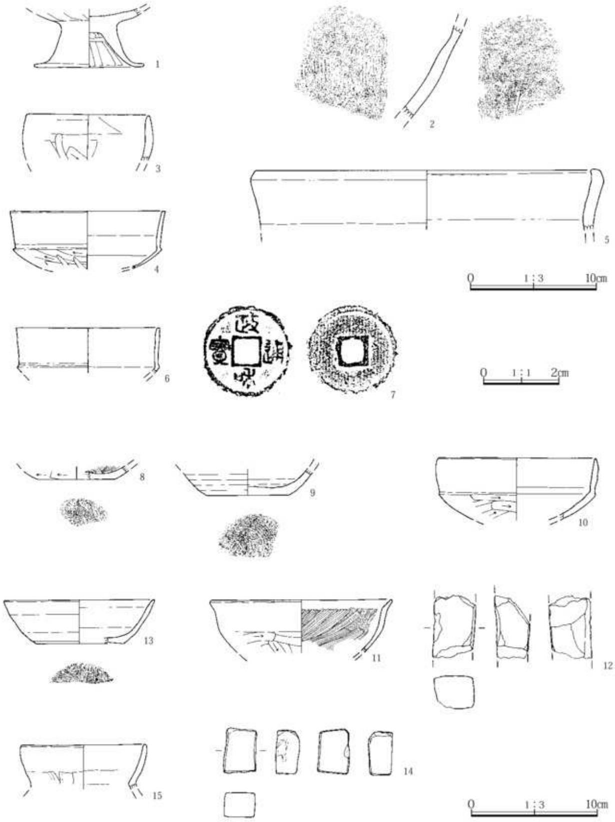
53土坑
1　黒褐色土　軽石φ10㎜、ローム粒塊混入、黒み帯びる
2　黒褐色土　ローム粒、焼土粒混入、軟
3　暗褐色土　ローム粒、黒色土粒混入
4　黒色土　ローム粒塊、焼土粒少混、粒度不均一、しまり弱



54土坑
1　黒褐色土　焼土少混
2　黄褐色土　焼土少混
3　黒褐色土　１より黄色土多混
4　黄褐色土　しまり強



第126図　47号・52号・53号・54号土坑遺構図



第127図　５号・12号・13号・30号・34号・41号・42号・44号・46号・47号土坑遺物図

5　井戸

1号井戸（第128図　ＰＬ37）

位置　96Ｆ－３、谷地の斜面に単独である。

形状　円形、素掘り、底面は黒色土で基盤には達していない。壁、底面に荒れた様子はみられず、水が湧いた形跡に乏しい。

規模　長軸135cm・短軸132cm・深さ94cm

覆土　黒褐色土、４層にロームブロックが多い。最下層の６層には川砂が混入し、一部はラミナ状。

遺物　龍泉窯青磁碗が底面で出土。

所見　時期は出土した青磁で中世と判断した。

2号井戸（第128図　ＰＬ37）

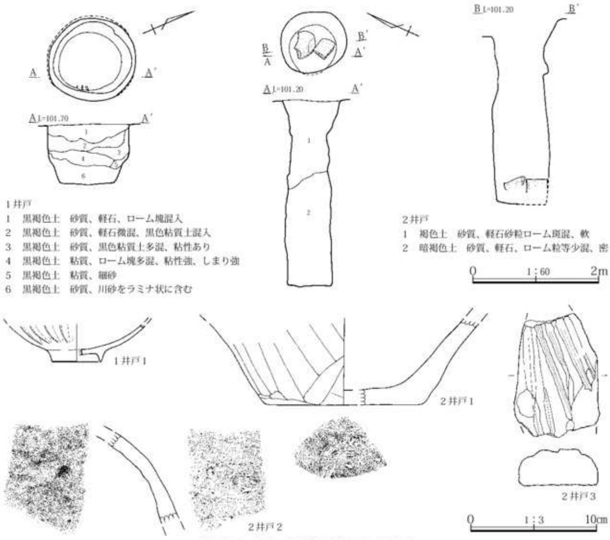
位置　96Ｒ－４、１号道、42号土坑に近い。

重複　無名の土坑が北側にかかる。土坑の調査で所在が判明した。

形状　円形、素掘り、底面は基盤に達している。壁は垂直で、中段に足を掛けたとみられる手の平大の穴が左右交互、数箇所にあけられている。

規模　長軸105cm・短軸96cm・深さ290cm

覆土　１層と２層との間には時差があるが、２層以下は短期間のうちに埋没。１層は攪拌されていて締まりに欠ける。２層は、壁から剥落したロームが混入、堅く締まる。２層の下部で、投棄したとみられる人頭大の石が出土。



第128図　1号・2号井戸遺構図・遺物図

遺物　2層で擂鉢底部破片、須恵器甕の破片、面取りされた角閃石安山岩が出土。

所見　深井戸、時期を特定する資料がない。屋敷に伴うものと考えておきたい。

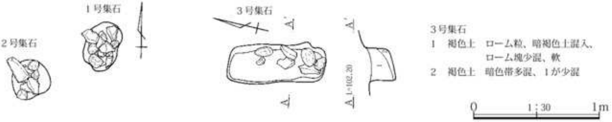
6　集石

3基を検出した。南にある2本は、地業の可能性がある。なお、1号集石の東には報告からは除外したが、重機の攪乱で消失した別の1基があった。

1号集石（第129図　ＰＬ38）
位置　96Ｓ－８、2号集石の北東35㎝にある。
重複している遺構はない。
形状　長軸38㎝・短軸27㎝・５㎝程度の深さの浅い掘り込みがある。拳大の粗粒輝石安山岩が平坦面を上にして置かれ、隙間に卵大の石がある。ぐらついた様子はなく、外回りが大きめで、高さを揃えているようにもみえる。地業の可能性がある。
出土した遺物はない。
所見　加工されたものはなく、遺物としては取り上げなかった。時期を特定できる資料はない。東側にも攪乱されているが1基ある。

2号集石（第129図　ＰＬ38）
位置　96Ｓ－８、1号集石の南西35㎝にある。
重複している遺構はない。
形状　直径30㎝前後の掘り込みに集められている。石は10～20㎝と不揃いで、抜き取られたかのようで出土した遺物はない。
所見　1号集石と対になる地業の可能性がある。時期を特定する資料はない。

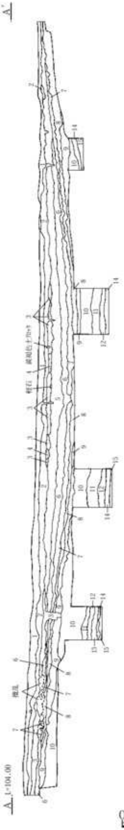
3号集石（第129図　ＰＬ38）
位置　96Ｓ－10、1号・2号集石の北７ｍにある。
重複している遺構はない。
形状　長軸78・短軸30・深さ19㎝の長方形の掘り方の上面で石が出土。
覆土　1層には大粒のロームや暗褐色土が混在していて、締まりに欠けるものの人為的な盛り土か。
出土した遺物はない。
所見　1号・2号集石とは、石の大きさ、土坑状の掘り方を持つことで性格を異にするか。石が大きく、1号のように並べたような印象もみられない。時期を特定する資料はない。



第129図　1号・2号・3号集石遺構図

7　谷地

A区谷地（第130図）
位置　86Ｃ～Ｌ－19・20、96Ｃ～Ｋ－１～６、調査区の南東部を北東から南西方向にあって、富田西原遺跡Ｄ区に続く谷地の谷頭側にあたる。幅は約20ｍ、Ａ区の三分の一近い面積を占めている。Ｄ区とは市



道をはさんだ位置関係にあり、本遺跡と富田西原遺跡とを分ける、実質の境界である。

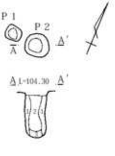
調査の経過　遺構確認は、Ａｓ－Ｂ下、その下位の黒色土の２面で行うが遺構を検出することはできなかった。その理由としては傾斜が強いこと、調査時にも経験したことではあるが、雨による土砂の堆積が多いために、耕地としては不適当だったのであろう。遺構は、ローム漸移層までが浅い谷地の境界あたりまで、１号井戸が相当する。２号・３号土坑は、中世屋敷の造成で削平されて、半ば露出していた。

埋没状況　南壁中央部の102.80m前後にＡｓ－Ｂがブロックで堆積。以下1.80m近い厚さの黒色土、ローム漸移層が堆積している。調査時点では、黒色土を色調やローム粒、軽石の含有程度から５枚の土層に分けて観察しているが、報告では一括した。

遺物　縄文包含層が北西方向から流れ込んでいる。

所見　時期は縄文時代、黒ボク土で急速に埋没。

谷地
1　現在の耕作土
2　褐色土　砂質、黄褐色土、黒色土塊混入、ラミナが見られる
3　暗褐色土　砂質、黒色土塊混入、Φ１㎜軽石微混、Ａｓ－Ｂ下水田耕作土
4　暗褐色土　Ａｓ－Ｂ多混、黒色土混入
5　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ混入
6　黒褐色土　Ａｓ－Ｃ混入
7　黒色土　粘質、Ａｓ－Ｃ下水田耕作土
8　黒褐色土　粘質、軽石微混
9　暗褐色土　砂質、鉄分凝集
10　黒色土　砂質、鉄分微混、粘性強
11　黒色土　粘質、ローム混入、しまり強
12　黒褐色土　粘質、ローム混入、鉄分凝集
13　黒褐色土　粘質、ローム混入、粘性強、しまり強
14　暗褐色土　粘質、ローム混入
15　明黄褐色土　橙色スコリア含む、しまり強

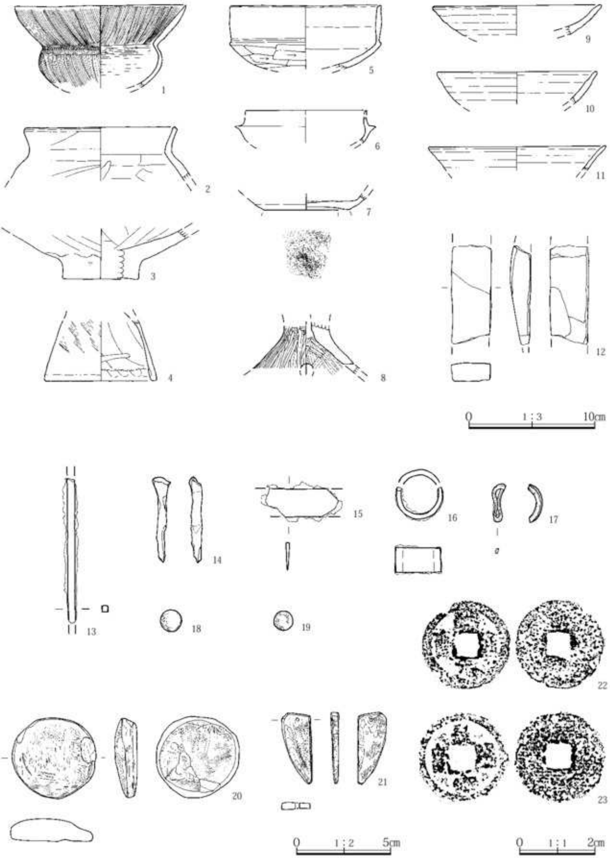


P２
1　黄褐色土　ローム塊混入、堅緻→埋土
2　暗褐色土　黄褐色の小ローム粒多混、上位しまり強、柱痕
3　褐色土　粗粒、しまり弱

0　1：120　3m

0　1：60　2m

第130図　谷地、１号・２号ピット遺構図



第131図　遺構外遺物図

富田高石遺跡観察表　１号炉

遺物番号	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	胴部1/3	粗砂、繊維	赤褐 高(10.0)	ふつう	くの字状に屈曲して口縁が開く器形。単節ＲＬ、ＬＲ縄紋による羽状構成。内面研磨。	黒浜式	6	56
2	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	黒褐	ふつう	横位に条線を施す。	黒浜式	6	56
3	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	波状口縁を呈し、波頂部に小突起を付す。口縁に沿って２条のＣ字状爪形紋をめぐらせ、以下、単節ＲＬ、ＬＲ縄紋による菱形構成。内面研磨。	黒浜式	6	56
4	深鉢					３と同一個体。		6	56
5	深鉢					３と同一個体。		6	56
6	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	半截竹管による平行沈線を横位にめぐらせ、以下、無節Ｒ１縄紋を横位施紋する。	黒浜式	6	56
7	深鉢	口縁部片	粗砂	橙	良好	単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。補修孔あり。	前期後葉	6	56
8	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	単節ＬＲ縄紋を横位施紋する。内面研磨。	黒浜式	6	56
9	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	6	56
10	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	単節ＬＲ、ＲＬ縄紋による羽状構成。内面研磨。	黒浜式	6	56
11	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。内面研磨。	黒浜式	6	56
12	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	単節ＬＲ、ＲＬ縄紋による菱形構成。内面研磨。	黒浜式	6	56
13	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	くの字状に屈曲する器形。単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	6	56
14	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	無節Ｌｒ、単節ＲＬ縄紋を施す。	黒浜式	6	56
15	深鉢	底部片	粗砂、石英、繊維	明赤褐	ふつう	底径6.6cm。単節ＬＲ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	6	56

遺構外遺物

遺物番号	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	口縁部片	粗砂、結晶片岩、細礫	橙	良好	山形押型紋を口縁部は横位、胴部は縦位帯状施紋する。口唇部にも施紋。	早期押型紋形	9	57
2	深鉢					１と同一個体。		9	57
3	深鉢					１と同一個体。		9	57
4	深鉢					１と同一個体。		9	57
5	深鉢					１と同一個体。		9	57
6	深鉢					１と同一個体。		9	57
7	深鉢					１と同一個体。		9	57
8	深鉢					１と同一個体。		9	57
9	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	地紋に条痕を施し、絡条体圧痕を斜位に施す。内面にも条痕を施す。	早期後半条痕紋系	9	57
10	深鉢	口縁部片	粗砂、結晶片岩、繊維	赤褐	ふつう	内外面に条痕を施す。口唇部に斜位の刻みを付す。	早期後半条痕紋系	9	57
11	深鉢					10と同一個体。		9	57
12	深鉢					10と同一個体。		9	―
13	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	口縁下に沈線を４条めぐらせ、以下、０段多条ＬＲ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	9	57
14	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	半截竹管による平行沈線を横位、斜位に施す。	黒浜式	9	57
15	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	単節ＬＲ縄紋を地紋とし、半截竹管による平行沈線を横位にめぐらす。内面研磨。	黒浜式	9	57
16	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	良好	半截竹管による平行沈線を鋸歯状に施す。	黒浜式	9	57
17	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	黄橙	ふつう	口縁が緩く内湾する器形。口縁下に半截竹管による平行沈線を浅く３条めぐらせた後、沈線上にＣ字状刺突を押捺する。以下、０段多条ＬＲ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	9	57

遺物番号	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様等	備考	図版番号	写真番号
18	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	くの字状に屈曲する器形。C字状爪形紋を２条めぐらせ、以下、単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。内面研磨。	黒浜式	9	57
19	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	C字状刺突をめぐらせ、以下、単節ＬＲ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	9	57
20	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	半截竹管による平行沈線、コンパス紋、C字状爪形紋を横位多段にめぐらす。内面研磨。	黒浜式	9	57
21	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	半截竹管による平行沈線、コンパス紋を横位多段にめぐらす。	黒浜式	9	57
22	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	単節ＬＲ縄紋を地紋とし、半截竹管による平行沈線、コンパス紋を横位にめぐらす。	黒浜式	9	57
23	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい赤褐	ふつう	単節ＬＲ、ＬＲの羽状縄紋を地紋とし、コンパス紋を横位にめぐらす。	黒浜式	9	57
24	深鉢	胴部片				23と同一個体。		9	57
25	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	単節ＲＬ、ＬＲ縄紋による羽状構成。	黒浜式	9	−
26	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	明褐	ふつう	無節Ｌｒ縄紋を横位施紋する。補修孔あり。	黒浜式	9	57
27	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	良好	単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。内面研磨。	黒浜式	9	57
28	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	明赤褐	ふつう	くの字状に屈曲する器形。単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	9	−
29	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	０段多条Ｌｒ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	9	57
30	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	明赤褐	ふつう	無節Ｌｒ、Ｒｌ縄紋による羽状構成。	黒浜式	9	57
31	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	くの字状に屈曲する器形。単節ＲＬ、ＬＲ縄紋による羽状構成。内面研磨。	黒浜式	9	57
32	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	単節ＲＬ、無節Ｌｒ縄紋による羽状構成。	黒浜式	9	−
33	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	明赤褐	ふつう	単節ＬＲ縄紋を横位施紋する。内面研磨。	黒浜式	9	−
34	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にぶい赤褐	ふつう	単節ＬＲ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	9	−
35	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	０段多条Ｌｒ、Ｒｌ縄紋による羽状構成。内面研磨。	黒浜式	9	−
36	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	０段多条Ｌｒ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	9	57
37	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	橙	ふつう	単節ＬＲ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	9	−
38	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	附加条縄紋による羽状構成。	黒浜式	9	57
39	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	単節ＬＲ、ＲＬ縄紋による羽状構成。	黒浜式	9	57
40	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	橙	ふつう	０段多条Ｌｒ、Ｒｌ縄紋による羽状構成。	黒浜式	9	57
41	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	無節撚糸紋ｒを横位施紋する。	黒浜式	9	−
42	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	明赤褐	ふつう	無節Ｌｒ縄紋を横位施紋する。	黒浜式	9	57
43	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	２条１単位の撚糸紋Ｒを斜位施紋する。	黒浜式	9	57
44	深鉢	口縁〜胴部2/3	粗砂、細礫、繊維	橙	ふつう	４単位波状口縁。単節ＲＬ、ＬＲ縄紋による羽状構成。	黒浜式	9	57
45	深鉢	胴部片	粗砂	赤褐	良好	C字状爪形紋をめぐらせ、単節ＲＬ縄紋を施す。	諸磯ａ式	9	57
46	深鉢	口縁部片	粗砂、結晶片岩	赤褐	良好	単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。	前期後葉	9	57
47	深鉢	胴部片	粗砂	橙	良好	単節ＬＲ縄紋を横位施紋する。	前期後葉	9	57
48	深鉢	胴部片	粗砂	赤褐	ふつう	単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。	前期後葉	9	−
49	深鉢	口縁部片	粗砂、結晶片岩	赤褐	良好	３条１単位の沈線を横位、弧状に施す。口唇部に斜位の刻みを付す。	前期後葉	9	57

１号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 器台	2/3	口　7.2 高　7.2 底 12.1	西部 4.8	①砂粒、角閃石 ②橙	**外面**　受部横方向篦磨き。脚部縦方向篦磨き。 **内面**　受部横方向篦磨き。脚部横・斜め方向刷毛目後、横ナデ。	13 39
2	土師器 器台	脚部下半 1/4	高(2.8) 底(8.4)	覆土	①角閃石 ②にぶい橙　赤	**外面**　縦方向篦磨き。赤彩。円形の四方透かし。 **内面**　横方向刷毛目。下半ナデ。	13 39
3	土師器 台付甕	略完	高(3.5) 底　8.2	北西部 −2.1	①砂粒、角閃石 ②黄褐	**外面**　縦方向刷毛目後、上半縦方向・下半横方向篦磨き。磨き幅広い刷毛目。**内面**　横方向刷毛目。天井部指頭圧痕。	13 39
4	土師器 高坏	坏部1/4	口(10.0) 高(4.9)	西部 4.8	①砂粒、角閃石、赤色粒②明赤褐	**内外面**　縦方向篦磨き。丁寧な磨きで、光沢帯びる。脚部接合痕明瞭。	13 39
5	土師器 小型甕	3/4	口(12.3) 高 11.7 底　4.5	北西部 1.6	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部上半刷毛目、下半ナデ。肩部に一条の篦描き波状文。口縁部篦描きの縦・横沈線。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部篦ナデ。口縁部と胴部の境刷毛目。	13 39
6	土師器 台付甕	口縁部破片	口(16.6) 高(4.7)	西部 9.2	①細砂粒 ②にぶい黄橙	**外面**　Ｓ字状口縁。口縁部横ナデ。胴部縦方向刷毛目後、横方向刷毛目。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向ナデ後、横ナデ。	13 39

２号住居跡

1	土師器 坏	2/3	口 12.4 高　5.5	北部 −20.0	①砂粒、石英 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部不定方向粗い篦削り。下部ナデの痕跡。 **内面**　口縁部横ナデ。体部ナデ。	15 39
2	土師器 高坏	脚部破片	高(2.7) 底(13.4)	西部 3.9	①雲母、小礫、片岩②にぶい橙	**内外面**　横ナデ。	15 39
3	土師器 甕	底部破片	高(2.5) 底(6.8)	東部カマド −5.5	①白色粒、角閃石、石英②にぶい黄橙	**外面**　ナデに近い篦削り。 **内面**　篦ナデ。	15 39
4	土師器 甑	底部1/4	高(5.2) 底(7.7)	中央部 −10.1	①砂粒、石英、角閃石②暗灰黄	**外面**　縦方向篦削り。 **内面**　縦方向強い篦ナデ。孔周縁面取り。	15 39
5	土師器 甕	底部3/4	高(3.6)	南東部 −13.8	①小礫、角閃石、石英②にぶい橙	**外面**　胴部叩き目。 **内面**　斑点状剥落で調整痕不明瞭。	15 39
6	土師器 甕	底部	高(3.4) 底　5.8	西部 11.1	①砂粒、石英 ②暗灰黄	**外面**　縦・横方向篦削り。一部篦ナデに近い。 **内面**　篦ナデ。剥落。	15 39
7	土師器 甕	口縁部～胴部1/2	口(14.8) 高(28.9)	北東部P2 −16.0	①砂粒、角閃石、赤色粒②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部上半斜め・下半横方向篦削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部篦ナデ。下半剥離で調整痕不明瞭。	15 39

３号住居跡

1	土師器 坏	口縁部～体部 1/3	口(14.4) 高(4.9)	東部 −0.7	①砂粒、石英、角閃石②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部篦削り後、横方向篦ナデ。 **内面**　口縁部～体部上半横ナデ。底面放射状ナデ。	17 39
2	土師器 坏	体部1/4	高(4.1)	南東部 0.3	①砂粒、赤色粒 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部篦削り後、横・斜め方向篦磨き。 **内面**　放射状篦磨き。上部横方向篦磨き。	17 39
3	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(11.6) 高(2.8)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部斜め方向ナデ。 **内面**　横ナデ。	17 39

４号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 高坏	坏部破片	口(13.6) 高(2.8)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②にぶい黄橙	**外面**　横・斜め方向幅広い篦磨き。 **内面**　横方向細かい篦磨き。	19 39
2	土師器 高坏	坏部～脚部1/2	口(17.0) 高(8.1)	中央部P4 −5.1	①砂粒、石英 ②にぶい黄橙	**外面**　坏部斜め方向細かい篦ナデ。脚部縦方向篦ナデ。擦痕。 **内面**　横方向刷毛目後、口縁部ナデ。脚部ナデ。	19 39
3	土師器 壺	略完	口 17.0 高 17.0 底　2.9	東部 −3.1	①小礫、石英 ②明赤褐	**外面**　二重口縁。口縁部縦に細かい篦磨き後、中位～下部横方向篦磨き。胴部上半斜め方向刷毛目後､波状文･横線文。中位～下半縦方向篦磨き後、横方向篦磨き。 **内面**　口縁部上半横方向刷毛目後、縦方向篦磨き。下半横方向篦磨き。	19 39
4	土師器 器台	略完	口(5.5) 高　6.8 底　9.4	北部 32.8	①砂粒 ②浅黄	**外面**　受部横ナデ。脚部縦方向篦ナデ。裾部横ナデ。 **内面**　受部横ナデ。脚部上半ナデ。指頭痕。下半横ナデ。	19 39
5	土師器 台付甕	脚部1/4	高(3.5) 底(8.8)	南東部 −2.6	①砂粒 ②にぶい黄橙	**外面**　縦方向篦削り後、裾部横方向篦削り。 **内面**　横・斜め方向篦ナデ。	19 39
6	土師器 小型甕	略完	口 11.7 高 11.1 底　4.5	北西部 10.9	①砂粒、石英、角閃石 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ後、篦磨き。胴部斜め方向篦削り後、横・斜め方向篦磨き。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部篦ナデ。平滑。	19 39
7	土師器 甕	略完	口 10.7 高 18.3 底　5.8	南東部 −2.6	①砂粒、角閃石 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。口唇部強くナデて尖らす。胴部下半斜め方向・下端横方向篦削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向篦ナデ。	19 39
8	土師器 壺	口縁部破片	口(13.7) 高(2.7)	覆土	①砂粒、石英 ②にぶい黄橙	**外面**　輪積み痕。口唇部横ナデ。 **内面**　横方向篦磨き。	19 40
9	土師器 甕	口縁部 1/4	口(16.6) 高(6.8)	北西部 9.3	①角閃石、砂粒、石英②にぶい黄橙	**外面**　折り返し口縁。折り返し部横ナデ。縦方向刷毛目。 **内面**　横方向細かい篦磨き。	19 40
10	土師器 甕	口縁部破片	口(19.2) 高(5.2)	覆土	①砂粒、石英 ②淡黄	**外面**　上半横ナデ。下半縦方向篦ナデ。削りに近い。 **内面**　上半横ナデ。下半篦ナデ。	19 40

11	土師器 甕	口縁部～ 胴部1/3	口 17.9 高(20.7)	中央・北 東部 7.5	①砂粒、石英、角閃石②灰白	**外面**　口縁部横ナデ。胴部斜め方向箆磨き。一部剥落。 **内面**　口縁部横ナデ後、縦箆磨き。胴部横・斜め箆磨き。	19 40
12	土師器 台付甕	略完	口 19.4 高 31.6 底 10.2	中央部・ 南東部 6.5	①砂粒、石英、角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　S字状口縁。口縁部横ナデ。胴部斜め方向粗い刷毛目後、肩部横方向刷毛目。脚部ナデ。**内面**　口縁部横ナデ。胴部の境刷毛目。胴部上半縦・横方向ナデ。下半刷毛目。脚部ナデ。	20 40
13	土師器 台付甕	口縁部破 片	口(19.0) 高(3.5)	中央・南 東部 6.5	①砂粒 ②浅黄	**外面**　S字状口縁。口縁部横ナデ。下半から縦方向刷毛目。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向ナデ。	20 40
14	土師器 台付甕	完形	口 16.0 高 24.5 底 8.8	東部 5.3	①砂粒、小礫、石英 ②にぶい黄橙	**外面**　S字状口縁。口縁部横ナデ。胴部斜め方向刷毛目後、肩部横方向刷毛目。脚部斜め方向ナデ、中位横ナデ。**内面**　口縁部横ナデ。胴部境・下半横方向刷毛目、上半縦方向ナデ。脚部斜め方向ナデ。一部指頭痕。	20 40

5号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 高坏	坏部破片	口(13.4) 高(2.6)	覆土	①砂粒 ②淡黄　赤褐	**内外面**　横方向箆磨き。赤彩。内面剥落。	23 40
2	土師器 器台	脚部1/2	高(5.2)	南部 22.0	①砂粒、角閃石 ②橙	**外面**　縦方向細かい箆ナデ。円形の三方透かし。 **内面**　横方向箆ナデ。	23 40
3	土師器 小型甕	完形	口　9.5 高　9.0 底　4.7	貯蔵穴内 2.0	①角閃石、赤・白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部上半斜め方向刷毛目。下半～底部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部箆ナデ。	23 40
4	土師器 壺	口縁部破 片	口(11.5) 高(4.5)	中央部 1.3	①角閃石、石英 ②にぶい橙	**外面**　口縁部縦方向箆磨き。胴部横方向箆磨き。 **内面**　横方向箆磨き。	23 40
5	土師器 甕	口縁部破 片	口(16.0) 高(2.0)	中央部 1.5	①砂粒、石英 ②赤褐	**内外面**　横ナデ。	23 40
6	土師器 高坏	坏部破片	口(21.0) 高(4.0)	覆土	①角閃石 ②橙	**内外面**　横方向箆磨き。内面一部剥落。	23 40
7	土師器 壺	口縁部 1/3	口(22.9) 高(8.2)	北部 4.0	①小礫、石英 ②淡黄	**外面**　折り返し口縁。折り返し部横ナデ。横方向箆削り後、縦方向箆ナデ。指頭痕。**内面**　上半横ナデ。下半箆ナデ。	23 40
8	鉄製品 鉄鏃	2/3	長(14.0) 幅　2.4	掘り方 覆土		雁股鏃。鏃身部の一部および茎部先端欠損。	23 40
9	土製品	完形 長　2.0	幅　1.7 厚　1.0	北部 5.0	①角閃石、白色粒 ②灰黄褐	楕円形で厚みのある円盤。片側の中心がくぼむ。用途不明。	23 40

6号住居跡

1	土師器 甕	口縁部破 片	口(17.5) 高(2.5)	覆土	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　横ナデ。 **内面**　横ナデ後、下半斜め方向箆削り。	25 40
2	土師器 高坏	坏部破片	口(23.0) 高(3.4)	覆土	①砂粒②にぶい黄橙　暗赤褐	**内外面**　横方向箆磨き。赤彩。光沢を帯びる。	25 40
3	弥生 壺	胴部破片	高(1.7)	覆土	①砂粒、角閃石 ②橙	**外面**　波状文。 **内面**　横・斜め方向箆磨き。	25 40

7号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	3/4	口 13.8 高　5.5	東部 25.1	①雲母、赤色粒 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。底部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。底部ナデ。	29 41
2	土師器 坏	3/4	口(13.0) 高　5.2	貯蔵穴 覆土	①赤色粒、雲母 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。底部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。	29 41
3	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(13.1) 高(4.6)	南部 4.5	①角閃石 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。底部ナデに近い箆削り。 **内面**　横ナデ。	29 41
4	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(10.1) 高(2.9)	覆土	①石英、角閃石 ②淡黄	**外面**　口縁部横ナデ。体部横方向箆磨き。 **内面**　剥落で調整痕不明瞭。	29 41
5	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(12.8) 高(3.0)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部不定方向箆ナデ。 **内面**　横ナデ。	29 41
6	須恵器 高坏	2/3	口(13.2) 高 10.5 底　8.7	覆土	①白色粒 ②灰	**外面**　轆轤ナデ。坏部～体部回転箆削り。波状文。長方形の三方透かし。 **内面**　坏部・脚部轆轤ナデ。	29 41
7	土師器 小型甕	口縁部～ 胴部破片	口(10.3) 高(4.3)	覆土	①角閃石、赤色粒 ②にぶい褐	**外面**　口縁部横ナデ。胴部調整、剥落で不明。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向ナデ。	29 41
8	土師器 小型甕	口縁部～ 胴部破片	口(12.0) 高(4.9)	覆土	①赤色粒②黒褐 にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部横方向ナデに近い箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向ナデ。	29 41
9	土師器 小型甕	口縁部破 片	口(12.0) 高(3.3)	覆土	①角閃石、赤・白色粒②明赤褐	**内外面**　横ナデ。平滑。	29 41
10	土師器 甕	胴部下半 1/4	高(19.4) 底　7.0	北・中央 部　28.4	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　横方向箆削り後、横・斜め方向箆ナデ。箆削りの下に刷毛目。 **内面**　横・斜め方向箆ナデ。刷毛目状工具痕。	29 41
11	土師器 甕	胴部～底 部 1/3	高(22.3) 底　5.9	北・中央 部　21.0	①角閃石、石英 ②にぶい黄橙	**外面**　胴部上位・下位縦方向、中位横方向箆磨き。頸部刷毛目。 **内面**　箆ナデ。上部刷毛目。	29 41
12	土師器 甕	口縁部～ 胴部上半	口 19.0 高(11.6)	覆土	①角閃石、砂粒、白・赤色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。縦方向箆ナデ。胴部縦方向箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部箆ナデ。	29 41

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
13	土師器 手捏	体部～底部 1/2	高(3.0)	覆土	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　縦方向ナデ。 **内面**　ナデ。剥落で不明瞭。	29 41
14	土師器 甕	底部破片	高(2.0) 底(8.5)	覆土	①白色粒、角閃石 ②にぶい橙　浅黄	**外面**　横・斜め方向箆削り。 **内面**　横方向強い箆ナデ。	29 41
15	石製品 管玉	完形	長(0.6) 径　0.9	南部 14.2	葉蝋石	中心を径１㎜の穴が貫通する。片面は欠損後、再度磨かれている。薄い青緑色。赤色の斑紋が入る。重 1.0g	29 41
16	土師器 甑	1/2	口 21.5 高 26.6 底(9.1)	北部・南東部 4.5	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部上半縦方向箆ナデ。下半横方向弱い箆削り・ナデ。**内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向強い箆ナデ後、縦方向箆磨き。孔周縁面取り。	30 41
17	石器 磨石	完形 長　7.8	幅　6.8 厚　5.3	東部 30.6	細粒輝石安山岩	楕円形。断面は丸みを帯びた三角形。表面左部分と裏面に顕著な研磨面あり。重　395ｇ	30 41

８号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 特殊 器台	口縁部～脚部破片	口(18.6) 高(15.2) 底(14.0)	覆土	①砂粒、角閃石、白色粒 ②にぶい黄褐	**外面**　口縁部横・斜め方向箆磨き。受部突出部横ナデ。下部縦方向箆磨き。脚部横方向箆磨き。 **内面**　横方向箆磨き。	33 41
2	土師器 高坏	脚部下半破片	高(3.0) 底(20.0)	北部 30.0	①角閃石、白色粒 ②淡黄	**外面**　縦方向箆磨き後、裾部横方向箆磨き。 **内面**　横ナデ。箆の圧痕。	33 41
3	土師器 蓋	3/4	摘　4.6 高　9.3 径(16.7)	南部 －22.0	①砂粒、小礫 ②明赤褐	**外面**　縦方向幅の狭い箆ナデ。 **内面**　受部横方向ナデ。脚部上半斜め方向・下半横方向ナデ。	33 41
4	土師器 高坏	脚部下半1/3	高(2.9) 底(8.7)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②にぶい黄褐	**外面**　上半縦方向ナデ。下半横ナデ。円形の四方透かし。 **内面**　上半横方向箆ナデ。下半横ナデ。	33 41
5	土師器 高坏	脚部	高(6.8) 底 14.3	北西隅 6.0	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　縦方向細かい箆磨き後、裾部横方向箆磨き。 **内面**　上半横方向箆ナデ。下半横方向刷毛目。	33 41
6	土師器 壺	胴部破片	高(2.6)	覆土	①砂粒、角閃石 ②橙　浅黄	**外面**　横・斜め方向刷毛目。 **内面**　横方向箆ナデ。	33 42
7	土師器 台付甕	口縁部～胴部	口 15.8 高(20.7)	北部 －2.0	①砂粒 ②灰黄	**外面**　Ｓ字状口縁。口縁部横ナデ。胴部上半縦方向・下半斜め方向刷毛目。肩部２条の横方向刷毛目。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向ナデ。下部横ナデ。	33 42
8	土師器 壺	胴部	高(11.7) 底　4.2	北西隅 5.0	①砂粒、小礫 ②にぶい黄橙	**外面**　横方向箆磨き、剥落で不明瞭。赤彩。 **内面**　横方向箆ナデ後、上部・底部横方向刷毛目。	33 42
9	土師器 壺	底部1/4	高(3.0) 底(15.0)	中央部 44.0	①砂粒、角閃石、白色粒 ②黒褐　にぶい褐	**外面**　縦・斜め方向刷毛目後、横方向ナデ。 **内面**　横・斜め方向細かい刷毛目。	33 42
10	土師器 甕	口縁部～胴部上半破片	口(23.9) 高(12.7)	中央部 33.5	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部横方向刷毛目後、縦・横方向箆磨き。 **内面**　口縁部上半横ナデ。下半縦方向箆ナデ。胴部斜め方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。	33 42
11	土師器 壺	底部1/4	高(2.4) 底(7.0)	中央部 35.0	①砂粒、角閃石、白色粒②橙	**外面**　縦・横方向弱い箆削り。 **内面**　縦・横方向箆磨き。	33 42
12	土師器 甕	底部1/2	高(2.9) 底(7.2)	北部 61.5	①角閃石、砂粒、石英②にぶい黄橙	**外面**　縦・横方向箆削り。 **内面**　箆ナデ。	33 42
13	土製品 手捏	略完	口　1.5 高　2.6	覆土	①角閃石 ②にぶい橙	壺を模倣。中心を直径２㎜程の穴が貫通。 **外面**　縦方向箆磨き。	33 42

９号住居跡

1	土師器 器台	受部1/2	高(6.3) 底(2.7)	北部 床面直上	①砂粒、角閃石、白色粒②浅黄	**外面**　口縁部横ナデ。下半横方向箆磨き。 **内面**　横ナデ後、縦方向箆磨き。	34 42
2	土師器 甕	底部破片	高(1.3)	覆土	①角閃石 ②灰黄	**外面**　胴部横方向箆削り。底部木葉痕。 **内面**　幅の狭い箆ナデ。	34 42

10号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 台付甕	口縁部破片	口(20.0) 高(2.2)	覆土	①砂粒、赤色粒 ②浅黄	**内外面**　Ｓ字状口縁。横ナデ。	38 42
2	土師器 壺	口縁部～胴部	口 17.1 高(10.8)	中央部 27.0	①砂粒、小礫、石英、角閃石 ②浅黄	**外面**　口縁部横ナデ後、一部斜め方向ナデ。胴部横・斜め方向細かい箆磨き。**内面**　口縁部横ナデ。胴部上半横方向箆ナデ。下半横方向刷毛目。一部剥落。	38 42
3	土師器 壺	口縁部～胴部	口 16.4 高(10.4)	西部 8.0	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部上半横ナデ。下半縦方向刷毛目。胴部横方向刷毛目。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	38 42
4	土師器 壺	口縁部～胴部上半	口 16.6 高(16.6)	北部 1.0	①砂粒、石英、角閃石 ②橙	**外面**　折り返し口縁、折り返し部横ナデ。口縁部縦方向箆ナデ。胴部斜め方向箆ナデ後、縦方向幅の狭い箆ナデ。**内面**　口縁部上半横ナデ。下半～胴部上半横方向箆磨き。下半横方向箆ナデ。	38 42
5	土師器 壺	口縁部～胴部上半3/4	口 14.7 高(25.4)	中央部 9.0	①砂粒、角閃石、赤色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向箆削り後、縦方向箆磨き。頸部刷毛目。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向箆ナデ後、上端と下半に横方向刷毛目。	38 42

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
6	土師器 甕	胴部上半 破片	高(14.2)	南西部 8.0	①砂粒 ②浅黄	**外面**　横方向箆削り後、縦方向幅の狭い箆ナデ。頸部刷毛目。 **内面** 横方向箆ナデ後、上半横方向箆磨き。箆の圧痕明瞭。	38 43
7	土師器 甕	胴部下半 ～底部	高(8.7) 底　7.5	南西部 10.0	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　横・斜め方向箆削り。 **内面**　横・斜め方向強い箆ナデ。削りに近い。	38 42
8	土師器 甕	底部破片	高(2.6) 底(7.5)	覆土	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄	**外面**　横・斜め方向丁寧な箆ナデ。光沢を帯びる。 **内面**　箆ナデ。一部不明瞭。	38 43
9	土師器 甕	底部1/4	高(2.4) 底(8.0)	東部P1 21.0	①砂粒、角閃石、 小礫②にぶい黄橙	**外面**　縦・横方向箆削り後、一部箆磨き。 **内面**　箆ナデ。	38 43
10	土師器 甕	底部	高(3.1) 底　5.4	南西部 3.0	①砂粒、小礫 ②にぶい黄橙	**外面**　不定方向ナデ。 **内面**　横方向箆ナデ。工具痕明瞭。	38 43
11	土師器 甕	底部破片	高(2.3) 底(7.0)	覆土	①砂粒 ②にぶい黄	**外面**　上部箆ナデ。下部・底部箆削り。 **内面**　横方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。	38 43
12	土師器 甕	底部	高(1.2) 底　6.0	北西部 床面直上	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　縦方向刷毛目後、横方向箆削り。底部刷毛目。 **内面**　削りに近い強い箆ナデ。	38 43
13	土師器 高坏	坏部破片	口(17.0) 高(3.6)	覆土	①角閃石②にぶい 黄橙　赤橙	**内外面**　横ナデ後、縦・斜め方向細かい箆磨き。赤彩。	39 43
14	土師器 高坏	坏部破片	高(4.7)	中央部 15.0	①角閃石、石英 ②にぶい黄橙	**外面**　上半横ナデ。下半縦方向箆ナデ。接合痕明瞭。 **内面**　横・斜め方向ナデ。	39 43
15	土師器 高坏	坏部1/4	口(12.6) 高(4.1)	覆土	①砂粒、石英、角 閃石②橙	**内外面**　横ナデ後、横・斜め方向の粗い箆磨き。	39 43
16	土師器 器台	脚部1/2	高(4.8)	北西部 21.0	①角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　縦方向幅広い箆磨き。円形の四方透かし。 **内面**　横方向箆ナデ。一部剥落。	39 43
17	土師器 器台	略完	口　8.1 高　8.4 底　9.0	北西部 −2.0	①白色粒、石英、 角閃石 ②にぶい橙	**外面**　受部横方向粗い箆磨き。脚部上半縦方向、下半横方向箆磨き。円形の四方透かし。 **内面**　受部横・斜め方向箆磨き。脚部横方向箆ナデ。工具痕明瞭。	39 43
18	土師器 器台	受部1/2	高(5.6)	北東部 −2.0	①石英、角閃石、 白色粒②浅黄	特殊器台。**外面**　受部横方向箆磨き。脚部縦方向箆ナデ。 **内面**　受部横方向箆磨き。脚部横方向ナデ。	39 43
19	土師器 器台	受部破片	高(2.1)	覆土	①雲母、角閃石、 白色粒 ②にぶい黄褐	特殊器台。**外面**　受部突出部強い横ナデ。下部縦方向箆磨き。脚部横方向箆磨き。 **内面**　横方向箆磨き。	39 43
20	土師器 特殊 器台	略完	口 16.9 高 14.3 底 16.2	西部 9.0	①砂粒、角閃石、 赤色粒 ②浅黄	**外面**　口縁部縦方向箆削り・刷毛目後、上半縦方向箆磨き。中位円形の五方透かし。口唇部横ナデ。受部・脚部縦方向箆磨き。中位円形の四方透かし。**内面**　口縁部横方向箆磨き。底部縦・横方向強い箆ナデ。受部の突出部刷毛目。	39 43
21	土師器 坩	口縁部 1/5	口(10.1) 高(3.6)	中央部 34.0	①角閃石 ②明黄褐	**外面**　縦方向ナデ。頸部縦方向箆削り。口唇部横ナデ。 **内面**　横方向箆磨き。	39 43
22	土師器 無頸壺	口縁部破 片	高(2.2)	掘り方 覆土	①砂粒 ②にぶい橙	**外面**　横方向箆磨き後、縄文施文。上部沈線。 **内面**　横方向箆磨き。	39 43
23	土師器 大甕	胴部下半 1/5	胴最大径 72.8	北部 2.0	①砂粒、小礫、角 閃石、雲母 ②黒　にぶい黄橙	**外面**　横・斜め方向刷毛目後、縦・斜め方向箆磨き。 **内面**　横・斜め方向箆ナデ。細かい刷毛目状工具痕・下部接合痕明瞭。	39 43

11号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 高坏	坏部破片	口(15.6) 高(6.5)	北東部 14.0	①砂粒、赤色粒 ②にぶい橙	**外面**　横方向強い箆ナデ。 **内面**　横方向箆ナデ。一部箆磨きに近い。	41 43
2	土師器 高坏	坏部1/2	口(29.0) 高(7.4)	南東部 4.0	①砂粒、石英 ②にぶい橙	**外面**　縦方向箆磨き後、横・斜め方向箆磨き。 **内面**　縦・斜め方向箆磨き。	41 43
3	土師器 高坏	脚部3/4	高(7.1) 底(11.2)	南東隅 10.0	①砂粒、角閃石、 石英 ②橙	**外面**　脚部縦方向箆ナデ後、上部横方向箆ナデ。裾部横ナデ。 **内面**　坏部不定方向箆ナデ。脚部横方向箆ナデ。工具痕明瞭。坏部の接合部指頭痕。	41 43
4	土師器 高坏	脚部1/2	高(7.2)	南西部P2 −9.5	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　縦方向箆ナデ。 **内面**　縦方向箆ナデ後、一部横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	41 43
5	土師器 器台	受部1/2	口(8.8) 高(2.3)	覆土	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　横・斜め方向箆磨き。口唇部横ナデ。 **内面**　横方向箆磨き。	41 43
6	土師器 高坏	脚部1/2	高(3.8)	北東部 15.0	①砂粒、角閃石、 白色粒②橙　赤褐	**外面**　縦方向箆磨き。三角形の透かし。赤彩。 **内面**　坏部ナデ。脚部横方向箆ナデ。	41 43
7	土師器 器台	脚部破片	高(3.8)	覆土	①角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　縦方向細かい箆ナデ。円形の四方透かし。 **内面**　ナデ。指頭痕。	41 43
8	土師器 小型甕	1/2	口(13.2) 高(8.5)	北東部 −4.0	①砂粒、角閃石 ②淡黄　赤	**外面**　斜め方向後、横方向細かい箆磨き。赤彩。 **内面**　横方向箆磨き。口縁部赤彩。	41 43
9	土師器 壺	口縁部 1/4	口(15.5) 高(7.6)	北東部 14.0	①砂粒、小礫 ②橙	**外面**　縦方向ナデ後、上部・下部横ナデ。 **内面**　上半横ナデ。下半横・斜め方向ナデ。	41 43
10	土師器 台付甕	口縁部破 片	口(14.0) 高(2.3)	覆土	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　S字状口縁。上部横ナデ。屈曲部下縦方向刷毛目。 **内面**　横ナデ。	41 43

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
11	土師器 台付甕	口縁部～ 胴部1/5	口(11.6) 高(4.2)	覆土	①砂粒 ②にぶい黄橙	**外面**　S字状口縁。口縁部横ナデ。胴部縦方向刷毛目後、肩部横方向刷毛目。**内面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向ナデ。	42 43
12	土師器 小型甕	1/2	口(14.8) 高(13.7)	北西部 10.0	①砂粒、角閃石、白色粒②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部上位斜め方向篦ナデ。中位～下位横・斜め方向篦削り。**内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向篦ナデ。工具痕明瞭。	42 44
13	土師器 壺	口縁部破片	口(16.0) 高(4.4)	覆土	①砂粒、角閃石 ②橙	**外面**　横方向篦削り後、縦方向篦削り。一部剥落。 **内面**　横方向篦削り後、横方向篦磨き。	42 44
14	土師器 壺	底部	高(5.2) 底　5.5	南東部貯蔵穴 5.0	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**内外面**　横・斜め方向細かい篦磨き。	42 44
15	土師器 壺	口縁部～ 胴部上半 1/3	口(12.6) 高(10.4)	北西部 −2.0	①砂粒、白色粒、角閃石 ②にぶい橙	**外面**　口縁部上半横ナデ。下半～胴部縦・斜め方向篦ナデ。工具痕明瞭。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向篦ナデ。一部刷毛目状。上部ナデ。	42 44
16	土師器 甕	頸部～肩部破片	高(7.1)	貯蔵穴内 −4.0	①角閃石、砂粒 ②浅黄橙	**外面**　縦・横方向篦ナデ。工具痕明瞭。 **内面**　横方向篦ナデ後、横方向篦磨き。	42 44
17	土師器 甕	底部	高(2.2) 底　6.3	北東部 −2.0	①砂粒、角閃石 ②橙	13と同一個体の可能性。平底。**外面**　篦ナデ。剥落。 **内面**　横方向篦磨き。	42 44
18	土師器 甕	底部1/2	高(1.4) 底(7.4)	東部 8.0	①砂粒、小礫 ②にぶい赤褐　にぶい黄橙	**外面**　篦磨き。剥落で単位不明瞭。 **内面**　不定方向篦磨き。	42 44
19	土師器 小型甕	胴部～底部1/2	高(4.7) 底　5.6	覆土	①砂粒、石英 ②にぶい橙	**外面**　縦・横方向篦削り。上部ナデ。 **内面**　幅広い篦磨き。胴部剥落。	42 44
20	土師器 甕	底部4/5	高(2.9) 底　6.3	北西部 −2.0	①砂粒、小礫、石英②にぶい赤褐	**内外面**　篦ナデ。剥落で単位不明瞭。	42 44
21	土師器 甕	口縁部～ 胴部1/3	口(16.9) 高(25.8)	南西部 6.0	①砂粒、角閃石 ②淡黄	**外面**　口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向篦削り後、篦磨き。 **内面**　口縁部横方向篦磨き。胴部横方向篦ナデ。	42 44

12号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	口縁部～ 体部1/4	口(12.4) 高(5.0)	東部 2.0	①砂粒、角閃石、白色粒②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ後、斜め方向ナデ。体部篦削り後、ナデ。 **内面**　横ナデ。剥落。	46 44
2	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(13.0) 高(3.1)	覆土	①角閃石、白・赤色粒②にぶい褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部横方向篦削り。 **内面**　横ナデ後、放射状の細かい篦磨き。	46 44
3	土師器 坏	1/2	口(13.1) 高　5.6	覆土	①角閃石、砂粒、石英、赤・白色粒 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部篦削り後、ナデ。 **内面**　丁寧な横ナデ後、放射状の幅の狭い篦磨き。	46 44
4	須恵器 𤭯	口縁部 1/2	口(10.0) 高(3.8)	覆土	①小礫 ②灰	**外面**　轆轤ナデ。波状文２条、間に沈線２条巡る。 **内面**　轆轤ナデ。	46 44
5	土師器 高坏	坏部～脚部上半	口(8.2) 高(7.4)	中央部 32.5	①砂粒、角閃石、石英、赤色粒 ②明赤褐	**外面**　坏部上半横ナデ。下半横方向篦削り。脚部縦方向細かい篦削り。 **内面**　坏部斜め方向強い篦ナデ。脚部篦ナデ。	46 44
6	土師器 甕	口縁部破片	高(4.2)	覆土	①白色粒、砂粒、角閃石②浅黄	**外面**　横ナデ後、縦方向櫛描文、横方向波状文２条施文。 **内面**　横ナデ。	46 44
7	土師器 小型甕	口縁部破片	口(12.8) 高(2.6)	覆土	①砂粒、白色粒、小礫、角閃石 ②にぶい褐	**外面**　口縁部縦方向篦ナデ。胴部横方向篦削り。 **内面**　横ナデ後、横・斜め方向篦磨き。	46 44
8	土師器 小型甕	1/3	口(12.6) 高(12.6) 底　5.8	覆土	①石英、角閃石、赤色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向篦削り。下端横方向篦削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向篦ナデ。	46 44
9	土師器 甕	口縁部 1/3	口(17.4) 高(7.5)	東部 6.0	①砂粒、小礫、角閃石②浅黄	**外面**　口縁部横ナデ。胴部横方向幅の狭いナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。下半篦の圧痕。胴部横方向篦ナデ。接合痕明瞭。	46 44
10	土師器 甕	底部破片	高(3.4) 底(10.2)	覆土	①砂粒、角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　胴部斜め方向強い篦ナデ。底部篦削り。 **内面**　刷毛目。剥落で単位不明瞭。	46 44
11	土師器 甕	胴部～底部1/2	高(4.9) 底(6.0)	中央部 27.0	①砂粒、石英、角閃石②にぶい黄橙	**外面**　胴部縦・斜め方向篦削り。底部篦削り。 **内面**　横方向篦ナデ。	46 44
12	石器 磨石	完形 長　8.6	幅　8.7 厚　5.1	覆土	細粒輝石安山岩	三角形状。断面は長方形。全面研磨。特に表面の研磨が顕著である。 重　586ｇ	46 44
13	石器 磨石	完形 長　7.9	幅　8.1 厚　5.0	中央部 床面直上	軽石	円形。断面は楕円形。表裏両面を研磨。特に表面の研磨が顕著である。 重　145ｇ	46 44
14	石器 磨石	完形 長　8.9	幅　7.7 厚　4.9	北部 3.5	軽石	円形。断面は楕円形。表裏両面を研磨。表面はややくぼむ。 重　104ｇ	46 44
15	石器 磨石	完形 長　6.9	幅　6.3 厚　5.4	北部 4.0	軽石	球状。断面は楕円形。全面研磨。表面中央にくぼみがあるが使用によるものかは不明確。重　147ｇ	46 44
16	鉄製品 刀子	1/2 長(7.0)	幅　1.5 厚　0.2	覆土		関部を中心とした破損品。切先・茎尻を欠く。刃部は研ぎ減りが著しい。茎部表面に木質（柄木）付着。	46 44
17	石製品 垂飾	完形 長　2.4	幅　1.7 厚　0.5	中央部 13.0	葉蝋石	三角形。上部径１㎜の貫通。片面穿孔。研磨面取り，細かな研磨痕が残る。薄い青緑色。赤色の斑紋が入る。重　3.5g	46 44

13号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量cm	出土位置cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 鉢	略完	口 11.6 高 4.7 底 4.1	南壁周溝 1.0	①砂粒、石英、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ、胴部箆削り後、横・斜め方向細かい箆磨き。底部箆削り。 **内面** 横方向細かい箆磨き。	49 45
2	土師器 鉢	口縁部～ 胴部破片	口(11.6) 高(3.8)	覆土	①角閃石 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部上半斜め方向軽いナデ。下半横方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	49 45
3	土師器 小型甕	口縁部 1/4	口(11.4) 高(3.4)	北部 5.0	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向強い箆ナデ。口縁部と胴部接合痕明瞭。 **内面** 口縁部横ナデ。箆の圧痕明瞭。胴部縦方向箆ナデ。	49 45
4	土師器 高坏	坏部破片	口(17.0) 高(3.2)	覆土	①砂粒 ②淡黄 にぶい赤褐	**外面** 縦・横方向刷毛目後、縦・横方向箆磨き。 **内面** 縦方向箆磨き。内外面赤彩。	49 45
5	土師器 高坏	脚部破片	高(4.5) 底(14.0)	北壁周溝 −7.0	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面** 縦・横・斜め方向箆磨き。円形の四方透かし上下に２段。 **内面** 上半横方向箆ナデ。下半横・斜め方向刷毛目。	49 45
6	土師器 高坏	脚部上半	高(3.2)	覆土	①砂粒、白色粒② にぶい黄橙 赤褐	**外面** 縦方向箆磨き。円形の三方透かし。 **内面** 横方向ナデ。天井部くぼむ。内外面赤彩。	49 45
7	土師器 高坏	坏部3/4	口 5.8 高(5.9)	南東部 床面直上	①砂粒、石英、角閃石 ②にぶい黄橙	小型坏３個を粘土紐で坏の下部と口縁部を繋いだ高坏。鋭い稜を作り、稜の１箇所と中央に穿孔。黒斑。**外面** 口縁部横ナデ。体部刷毛目後、箆削り。**内面** ナデ後、２個上半に粗い横方向箆磨き。	49 45
8	土師器 壺	口縁部破片	口(13.9) 高(4.1)	覆土	①砂粒、角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面** 上半横ナデ。下半縦方向箆削り。箆の圧痕明瞭。 **内面** 横方向箆ナデ。	49 45
9	土師器 甕	口縁部～ 肩部破片	口(21.0) 高(6.6)	覆土	①角閃石、白色粒 ②淡黄	**外面** 口縁部横ナデ後、縦方向刷毛目。胴部刷毛目後、上部横方向粗い箆磨き。**内面** 口縁部横ナデ。下半横方向刷毛目。胴部横方向箆磨き。	49 45
10	土師器 甕	1/2	口 17.3 高 28.9 底 7.1	北部 3.0	①砂粒、小礫、赤色粒、石英、角閃石②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ。頸部縦方向、胴部上半横・斜め方向箆ナデ。胴部下半縦方向幅の狭い箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。頸部～胴部横・斜め方向箆ナデ。	50 45
11	土師器 台付甕	口縁部破片	口(14.0) 高(2.6)	覆土	①砂粒、石英 ②にぶい黄橙	**外面** Ｓ字状口縁。口縁部横ナデ。頸部わずかに刷毛目。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向ナデ。	49 45
12	土師器 壺	口縁部 3/4	口 19.7 高(9.5)	中央部 −6.0	①砂粒、小礫、石英②にぶい黄橙	**外面** 口唇部横ナデ。口縁部～肩部斜め方向刷毛目後、横・斜め方向粗い箆磨き。**内面** 横・斜め方向刷毛目後、横方向粗い箆磨き。	50 45
13	土師器 甕	口縁部～ 肩部破片	高(7.1)	北部 40.0	①砂粒、石英、角閃石②浅黄	**外面** 口縁 部横ナデ後、斜め方向刷毛目。胴部横方向箆ナデ後、口縁部と逆方向刷毛目。**内面** 口縁部上半横ナデ。頸部～胴部横方向箆ナデ。	50 45
14	土師器 甕	口縁部 1/4	口(16.0) 高(5.4)	東壁周溝 50.0	①砂粒、小礫、片岩②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆ナデ。	50 45
15	土師器 甕	胴部下半 1/2	高(8.7)	中央部 3.0	①砂粒、小礫、石英②にぶい橙	**外面** 縦方向箆ナデ。 **内面** 上半横方向箆ナデ。下半横方向箆磨き。	50 45
16	土師器 台付甕	脚部略完	高(6.1) 底(10.0)	南西部 21.0	①砂粒、角閃石、小礫②にぶい黄褐	**外面** 上半縦方向、下半横方向刷毛目。風化。 **内面** 脚部横・斜め方向箆ナデ。胴部風化。	50 45
17	土師器 甕	底部	高(2.3) 底 6.4	中央部南寄り 23.0	①砂粒、小礫、石英、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面** 胴部横方向箆削り。底部縦・横方向箆削り。 **内面** 縦・横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	50 45
18	土師器 甕	底部	高(2.5) 底 4.2	覆土	①砂粒、角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面** 縦方向細かい箆削り。底部箆削り。 **内面** 横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	50 45
19	土師器 甕	底部略完	高(2.6) 底 4.6	覆土	①砂粒、石英、角閃石②にぶい黄褐	**外面** 横・斜め方向箆削り。底部箆削り。 **内面** 箆ナデ。箆の圧痕。	50 45
20	土師器 甑	底部1/4	高(2.0) 底(4.0)	覆土	①石英、角閃石 ②にぶい橙	**外面** 横・斜め方向箆削り後、ナデ。 **内面** 横・斜め方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。孔周縁ナデ。	50 45
21	土師器 壺	胴部1/5 胴最大径	口(25.5) 68.0	北部 5.0	①砂粒、小礫、雲母、角閃石 ②にぶい黄橙 黒	10住－23類似。 **外面** 縦方向箆磨き。頸部縦方向細かい箆ナデ。 **内面** 横・斜め方向細かい箆ナデ。	50 45

14号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量cm	出土位置cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	略完	口 13.5 高 5.9	南東部 8.4	①砂粒、石英、赤色粒②橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆削り後、丁寧な箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。体部丁寧なナデ後、放射状箆磨き。	55 46
2	土師器 坏	略完	口 13.7 高 5.6	東部 床面直上	①砂粒、角閃石、石英、赤・白色粒 ②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆削り後、丁寧な箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ後、斜め方向ナデ。放射状箆磨き。	55 46
3	土師器 坏	2/3	口(13.3) 高 5.9	貯蔵穴際 33.7	①小礫、石英、角閃石②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部不定方向雑な箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。体部箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	55 46
4	土師器 坏	1/2	口 13.4 高 5.4	貯蔵穴際 4.3	①小礫、石英、角閃石、赤色粒 ②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部横方向箆ナデ、風化で不明瞭。 **内面** 口縁部横ナデ。体部横方向箆磨き。	55 46
5	土師器 坏	2/3	口 12.8 高 5.8	南東部 8.4	①石英、角閃石、赤色粒②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆削り後、縦・横方向箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。体部放射状の密な箆磨き。上端横方向箆磨き。底部「×」の箆記号。	55 46

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
6	土師器 坏	4/5	口 15.4 高 7.5	竈右袖脇 10.9	①小礫、石英、角閃石、赤色粒 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り後、ナデ。風化で単位不明瞭。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横ナデ、縦方向箆ナデ。底部一部剥落。	55 46
7	土師器 坏	3/4	口(13.2) 高 5.4	貯蔵穴際 −3.4	①雲母、砂粒、赤色粒②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。風化で単位不明瞭。 **内面**　横ナデ。	55 46
8	土師器 坏	略完	口 13.0 高 6.7	竈燃焼部 12.4	①砂粒、角閃石 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。風化。 **内面**　口縁部横ナデ。体部ナデ。箆の圧痕。一部剥落。	55 46
9	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(12.8) 高(4.7)	南東部 17.9	①雲母、白色粒 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。削り残し有り。 **内面**　横ナデ。	55 46
10	土師器 坏	3/4	口(13.0) 高 5.5	南東部 −0.5	①角閃石、赤・白色粒②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り後、一部箆ナデ。 **内面**　横ナデ。底部箆の圧痕明瞭。	55 46
11	土師器 坏	底部破片	―	西部 −2.5	①角閃石、石英 ②にぶい黄橙	**外面**　箆削り後、ナデ。箆記号「×」か「十」。 **内面**　放射状箆磨き。	55 46
12	土師器 坏	底部破片	―	貯蔵穴際 −3.4	①石英、角閃石 ②にぶい赤褐	**外面**　箆削り後、ナデ。箆記号「×」か「十」。 **内面**　放射状箆磨き。	55 46
13	土師器 鉢	略完	口 8.4 高 10.1 底 5.0	覆土	①砂粒、石英 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向ナデ後、横方向箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	56 46
14	土師器 鉢	3/4	口 14.6 高 12.3	貯蔵穴際 4.3	①雲母、赤色粒 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向箆ナデ。底部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向箆ナデ。口縁部と胴部接合痕明瞭。	56 46
15	土師器 甕	頸部～胴部1/2	高(12.8)	竈燃焼部 29.4	①砂粒、石英、角閃石、赤色粒 ②にぶい橙	**外面**　頸部縦方向箆ナデ。胴部箆削り後、丁寧な横ナデ。 **内面**　頸部横ナデ。胴部上半刷毛目、下半横方向箆ナデ、一部刷毛目。	56 46
16	土師器 甕	口縁部～ 胴部破片	口(14.6) 高(6.5)	覆土	①砂粒、角閃石、白色粒、石英 ②暗灰黄	**外面**　口縁部横ナデ。頸部縦方向箆削り。胴部横方向箆削り後、斜め方向箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向強い箆ナデ。	56 46
17	土師器 甕	口縁部～ 胴部1/4	口(15.0) 高(11.0)	東部 4.5	①角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。指頭痕。胴部上半縦方向弱いナデ。下半横方向箆削り。**内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	56 46
18	土師器 甕	口縁部～ 胴部上半	口 16.3 高(17.4)	貯蔵穴際 4.1	①砂粒、石英、角閃石②浅黄	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦・横・斜め方向箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	56 46
19	土師器 甕	口縁部～ 胴部中位	口 17.4 高(21.4)	竈右袖脇 7.0	①砂粒、石英、角閃石、赤色粒 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	56 46
20	土師器 甕	口縁部～ 胴部上半	口 15.8 高(20.8)	北東部 1.2	①砂粒、角閃石、白色粒②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦・斜め方向箆削り後、縦・横方向箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	56 47
21	土師器 甕	略完	口 17.2 高 32.2 底 5.6	竈燃焼部 30.4	①砂粒、角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向箆ナデ。風化で不明瞭。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	57 47
22	土師器 甕	略完	口 15.9 高 31.7 底 6.7	竈周辺 13.4	①砂粒、白色粒 ②明黄褐	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦・横・斜め方向細かい箆削り。ナデに近い。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部箆ナデ。剥落。	57 47
23	土師器 甕	胴部下半 ～底部	高(12.0) 底 5.5	P1周辺 −1.0	①砂粒 ②橙	**外面**　胴部縦・横方向箆削り。底部箆削り。 **内面**　横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	57 47
24	土師器 甕	胴部下半 ～底部	高(9.6) 底 5.6	竈右袖脇 13.8	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　胴部縦方向・下部横方向箆削り。底部箆削り。 **内面**　斜め方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	57 47
25	土師器 甕	胴部下半 ～底部	高(13.7) 底 5.0	覆土	①石英、角閃石、赤色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　箆削り後、縦方向箆ナデ。風化で不明瞭。 **内面**　横方向箆ナデ。一部斑点状剥落。	57 47
26	土師器 甕	口縁部～ 胴部1/2	口 17.3 高(24.7)	P1周辺 −6.0	①砂粒、石英、白色粒②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向箆削り。削り残し有り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	58 48
27	土師器 甑	略完	口 24.8 高 27.2 底 8.0	貯蔵穴際 −3.4	①角閃石、白・赤色粒 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。胴部上半縦方向箆ナデ。下半斜め方向箆削り。孔周縁ナデ。**内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。下部横方向箆削り。粘土紐痕明瞭。	58 48

16号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 高坏	坏部破片	口(17.2) 高(3.1)	覆土	①角閃石 ②浅黄橙　赤	**内外面**　縦方向箆磨き。赤彩。	61 48
2	土師器 壺	胴部下半 ～底部	高(5.8) 底 5.6	北部 9.0	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面**　縦方向箆削り後、箆磨き。 **内面**　横・斜め方向箆ナデ。	61 48
3	土師器 台付甕	脚部破片	高(2.3)	覆土	①砂粒 ②にぶい黄橙	**外面**　縦方向刷毛目。 **内面**　胴部箆ナデ。箆の圧痕明瞭。脚部ナデ。	61 48

18号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 小型甕	口縁部～ 胴部1/4	口(10.8) 高(5.2)	覆土	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。指頭痕。胴部横方向箆削り後、幅広い箆磨き。 **内面**　口縁部上半横ナデ、下半箆磨き。胴部横方向箆ナデ後、一部箆磨き。	63 48

19号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量cm	出土位置cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	口縁部～体部1/4	口(16.0) 高(6.0)	竈右脇 2.0	①砂粒、石英、角閃石、赤色粒 ②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。体部横方向篦削り後、縦・横ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。体部縦方向丁寧な篦ナデ。剥落。	66 48
2	土師器 坏	口縁部～体部1/3	口(12.0) 高(7.4)	竈右脇 −2.0	①砂粒、石英、角閃石、赤色粒 ②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。体部横・斜め方向篦削り。一部剥落。 **内面** 口縁部横ナデ。体部丁寧な篦ナデ。平滑。	66 48
3	土師器 甕	口縁部破片	口(15.8) 高(5.2)	覆土	①砂粒、赤色粒 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向弱い篦削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向篦ナデ。接合痕明瞭。	66 48
4	土師器 甕	底部破片	高(4.0) 底(5.8)	竈右脇 1.0	①角閃石、赤色粒 ②にぶい赤褐	**外面** 斜め方向篦削り。 **内面** 剥落で調整痕不明。	66 48
5	土師器 甕	口縁部～胴部破片	口(16.0) 高(7.8)	貯蔵穴際 27.0	①角閃石、白色粒 ②浅黄	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向後、横方向篦削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向篦ナデ。剥落で単位不明瞭。	66 48

20号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量cm	出土位置cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	須恵器 蓋	1/5	口(12.1) 高 4.1	覆土	①砂粒、黒色粒 ②灰	**外面** 轆轤ナデ。天井部回転篦削り。 **内面** 轆轤ナデ。	69 48
2	土師器 高坏	坏部破片	口(13.0) 高(2.9)	覆土	①石英、角閃石、白色粒②橙	**内外面** 横方向篦磨き。	69 48
3	土師器 高坏	坏部破片	口(13.8) 高(3.2)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②橙	**外面** 上半横ナデ。下半横・斜め方向刷毛目。 **内面** 上半横ナデ。下半ナデ。	69 48
4	土師器 高坏	坏部1/3	口(16.4) 高(4.2)	覆土・ 床下	①小礫、石英、角閃石②灰白 赤	**外面** 上半横方向、下半縦方向篦磨き。 **内面** 口縁部横方向篦磨き。縦方向篦磨き。内外面赤彩。	69 48
5	土師器 高坏	脚部破片	高(1.4) 底(17.0)	覆土	①砂粒、白色粒、石英、角閃石②橙	**外面** 横・斜め方向細かいナデ。 **内面** 横ナデ。	69 48
6	土師器 高坏	坏部・脚部破片	口(19.0) 高(13.8) 底(14.0)	覆土	①砂粒、石英、角閃石 ②にぶい黄橙 赤	**外面** 刷毛目後、口縁部横方向、体部縦方向篦磨き。脚部縦・横方向篦磨き。 **内面** 横方向刷毛目後、斜め方向篦磨き。脚部斜め方向刷毛目。	70 48
7	土師器 台付甕	脚部1/4	高(2.4)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②橙	**外面** 縦方向刷毛目。 **内面** 不定方向ナデ。一部横方向刷毛目。	70 48
8	土師器 高坏	脚部破片	高(2.0) 底(9.2)	覆土	①角閃石、白色 ②浅黄 赤	**外面** 縦方向篦磨き。赤彩。 **内面** 横ナデ。	70 48
9	土師器 高坏	脚部破片	高(3.9) 底(9.8)	覆土	①角閃石、白色粒、小礫、石英 ②にぶい黄橙	**外面** 縦方向篦磨き。上下に円孔の四方透かし。 **内面** 横・斜め方向篦ナデ。	70 48
10	土師器 器台	受部2/3	口 7.6 高(3.9)	北東部P4 −2.5	①砂粒、石英、角閃石②橙	**外面** 受部横ナデ。脚部縦方向刷毛目後、縦方向篦削り。 **内面** 受部横ナデ。一部刷毛目。脚部縦方向篦ナデ。	70 48
11	土師器 甕	口縁部破片	高(3.0)	覆土	①角閃石、小礫、石英②浅黄	**内外面** 上半横ナデ。下半縦方向ナデ。	70 48
12	土師器 甕	底部4/5	高(1.4) 底 4.6	覆土	①小礫、石英、角閃石、赤色粒 ②にぶい橙	**外面** 丁寧な篦磨き。 **内面** 篦ナデ。篦の圧痕明瞭。	70 48
13	土師器 小型甕	口縁部～胴部1/4	口(11.6) 高(6.2)	北東部P4 5.2	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ後、縦方向篦削り。胴部縦・横方向篦削り。 **内面** 横方向篦ナデ後、横方向篦磨き。	70 48
14	土師器 壺	胴部1/4	高(6.8)	北壁周溝 32.0	①石英、角閃石 ②にぶい橙	**外面** 横・斜め方向篦磨き。黒斑。 **内面** 横方向篦ナデ。一部刷毛目状。	70 48
15	土師器 鉢	胴部～底部1/2	高(7.1) 底 5.6	南部 26.8	①砂粒、石英、角閃石、白色粒 ②にぶい橙	**外面** 縦方向粗い刷毛目。下部刷毛目後、横方向篦削り。 **内面** 縦方向ナデ。一部刷毛目。	70 48
16	土師器 小型甕	口縁部破片	口(10.6) 高(2.4)	覆土	①砂粒、角閃石、白色粒②明赤褐	**内外面** 横ナデ。	70 48
17	土師器 台付甕	口縁部破片	口(14.8) 高(2.4)	覆土	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面** S字状口縁。口縁部横ナデ。頸部縦方向粗い刷毛目。 **内面** 横ナデ。	70 48
18	土師器 台付甕	口縁部破片	口(16.0) 高(1.9)	覆土	①砂粒 ②浅黄	**外面** S字状口縁。口縁部横ナデ。頸部縦方向刷毛目。 **内面** 横ナデ。	70 48
19	土師器 壺	口縁部破片	口(16.0) 高(2.7)	南東部 24.7	①砂粒、石英、角閃石、白色粒 ②浅黄	**外面** 折り返し口縁。折り返し部横ナデ。下半縦方向刷毛目。 **内面** 横ナデ後、下部横方向篦磨き。一部剥落で単位不明瞭。	70 48
20	土師器 甕	口縁部破片	口(16.8) 高(4.1)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②にぶい黄褐	**外面** 口唇部横ナデ。口縁部縦方向篦削り。一部刷毛目。 **内面** 口縁部横ナデ後、横方向篦磨き。頸部篦ナデ後、一部篦磨き。	70 48
21	土師器 壺	口縁部1/2	口(17.6) 高(5.8)	南部P3 −1.0	①角閃石、小礫、石英、白・赤色粒 ②にぶい黄橙	**外面** 横ナデ後、縦方向篦磨き。風化で単位不明瞭。 **内面** 横ナデ。下半篦の圧痕明瞭。	70 48
22	土師器 甕	口縁部破片	口(20.2) 高(3.4)	覆土	①砂粒、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面** 上半横ナデ。下半細かい刷毛目後篦ナデ。 **内面** 横ナデ。	70 48

23	石製品 砥石	一部欠損 長(8.5)	幅　7.4 厚　6.0	南西部 20.0	軽石	長方形。断面も長方形。一部欠損。側面は平坦。特に右側面は滑らか。表面は凹凸あり。表面に複数の筋状研ぎ痕。	70 48

21号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	口縁部～ 体部1/3	口(13.0) 高(5.3)	貯蔵穴内 −21.0	①角閃石、砂粒、石英②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部横・斜め方向箆削り後ナデ。風化で単位不明瞭。**内面**　口縁部横ナデ。体部放射状の箆磨き。剥落。	72 49
2	土師器 坏	3/4	口　12.8 高　6.2	竈右袖脇 12.0	①砂粒、角閃石、石英、赤色粒 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部箆ナデ。箆の圧痕。平滑。	72 49
3	土師器 坏	略完	口　12.5 高　5.4	竈右袖脇 5.4	①角閃石、白色粒 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。風化。 **内面**　口縁部横ナデ。体部剥落。黒色処理。	72 49
4	土師器 坏	1/4	口(13.6) 高(5.3)	竈右袖脇 5.4	①角閃石、小礫、石英②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部横方向箆ナデ。 **内面**　横方向箆磨き。	72 49
5	土師器 坏	体部～底 部破片	−	貯蔵穴内 −21.0	①角閃石、白色粒、石英②明赤褐	**外面**　箆削り後、ナデ。 **内面**　放射状箆磨き。	72 49
6	土師器 坏	底部破片	−	竈右袖脇 7.5	①角閃石、石英 ②明黄褐	**外面**　箆削り。風化。 **内面**　放射状箆磨き。一部剥落。	72 49
7	土師器 鉢	口縁部破 片	口(11.0) 高(3.6)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	72 49
8	土師器 鉢	略完	口　10.2 高　7.9	貯蔵穴内 −21.0	①砂粒、角閃石、石英②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	73 49
9	土師器 小型甕	完形	口　13.0 高　14.7 底　4.8	竈右袖脇 2.5	①角閃石、白・赤色粒、石英 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部斜め方向箆削り。底部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部上半横方向箆ナデ。下半横・斜め方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	73 49
10	土師器 甕	略完	高(25.4) 底(7.7)	竈右袖脇 2.5	①小礫、石英 ②にぶい黄橙	胴部中位と底部に焼成後穿孔。**外面**　横方向刷毛目後、縦・横・斜め方向箆磨き。**内面**　縦・横方向箆ナデ。風化。	73 49
11	土師器 甕	4/5	口(14.0) 高　29.7 底　3.8	貯蔵穴内 −30.0	①小礫、石英、白色粒 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部上半縦方向箆ナデ。一部刷毛目状。下半斜め方向箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向箆ナデ。	73 49

23号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	1/3	口(14.0) 高　5.6	竈右袖脇 3.6	①砂粒、石英、角閃石②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部細かい箆削り。風化。 **内面**　口縁部横ナデ。体部箆ナデ。	76 49
2	土師器 坏	4/5	口　12.7 高　6.2	貯蔵穴内 −14.7	①角閃石、白・赤色粒、石英 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り後、丁寧な箆ナデ。底部圧痕。黒斑。 **内面**　口縁～体部上半横ナデ。下半横方向箆ナデ。	76 49
3	土師器 埦	2/3	口(11.3) 高　6.6	竈左袖脇 −0.6	①砂粒、角閃石、石英、赤色粒 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削りで不明瞭。 **内面**　口縁部横ナデ。体部箆ナデ。	76 49
4	土師器 鉢	1/3	口(16.6) 高　9.0	竈右脇 −2.9	①砂粒、石英、角閃石②橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部上半縦方向箆ナデ。下半箆削り。風化。 **内面**　口縁部横ナデ。丁寧なナデ。平滑。	76 49
5	土師器 坏	口縁部～ 体部1/5	口(12.2) 高(5.0)	竈左袖脇 −1.4	①石英、小礫、角閃石、白色粒 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部丁寧な箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部ナデ。剥落。	76 49
6	土師器 小型甕	1/2	口(12.3) 高　14.0	南東部P2 −37.5	①砂粒、白色粒、小礫、石英、角閃石②橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部上半横、下半縦方向箆ナデ。一部剥落。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。	76 49
7	土師器 甕	口縁部 1/2	口(18.0) 高(7.2)	東部 1.3	①角閃石、白・赤色粒、砂粒②浅黄	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。	76 49
8	土師器 甕	口縁部～ 胴部破片	口(20.0) 高(8.5)	貯蔵穴内 −53.3	①砂粒、石英、角閃石②浅黄	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向ナデ。一部弱い箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部斜め方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。一部剥落。	76 49
9	土師器 甕	口縁部～ 胴部破片	口(17.0) 高(6.9)	貯蔵穴内 −51.5	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向箆削り。頸部箆ナデ痕。**内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向ナデ後、縦方向強い箆ナデ。輪積み痕明瞭。	76 49
10	土師器 甕	口縁部破 片	口(19.0) 高(4.8)	竈右袖脇 18.3	①石英、角閃石 ②浅黄	**内外面**　横ナデ。	76 50
11	土師器 甕	底部破片	高(3.6) 底　7.1	竈焚口部 −0.7	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　縦・横方向箆削り。 **内面**　横方向刷毛目。一部剥落。	76 50

24号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	1/4	口(12.9) 高(5.1)	覆土	①雲母、赤色粒 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。風化。 **内面**　横ナデ。	77 50
2	土師器 坏	1/4	口(15.8) 高(8.4)	覆土	①砂粒、赤色粒、小礫、角閃石 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り後、一部強い箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。体部上半放射状の幅広い箆磨き。	77 50

遺物番号	器種	残存	法量cm	出土位置cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
3	土師器 高坏	坏部～脚部上半	口(12.8) 高(8.7)	北西部 6.7	①角閃石、白・赤色粒②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ、体部～脚部箆ナデ。 **内面** 坏部横ナデ。脚部ナデ。上部指頭痕。	77 50
4	土師器 甕	胴部	高(8.9)	覆土	①砂粒、雲母、白・赤色粒、片岩 ②にぶい橙	**外面** 横方向箆ナデ。剥落で単位不明瞭。接合面丁寧なナデ、一部指頭痕。 **内面** 横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。上部縦方向ナデ。指頭痕。	78 50
5	土師器 甕	底部1/2	高(1.5) 底(7.1)	覆土	①砂粒、角閃石、赤色粒②橙	**内外面** 箆ナデ。	77 50
6	土師器 甕	口縁部破片	口(13.5) 高(4.6)	覆土	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部斜め方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	78 50
7	土師器 甕	口縁部破片	口(17.0) 高(6.3)	覆土	①雲母、砂粒、赤色粒②にぶい褐	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部箆ナデ。	78 50
8	土師器 甑	底部破片	—	覆土	①白・赤色粒 ②暗灰黄	底部中央に推定径1.8㎝の穿孔。孔周縁は内面に盛り上がる。外面は未調整。	78 50

25号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量cm	出土位置cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	底部破片	—	中央部 1.0	①砂粒、角閃石、石英②橙	**外面** 箆削り。削り残し一部有り。 **内面** 放射状箆磨き。	81 50
2	土師器 高坏	脚部1/2	高(10.8)	南部 3.5	①角閃石、砂粒、石英、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面** 縦方向箆ナデ。裾部横ナデ。 **内面** 横ナデ。上半絞りの痕跡。	81 50
3	土師器 小型甕	3/4	口(9.9) 高(13.2)	東部 −7.0	①砂粒、小礫、角閃石 ②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆削り後、斜め方向丁寧な箆ナデ。肩部縦方向箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部上半縦方向ナデ。下半横方向箆ナデ。一部剥落。	81 50
4	土師器 小型甕	口縁部～胴部1/4	口(9.2) 高(7.3)	覆土	①砂粒、白色粒 ②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。胴部箆削り。剥落で詳細不明。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ後、縦方向ナデ。	81 50
5	土師器 鉢	口縁部破片	口(16.1) 高(3.9)	東部P2内 14.5	①砂粒、石英、角閃石②にぶい赤褐	**内外面** 口縁部横ナデ。胴部斜め方向箆ナデ。	82 50
6	土師器 甕	口縁部1/4	口(17.0) 高(6.6)	貯蔵穴内 −5.5	①砂粒、石英、角閃石②浅黄	**外面** 口縁部横ナデ。下半～胴部縦方向箆ナデ。刷毛目状工具痕。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	82 50
7	土師器 甕	口縁部破片	口(17.4) 高(6.6)	中央部 20.0	①石英、角閃石 ②にぶい黄	**外面** 口縁部横ナデ。胴部斜め方向弱い箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。	82 50
8	土師器 甕	口縁部～肩部1/4	口(23.0) 高(10.6)	東部・北部 床面直上	①砂粒、石英、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部斜め方向箆ナデ後、縦方向細かい箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。一部斜め方向箆ナデ。胴部縦方向箆ナデ後、上部横方向箆ナデ。一部刷毛目状。	82 50
9	土師器 甕	3/4	口 17.8 高 28.3 底 7.2	南東部 4.0	①石英、角閃石、白・赤色粒 ②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部上位～中位縦方向細かい箆ナデ。下位横方向箆削り。下端縦方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。下半不明瞭。	82 50
10	土師器 甕	口縁部～胴部破片	口(19.0) 高(9.3)	覆土	①砂粒、白・赤色粒、石英、角閃石 ②浅黄	**外面** 口縁部横ナデ。胴部斜め方向細かい箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。一部斑点状剥落。	82 50
11	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	口 17.0 高(9.1)	貯蔵穴内 −24.0	①砂粒、石英 ②橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部箆削り後ナデ。単位不明瞭。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。剥落で不明瞭。	82 50
12	土師器 甑	胴部下半1/4	口(10.8) 高(9.4)	南東隅部 7.0	①砂粒、角閃石、赤色粒②浅黄	**外面** 縦方向細かい箆ナデ。一部削りに近い。 **内面** 上半横方向箆ナデ。下半斜め方向箆ナデ。孔周縁面取り。	82 50
13	土師器 甕	胴部～底部	高(6.3) 底 4.8	覆土	①砂粒、石英、角閃石②灰黄	**外面** 縦・斜め方向箆削り。 **内面** 剥落で調整不明。	82 51
14	土師器 甕	底部1/2	高(3.3) 底(6.7)	貯蔵穴内 −13.0	①砂粒、小礫、石英、角閃石、白色粒②にぶい褐	**外面** 横・斜め方向箆削り。下端部削り。底部箆削り。 **内面** 横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	82 51

26号住居跡

遺物番号	器種	残存	法量cm	出土位置cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	略完	口 13.2 高 6.2	東部 1.0	①雲母、赤色粒 ②橙	**外面** 口縁部横ナデ。下半箆の圧痕。体部箆削り。 **内面** 横ナデ。平滑。	85 51
2	土師器 坏	口縁部破片	口(11.0) 高(2.4)	覆土	①砂粒②黒褐	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆ナデ。 **内面** 横ナデ。	85 51
3	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(11.0) 高(4.5)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部横・斜め方向細かい箆ナデ。 **内面** 横ナデ。	85 51
4	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(13.4) 高(4.2)	覆土	①石英、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部弱い箆削り。 **内面** 横ナデ。	85 51
5	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(12.5) 高(3.0)	覆土	①砂粒、白・赤色粒、角閃石 ②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。体部斜め方向箆ナデ。 **内面** 横ナデ。放射状箆磨き。	85 51
6	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(12.0) 高(2.0)	覆土	①角閃石、赤・白色粒②橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。体部放射状箆磨き。	85 51

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
7	土師器 坏	口縁部～ 体部破片	口(12.0) 高(3.2)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部斜め方向箆ナデ。 **内面**　横ナデ。風化で不明瞭。	85 51
8	土師器 坏	口縁部～ 体部1/2	口(14.0) 高(3.5)	覆土	①砂粒、石英、角閃石②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部斜め方向箆ナデ。 **内面**　横ナデ。	85 51
9	須恵器 坏	口縁部～ 体部1/4	口(10.2) 高(3.7)	覆土	①砂粒 ②灰	**外面**　轆轤ナデ。体部下半回転箆削り。 **内面**　轆轤ナデ。	85 51
10	土師器 甕	口縁部～ 胴部破片	高(14.4)	竈内 4.5	①石英、角閃石、白・赤色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。胴部縦方向ナデ。風化で不明瞭。 **内面**　横方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。一部剥落。	85 51
11	土師器 甕	口縁部 1/5	口(14.0) 高(3.4)	覆土	①砂粒、角閃石 ②浅黄	**外面**　口縁部上半横ナデ。下半斜め方向雑なナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。全面箆の圧痕。煤付着。	85 51
12	土師器 甕	底部1/3	高(2.1) 底(6.0)	覆土	①砂粒、角閃石、白色粒②灰黄褐	**外面**　胴部縦方向、下端横方向箆削り。底部箆削り。 **内面**　横方向箆ナデ。箆の圧痕。	85 51
13	鉄製品 棒状品	長(9.1) 幅　0.4	厚　0.3	覆土		断面方形。用途不明。両端を欠く。	85 51

27号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	須恵器 坏	口縁部～ 体部破片	口(9.4) 高(3.7)	覆土	①砂粒、石英、黒色粒②灰	**外面**　左回転轆轤ナデ。体部下半回転箆削り。 **内面**　轆轤ナデ。	90 51
2	須恵器 坏	体部破片	高(3.0)	覆土	①砂粒、石英、黒色粒②灰	**外面**　左回転轆轤ナデ。体部下半回転箆削り。 **内面**　轆轤ナデ。	90 51
3	土師器 坏	1/3	口(13.8) 高(5.2)	中央部 29.0	①砂粒、角閃石、白・赤色粒 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部放射状箆磨き。一部斑点状剥落。	90 51
4	土師器 坏	1/4	口(14.6) 高(5.5)	覆土	①砂粒、角閃石、白・赤色粒②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部上半放射状密な箆磨き。下半ナデ。	90 51
5	土師器 坏	1/4	口(14.0) 高　4.7	北東部 48.5	①砂粒、角閃石、石英、白・赤色粒 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部上半放射状箆磨き。下半ナデ。一部剥落。	90 51
6	土師器 埦	口縁部～ 体部破片	口(16.0) 高(4.7)	覆土	①砂粒、石英、角閃石、白・赤色粒 ②にぶい褐	**外面**　口縁部～体部上半横ナデ。下半箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。体部放射状の疎らな箆磨き。	90 51
7	土師器 坏	2/3	口 13.7 高　5.0	覆土	①石英、白・赤色粒②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部放射状の密な箆磨き。	90 51
8	土師器 坏	1/2	口(14.7) 高　5.6	中央土坑 30.0・ 5.5	①砂粒、角閃石、石英、白・赤色粒 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り後、箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。体部横方向ナデ後、縦方向箆ナデ。平滑。	90 51
9	土師器 坏	1/5		貯蔵穴内 −82.0	①砂粒、石英、角閃石、赤色粒②橙	**外面**　口縁部～体部上半横ナデ。下半弱い箆削り。一部削り残し。 **内面**　口縁部横ナデ。体部放射状の疎らな箆磨き。	90 51
10	土師器 坏	1/2	口 13.0 高(4.7)	北東部 床面直上	①砂粒、石英、角閃石、白・赤色粒 ②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部放射状の疎らな箆磨き。	91 51
11	土師器 坏	1/4	口(14.0) 高(4.8)	覆土	①砂粒、石英、角閃石、白色粒②橙	**外面**　口縁部～体部上半横ナデ。下半箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部放射状の疎らな箆磨き。	91 51
12	土師器 埦	口縁部～ 体部破片	口(13.8) 高(3.5)	覆土	①砂粒、角閃石、白・赤色粒②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部放射状箆磨き。	91 51
13	土師器 坏	略完	口 12.1 高　5.1	中央部 23.5	①石英、角閃石、砂粒、白色粒②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り後、丁寧な箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。体部剥落。	91 51
14	土師器 坏	完形	口 12.2 高　6.2	北東部竈 脇　6.5	①角閃石、砂粒、石英、赤色粒 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り後箆ナデ、ナデの単位不明瞭。 **内面**　口縁部横ナデ。体部剥落。	91 51
15	土師器 坏	略完	口 12.2 高　5.1	北部 32.5	①角閃石、赤・白色粒②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部風化。	91 51
16	土師器 坏	略完	口 12.0 高　4.9	中央部 17.0	①砂粒、角閃石、石英、赤色粒②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部～体部上半横ナデ。下半ナデ。	91 51
17	土師器 坏	1/4	口(12.2) 高　5.3	中央部 35.0	①雲母、砂粒、赤色粒②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。風化。 **内面**　口縁部横ナデ。体部の境強いナデ。体部放射状の疎らな箆磨き。	91 51
18	土師器 坏	1/2	口(10.6) 高　5.1	覆土	①角閃石、白・赤色粒②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部横ナデ。体部横方向の細かい箆磨き。内外面黒色処理。	91 51
19	土師器 坏	1/4	口(12.1) 高(4.4)	覆土	①砂粒、白・赤色粒②明褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部弱い箆ナデ。下部削り残す。 **内面**　口縁部～体部上半横ナデ。下半ナデ。一部剥落。	91 51
20	土師器 坏	口縁部～ 底部破片	口(9.9) 高(5.3)	覆土	①小礫、白・赤色粒②明赤褐	**外面**　口縁部横ナデ。体部上半未調整。下半箆削り。 **内面**　横ナデ後、放射状の疎らで幅の狭い箆磨き。体部下半剥落。	91 51
21	土師器 坏	口縁部～ 体部1/4	口(11.6) 高(3.5)	覆土	①雲母、白色粒 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　横ナデ。	91 51

遺物番号	器種	残存	法量cm	出土位置cm	①胎土 ②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
22	土師器 坏	1/3	口(13.6) 高(4.2)	中央部土坑 2.5	①砂粒、石英、角閃石、白・赤色粒 ②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面** 口縁部～体部上半横ナデ。下半ナデ。	91 51
23	土師器 高坏	坏部・脚部破片	口(18.8) 高(14.6) 底(17.0)	覆土	①角閃石、石英、白色粒 ②浅黄橙	**外面** 坏部・脚部とも横ナデ。放射状の疎らな箆磨き。 **内面** 横ナデ。口縁部放射状の疎らな箆磨き。	91 51
24	土師器 直口壺	略完	口 8.2 高 14.1	中央部 28.0	①砂粒、石英、角閃石②橙	**外面** 口縁部横ナデ後､縦方向細かい箆ナデ。胴部横方向細かい箆ナデ。 **内面** 口縁部横方向箆ナデ。胴部観察不能。	91 51
25	土師器 鉢	1/3	口(16.0) 高 12.5 底(6.0)	西部 34.0	①砂粒、角閃石、白色粒 ②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。胴部上半弱いナデ。下半縦方向箆ナデ後、横方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向箆ナデ。	92 51
26	土師器 鉢	完形	口 13.2 高 9.2 底 4.0	北東部 8.5	①砂粒、石英、角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部上半縦方向、下半横方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。平滑。	91 52
27	土師器 小型甕	略完	口 11.8 高 14.6 底 6.0	北東部 −1.5	①砂粒、石英、角閃石、白色粒 ②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。下半縦方向箆ナデ痕。胴部横・斜め方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	92 52
28	土師器 小型甕	略完	口 10.9 高 14.7	中央部 29.5	①角閃石、砂粒、石英②浅黄	**外面** 口縁部横ナデ。胴部上半縦方向・下半横方向箆ナデ。風化で単位不明瞭。**内面** 口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向箆ナデ。	92 52
29	土師器 小型甕	略完	口 11.4 高 14.0 底 4.7	中央部 29.0	①石英、角閃石、小礫 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆ナデ後、下半横方向箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	92 52
30	土師器 鉢	略完	口 19.4 高 15.2 底 7.4	中央部 30.0	①砂粒、石英、角閃石 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部上半縦方向箆ナデ後、横・斜め方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	92 52
31	土師器 甕	口縁部～胴部上半1/4	口(14.6) 高(12.0)	覆土	①砂粒、石英、角閃石、小礫 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。一部指頭痕。胴部横・斜め方向箆ナデ。一部縦方向箆傷。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。	92 52
32	土師器 甕	口縁部～胴部上半1/2	口 13.0 高(8.3)	覆土	①角閃石、白色粒 ②淡黄	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆ナデ後、横方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ｡胴部横方向箆ナデ｡一部縦方向ナデ｡輪積み痕明瞭｡	92 52
33	土師器 甕	口縁部～胴部破片	口(14.5) 高(4.8)	表採	①石英、白・赤色粒②淡黄	**外面** 口縁部横ナデ。胴部斜め方向箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部斜め方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。	92 52
34	土師器 甕	口縁部 1/4	口(15.6) 高(3.2)	覆土	①砂粒、石英、角閃石、赤色粒②橙	**外面** 上半横ナデ。下半縦方向箆ナデ。 **内面** 横ナデ。	92 52
35	土師器 甕	口縁部破片	口(20.6) 高(5.7)	南西部 24.0	①角閃石、石英、白色粒②にぶい橙	**外面** 横ナデ後、斜め方向箆削り。 **内面** 横ナデ後、横方向強い箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	93 52
36	土師器 甕	4/5	口 15.8 高 28.4 底 6.7	中央部 24.0	①砂粒、角閃石、白色粒 ②橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向細かい箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	92 52
37	土師器 甕	略完	口 16.2 高 26.7 底 6.6	北部P5 −6.0	①雲母、角閃石、白色粒 ②にぶい黄褐	**外面** 口縁部～肩部横ナデ。胴部上半横・斜め方向箆ナデ。下半横方向箆削り後箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横・斜め方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	93 52
38	土師器 甕	胴部3/4	高(23.5)	竈 13.5	①砂粒、石英、角閃石、白色粒②橙	**外面** 縦方向箆ナデ。**内面** 上半縦方向ナデ。下半横方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。下半斑点状剥落。	93 52
39	土師器 甕	胴部～底部	高(24.5) 底 5.7	竈・貯蔵穴 12.0	①角閃石、砂粒、白色粒②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部上位縦方向・下位横方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	93 53
40	土師器 甕	口縁部～胴部1/2	口 14.8 高(15.3)	中央部 35.0	①砂粒、角閃石、白・赤色粒、石英 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆ナデ後、一部斜め方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。箆の圧痕明瞭。	93 53
41	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	口(17.6) 高(14.2)	竈袖 6.5	①砂粒、石英、角閃石②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆ナデ。頸部縦方向箆ナデ痕。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部斜め方向箆ナデ。斑点状剥落。	93 53
42	土師器 甕	口縁部～胴部1/2	口(13.1) 高(26.7)	南西部 32.0	①石英、角閃石、白・赤色粒 ②黒褐	**外面** 口縁部横ナデ後、縦方向強い箆ナデ。胴部横方向箆削り。一部箆ナデに近い。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。剥落。	94 53
43	土師器 甑	略完	口 25.6 高 27.0 底 8.2	貯蔵穴内 −57.0	①角閃石、白色粒 ②橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部箆削り後、縦・横方向箆ナデ。口縁部と胴部接合痕明瞭。**内面** 口縁部横ナデ。胴部上半斜め方向・下半横方向箆ナデ。孔周縁横方向箆削り。	94 53
44	土師器 甑	胴部下半 1/2	高(13.1) 底(8.8)	覆土	①小礫、石英、角閃石②にぶい橙	**外面** 斜め方向箆削り後、縦方向箆削り。下端横方向箆削り。 **内面** 縦方向強い箆ナデ。孔周縁横方向箆削り。	94 53
45	土師器 甑	1/2	口 26.6 高 25.2 底 10.1	北東部 16.0	①砂粒、角閃石、白・赤色粒、石英 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。風化。	94 54
46	土師器 甑	完形	口 22.8 高 26.6 底 8.4	中央部 22.0	①砂粒 ②にぶい黄橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆ナデ。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部上半横方向・下半縦方向箆ナデ。輪積み痕明瞭。	94 54

47	石製品 砥石	1/2 長(4.9)	幅 3.1 厚 1.8	覆土	砂岩	上半部欠損。板状の砥石である。全面丁寧に研磨されている。	94 53

28・29号住居跡

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 高坏	脚部1/3	高(5.3) 底(14.0)	29住西P7 −35.5	①角閃石、砂粒、石英 ②にぶい黄橙　赤	**外面**　縦・横方向細かい箆磨き。円形の四方透かし。赤彩。 **内面**　横方向箆ナデ。裾部横ナデ。	98 54
2	土師器 高坏	坏部1/3	高(16.0) 底(6.1)	28住南部 1.0	①角閃石、白色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部雑なナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。体部横方向箆ナデ。箆の圧痕。	98 54
3	土師器 坏	1/3	高(12.6) 底(5.3)	29住北部 6.0	①砂粒 ②明赤橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　口縁部〜体部上半横ナデ。下半剥落。	98 54
4	土師器 甕	底部1/2	高(5.8) 底(6.0)	29住北部 1.0	①石英、角閃石、白・赤色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　胴部横・斜め方向箆削り。底部箆削り。 **内面**　横方向箆ナデ。	98 54

１号方形周溝墓

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 鉢	1/3	口(10.4) 高 4.1 底(4.1)	南東隅周溝 6.2	①砂粒、角閃石、石英、赤色粒 ②明赤褐	**内外面**　口縁部横ナデ。体部横・斜め方向箆磨き。	101 55
2	土師器 甕	口縁部破片	口(13.0) 高(2.2)	覆土	①角閃石、白・赤色粒②にぶい黄橙	**内外面**　口縁部横ナデ。	101 55
3	土師器 高坏	1/2	口 9.8 高 10.5 底(13.9)	西側周溝 44.0	①石英 ②にぶい赤褐	**外面**　坏部丁寧な箆ナデ。脚部縦方向細かな箆磨き。 **内面**　坏部箆磨き、脚部箆ナデ。	101 55
4	土師器 小型甕	1/3	口(11.2) 高 10.0 底(4.1)	覆土	①砂粒、雲母、石英 ②にぶい黄	**外面**　刷毛目。二次被熱により煤付着。 **内面**　口縁部刷毛目。胴部刷毛・箆ナデ。器壁薄く、粘土は軽い。	101 55
5	土師器 台付甕	略完	口 11.4 高 12.5 底 6.9	西側周溝 54.0	①石英、砂粒 ②にぶい黄橙	**外面**　Ｓ字状口縁。口縁部横ナデ。胴部箆削り。上半粗い箆磨き。脚部箆ナデ・一部刷毛目。 **内面**　箆ナデ。斑点状剥落。	101 55
6	土師器 甕	胴部下半〜底部	高(10.8) 底 5.2	東側周溝 2.0	①砂粒、石英、角閃石②にぶい橙	**外面**　胴部箆削り。 **内面**　箆ナデ。斑点状剥落。	102 55
7	土師器 甕	略完	口 17.9 高 27.9 底 5.7	１号壺棺床面直上	①砂粒、石英、赤色粒 ②にぶい黄橙	**外面**　口縁部〜胴部丁寧な刷毛目。胴部上半煤付着。 **内面**　胴部横方向箆ナデ。口縁部横ナデ。	101 55
8	土師器 壺	口縁部・底部欠損	高(24.0)	２号壺棺 −32.0	①砂粒、小礫、石英、角閃石、白・赤色粒②橙	**外面**　丁寧な箆磨き。器壁堅緻で平滑。 **内面**　横方向箆ナデ。胴部下半斑点状剥落。	102 55

２号方形周溝墓

1	土師器 鉢	完形	口 8.0 高 5.9 底 2.9	東側周溝 4.5	①角閃石、白・赤色粒 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。頸部〜胴部刷毛目。二次被熱で煤付着。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部ナデ。	103 55

３号方形周溝墓

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	須恵器 壺	口縁部破片	口(12.5) 高(3.9)	覆土	①砂粒、角閃石、赤色粒②褐灰	**内外面**　口縁部横ナデ。	105 55
2	土師器 鉢	略完	口 11.6 高 5.0 底 4.1	北側周溝	①砂粒、角閃石、白色粒 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部縦方向粗い刷毛目。 **内面**　口縁部横ナデ。体部ナデ。	105 55
3	土師器 鉢	完形	口 12.6 高 5.9 底 5.0	北側周溝	①砂粒、石英、角閃石、白色粒 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部縦方向粗い刷毛目。 **内面**　口縁部横ナデ。体部ナデ。	105 55
4	土師器 鉢	完形	口 19.3 高 7.6 底 6.9	北側周溝	①石英、角閃石、白色粒 ②にぶい橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部縦方向粗い刷毛目。 **内面**　口縁部横ナデ。体部粗い刷毛目。	105 55
5	土師器 高坏	坏部4/5	口 25.2 高(9.4)	くびれ部 4.0	①砂粒、石英、角閃石、赤色粒 ②にぶい橙	**外面**　丁寧で細かな箆磨き。 **内面**　放射状の丁寧で細かな箆磨き。剥落。	105 55
6	土師器 壺	口縁部破片	高(2.7)	覆土	①砂粒、雲母、石英②にぶい黄橙	**外面**　二重口縁。縦方向細かい箆磨き。 **内面**　上半縦方向・下半横方向箆磨き。	106 55
7	土師器 壺	口縁部破片	高(3.9)	覆土	①砂粒、雲母、石英②にぶい黄橙	**外面**　二重口縁。縦方向細かい箆磨き。 **内面**　上半縦方向・下半横方向箆磨き。	106 55
8	土師器 壺	口縁部・底部欠損	高(29.8)	北側周溝 83.5	①砂粒、石英、角閃石、白・赤色粒 ②淡黄	**外面**　口縁部縦方向箆磨き。胴部丁寧な箆磨き。 **内面**　口縁部横方向箆磨き。胴部横方向・斜め上方向刷毛目。	106 56

9	土師器 小型壺	完形	口 9.3 高 11.4 底 5.5	北側周溝	①砂粒、角閃石、白色粒 ②橙	**外面** 櫛歯状工具で刷毛目。胴部棒状工具で粗い箆磨き。黒斑。 **内面** 口縁部粗い箆磨き後、横ナデ。胴部箆ナデ。	106 55

3号溝

1	石製品 板碑	下半欠損 長(26.9)	幅 16.7 厚 2.6	北西部 15.0	緑泥片岩	板碑の頭部から上半の破片である。中央にキリークが刻まれている。	108 54

1号道

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(14.8) 高(4.5)	覆土	①砂粒、角閃石、白・赤色粒 ②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面** 口縁部～体部横ナデ。	110 56
2	土師器 器台	脚部破片	高(5.0)	覆土	①雲母 ②橙	**外面** 脚部縦方向丁寧な箆磨き。 **内面** 横方向箆削り。	110 56
3	土師器 甕	口縁部～胴部1/4	口(15.0) 高(8.5)	覆土	①雲母、石英、角閃石②橙	**外面** 口縁部横ナデ。胴部縦方向箆削り。 **内面** 口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	110 56

1号溝

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坏	2/3	口 12.5 高(3.5)	覆土	①角閃石 ②橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部未調整部分を残し、体部～底部箆削り。底部墨書。**内面** 口縁部横ナデ。体部ナデ。	118 54
2	瀬戸 擂鉢	体部～底部破片	高(4.8) 底(14.0)	覆土	①砂粒、石英、白色粒②黄灰	**外面** 体部下端回転箆削り。付高台。 **内面** 平滑。	118 54

2号溝

1	須恵器 坏	口縁部～体部破片	口(12.4) 高(3.1)	覆土	①雲母、白色粒 ②暗灰黄	**内外面** 轆轤右回転。轆轤目明瞭。	118 54
2	須恵器 坏	口縁部～体部破片	口(14.6) 高(3.5)	覆土	①雲母 ②灰黄	**内外面** 轆轤右回転。外面轆轤目明瞭。	118 54
3	黒色土器 坏	体部～底部破片	高(2.5) 底(7.0)	覆土	①白・赤色粒 ②浅黄	**外面** 轆轤右回転。体部墨書、則点文字「一生」か。底部糸切り離し。 **内面** 黒色処理。体部横方向箆磨き。底部箆磨き。	118 54
4	須恵器 高台付坏	体部～底部破片	高(1.7)	覆土	①白色粒 ②灰白	**内外面** 轆轤右回転。底部糸切り離し。	118 54
5	須恵器 坏	底部破片	―	覆土	①雲母、白色粒 ②にぶい橙	**内外面** 轆轤右回転。底部糸切り離し。	118 54
6	鉄製品 鎌	3/4 長(12.1)	幅 1.9 厚 2.6	覆土	鍛造鉄器	先端部から1/2までは遺存状態良好。柄に近い部分は錆び膨れが見られる。表面には植物繊維が付着する。	118 54

5・12・13・30・34・41・42・44・46・47号土坑

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 高坏	脚部	高(4.6) 底 8.8	5土坑 覆土	①砂粒、赤色粒 ②橙	**外面** 脚部ナデ・箆削り。 **内面** 箆ナデ。	127 54
2	常滑 甕	胴部破片		12土坑 覆土	①砂粒 ②にぶい黄褐	**外面** 箆ナデ後、部分的に平行叩き。 **内面** 無文当て具による凹凸を横箆ナデによりナデ消す。	127 54
3	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(9.8) 高(3.6)	13土坑 覆土	①雲母、石英、赤色粒②にぶい橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆ナデ・箆削り。 **内面** 口縁部～体部横ナデ。	127 54
4	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(12.4) 高(4.6)	13土坑 覆土	①白色粒 ②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面** 口縁部～体部横ナデ。	127 54
5	中世陶器 鉢	口縁部破片	口(27.4) 高(4.7)	30土坑 覆土	①白・黒色粒 ②灰	**外面** 口縁部横ナデ。胴部上半軽いナデ。 **内面** 口縁部～胴部横方向ナデ。	127 54
6	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(11.4) 高(3.6)	34土坑 覆土	①雲母、角閃石、白色粒②橙	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面** 口縁部～体部横ナデ。	127 54
7	銭	完形		34土坑 覆土		政和通寶（北宋銭　初鋳1111年）	127 54
8	黒色土器 坏	底部破片	高(1.0) 底(6.0)	41土坑 覆土	①雲母、角閃石、白色粒②橙	**外面** 底部糸切離し後、外周回転箆削り。体部下端回転箆削り。 **内面** 黒色処理。丁寧な箆磨き。平滑。	127 54
9	須恵器 坏	体部～底部破片	高(2.1) 底 6.4	41土坑 覆土	①雲母、白色粒 ②黄灰	**外面** 右回転。回転糸切り離し。 **内面** 轆轤目明瞭。	127 54
10	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(12.6) 高(4.9)	42土坑 覆土	①雲母、石英、角閃石、白色粒 ②明赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面** 横ナデ。斑点状剥落。	127 54
11	土師器 坏	口縁部～体部破片	口(14.4) 高(4.2)	42土坑 覆土	①石英、赤・白色粒②赤褐	**外面** 口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面** 口縁部～体部横ナデ。放射状の密な箆磨き。	127 54
12	石製品 砥石	破片 長(5.0)	幅 3.4 厚 2.8	42土坑 覆土	砂岩	断面方形の板状。表面は研磨顕著である。左右側面と裏面はあまり使用されていないためか成形時の加工痕が残る。	127 54
13	須恵器 坏	1/4	口(12.4) 高 3.3 底(7.1)	44・46 土坑 覆土	①雲母 ②明黄褐	**内外面** 轆轤右回転。底部回転糸切り離し。	127 54

14	石製品 砥石	完形 長　3.3	幅　2.4 厚　1.9	46土坑 覆土	泥岩	長方形。断面は方形。表裏面・左右側面は研磨が顕著である。上下面は欠損後研磨している。	127 54
15	土師器 鉢	口縁部破片	口(10.0) 高(3.5)	47土坑 覆土	①雲母、赤色粒 ②橙	**内外面**　横ナデ。	127 54

１号井戸

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	青　磁 碗	体部～底部破片	高(3.0) 底(4.0)	覆土	①砂粒 ②緑灰	底部平底で小型。体部内湾気味に外傾して立ち上がる。高台丁寧な貼り付け。全面厚い釉。**外面**　鎬蓮弁文。	128 56

２号井戸

1	在　地 鉢	体部～底部破片	高(6.8) 底(12.5)	覆土	①白・赤色粒 ②灰	**外面**　指押さえによる器面調整。底部回転糸切り離し。 **内面**　平滑。	128 56
2	常　滑 甕	胴部破片	－	覆土	①砂粒②にぶい褐オリーブ灰	**外面**　全体に釉がかかり、肩部下方に筋状に垂れる。 **内面**　横方向箆ナデ。	128 56
3	石製品 砥石	一部欠損 長(6.8)	幅　9.8 厚　3.1	覆土	軽石	表面には砥ぎの際についたくぼみが、筋状に何条もみられる。	128 56

遺構外

遺物番号	器種	残　存	法量cm	出土位置cm	①胎土　②色調	成・整形・文様の特徴	図版写真
1	土師器 坩	口縁部～体部1/4	口(13.6) 高(6.5)	谷地トレンチ	①雲母、石英、赤色粒②にぶい黄橙	**外面**　口縁部縦方向箆磨き。胴部縦方向箆磨き。 **内面**　口縁部縦方向箆磨き。胴部横方向箆磨き。	131 58
2	土師器 小型甕	口縁部～脚部破片	口(12.2) 高(4.3)	トレンチ	①雲母、石英、白色粒②褐	**外面**　口縁部横ナデ。胴部箆ナデ。 **内面**　口縁部横ナデ。胴部横方向箆ナデ。	131 58
3	土師器 壺	胴部～底部破片	高(4.0) 底(6.0)	谷地トレンチ	①砂粒、雲母、赤色粒②橙	**外面**　底部箆削り。胴部箆ナデ。 **内面**　箆ナデ。	131 58
4	土師器 台付甕	脚部破片	高(4.7) 底(9.0)	谷地トレンチ	①砂粒、雲母 ②にぶい黄橙	**外面**　一部刷毛目。 **内面**　指頭痕。箆ナデ調整。	131 58
5	土師器 坏	口縁部～底部1/4	口(12.0) 高(5.0)	谷地トレンチ	①雲母、赤色粒 ②橙	**外面**　口縁部横ナデ。体部箆削り。 **内面**　横ナデ。	131 58
6	須恵器 坏	口縁部～体部破片	高(2.2)	96-R- 8	①白色粒 ②灰	**内外面**　坏Hの坏身。轆轤右回転。	131 58
7	須恵器 坏	底部破片	高(1.2) 底(7.0)	96-R- 8	①石英、白色粒 ②灰	**内外面**　轆轤右回転。底部箆越し後、外周回転箆削り。	131 58
8	土師器 器台	脚部破片	高(4.2)	96-0-16	①石英、角閃石、白色粒②赤褐	**外面**　三方または四方透かし。箆磨き。器壁堅緻で平滑。 **内面**　箆磨き。	131 58
9	瀬　戸 皿	口縁部～体部破片	口(13.9) 高(2.4)	96-P- 5	①白色粒 ②灰　緑灰	**外面**　轆轤右回転。轆轤目明瞭。口縁部緑灰色の施釉。 **内面**　全面緑灰色の施釉。	131 58
10	須恵器 坏	口縁部破片	口(12.8) 高(2.6)	20住覆土	①白・黒色粒 ②灰	**内外面**　轆轤左回転。平滑で轆轤目の凹凸はあまり見られない。	131 58
11	須恵器 坏	口縁部破片	口(14.0) 高(1.9)	20住覆土	①白・黒色粒 ②灰	**内外面**　轆轤右回転。平滑で轆轤目の凹凸はあまり見られない。	131 58
12	石製品 砥石	一部欠損 長(7.8)	幅　3.1 厚　1.6	C区表採		板状。表面・右側面は滑らか。裏面には細かな凹凸。左側面はあまり使用されていないため、成形時の加工痕が残る。	131 58
13	鉄製品 角棒状品	破片	長(8.5) 幅　0.4 厚　0.4	96-R-11		断面方形。用途不明。両端部を欠く破片。	131 58
14	鉄製品 釘	2/3 長(4.8)	幅　0.5 厚　0.6	96-C- 1		著しく錆化し、層状剥離が見られる。頭巻釘と考えられる。	131 58
15	鉄製品 不明	破片 長(4.3)	幅　1.6 厚　0.2	96-G- 9		断面の形状から刃部の破片と見られる。	131 58
16	銅製品 不明	1/2 径　2.7	幅　1.5 厚　0.3	96-R- 8		リング状。用途不明。刀子などの口金の金具の可能性がある。	131 58
17	銅製品 不明	完形 径　2.2	幅　0.7 厚　0.2	96-L-16		リング状。用途不明。薄い銅板を合わせている。ひしゃげて変形したものと思われる。	131 58
18	鉛製品 鉄砲玉	完形	径　1.3	B区表土		球状。重 11.4g	131 58
19	鉛製品 鉄砲玉	完形	径　1.1	B2区表土		球状。重 6.8g	131 58
20	石製品 模造品	完形	径　4.3 厚　1.2	表採	滑石	円盤状の製品である。上面はかまぼこ上に膨らみをもつ。下面は平坦である。上下面ともに研磨痕が残る。重 33.6g	131 58
21	石製品 剣形模造品	完形	長　3.6 幅　1.5 厚　0.4	96-G- 1	滑石	刃部は細かな剥離により刃を作り出している。背部は幅があり、細かな擦痕が残る。先端部分に小孔が付く。重 3.6g	131 58
22	銭	完形		96-C- 1		開元通寳（唐銭　621年初鋳）	131 58
23	銭	完形		４住覆土		皇宋通寳（北宋銭　1038年初鋳）	131 58

第５章　自然科学分析

分析の目的と試料採取地点

富田高石遺跡では、遺跡の理解を深めるために、下記の自然科学分析をパレオ・ラボに委託して実施した。分析結果は、第４章の記述に反映させたが、分析内容の詳細を本章に掲載した。

炭化種実同定は、27号住居跡の覆土と土器の中にあった土を洗浄して行った。集落内では一般的な住居のひとつで、時期は６世紀前半である。撹乱が少なく重複もないことから対象として選んだのであるが、貯蔵穴には２度の造り替えの跡が認められた。遺物の出土状態にも、カマド両脇の壁際と住居の中央部とでは時差があり、前者は使用時の状態をそのまま残し、後者は少し遅れた住居廃絶後のまつりの跡のようである。床に甕や鉢がひとかたまりに置かれていた。

分析の目的は、どんな種実があるのかはもちろんのこと、土器の中に何が入っていたのか、はたして、それらが食糧の残滓なのかなど、知ることである。試料は、覆土全体から層ごとに採取した。土器は、壁際から出土した４点と中央部にある５点から採取した。甕と坏、甕は煮炊きには不向きな小型品である。同定できたのは、木本４分類群、草本14分類群である（第２表）。考察では、そのうちのモモ、イネ、コムギ、アワをはじめとした10分類が食用ではないかと判定された。その中でもイネ、コムギ、ムギ類の多いことが指摘されているが、調査の前までは畑として耕作していた箇所でもあり、現生種は試料から取り除いたと明記されているように混入はあり得る。まして陸稲や麦は、採取地点では最近までの栽培種であった。試料は、覆土の下層だけではなく上層もあり、試料の評価では慎重さが必要であろう。

栽培植物以外の雑草からは、住居跡周辺の環境が言及されている。ウキヤガラは湿地を好むとされ、タデ属、シロザ近似種などは路傍や畑地のような乾き気味の場所が予想されている。周囲に自生していたのか、それとも作物に付いてきたのか、出土に至る経緯が新たな関心となっている。

また、虫えい（虫こぶ）が多くみられた。これについても、住居内に持ち込まれた植物の葉などに付着していたのではないかと言われている。イネとの関係を特定したいところであるが、食用以外でもカマドの燃料、住居内に敷いていたかもしれない藁など、日常生活の場で思い浮かぶことが多い。

亀泉坂上遺跡では、貯蔵穴内にあった甕の中の土からプラント・オパールが抽出されている（2009）。籾殻を付けた、コメの保管方法が推定できるようで、これまでに知られている炭化米とは違った情報である。

分析は、種実を検出することが第一であるが、栽培植物だけが有効なわけではなく、雑草からでも周辺の環境に言及することできる。ただし、当時のものがすべて残されていたわけではないので、評価するにあたっては花粉分析など他の分析と合わせて検討する必要がある。

なお、27号住居跡については、P91～P99を参照。また、分析結果にある土坑番号、遺物番号は、一部を変更した。

上記分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。分析結果は下記のとおりである。

1　富田高石遺跡から出土した炭化種実

1　試料と方法

炭化種実の検討は、27号住居内より得られたものについて行った。試料の内訳は、27号住居とのみ記されたもの（125試料）、P-番号の付いたもの（９試料）、１層土（８試料）、２層土（24試料）、４層土（１試料）、５層土（２試料）、７層土（３試料）、８層土（２試料）、13層土（７試料）、14層土（１試料）、上位面（４試料）、上位面１号坑（２試料）、上位面２号坑（１試料）、上位面３号坑（３試料）、上位面

４号坑（19試料)、27号住居内土坑Ⅰ～Ⅲ層（７試料)、同Ⅳ層土（２試料)、カマド焚口部焼土（１試料）の合計221試料である。各試料は､土嚢袋に入った堆積物試料であり、水洗およびフローテーションを行った。炭化種実の採集・同定・計数は、肉眼採集および浮遊物の回収により得られた残渣から実体顕微鏡下で行った。

２．出土した炭化種実

出土した炭化種実は、木本４分類群、草本14分類群であった。木本で得られたのは、コナラ属、モモ、サンショウ、ブドウ属であり、草本はイネ、コムギ、ムギ類、ヒエ、アワ、ヒエーアワ、キビ族、ウキヤガラ、タデ属、シロザ近似種、ササゲ属、マメ科、エノキグサ、シソ属であった。その他に、虫えい、菌核が得られた。

各試料から出土した炭化種実の一覧は、第１表に示し、主な地点（層位）別の出土状況を第２表にまとめた。ただし、第１表については、炭化種実（虫えい、菌核も含め）として同定し得るものを全く含んでいなかった試料については一覧表から省いた。また､試料中には､未炭化で状態の新鮮な種実類（ヒノキ小枝、イヌビエ、エノコログサ属、イネ科、ツユクサ属、サナエタデ近似種、ヤナギタデ、イヌタデ近似種、ギシギシ属、ヒユ属、タケニグサなど）が含まれており、芽吹いているものも見られた。これらは、現代のものの混入と考えられるので、一覧表中から省いた。以下に、地点（層位）別に炭化種実の記載を示す。

27号住居（125試料)：119試料から炭化種実（虫えい、菌核を含む。以下同）が得られた。木本は、コナラ属炭化子葉、ブドウ属が得られた。草本は、エノキグサが多産し、イネ、コムギも比較的目立った。他に、ムギ類、ヒエ、アワ、キビ族、ウキヤガラ、タデ属、シロザ近似種、ササゲ属、マメ科が得られた。これら以外に、虫えいが多産した。

27号住居P-番号試料（９試料)：P-145（編集註：未掲載）を除く８試料から炭化種実が得られた。木本は、ブドウ属のみが得られた。草本は、イネ、コムギが目立ち、アワ、シソ属も僅かに得られた。

１層土（８試料)：全試料から炭化種実が得られた。木本は、モモ、ブドウ属が僅かに得られた。草本は、コムギが非常に多産し、イネも目立った。他に、ムギ類、ササゲ属、マメ科、エノキグサが僅かに得られた。これら以外に、虫えいが多産した。

２層土（24試料)：23試料から炭化種実が得られた。木本は、ブドウ属が多産し、モモ、サンショウが僅かに得られた。草本は､イネ､コムギが多産し、ムギ類、ヒエ、マメ科、エノキグサ、シソ属も得られた。これら以外に、虫えいが多産した。

４層土(１試料)：イネ､コムギ､キビ族が得られた。

５層土（２試料)：１試料から虫えいのみが得られた。

７層土（３試料)：全試料から炭化種実が得られた。木本は、モモ、ブドウ属が僅かに得られた。草本は、イネ、コムギ、ヒエーアワが得られた。

８層土（２試料)：２試料からブドウ属、イネ、コムギが僅かに得られた。

13層土（７試料)：６試料から炭化種実が得られたが、コムギ、エノキグサが僅かであり、大半が虫えいであった。

14層土（１試料)：エノキグサと虫えいが僅かに得られた。

上位面(４試料)：４試料から炭化種実が得られたが､イネ､エノキグサが僅かであり､大半は虫えいであった。

上位面１号坑(２試料)：虫えいのみが僅かであった。

上位面２号坑（１試料)：ヒエーアワ、マメ科が僅かに得られた。

上位面３号坑（３試料)：３試料から炭化種実が得られたが、虫えいの他には、キビ族とエノキグサが僅かであった。

上位面４号坑（19試料)：全試料から炭化種実が得られた。草本のみで､エノキグサが目立ち､イネ、コムギ、ヒエーアワも得られた。これら以外に、虫

えいが多産した。

27号住居内土坑Ⅰ～Ⅲ層（7試料）：6試料から炭化種実が得られた。木本はブドウ属が僅かであり、草本はイネ、エノキグサの他に、コムギが僅かに得られた。これら以外に、虫えいが多産し、菌核も僅かに得られた。

同Ⅳ層土（2試料）：2試料からエノキグサ、虫えいが得られた。

カマド焚口部焼土（1試料）：炭化種実は全く得られなかった。

3．考察

検討した結果、27号住居内から出土した炭化種実のうち、栽培植物と考えられるものは、モモ、イネ、コムギ、ムギ類、ヒエ、アワ、ヒエ－アワ、キビ族、ササゲ属（アズキやリョクトウの類）、シソ属であり、これらが食用とされていたと推定される。このうち、イネ、コムギは非常に多産しており、特に1層土、2層土で多産する。ムギ類としたものは、状態が悪く同定は控えたが、おそらくコムギと予想され、コムギが多産するにもかかわらず、明らかなオオムギが出土しない点は注目される。ヒエ、アワを含むキビ族は、出土個数は僅かながらも様々な層位（地点）で出土する。

栽培植物以外では、有用植物であるコナラ属、サンショウ、ブドウ属の利用の可能性が考えられる。このうち、果実が生食可能な漿果であるブドウ属は多産し、イネやコムギと同様、2層土で多産する。その他は、湿地（ウキヤガラ）、あるいは路傍ないし畑地のような乾き気味の場所（タデ属、シロザ近似種、マメ科、エノキグサ）の雑草と予想されるものであり、住居周辺の環境に由来するか、上記作物に付随するなどして住居内に混入したのではないだろうか。なお、虫えい（虫こぶ）が多産するが、虫えいが付いているような植物体（葉など）が住居内に持ち込まれていたと考えられる。

4．主な炭化種実の形態記載

コムギ　*Triticum aestivum* Linn.　炭化胚乳

丸こく、楕円形ないしほぼ円形。厚みがあり、断面も楕円形ないしほぼ円形。一方の面には、基部から頂部かけて一本の溝が走る。発泡して状態の悪いものも多いが、外形・胚・溝などが辛うじて認められるものはコムギとした。発泡・欠損が更に著しいものは、ムギ類として同定を控えた。

ヒ　エ　*Echinochloa crus-galli* P.Beauv. var. fumentacea Trin.　炭化胚乳

アワよりやや大きいが、厚みは薄い。胚は幅が広くて長く、臍は幅が広いうちわ型。下端が尖り気味となるものもみられる。

アワ　*Setaria italica* Beauv.　炭化胚乳

小さいが厚みがあり丸こい。胚は長く、臍は幅が狭い長楕円形。なお、ヒエ－アワとしたものは、各々の区別が困難であった。胚が長いことは分かるが、発泡・欠損で状態は悪く、臍は確認できない。キビ族としたものは、更に状態が悪く、胚や臍などは確認できない。

タデ属　*Polygonum*　炭化果実

二面体のものと三稜形のものがある。二面体のものは、卵形ないし卵円形で表面は平滑。長さ1.4mm前後、幅1.1mm前後。三稜形のものは、倒卵形で長さ1.3mm程度、幅1.0mm程度。

ササゲ属　*Vigna*　炭化種子

1層土より出土したものは、一方が欠損するが状態は比較的良好である。長さは6.2mm以上であり、おそらく元は8～9mm程度。幅は4.3mm、厚さ4.2mm程度。臍は欠損しているものの、確認でき、幅2mm台の細長い楕円形である。もう一方の出土種子は、臍は確認できないが、長さ6.8mm、幅4.9mm、厚さ4.1mmと大きいのでおそらくササゲ属と思われる。

マメ科　Leguminosae　炭化種子

長さ1.7～4.0mm、幅1.3～2.9mm、厚さ1.1～2.3mm程度。外形・大きさからおそらく野生種と思われる。

エノキグサ　*Acalypha australis* Linn.　炭化種子

倒卵形で下端は尖る。表面には微細な網目紋がある。エノキグサは、多産したが、未炭化であるよう

に見えるものも含まれていた。試料中には、明らかな現代のものの混入と考えられる種実類がしばしば含まれていたので、エノキグサの一部も混入の可能性がある。

シソ属　*Perilla*　炭化果実

倒卵形で表面には網目紋があるが、やや不明瞭である。２層土出土果実は、長さ1.8ないし1.9㎜程度。P-144（編集註：報告番号27）出土果実は長さ2.2㎜程度。シソ属にはシソ、エゴマが含まれるが、P144出土果実は、大きさとしてはエゴマと思われる。

虫えい（虫こぶ）

大きさ・外形は様々であるが、一方の面は角の丸まった台形ないし円柱形で、もう一方の面は中央部に窪みのある円形を呈するものが大半である。欠損したものを見ると、内部は均質で中心部に空洞がある。

編集註

１、27号住居跡内土坑は、53号土坑のことである。覆土は、P116に掲載した。7試料が採取されている。時期は、中世か、それ以降の時期とみられる。試料の評価は、他の試料とは別途にして考えたい。

２、番号を変更した土器は、次のとおりである。

P46→報告番号29、	P47→報告番号28、
P48→報告番号24、	P49→報告番号30、
P58→報告番号15、	P141→報告番号37、
P143→報告番号26、	P144→報告番号27

２　石材分析

７号住居跡17の管玉、12号住居跡17の垂飾については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により石材分析がされ、葉蝋石との判定結果がある。

葉蝋石とは、稀少鉱物のモナザイトを含有し、産出地は新潟県と長野県の一部に限られている。モナザイトは、リン酸塩基物の一種。ペグマタイト、花崗岩、変麻岩、砂岩などに含まれる。通常、小さな孤立した結晶として発生する。国内では、岐阜県南東部苗木地方や福島県石川地方の小規模な漂砂鉱床の試掘例があるだけで、資源的な価値のある鉱床は存在しない（松原聡保育社『日本鉱物図鑑』1990より引用）。

色調は、淡い黄緑色でヒスイによく似ている。そのために利用されたものとみるのが素直で、ヒスイと区別するほど意識があったのかどうか。分析者からは、どういう流通経路をたどって原産地から搬入されたのか関心が持たれている。

３　プラント・オパール分析

本遺跡の西にある大泉坊川沿いの低地は、富田漆田遺跡として調査した。Ａ区は、現在の河道を含む最も低い所で、調査では畦で区画されたＡｓ-Ｂ下の水田が検出され、さらに下層には水田特有の強い粘性を帯びた黒色土が堆積していた。Ｈｒ-ＦＡ、Ａｓ-Ｃは堆積したのであろうが点々と残るだけで、水田を検出することができなかった。そのため上記分析を実施したのであるが、結果は水田の存在を肯定するものであった。この結果は、富田漆田遺跡（2006）では報告していないので、一部をここに掲載してその代わりとしたい。

検出した結果は、次のようである。

Ａ区基本土層北地点

Ａｓ-Ｂ直下	5,300個/ｇ
Ａｓ-Ｂの下層	3,700個/ｇ
Ｈｒ-ＦＡ直下	1,500個/ｇ

Ａ区基本土層南地点

Ｈｒ-ＦＡ直下	4,500個/ｇ
Ａｓ-Ｃ混土層	800個/ｇ

水田存否の基準となる5,000個/ｇからすると、高い数値ではない。しかも地点により差がある。しかし、分析を実施した萱野Ⅱ遺跡でも同様な結果が出ていて、土壌の堆積に原因があるのかとされている（2006）。

参考文献

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第445集『亀泉坂上遺跡』（2008）同第372集『富田漆田遺跡・富田下大日遺跡』（2006）同第402集『萱野Ⅱ遺跡』（2006）

第1表炭化種実出土一覧表（その1）　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼遺構・層位など		27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住
コナラ属	炭化子葉																	(1)								
イネ	炭化胚乳	1															(1)							1		
ムギ類	炭化胚乳		1			1																				
アワ	炭化胚乳																			1						
ウキヤガラ	炭化果実										1															
エノキグサ	炭化種子					1				1					1					(1)						1
虫えい		2 (3)	2 (1)	3 (4)	7 (3)	4 (10)	(2)	1 (1)	(1)	6 (10)	(3)	3 (1)	5	(1)	(1)	1 (1)	1 (2)	2	2 (1)	1	4 (2)	4 (3)	2 (3)		1 (1)	

第1表炭化種実出土一覧表（その2）　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼遺構・層位など		27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住
イネ	炭化胚乳					1	1														1 (2)					
タデ属	炭化果実																				1					
シロザ近似種	炭化種子												1													
エノキグサ	炭化種子			2	1			1							1						1	(1)	3			
虫えい		6 (1)	3 (1)	2 (1)	1 (1)	3 (1)	2 (1)	4	6	1 (1)	(1)	(1)		4 (2)		1 (4)	1	1 (3)	4 (10)	1 (2)	2 (2)	(3)	1 (5)	4 (5)	1 (5)	(6)

第1表炭化種実出土一覧表（その3）　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼遺構・層位など		27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住
ブドウ属	炭化種子																						(1)			
イネ	炭化胚乳					(1)	1																			
コムギ	炭化胚乳															1	1									
ヒエ	炭化胚乳				1																					
アワ	炭化胚乳																									1
エノキグサ	炭化種子																	1 (1)								
マメ科	炭化種子																									1
虫えい		2 (4)	4 (3)	3 (2)	(3)	(1)		(1)	(1)	(2)	2 (1)	1 (2)	1	(2)	(1)	3 (3)	2 (2)	(1)	2 (3)	6 (8)	2 (2)	(2)	4 (2)	1 (3)	(4)	2 (2)

第1表炭化種実出土一覧表（その4）　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼遺構・層位など		27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住
イネ	炭化胚乳				1 (1)		1 (1)																			
コムギ	炭化胚乳								1										1				1			
ムギ類	炭化胚乳						1																			
ヒエ	炭化胚乳			2																						
キビ族	炭化胚乳														1										1	
タデ属	炭化果実																					1				
エノキグサ	炭化種子				1						1							1			2 (2)	2		2		
ササゲ属	炭化種子																									1
マメ科	炭化種子															1				1						
虫えい		4 (7)	6 (7)	3 (2)	(3)	2 (6)	1 (2)	1 (2)	1 (1)	1 (5)	1	(2)	4 (8)	3 (9)	4 (5)	2 (8)	5 (6)	1 (4)	6 (6)	4 (7)	(1)	9 (4)	2 (3)	2	1 (1)	(1)

第1表炭化種実出土一覧表（その5）　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼遺構・層位など		27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住
																					P-46	P-47	P-48	P-49	P-58	P-141
																					2層	2層	2層	2層	2層	
ブドウ属	炭化種子																						1	1	(1)	
イネ	炭化胚乳		1																		1 (1)		1 (1)	(3)	1	
コムギ	炭化胚乳																1	1			1	1		4 (1)		
アワ	炭化胚乳		1																					1		
タデ属	炭化果実							(1)																		
エノキグサ	炭化種子						1				(1)															
虫えい		1	3 (6)	2 (2)	(4)	(3)	(4)	(1)	(3)	(1)	1 (2)	3 (4)	2 (2)	2 (5)	3 (3)	2 (6)	2 (4)	1 (5)	1 (2)	(2)				(1)		1 (1)

第1表炭化種実出土一覧表（その6）　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼遺構・層位など		27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住
		P-143	P-144	1層土	1層土	1層土	1層土	1層土	1層土	1層土	1層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土
モモ	炭化核					(2)																		(1)		
サンショウ	炭化種子																								1	
ブドウ属	炭化種子	1			1				1					1			5		1	1			1	2	1	1
イネ	炭化胚乳			2 (2)	2 (1)		3 (1)	1 (2)	4 (2)	1 (6)	2		1				1		6				1	6 (1)	2 (1)	
コムギ	炭化胚乳			6	8		34	1	11 (2)	16 (3)									3	1					1	
ムギ類	炭化胚乳			1 (1)										3												
ササゲ属	炭化種子				1																					
マメ科	炭化種子								(1)																2	
エノキグサ	炭化種子				1							1									1			1		
シソ属	炭化果実		1																							
虫えい				1 (1)	3	3 (3)	4	3 (2)	2 (2)	2 (2)	3 (1)	4 (1)	1	1 (3)	1	1 (1)	1 (1)	2 (2)	2		4 (6)	1 (3)	2 (2)	(3)	4 (1)	3

第1表炭化種実出土一覧表（その7）　　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼遺構・層位など		27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住
		2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	2層土	4層土	5層土	7層土	7層土	7層土	8層土	8層土	13層土	13層土	13層土	13層土	13層土	13層土	14層土	上位面	上位面	上位面
モモ	炭化核				(2)							1														
ブドウ属	炭化種子				8		1 (1)					1			1											
イネ	炭化胚乳			1	1 (2)	(1)	6 (3)	1	1	3 (2)				3	1										1 (1)	
コムギ	炭化胚乳		2				4 (3)		2	3		1	1			1		1				1				
ヒエ	炭化胚乳				1		1																			
ヒエーアワ	炭化胚乳													1												
キビ族	炭化胚乳									1																
エノキグサ	炭化種子				1														1				2	1		
シソ属	炭化果実						1																			
虫えい		(4)		(1)	2 (1)	1 (5)	1 (3)	2 (3)	5 (2)	1	2 (1)	1	1 (6)	1 (3)	1	1 (2)	2	2 (1)		4 (3)	2	1 (2)	(3)		1 (1)	1 (12)

第1表炭化種実出土一覧表（その8）　　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼遺構・層位など		27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住
		上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面	上位面
			1号坑	1号坑	2号坑	3号坑	3号坑	3号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑	4号坑
イネ	炭化胚乳																									1
コムギ	炭化胚乳													1			1	1								
ヒエーアワ	炭化胚乳				1											1										
キビ族	炭化胚乳							1																		
マメ科	炭化種子				1																					
エノキグサ	炭化種子	2					1			3	1	2			1	2			1					(1)		
虫えい		3 (4)	(1)	2 (1)	5	1 (1)	(2)		2 (1)	2	3 (1)	1 (2)	2 (3)	2 (3)	3 (4)	5 (1)	5 (4)	3 (4)	3 (4)	4 (5)	4 (2)	3 (6)	1 (6)	5 (7)	4 (11)	(2)

第1表炭化種実出土一覧表（その9）　　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼遺構・層位など		27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住
		上位面	内土坑	内土坑	内土坑	内土坑	内土坑	内土坑	内土坑	内土坑
		4号坑	Ⅰ～Ⅲ層	Ⅰ～Ⅲ層	Ⅰ～Ⅲ層	Ⅰ～Ⅲ層	Ⅰ～Ⅲ層	Ⅰ～Ⅲ層	Ⅳ層土	Ⅳ層土
ブドウ属	炭化種子		1							
イネ	炭化胚乳			1	1	1				
コムギ	炭化胚乳						1			
エノキグサ	炭化種子			1	2	1			2	2
虫えい		3 (1)	(3)	4 (1)	1	2 (5)	3 (2)	3	2 (1)	3
菌核				1						

第２表　炭化種実の層位別出土状況　　数字は個数、() 内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼	遺構・層位・試料数	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	27号住	合計
			P-試料	1層土	2層土	4層土	7層土	8層土	13層土	上位面	上位面	上位面	上位面	内土坑	
											2号坑	3号坑	4号坑	Ⅰ～Ⅲ層	
		119試料	8試料	8試料	23試料	1試料	3試料	2試料	6試料	4試料	1試料	3試料	19試料	6試料	
コナラ属	炭化子葉	(1)													(1)
モモ	炭化核			(2)	(3)		1								1(5)
サンショウ	炭化種子				1										1
ブドウ属	炭化種子	(1)	4(1)	2	22(1)		1	1						1	31(3)
イネ	炭化胚乳	9(6)	3(5)	15(14)	27(8)	3(2)	3	1		1(1)			1	3	66(36)
コムギ	炭化胚乳	7	6(1)	76(5)	13(3)	3	2	1	2				3	1	114(9)
ムギ類	炭化胚乳	3		1(1)	3										7(1)
ヒエ	炭化胚乳	3			2										5
アワ	炭化胚乳	3	1												4
ヒエーアワ	炭化胚乳						1				1		1		3
キビ族	炭化胚乳	2				1						1			4
ウキヤガラ	炭化果実	1													1
タデ属	炭化果実	2(2)													2(2)
シロザ近似種	炭化種子	1													1
ササゲ属	炭化種子	1		1											2
マメ科	炭化種子	3		(1)	2						1				6(1)
エノキグサ	炭化種子	25(7)		1	4				1	3		1	10(1)	4	49(8)
シソ属	炭化果実		1		1										2

第6章　調査のまとめ

第1節　はじめに

富田高石遺跡は、荒砥川と大泉坊川とにはさまれた舌状台地に位置する。台地の中では先端に近く、標高は104m前後、勾配は緩やかで川に沿って水田が広がっている。遺跡が多い一帯である。

調査では、荒砥川を境として遺跡の様相に違いがあるのか、地域を東西に区別することができるのかどうか、これを一番の関心とした。明らかとなったのは荒砥川以東と同じ、谷地を狩猟や生産の場とした集落と、そこでの変遷である。

画期は古墳時代にある。荒砥と呼ぶ地域では、この時代からの台頭が大きな特徴となっている。前期はそれまでの稀薄さから一転、集落が数を増し、後期には大室古墳群が作られ南麓の中心地となるまでに発展した。本遺跡でも、画期の一端が明らかとなった。特に前期では居住の場だけではなく、方形周溝墓からなる墓域の様子も明らかとなった。

ここでは、周辺遺跡の成果も盛り込みながら、検出された遺構と遺物の特徴について述べる。

第2節　富田高石遺跡の集落変遷

1　集落の範囲

調査した範囲は、南北にのびる台地の西側縁辺部から中央部にかけてである。付図1は、その全貌である。遺構は台地の中央部に密集していて、集落の中心部を調査できたことがわかる。

もうひとつの特徴は縁辺部である。東を除いて、三方が斜面である。北端は、斜面にもかかわらず方形周溝墓がある。敬遠される斜面に、あえて孤立させるために作られたのだろうか。台地中央部での住居跡との様子では、北側には別の集落が展開しそうである。

南東隅には、富田西原遺跡から続く谷地がある。台地との比高差は2～3m、水田や畠に利用された形跡はない。しかし放置されていたわけではなく、集落を分ける境界の役割をはたし、時には共同で利用する通路のような場所ではなかったろうか。富田西原遺跡で検出された祭祀遺構は、この南端にあたり、集落の範囲が時代により変化していることを示している。

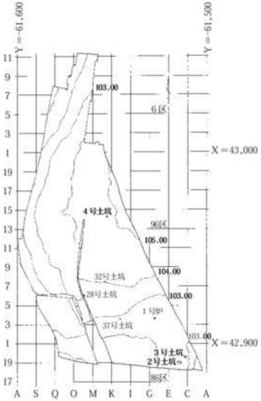
付図2では、南にある富田西原遺跡との位置関係を示した。両者の関係は弥生時代を除けば、同時代に変遷していて、谷地との位置関係、台地の利用状況がよく似ている。谷地で区別されるだけの、関係の深い集落同士といえよう。両者を重ねると不足や不明の部分を補うことができ、富田西原遺跡では削平された台地中央部も復原できるのではないか。おそらく、そこには方形周溝墓があり、6世紀代の集落があったかもしれない。それは、第1次の新開集落に分類されるもので、適地で耕作がはじまり緩やかながら川沿いに北上する動きを読み取れる。

2　縄文時代の遺構と遺物

土坑6基、炉1基を検出した（第132図）。これらは、散漫な状態で分布し、しかも谷地をはさんで北と南では性格が違っている。南側には2基の落とし穴があり、その特徴から隣接する富田西原遺跡から続くとみてよい。狩猟の場である。ここでも落とし穴は、勾配と直交している。

北側には、住居跡として検討した炉や円形の土坑が点在している。しかし、遺構の数は少ない。中心を調査区外の東側に想定して集落の縁辺部にあてるか、南斜面を利用した一時的な居住の跡とみることができよう。

住居跡の可能性を持っていたのが1号炉である。前期黒浜式の深鉢が埋設され、上面は斜面堆積の遺物包含層に覆われていた。周辺で報告されている住居跡は、台地の平坦面にあるものがほとんどで土坑



第132図　縄文時代遺構分布図

とも接近している（註１）。南面するのは住居に好都合であるが、台地の中で斜面を選んだというのには理由が必要であろう。南にある低地との関連を考えてみた。富田西原遺跡のＤ区にある低地では石器が出土している。これに関連させて、水場を管理する施設という可能性を指摘して、今後調査する際の留意点としておきたい（註２）。

３　古墳時代前期の遺構と遺物

住居跡14軒、方形周溝墓３基、壺棺墓２基を検出した（第133図）。遺構の分布状況は、台地中央の平坦部に住居跡があり、縁辺部に方形周溝墓がある。居住域と墓域とは隣接していて、重複している住居跡はわずかに１例と少ない。規模では超大型に分類されるものから段階的に小型のものまでがある。超大型住居を頂点とする、重層的な集落構成が特徴である。14軒とは、次のとおりである。

１号、４号、５号、６号、８号、９号、10号、11号、13号、15号、16号、17号、20号、28号

①集落の範囲　住居跡は、Ａ区の谷地をはさんで南北２つの群に分けられる。南は、１号住居跡の１軒で市道を超えた富田西原遺跡の縁辺部に相当する。残り13軒が北の住居跡群で、台地の様子からすると想定される西半分を検出したものと思われる。方形周溝墓は北の一群に対応し、中でも１号方形周溝墓との関係が濃厚である。生産跡は調査区外が該当する（註３）。

②変　遷　土器から大きな時差を読み取るのはむずかしい。唯一、13号住居跡と17号住居跡が重複しているので、２時期かそれ以上の変遷を推定することができる。Ａｓ-Ｃ降下後、僅差で連続するのであろう。また、後期までの間は空白である。

③住居の形状（第142図）　方形を基本形に設計されている。２号、23号は、復原案に無理があるようだ。長方形は６号と11号の２軒である。長方形は床までがソフトロームの上位程度と浅いのに対して、方形は深く暗色帯にまで達している。

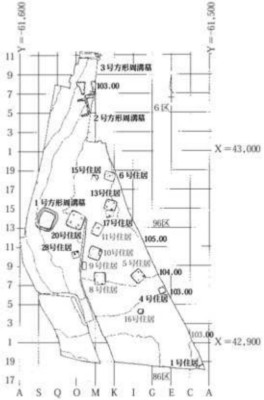
長方形については、弥生時代以来の系譜を引いて古いとみてよいのか、それとも建物としての構造が違うのか。唯一の重複関係では、浅い17号住居跡が先行している。後述のように長方形でも柱穴の位置が、すでに方形となっている。荒砥前田Ⅱ遺跡(2009)では、この点を新しさとして注目をしているが、本遺跡でもこの傾向を認めることができた。

形状の分類は、次のとおりである。

長方形　６号、11号
方　形　４号、５号、８号、10号、13号、15号、16号、17号、20号、28号
不　明　１号、９号

④面　積　最大は20号住居跡、74.82㎡、最小は16号住居跡、6.72㎡である。計測することができた９軒の平均面積は29.97㎡である。20号と16号は、最大値・最小値で、これを除けば差は少ない。

超大型　長軸長6.5m以上　10号、20号
大　型　長軸長5.4～6.5m未満　５号、６号、８号、11号、13号、28号
中　型　長軸長4.3～5.4m未満
小　型　長軸長3.2～4.3m未満　１号、４号、



第133図　古墳時代前期の遺構分布図

9号、15号、16号
(「今井道上遺跡」(1994) 住居分類基準に準拠)。

⑤主柱穴　大型住居以上は4本であるが、中小では柱穴に相当するそのものがないか、あったとしても不規則である。6号住居跡では、4本を結んだ線形が長方形ではなく、方形であることが注目である。

⑥炉　3つの傾向がある。定位置の中央部の北寄りのほかに、大型住居以上では複数があり、小型住居では特定することがむずかしい。複数ならば用途によって使い分けがあるのか、焼土の量、掘り方への注意が必要である。

定位置とした中央部も、壁寄りにあるのか、中央寄りかで差がある。長方形住居では、2軒ともに中央部にあり、変遷としては中央から北壁寄りへと漸進している。4号は、炉とはしてみたが焼失住居との区別は難しい上、床面積から見て炉を備えられる構造上のゆとりがあったかどうか。どちらかといえば否定的で、住まいではなく、倉庫のような性格を考えるべきなのであろうか。

⑦貯蔵穴　南東ないし南西の壁際にあるものをあてたが、差が目立つ。隅に特定されていくまでの過渡期な様相と理解したい。

⑧周　溝　4軒で検出され、全周することが基本である。方形の住居跡に限られ、長方形や掘り込みが浅い住居跡にはみることができない。

⑨ベッド状遺構　10号住居跡の1軒だけで検出された。ただし、壁際の一辺全部を仕切るのではなく、北側半分だけで、しかも壁寄りに浅い土坑と壁にかかり袋状の土坑が付くという特異さである。寝間とするには半端な状態で、土坑が容器を据え付けた跡ならば作り付けの棚とみた方が適当ではないだろうか。ちなみに掘り方ではロームを掘り残すなどの痕跡はなく、すべて盛り土である。

⑩遺物組成　第137図・第138図には、住居跡から出土した土器を集成した。4号住居跡、11号住居跡にまとまった内容を見ることができるが、全体では遺物の少ないことが一瞥できる。

壺は、単純口縁が数の上では最も多く、二重口縁、折り返し口縁がこれに次ぐ。4号住3は浮文を貼付、球胴形の肩には波状文をめぐらし、唯一ともいえる加飾された個体である。

甕は、平底が主で、法量の大小、形状、器面の調整に違いがみられた。個体の数は最多である。4号住8は口縁部に輪積み痕、10号住22は同じく縄文を施文している。ともに稀な例として掲載した。単純口縁台付甕は使用頻度が高かったのか、脚部が残るくらいで良好な資料はない。S字状口縁台付甕は、4号住を見ると法量上の大中小の違いがある。また、胴部外面の肩部に横刷毛を持つものが多い。数の上では、単純口縁に対して客体的である。

器台は、8号住、10号住に特殊器台がある。坏部が直線的な4号住4、11号住5、坏状の9号住1、10号住17、有稜の1号住1などがある。

高坏は完存の資料がない。13号住7は、坏部の内面が3つに仕切られるという異形である。器面の調整はほかに比べると粗雑、仕切りに貫通した小孔をあけるなど実用品ではなく、祭祀用ではないかという逸品である。

鉢は、小型の甕との区別がむずかしい。13号住では、口縁部が屈曲することなく、大きく外反するものと、斜めに立ち上がり上位で屈曲した後、短い口縁が付くものとが共伴している。

坩は、小型丸底土器は出土していない。蓋は、８号住３の１例がある。天井部に貫通孔がある。ミニチュア土器は８号住13がある。

４　方形周溝墓について

方形周溝墓は、３基を検出した。１号は単独とみてよいが、北の２基は複数あるうちの南側にあたると考えたい。Ａｓ－Ｃとの関係は、覆土に純層はなく、すでに混土化している。３基に大きな時差はなく、住居跡とも同様で時差はない。

①立　地　台地の縁辺部、西斜面に作られている。先述のように１号が単独、２号と３号で別の一群を構成するとみたい。１号は単独とはいえ、２基の壺棺墓が付随し、20号住居跡が東５ｍという間近にある。一方の２号と３号は、住居跡からは見下ろすような位置にある。調査の時点は、対岸や水田からの眺望を意図したと解釈していたが、実際、その効果とは何を狙ったのであろうか。谷地に立つと見上げるようで､目立った存在であろうことは想像できた。

②形　態　１号・２号は掘り残しがなく、周溝が全周する。３号が前方後方形である。推定を含むが周溝の幅は一定していて、方台部に沿っている。

③規　模　方台部の縦×横　長軸方位

１号　8.94×7.58m　N23°E

２号　7.96×4.20m以上　N13°W

３号　周溝を含めた全長24m、前方部長7.14m、前方部前端幅5.44m、後方部長12.86m
Ｎ４°Ｗ

④主体部　削平されたものと思われ、検出されていない。１号の周溝内では高低差があったが、土坑のようにはならず周溝内にあったとしても可能性にとどまる。

⑤盛り土　３号では、周溝への堆積土にローム塊が多く混入している。盛り土であった可能性が高い。

⑥遺　物　出土したのが少量で完形か、それに近いものが多い。出土位置、器種に特定の傾向を指摘することはできないが、出土レベルは溝の底面にあるものと高いものとがある。１号は総じて高い位置にあって、方台部に置かれていたものが崩落したとみられる状態である。それに対して、３号では溝の底面に近い。高坏はくびれ部に置かれ、坩や鉢は後方部に集中していた。

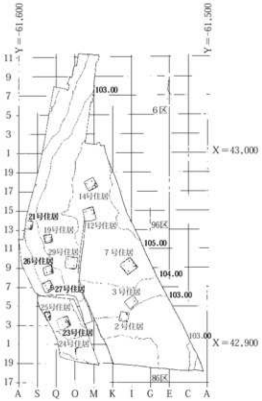
⑦特記事項　注目は、１号方形周溝墓で２基の壺棺墓が異なる状態で検出されたことである。１号は周溝の中ではなく縁に作られ、２号は周溝の中に掘り込んだ土坑に納められている。１号は、土坑にすっぽりと収まっていて、密閉されていた状態である。それに対して、２号は土坑の隅にたてかけ、その高さからみて上部は露出していたのではないか。

蓋をする仕様が、１号が甕の破片を使い、２号が甕の下胴部と違っている。この仕様は、さらに底部でも異なる。２号は欠損もなくそのままであるが、１号では底部を打ち欠いて、代わりに破片が敷かれている。容量は同じように見えても、方台部との距離に時差、あるいは方台部被葬者との親近感が反映されたようにも見える。単純に２基とするのではなく、性格は違うのではないか。

１号は密閉という意図があったようで、２号は土坑とは寸法に違いがあって開放的である。２号には一度土坑に埋葬したものを再葬墓としたような、埋葬に時差があったのではないか。調査時の注意が必要であった。残念ながら、中に入っていた土は分析していない。

最後に、10号住居跡23と13号住居跡21として報告したものに注目をしておきたい。この２つは、同一個体の壺を転用した土器棺墓の可能性がある。最大径が75cm前後という大きさで、10号住居跡は底部を欠いた下胴部、13号住居跡が口縁部を欠いた上胴部である。10号住居跡のものは、割れ口が高さを揃えるように研磨されている。

出土状態は、壺棺のように一箇所で押しつぶれていたのではなく、点在していたものが接合した。13



第134図　古墳時代後期の遺構分布図

号住居跡は、故意に割って撒いたようにも見える点在の仕方である。

前方後方形周溝墓は、荒砥地域では宮川流域にある堤東遺跡、阿久山遺跡、中山Ａ遺跡、東原Ｂ遺跡での検出が知られている（註４）。壺棺墓は、東原Ｂ遺跡で甕棺が２基、地域を外れるが旧富士見村下庄司原東遺跡４号方形周溝墓で１基が検出されている。

前方後方形は、上記のものに３号を比べると周溝の幅が一定している。方台部は前方部が長くて後方部に対して遜色がない。幅もある。土器も土師器が出土するのみで、樽系はない。方形周溝墓の形態、伴出土器ともに新しさがある。

方形周溝墓自身は荒砥川の西でも珍しくないが、川の東西で古墳の数に圧倒的な差があるだけに、目立った存在ではある（註５）。前期の段階では、川の東西では差が少なく開発のパイオニア的な人物のいたことがわかる。

壺棺墓は、これまでの検出例とは占地や蓋の様子が似ていて、差がない。これまでの状態を追認することができた。

５　古墳時代後期の集落

６世紀前半の住居跡13軒を検出した（第134図）。
２号、３号、７号、12号、14号、19号、21号、23号、24号、25号、26号、27号、29号

①集落の範囲　住居跡は、台地の中央部から西縁辺部斜面にかけて分布する。中央部が、やや散漫な分布状態。縁辺部に中型以下が分布している。主軸方位に差があるものの、重複も少なく均質な構成である。隣接する富田西原遺跡では、該期の祭祀遺構が検出されている。

②変　遷　重複する住居跡がない。それでも接近した状態で、周堤帯を考慮すると２時期かそれ以上に分けられる。竪穴住居のほかには、台地の中央にある３号以下の掘立柱建物跡を検討してみたが、時期を特定できる資料が無いので特定するのをさけた。台地中央部に住居が少ないことから、倉庫か納屋を推定したいところである。４号、５号掘立柱建物跡は、棟方向が住居跡に類似、柱穴がほかの３棟よりも大型である。住居跡に共伴する可能性は高い。

③住居の形状（第143図）　推定を含むが正方形に限られる。カマドは、29号の１軒を除いて東を向いている。違いは、規模と方位である。規模は、超大型、大型、中型、小型の４つがある（「今井道上遺跡」（1994）住居分類基準に準拠、カッコ内は推定）。

超大型	７号、(29号)
大　型	３号、12号、14号、23号、27号
中　型	２号、21号、26号
小　型	19号、24号、25号

方位は、N78°Ｗから N80°Ｅまでがある。周堤帯は、25号住居跡で可能性を指摘した。

④面　積　最大は７号の 47.33㎡、最小は 19 号の 16.67㎡、計測できた７軒の平均面積は 28.75㎡である。

⑤柱　穴　住居規模の大小には関係がなく、４本組主柱穴とみてよい。違いは深さに現れ、台地の中央部にあるものが深い傾向にある。特異な例では 24

号で底面の近くから壺か甕とみられる土器が出土。故意に埋めたものとみたが、住居跡のプランに検討の余地が残されていて柱穴と確定できたわけではない。地鎮具とすべきか類例を待ちたい。

⑥カマド　共通点は、壁外への張り出しが少ないことである。作り方には２つの方法がある。ひとつは、芯材としてあらかじめロームを掘り残すもので７号、14号、19号住居跡が該当する。特に７号は几帳面な作り方で、ロームの高さが20㎝という衝立風の構造である。

もうひとつは、ロームは掘り残さずに芯材をはじめとして暗色帯などの粘土で作るもので、12号、21号、23号、25号～27号住居跡が該当する。粘土は、柱穴や貯蔵穴からでも採取できるが大泉坊川沿いの崖には露出していて、日常生活の範囲で容易に入手できたことが想像できる。使用した住居跡が台地の縁辺に多いのも、採取した場所が近いことを示しているのであろう。

カマドの半数は良好な状態で、焚き口に鳥居状の石組、あるいは燃焼部に支脚を残している。唯一使用状態がわかるのが14号住居跡で、支脚の上に押しつぶれた状態で甕と小型甕が残されていた。長さに対して細身であることから１穴式の構造で、ほかの住居跡でも１穴式が一般的のようである。

⑦貯蔵穴　カマドの右側、住居の南東隅が圧倒的である。唯一、27号住居跡だけが作り替えによる３基の重複で、方形から長方形への変化が読み取れた。稀少な例である。しかし、遺物を出土するのは稀で、区画を兼ねた周堤や蓋の痕跡は乏しい。

⑧周　溝　全周するのは14号住居跡だけで、普及の度合いは低い。23号、25号住居跡が一部にめぐる。

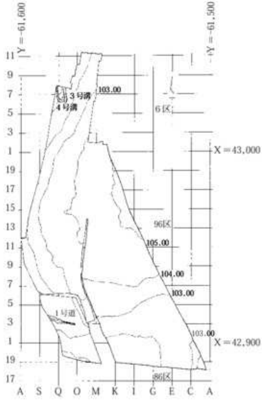
⑨遺物組成（第139図～第141図）　甕、小型甕、甑、高坏、鉢、坏が出土。須恵器の共伴は７号住居跡で高坏、12号住居跡で𤭯、26号住居跡で坏、20号住居跡で蓋坏が出土している。

甕は大型と小型がある。大型品は長胴の個体が主で、胴部中位に最大径を持つものが多い。調整は、縦方向のヘラ削りである。ほかに球胴形をした７号住居跡11、14号住居跡15、21号住居跡10が出土している。

甑は、大型のもので胴部に張りがあるものとないものとがあり、27号住居跡では両者が複数個体で共伴している。

高坏は出土点数が少ない。24号住居跡３は低い器高で、12号住居跡５は柱状の脚部である。

坏は、須恵器模倣、内斜口縁、半球形丸底の３つのタイプがある。模倣で口縁部に段があるものはない。



第135図　平安時代の遺構分布図

5　平安時代の遺構と遺物

溝１条、道１条を検出した（第135図）。居住した形跡は見当たらない。唯一、１号・２号溝の覆土に平安時代の墨書土器（第118図）が混入しているので、近く何らかの遺構のあることは推定できる。ただし、調査区全体を合わせても出土量は少ない。推定できる集落も規模が小さいか、集落でも縁辺部のような場であったろう。この推定を容易にさせるのは、富田西原遺跡でも検出されたのは水田と溝だけ、

遺物量も少ないという似た状況があるからで、隣同士、２遺跡とも居住域の様相は消えて生産域へと転換してしまったかのようである。

調査で判明している集落は、対岸の富田漆田遺跡に９世紀代から10世紀代にかけての集落のあることがわかっており、本遺跡とは谷地をはさんで対面している。南面する斜面から台地の中央に集住する様子がみられ、継続している。その立地は大泉坊川沿いを意識した格好である。

大泉坊川沿いに特定してみると同様な動きは、同じ台地上にある富田宮下遺跡でもみることができる。また、下流の富田大泉坊Ａ・Ｂ遺跡では水田と同時期の集落がある。現在わかる遺跡の位置関係をみれば、集落は適度な距離で点在している。水田を一元的に管理するために居住の場を集約した結果で、本遺跡は富田宮下遺跡、富田漆田遺跡のどちらかに吸収されたのではないだろうか。

中原遺跡群では、Ａｓ-Ｂ下水田のほかに複数の時代の水田が調査されている（1993・1994）。このような状況は国道50号拡幅に伴う調査でも見ることができ、広瀬川低地帯では一般的な姿とみてよいだろう。そのうちのひとつ、弘仁九年の地震による洪水砂で埋没した水田は、半折型の条里地割である。少なくとも９世紀初頭には条里制の傘下に組み込まれるような一角ではあったのだろう。問題は、川沿いにどこまで遡れたかである。

ＪＡ前橋市本部付近が通称「きふね・たんぼ」、富田町の中では本遺跡西の「うりた」と並んで土地改良される前から水田が広がる所であった（富田町松本恭司氏教示）。能登　健氏からは、大泉坊川の別名貴船川について名称の由来を問われ、水分信仰との関連がないかと助言を得た。「水分信仰」とは意外であるが、本遺跡のあたりで変わる水田の様子はそのことと関連があるのかもしれない。

松本氏からは、「うりた」の南端、調査した富田西原遺跡Ｄ区に隣接して松山堰（まつやまぜき）があり、重要な堰で谷地を上下に分ける働きをしていたとの教示も受けた。調査でも、松山堰の上下では

第136図　中・近世の遺構分布図

検出した水田に違いのあることが確かめられた。下流の富田大泉坊遺跡Ａ遺跡では、畦で区画をし、その形態はＡｓ-Ｃの上面の水田面にまで遡ることができる（2009）。これは低地によくある状況で、大泉坊川沿いでは最も古い水田である。

それに対して上流の富田漆田遺跡では、ＦＡ前後は河道に面した付近だけが開田されたようで時代も場所も限定的である（2006）。面積が拡大するのは平安時代前半からで、段と畦による区画を併用して台地の際にまで区画を拡大している。拡大する耕地、そのための居住域の移動、本遺跡で集落が空白となるのもこのことが原因ではなかったか。

荒砥北原Ⅱ遺跡では、調査した２つの谷地の一方は開墾されていたが、もう一方は湿地のままであった（2007）。低地ならば、一様にどこも開墾されていたというわけではない。また、水田に代わって畠があるかといえば、現在のところ検出例は稀である。

能登氏からは、キャサリン台風時の被災状況が荒砥川を境にして東西に違うこと、乏水地帯として苦しんだ土地柄であることなどの指摘も受けた。生産

跡は、今後に課題を残した状況である。

６　中・近世の遺構と遺物

屋敷か神社らしき、溝で区画された跡を検出した（第136図）。区画の中は閑散とした様子で、南面する掘立柱建物跡が３棟、柱穴からは獣骨が出土した。屋敷とみたのは、地元に伝承されていた「八丁堀城」（註６）の一角かもしれないというのが理由で、神社説は閑散としていて南面すること、獣骨を柱穴に埋納する建物としての特異さである。

建物跡は５棟ある。

１号　１間・３間　東西棟
２号　２間・６間　東西棟
３号　２間・２間　南北棟
４号　２間・２間　等間
５号　２間・２間　南北棟

このうち４号と５号は、溝で区画された外側にあり、古墳時代後期で先述したとおり古くなる可能性を持っている。１号と２号の特徴を列記すると、次のようになる。

柱穴は方形、整理過程の検討では掘り方が浅いとの指摘を受けたものの、中に柱痕があり、礎石建ちの可能性はなく掘立柱とみられる。柱間は、梁間が６尺と一定しているが桁行は10尺が多い。間柱の有無は、掘り方が浅いために確定することができない。特記事項は、１号で４本、２号で10本の柱穴から獣骨が出土したことである。頸骨に混じり頭骨が１点ある。地鎮を意図したとして類例を待ちたい。

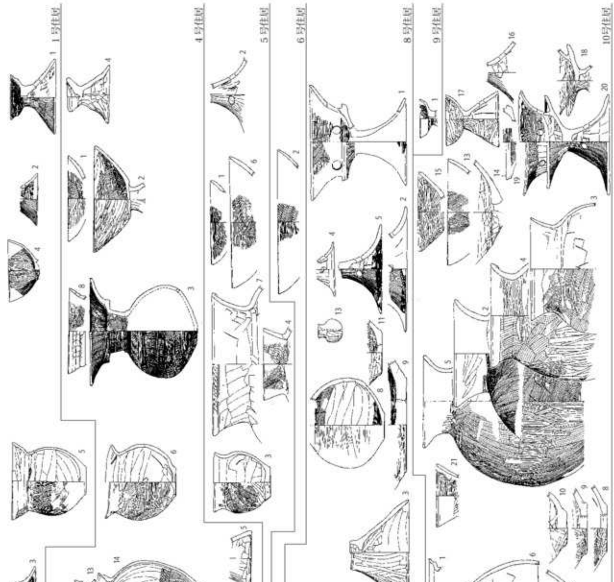
２棟は削平段に南面している。柱の筋はずれているが、南北に並列するように作られたことは確かであろう。しかし、２棟が別棟で正しいのか、それとも下屋のように続いているのか疑問点を残す。これといった出土遺物が無く、時期を特定するのがむずかしい。判断の根拠は、区画の溝との位置関係、平行や直交するというもので、土坑との重複をわずかな補強材料としているだけである。強いてあげれば、１号井戸から出土した青磁、29号土坑から出土した擂り鉢、そして３号溝から出土した板碑に、中世らしさがある。

中世については、本遺跡が隣接する「江木谷」で、簗瀬大輔氏が中世的景観の復原を試みている（1999）。大胡城主牧野康成による、江木之郷の「あらく」の地の再開発記録から中世に迫ろうとしたもので、谷地田経営の様子、そこでは溜井が頼みであったことなどが詳述されている。

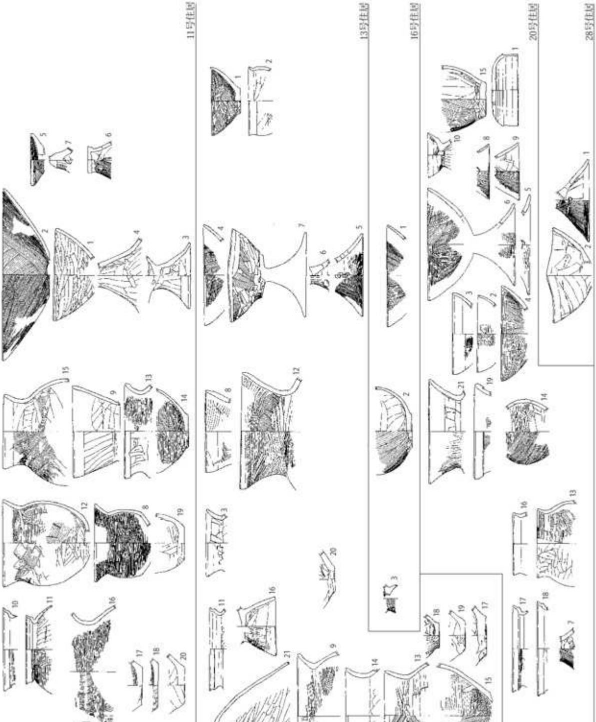
今、遺跡の周辺では、水田が当然のように広がっている。しかし、水の苦労から解放されたのは大正用水が通じた戦後のことであるという。景色は中世どころか、『上野国郡村誌』が書かれた明治11年の頃まで変わらなかったのではないか、とさえ簗瀬氏は指摘する。これは、隣同士の富田でも十分にあてはまることで、傾聴すべき内容である。

参考文献

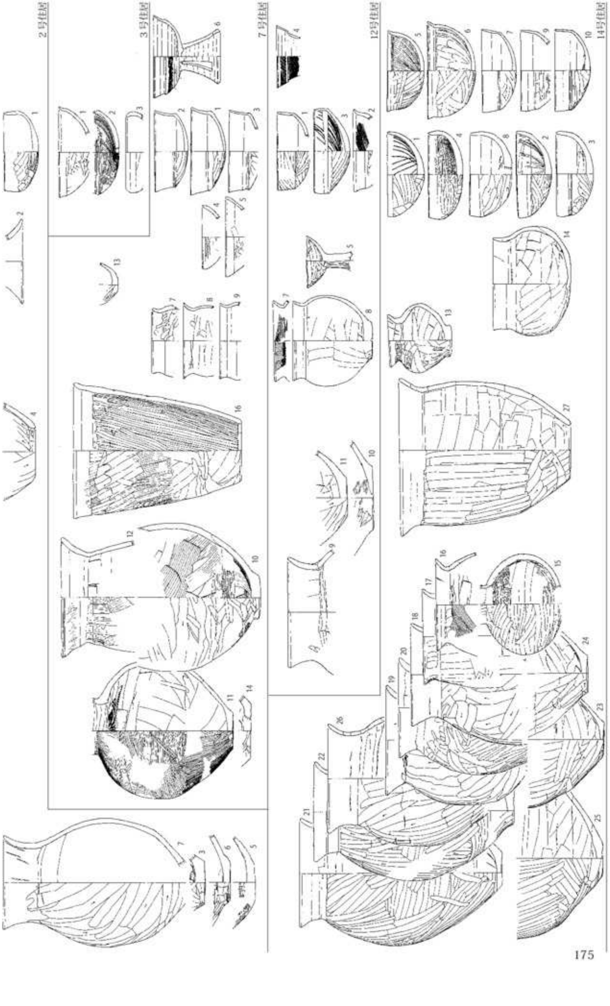
相澤忠洋顕彰刊行会「追憶・相澤忠洋　一九四九年九月十一日-この日に歴史が動いた-」2005
大沢亥之七「富田高石遺跡試掘概報」荒砥考古学研究会『考古学の友』第３号　1951
木暮元夫　「荒砥村縄文早期遺跡概報」『上毛史談1952春季版』1952　上毛古文化協会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」1986
第165集「今井道上遺跡」1994
第189集「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」1995
第372集「富田漆田遺跡・富田下大日遺跡」2006
第377集「江木下大日遺跡」2006
第395集「荒砥北原Ⅱ遺跡」2007
第402集「萱野Ⅱ遺跡」2007
第465集「富田新井遺跡・富田大泉坊Ｂ遺跡・富田大泉坊Ａ遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡」2009
第472集「荒砥前田Ⅱ遺跡」2009
前橋市史編纂委員会「前橋市史」第６巻　1985
富士見村教育委員会「陣馬・庄司原古墳群」1991
群馬県教育委員会・荒砥北部遺跡群調査会「上諏訪山Ａ・Ｂ　中山Ａ・東原Ａ・Ｂ」1992
大胡町教育委員会「中川原遺跡群　上ノ山遺跡」1992
群馬県企業局「萱野遺跡・下田中遺跡・矢場遺跡」1991



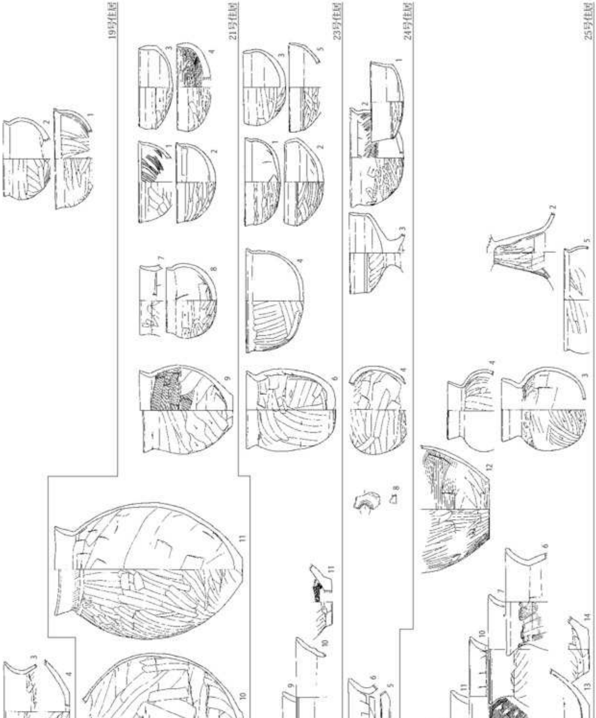
第137図　古墳時代前期遺物集成図（1）



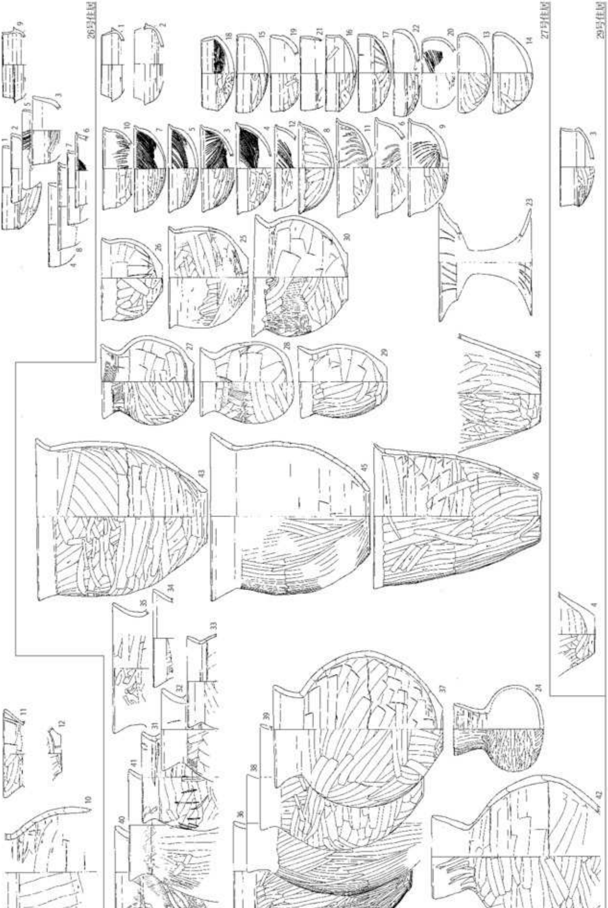
第138図　古墳時代前期遺物集成図（２）



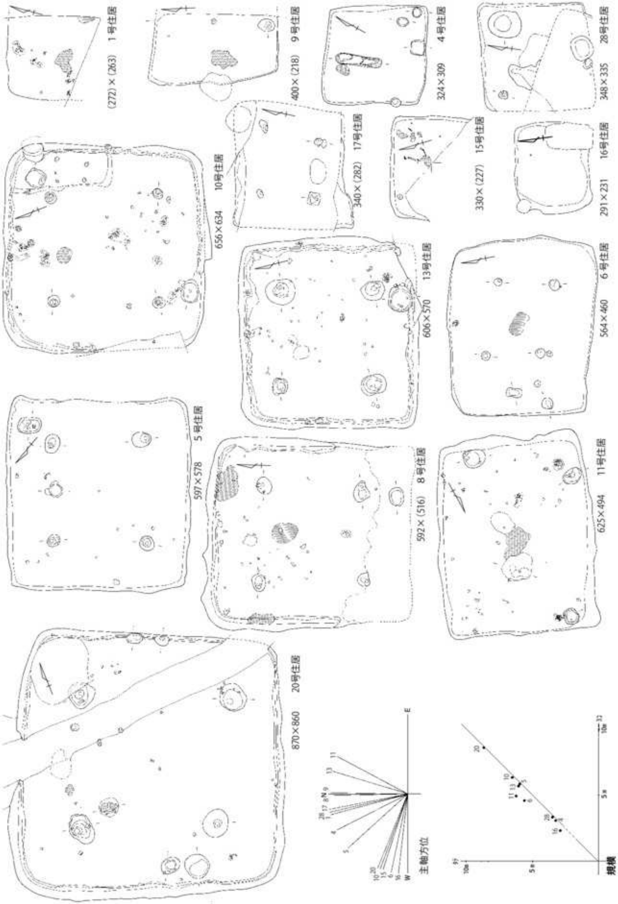
第139図　古墳時代後期遺物集成図（1）



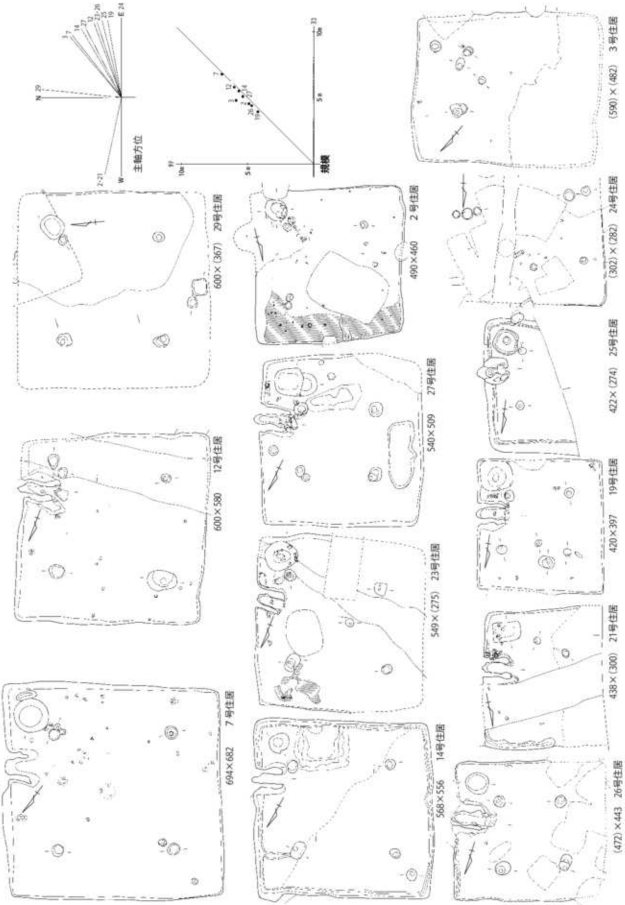
第140図　古墳時代後期遺物集成図（２）



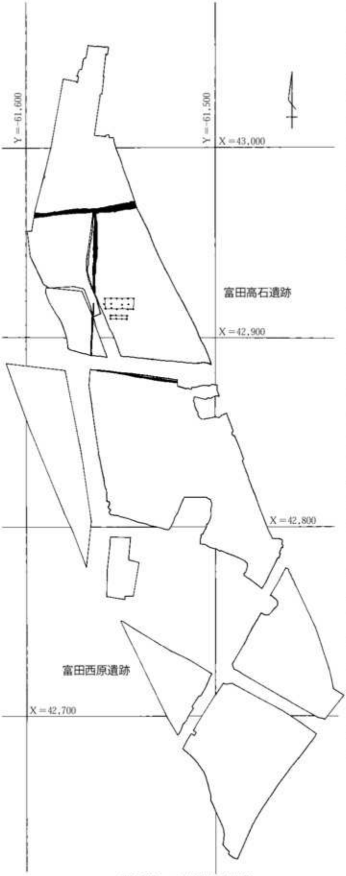
第141図　古墳時代後期遺物集成図（３）



第142図　古墳時代前期住居跡集成図



第143図　古墳時代後期住居跡集成図



第144図　中世遺構配置図

前橋市埋蔵文化財調査団「中原遺跡群」Ⅰ・Ⅱ　1993・1994
洞口正史「群馬県埋蔵文化財調査事業団稀実類調査遺跡集成」 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』25　2007
小島敦子「群馬県の方形周溝墓－群在のパターン分類を通じて」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』所収　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1986
簗瀬大輔「赤城南麓「江木谷」の中世的景観－記録と記憶による景観復原の試み－」『群馬歴史民俗』第 20 号　1999　群馬歴史民俗会
前原　豊「赤城山麓の墓あと」『浅間火山灰と中世の東国』所収　平凡社　1989
群馬県教育委員会「城南地区の民俗」（群馬県民俗調査報告書第 17 集）1975

註

1　江木下大日遺跡、富田下大日遺跡では、前期の前半と後半の集落が検出されている。土坑との関係では萱野Ⅱ遺跡の土坑からは、炭化した種実が出土している。富田東原遺跡では９号住居跡、富田大泉坊Ｂ遺跡では 11 号住居跡が検出されている。ともに黒浜式期である。

2　本遺跡の周囲では、遺構はなくても遺物だけが出土している遺跡が多く見受けられる。定住するのではなく、水場のような一時的な活動の跡だった可能性はないだろうか。

3　第５章でも取り上げたが、西側の谷地が相当する。ＦＡの時期にプラント・オパールが検出されている。富田大泉坊Ａ遺跡の水田も可能性があるひとつである。

4　小島敦子氏により県内の方形周溝墓が集成され、その中で荒砥地域の遺構の特徴が詳述されている。

5　旧大胡町上ノ山遺跡で方形周溝墓、萱野遺跡で円形周溝墓がそれぞれ検出されている。

6　八丁堀城は富田町松本恭司氏の教示。城南病院付近を本丸として、富田西原遺跡Ｄ区の脇、松山塚付近が物見台であったという。ここを結ぶ道が本遺跡を東西に分けていた道であったが、調査では道跡は検出されていない。城南病院付近の小字が上曲輪、下曲輪である。

富田高石遺跡住居跡一覧表　（長軸・短軸・深さの単位はcm、カッコ付きは残存値）

No.	グリッド位置	時　期	形　状	長軸・短軸・深さ	柱　穴	炉・カマド	貯蔵穴	周　溝	主軸方位	備　　考
1	86AB-18	前期	推定方形	(272)・(263)・38	1	中央北	不明	なし	N15°W	単独
2	96IJ-3・4	後期	方形	490・460・24	3	東	南東隅		N78°W	24号土坑と重複
3	96HI-4〜6	後期	推定長方形	(590)・(482)・20	2	東	29坑か	なし	N50°E	単独
4	96EF-6	前期	方形	324・309・40	3	中央北	南中央	なし	N27°W	単独、焼失住居
5	96G〜I-7・8	前期	方形	597・578・39	4	中央北	南東隅	全周	N42°W	単独
6	96J〜L-17・18	前期	長方形	564・460・13	4	中央	不明	なし	N78°W	単独
7	96H〜J-9・10	後期	方形	694・682・55	4	東	南東隅		N52°E	単独
8	96K〜M-7・8	前期	方形	592・(516)・62	4	中央北		全周	N1°W	単独
9	96N-8・9	前期	隅丸方形	400・(218)・18	2	中央西	不明	なし	N1°E	1号溝と重複
10	96LM-9〜11	前期	方形	656・634・52	4	中央北	北東隅	全周	N70°W	1号溝と重複
11	96LM-12・13	前期	長方形	625・494・22	2	中央北	南東隅	なし	N28°E	単独
12	96L〜N-13〜15	後期	方形	600・580・52	4	東	不明	なし	N70°E	2号溝が重複
13	96J〜L-14〜16	前期	方形	606・570・54	4	中央北	南東隅	全周	N17°E	17号住に重複
14	96L〜N-17・18	後期	方形	568・556・46	4	東	南東隅	全周	N60°E	15号住に重複
15	96LM-18	前期	推定方形	330・(227)・28	なし	不明	不明	なし	N72°W	14号住が重複
16	96GH-4	前期	方形	291・231・15		不明	不明	なし	N83°W	7号・25号坑重複
17	96K-14	前期	方形	340・(282)・-	4	不明	不明	なし	N11°W	13号住が重複
18	96HI-13・14	不明	推定方形	(192)・(110)・39	なし	不明	不明	全周	N7°E	単独
19	96QR-11・12	後期	方形	420・397・43	4	東	南東隅		N80°E	単独
20	96N〜P-12〜14	前期	方形	870・860・63	4	中央北	南西隅	部分	N68°W	2号溝が重複
21	96ST-13	後期	推定方形	438・(300)・24	2	東	南東隅	なし	N78°W	2号溝が重複
22	欠番									
23	96OP-2・3	後期	推定方形	549・(275)・27	4	不明	南東隅	北・東	N72°E	1号道が重複
24	86MN-19・20	後期	推定方形	(302)・(282)・17	4	不明	不明	なし	N90°E	1号溝が重複
25	96QR-3・4	後期	推定方形	422・(274)・107	2	東	南東隅	北・東	N76°E	1号道が重複
26	96QR-8・9	後期	方形	(472)・443・40	4	東	南東隅		N72°E	単独
27	96QR-6・7	後期	方形	540・509・54	4	東	南東隅	なし	N63°E	単独
28	96NO-9・10	前期	方形	348・335・15		不明	不明	なし	N13°W	29号住が重複
29	96N〜P-8〜10	後期	推定方形	600・(367)・11	4	北		なし	N6°E	28号住に重複

富田高石遺跡土坑一覧表（長軸・短軸・深さの単位はcm、カッコは残存値）

No.	位　置	時　代	形　状	長軸・短軸・深さ	備　考
1	96I-3	不明	長方形	160・85・28	２号住に重複
2	86CD-18・19	縄文	長方形	230・122・62	落とし穴
3	86C-19	縄文	長方形	160・75・61	落とし穴
4	96K-14	縄文	円形	77・(50)・70	２号溝に重複
5	96HI-3・4	不明	円形	130・120・52	単独
6	96FG-6・7	不明	長方形	166・96・24	単独
7	96GH-4	不明	長方形	148・80・16	16号住に重複
8	96H-6	不明	円形	43・36・74	単独、柱穴か
9	96G-6	不明	円形	46・36・42	単独、柱穴か
10	96F-7	不明	円形	46・42・40	単独、柱穴か
11	96F-7	不明	円形	39・34・51	単独、柱穴か
12	96F-8	不明	円形	25・23・55	単独、柱穴か
13	96HI-10	中世か	円形	138・123・29	単独
14	96I-10	不明	円形	45・35・53	単独、柱穴か
15	96I-11	不明	円形	37・36・26	３号掘立柱穴
16	96K-10	不明	円形	44・28・42	単独、柱穴か
17	96J-11	不明	円形	46・37・80	３号掘立柱穴
18	96J-11	不明	円形	52・43・40	３号掘立柱穴
19	96J-11	不明	不整形	48・13・30	３号掘立柱穴
20	96J-12	不明	円形	32・31・23	３号掘立柱穴
21	96J-12	不明	円形	34・37・21	３号掘立柱穴
22	96J-12	不明	円形	34・28・72	単独、柱穴か
23	96J-12	不明	円形	44・34・26	単独
24	96IJ-3・4	中世か	長方形	233・166・43	２号住に重複
25	96H-4	不明	円形	42・45・66	16号住に重複
26	96J-11	不明	円形	33・27・32	３号掘立柱穴
27	96J-12	不明	円形	38・37・19	３号掘立柱穴
28	96MN-5・6	縄文	円形	155・(90)・46	１号溝が重複
29	96H-5	不明	円形	72・64・26	３号住貯蔵穴か
30	96H-5	不明	円形	54・52・30	単独、柱穴か
31	96M-9	不明	円形	93・76・40	９号住に重複
32	96K-7	縄文	円形	118・(68)・57	単独
33	960P-18・19	不明	地下式坑	436・186・134	縦長方形
34	96N-18・19	不明	地下式坑	355・173・122	縦長方形
35	6N-1	不明	地下式坑	398・155・140	縦長方形
36	960-14	不明	地下式坑	220・180・106	20号住に重複
37	96J-3	縄文	円形	83・78・39	２号住が重複
38	96L-19	不明	地下式坑	307・148・144	縦長方形
39	96I-4	不明	楕円形	76・57・25	２号住に重複
40	6N-10	中世	方形	166・160・46	３号方形周溝墓重複
41	86M-19	不明	方形	60・54・70	24号住貯蔵穴か
42	96R-5・6	不明	地下式坑	398・68・58	縦細形
43	960P-3	不明	長方形	146・111・32	23号住に重複
44	96N-17	不明	地下式坑	252・133・97	横長方形
45	96MN-18	中世か	方形	117・108・17	４号掘立が重複
46	96N-17	不明	地下式坑	216・116・108	縦長方形
47	96RS-11	不明	地下式坑	364・193・119	縦方形
48	96M-20・6M-1	中世か	長方形	147・75・10	単独
49	96M-20・6M-1	中世か	長方形	274・147・28	単独
50	96M-20・6M-1	中世か	長方形	223・78・24	単独
51	96M-19・20	中世か	長方形	345・113・17	単独
52	96RS-6・7	不明	地下式坑	408・90・53	縦細形
53	960-6	不明	円形	132・120・21	27号住に重複
54	96H-5	不明	円形	86・81・18	柱穴の可能性

写真図版

赤城南麓全景　南上空

上武道路全景　東上空

PL.2

A区全景　南上空

A区全景　西上空

A区北全景　西上空

A区南全景　西上空

B区北全景　南上空

B区南全景　南上空

C区全景　南上空

C区全景　西上空

7 号住居跡作業風景　北

10 号住居跡作業風景　東

14 号住居跡作業風景　南

28・29 号住居跡作業風景　南

47 号土坑作業風景　東

1 号掘立柱建物跡作業風景　南

2 号溝作業風景　東

1 号方形周溝墓作業風景　北

1号住居跡全景　西

1号住居跡掘り方B断面　西

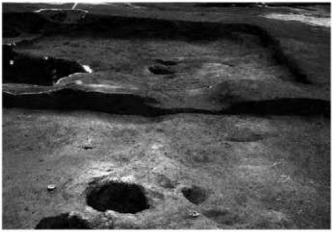
1号住居跡遺物出土状況　北

1号住居跡ピット7全景　北

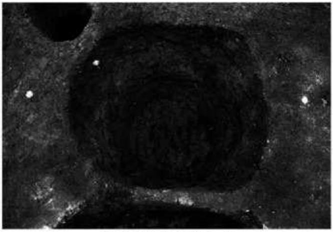
2号住居跡全景　東

2号住居跡B断面　南

2号住居跡遺物出土状況　東



2号住居跡掘り方B断面　南


2号住居跡貯蔵穴全景　南

3号住居跡掘り方B断面　西

4号住居跡全景　南

4号住居跡A断面　南

4号住居跡遺物出土状況　南

4号住居跡炭化物出土状況　南

4号住居跡掘り方全景　南

4号住居跡ピット3断面　西

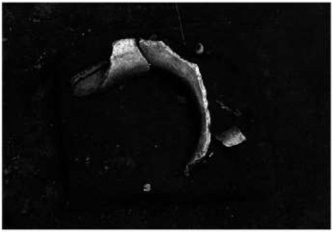
4号住居跡ピット4断面　東

5号住居跡全景　北

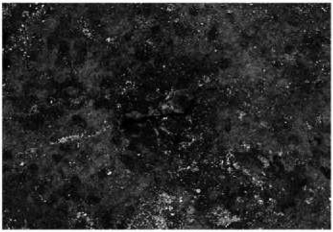
5号住居跡B断面　西

5号住居跡遺物出土状況　西

5号住居跡遺物出土状況　南

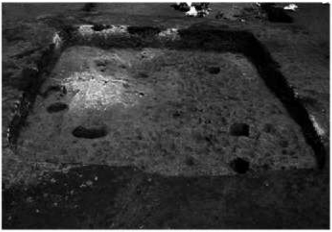


5号住居跡遺物出土状況　西



5号住居跡鉄製品出土状況　南

5号住居跡遺物出土状況　西



5号住居跡掘り方全景　南

5号住居跡掘り方B断面　西

5号住居跡貯蔵穴全景　南

5号住居跡ピット2全景　南

6号住居跡全景　南

6号住居跡遺物出土状況　西

6号住居跡掘り方全景　南

6号住居跡掘り方B断面　西

6号住居跡炉断面　南

6号住居跡ピット3断面　東

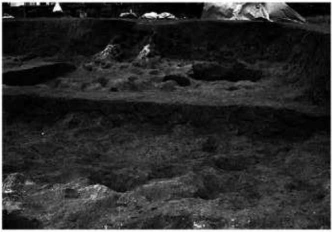
6号住居跡ピット4断面　東

7号住居跡全景　西

7号住居跡A断面　西

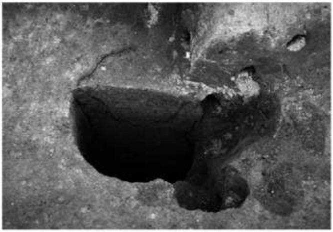
7号住居跡遺物出土状況　南

7号住居跡掘り方全景　西


7号住居跡掘り方A断面　西

7号住居跡カマド全景　西

7号住居跡カマド掘り方全景　西



7号住居跡ピット1断面　西

8号住居跡全景　南

8号住居跡B断面　東

8号住居跡遺物出土状況　西

8号住居跡遺物出土状況　南

8号住居跡遺物出土状況　南

8号住居跡掘り方全景　南

8号住居跡貯蔵穴断面　南

9号住居跡全景　東

9号住居跡A断面　南

9号住居跡掘り方全景　東

9号住居跡掘り方A断面　南

10号住居跡全景　東

10号住居跡A断面　南

10 号住居跡 B 断面　西

10 号住居跡遺物出土状況　東

10 号住居跡遺物出土状況　南

10 号住居跡遺物出土状況　南

10 号住居跡掘り方全景　東

10 号住居跡掘り方 A 断面　南

10 号住居跡掘り方 B 断面　西

10 号住居跡貯蔵穴断面　南

10 号住居跡炉全景　南

10 号住居跡ベッド状遺構全景　西

11 号住居跡全景　東

11 号住居跡遺物出土状況　東

11 号住居跡遺物出土状況　西

11 号住居跡遺物出土状況　西

11 号住居跡遺物出土状況　北

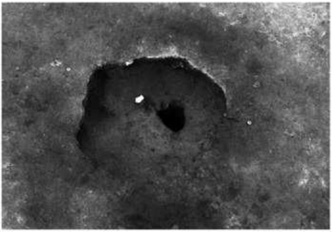
11 号住居跡ピット 2 遺物出土状況断面　南

11 号住居跡掘り方全景　東

11 号住居跡掘り方 A 断面　南

11 号住居跡掘り方 B 断面　西

11 号住居跡貯蔵穴断面　南


11 号住居跡炉全景　南

11 号住居跡炉断面　南

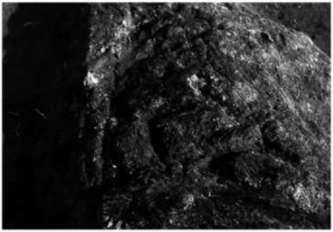
12 号住居跡全景　北東

12 号住居跡 B 断面　南

12 号住居跡掘り方全景　西

12 号住居跡掘り方 B 断面　南

12 号住居跡掘り方 B 断面　南

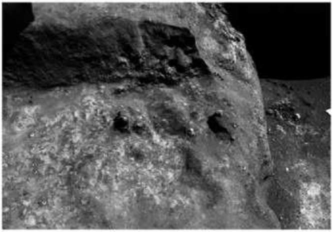


12 号住居跡炭化材出土状況　南

12 号住居跡カマド全景　西

12 号住居跡カマド断面　南

12 号住居跡カマド天井石出土状況　西



12 号住居跡カマド掘り方全景　西

13 号住居跡全景　北

13 号住居跡 A 断面　南

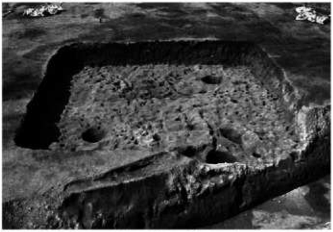
13 号住居跡 B 断面　西

13 号住居跡遺物出土状況　西

13 号住居跡遺物出土状況　西

13 号住居跡遺物出土状況　西

13 号住居跡遺物出土状況　西


13 号住居跡掘り方全景　南

13号住居跡掘り方A断面　南

13号住居跡貯蔵穴全景　北

13号住居跡床面ピット列全景　南

14号住居跡全景　西

14号住居跡遺物出土状況　南

14号住居跡掘り方全景　西

14号住居跡カマド全景　西

14号住居跡カマド遺物出土状況　西

14 号住居跡カマド掘り方全景　西

14 号住居跡ピット 3 断面　西

14 号住居跡ピット 4 断面　南

15 号住居跡全景　南

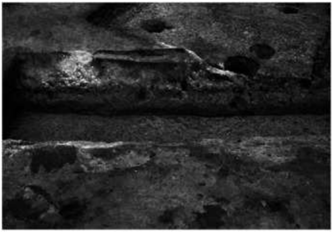
15 号住居跡 B 断面　西

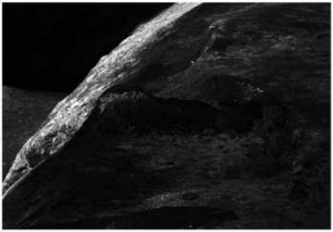
15 号住居跡掘り方全景　南

15 号住居跡炭化物出土状況　西

16 号住居跡全景　南

16 号住居跡A断面　南


17 号住居跡全景　南


17 号住居跡A断面　西

18 号住居跡全景　西

19 号住居跡全景　西

19 号住居跡A断面　西

19 号住居跡掘り方全景　西

19 号住居跡掘り方A断面　西

19 号住居跡遺物出土状況　南

19 号住居跡カマド全景　西

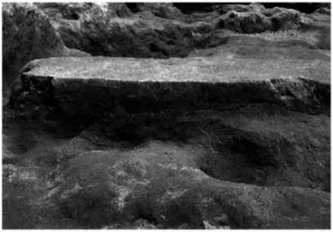
19 号住居跡カマド掘り方全景　西

19 号住居跡カマド掘り方P断面　西

20 号住居跡全景　南

20 号住居跡C断面　南

20 号住居跡掘り方全景　西



20 号住居跡掘り方C断面　南

20 号住居跡炉断面　南

20 号住居跡ピット 2 断面　南

21 号住居跡全景　南

21 号住居跡 B 断面　南

21 号住居跡遺物出土状況　南

21 号住居跡掘り方全景　南

21 号住居跡カマド全景　西

21 号住居跡貯蔵穴全景　南

21 号住居跡貯蔵穴断面　西

23 号住居跡全景　北

23 号住居跡掘り方全景　西

23 号住居跡カマド全景　西

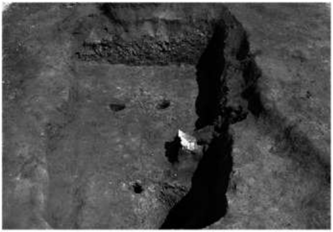
23 号住居跡カマドN断面　西

23 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況　北

23 号住居跡貯蔵穴断面　西

24 号住居跡全景　北

24 号住居跡掘り方全景　西


25 号住居跡全景　南

25 号住居跡A断面　北

25 号住居跡遺物出土状況　南

25 号住居跡カマド全景　西

26 号住居跡全景　西

26 号住居跡A断面　東

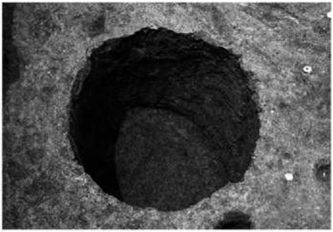
26 号住居跡掘り方全景　西

26 号住居跡カマド全景　西

26 号住居跡カマドＬ断面　西

26 号住居跡カマドM断面　西

26 号住居跡カマド掘り方Ｊ断面　北


26 号住居跡貯蔵穴全景　東

27 号住居跡全景　西

27 号住居跡上面遺物出土状況　西

27 号住居跡Ｂ断面　南

27 号住居跡A断面　東

27 号住居跡上面焼土塊断面　南

27 号住居跡遺物出土状況　北

27 号住居跡上面遺物出土状況　西

27 号住居跡遺物出土状況　西

27 号住居跡掘り方全景　西

27 号住居跡カマド全景　西

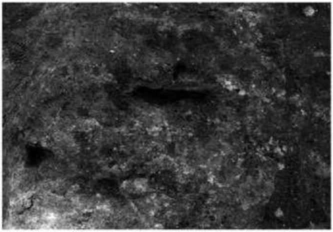
27 号住居跡カマドR断面　南

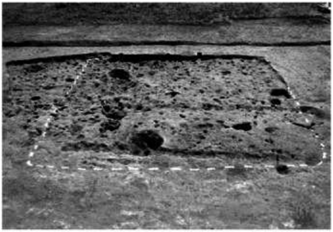
27 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況　東

28 号住居跡全景　西

28（上）・29（下）号住居跡 C 断面　南

28・29 号住居跡 B 断面　南


28 号住居跡炉断面　南


28（左）・29（右）号住居跡掘り方全景　西

29 号住居跡全景　西

29 号住居跡カマド痕跡　南

1号土坑全景　東

1号土坑断面　東

2号土坑全景　南

2号土坑断面　南

3号土坑全景　南

3号土坑断面　南

4号土坑全景　北

4号土坑断面　北

5号土坑全景　南

5号土坑断面　南

5号土坑遺物出土状況　南

6号土坑全景　南

6号土坑断面　西

7号土坑全景　南

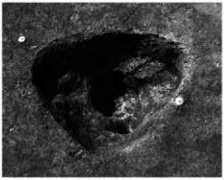
7号土坑断面　西

8号土坑全景　南

8号土坑断面　南

9号土坑全景　東

9号土坑断面　東


10号土坑全景　南

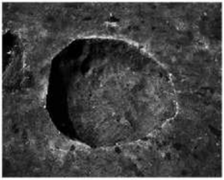
10号土坑断面　南

11号土坑全景　南

11号土坑断面　南

12号土坑全景　南

12号土坑断面　南


13号土坑全景　南

13号土坑断面　南

14号土坑全景　南

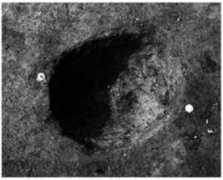
14号土坑断面　南

16号土坑全景　南

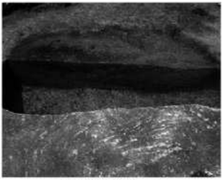
16 号土坑断面　南

22 号土坑全景　南

22 号土坑断面　南


23 号土坑全景　南

23 号土坑断面　南


24 号土坑断面　南

25 号土坑全景　西

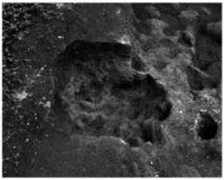
25 号土坑断面　東

28 号土坑全景　東

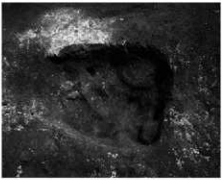
28 号土坑断面　南

29 号土坑断面　南

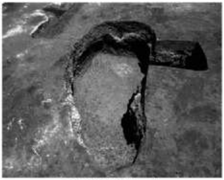
30 号土坑断面　東


31 号土坑全景　南

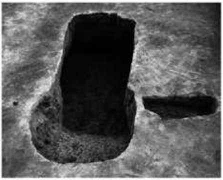
31 号土坑断面　南

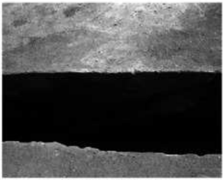

32 号土坑全景　南

32 号土坑断面　南


33 号土坑全景　南

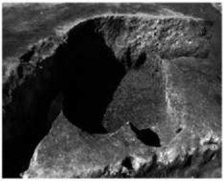
33 号土坑断面　西


34 号土坑全景　南


34 号土坑断面　西

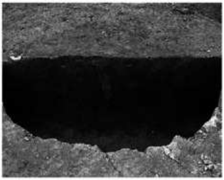
35 号土坑全景　西

35 号土坑断面　西


36 号土坑全景　南

36 号土坑断面　南

37 号土坑全景　南

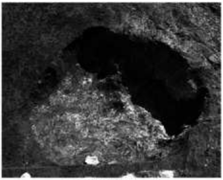

37 号土坑断面　南

38 号土坑全景　南

38 号土坑全景　西

39 号土坑全景　南

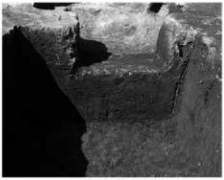
39 号土坑断面　南


40 号土坑全景　西

40 号土坑断面　西

41 号土坑全景　南

42 号土坑全景　南西


42 号土坑断面　西

43 号土坑全景　西

43 号土坑断面　西

44 号土坑全景　西

44 号土坑断面　南

45 号土坑全景　南

45 号土坑断面　南

46 号土坑全景　北

46 号土坑断面　西

46 号土坑断面　北

46号土坑東壁工具痕　西

47号土坑全景　東

47号土坑断面　南

48号土坑全景　南

48号土坑断面　南

49号土坑全景　南

49号土坑断面　南

50号土坑全景　南

50号土坑断面　南

51号土坑全景　南

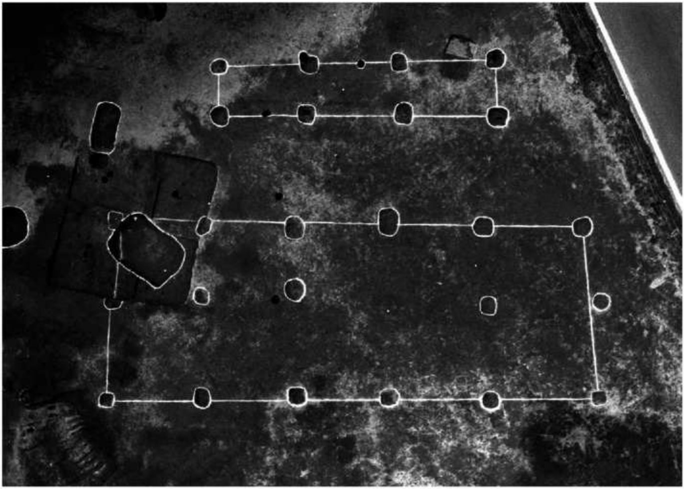
51号土坑断面　南

52号土坑全景　南

52号土坑断面　南

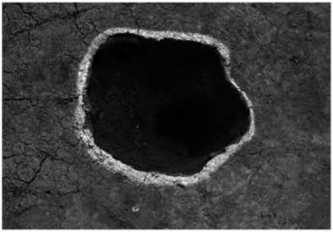
54号土坑全景　南

54号土坑断面　南



1（上）・2（下）号掘立柱建物跡全景　北上空

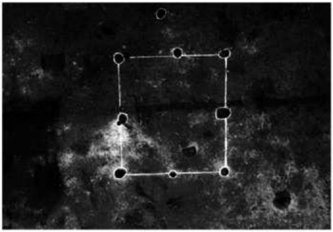
1号掘立柱建物跡全景　西



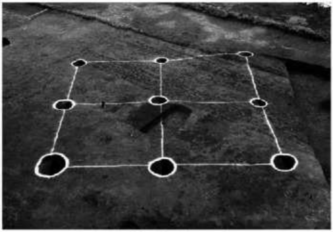
1号掘立柱建物跡ピット5全景　西

1号掘立柱建物跡柱穴　南

2号掘立柱建物跡全景　西


3号掘立柱建物跡全景　南上空

3号掘立柱建物跡ピット3断面　南

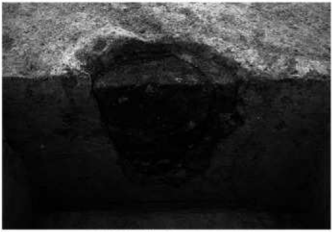

4号掘立柱建物跡全景　南西

4号掘立柱建物跡ピット1断面　南

4号掘立柱建物跡ピット8断面　南

5号掘立柱建物跡全景　西

5号掘立柱建物跡ピット3断面　南


5号掘立柱建物跡ピット4断面　南

1号溝全景　南

1号溝A断面　南

1号溝北部掘削痕　南

2号溝全景　東

2号溝F断面　東

2号溝G断面　西

2号溝西部全景　東

3（右）・4（左）号溝全景　南

3号溝A断面・遺物出土状況　南

3号溝遺物出土状況　西

5号溝全景　西

5号溝C断面　西

1号方形周溝墓全景　南上空

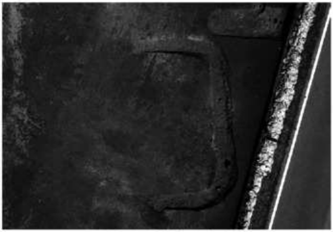
1号方形周溝墓E断面　南

1号方形周溝墓G断面　西

1号方形周溝墓1号壺棺出土状況　南

1号方形周溝墓2号壺棺出土状況　南

1号方形周溝墓遺物出土状況　東



2号方形周溝墓全景　南上空

2号方形周溝墓D断面　南

2号方形周溝墓E断面　東

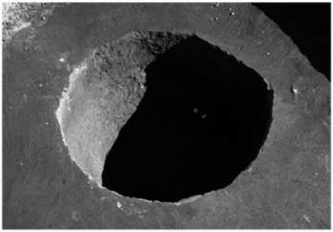
2号方形周溝墓遺物出土状況　南

3号方形周溝墓全景　西上空

3号方形周溝墓D断面　西

3号方形周溝墓H断面　西

3号方形周溝墓遺物出土状況　西


1号井戸全景　西

1号井戸断面　西

2号井戸全景　北

2号井戸断面　東

1号道全景　東

1号道A断面　西

1号炉全景　西

1号炉断面　南

1号集石全景　南

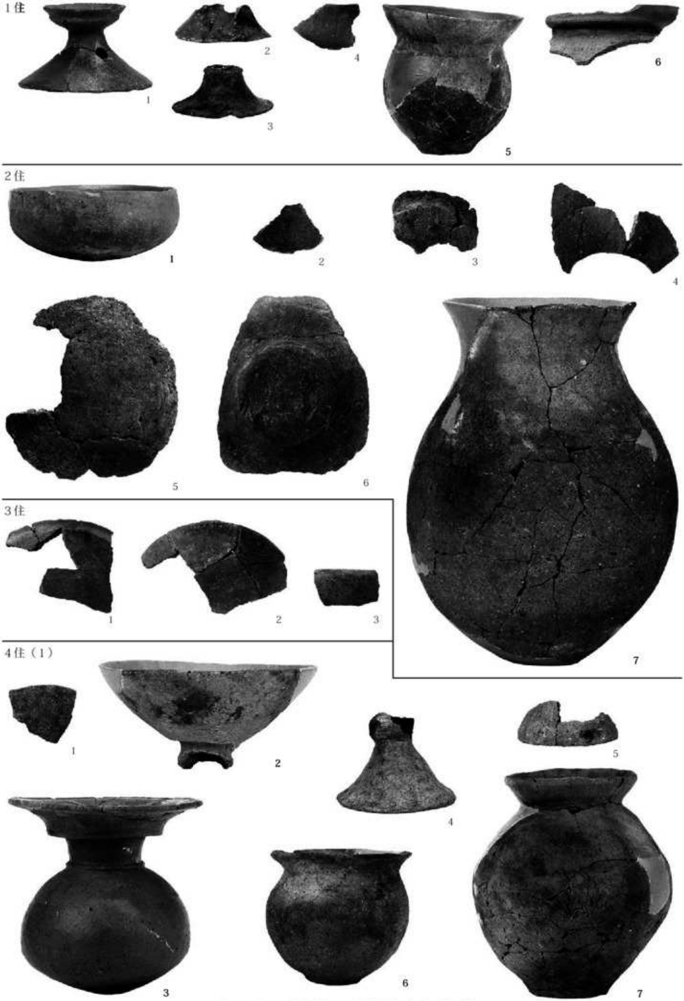
2号集石全景　南

3号集石全景　西

3号集石断面　北

96Ⅰ-3遺物出土状況　南

96Ⅰ-3遺物出土状況　南



1号・2号・3号住居跡・4号住居跡（1）出土遺物

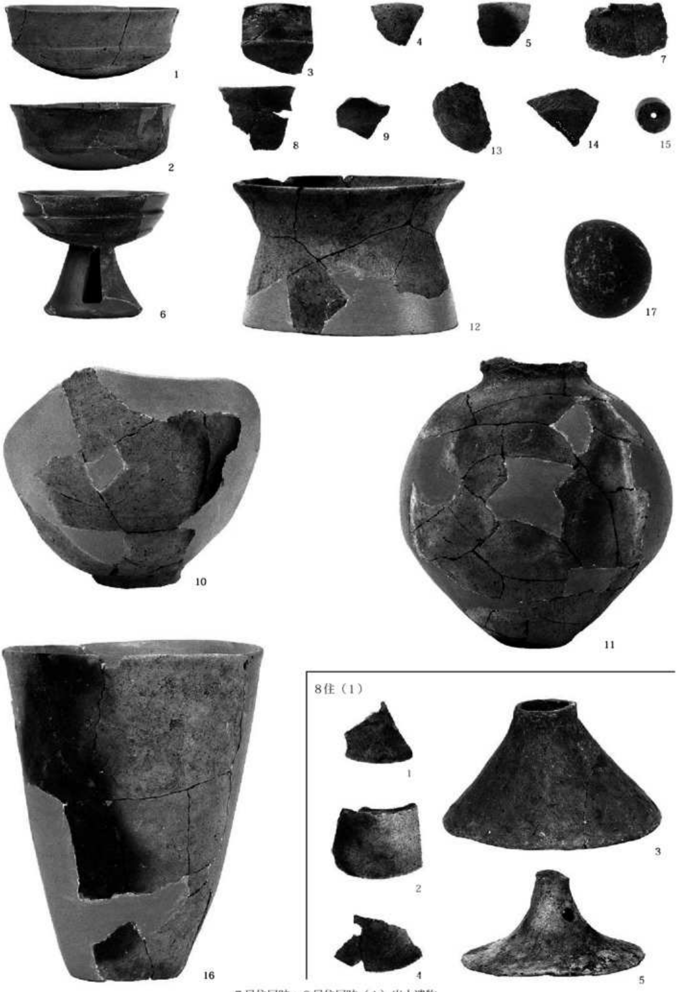
4住（2）

5住

6住

4号住居跡（2）・5号・6号住居跡出土遺物

7住



7号住居跡・8号住居跡（1）出土遺物

PL.42

8住（2）

6

13

9

8

7

11

12

10

9住

1

2

10住（1）

1

2

3

4

5

7

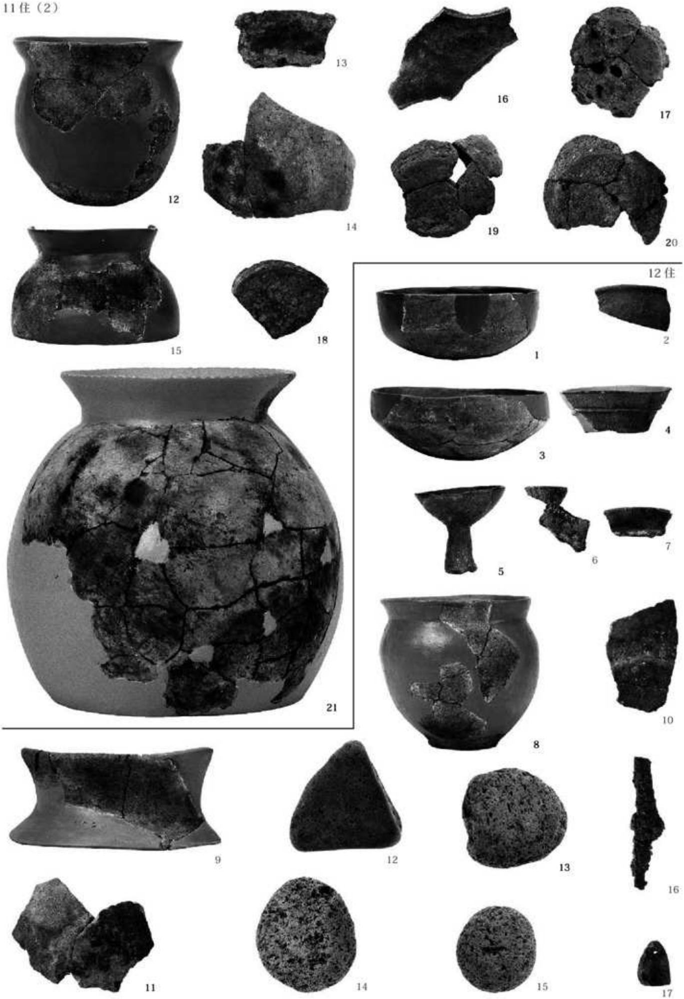
8号住居跡（2）・9号住居跡・10号住居跡（1）出土遺物

10住（2）

11住（1）

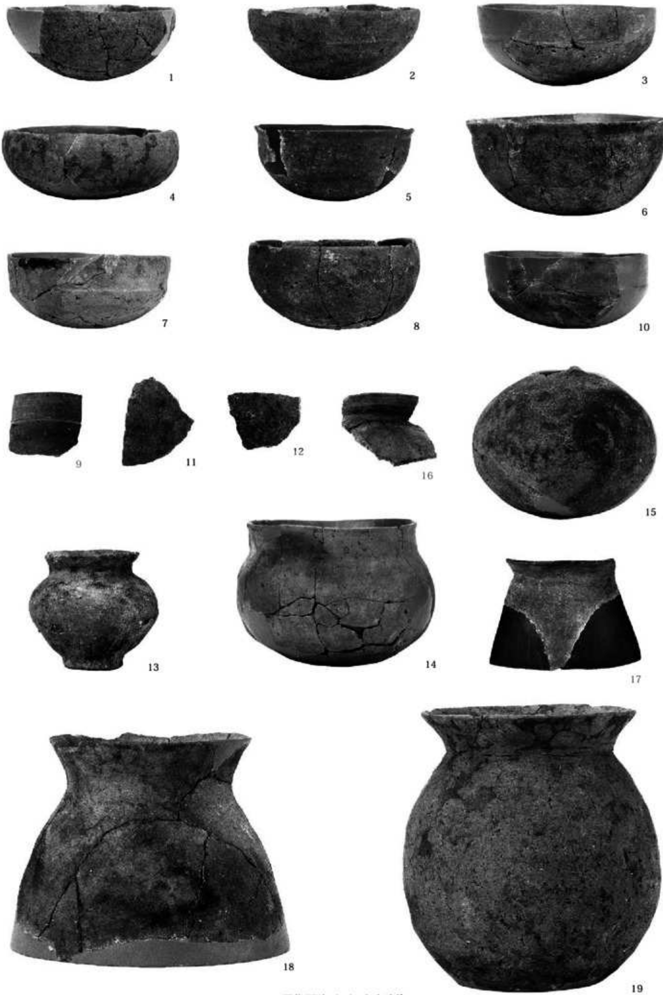
10号住居跡（2）・11号住居跡（1）出土遺物

11住（2）



11号住居跡（2）・12号住居跡出土遺物

13号住居跡出土遺物



14号住居跡（1）出土遺物

20

21

22

23

24

25

14号住居跡（2）出土遺物

14住（3）

16住

18住

19住

20住

14号住居跡（3）・16号・18号・19号・20号住居跡出土遺物

21住

1

2

5

6

3

4

7

9

8

11

10

23住（1）

1

5

2

9

3

6

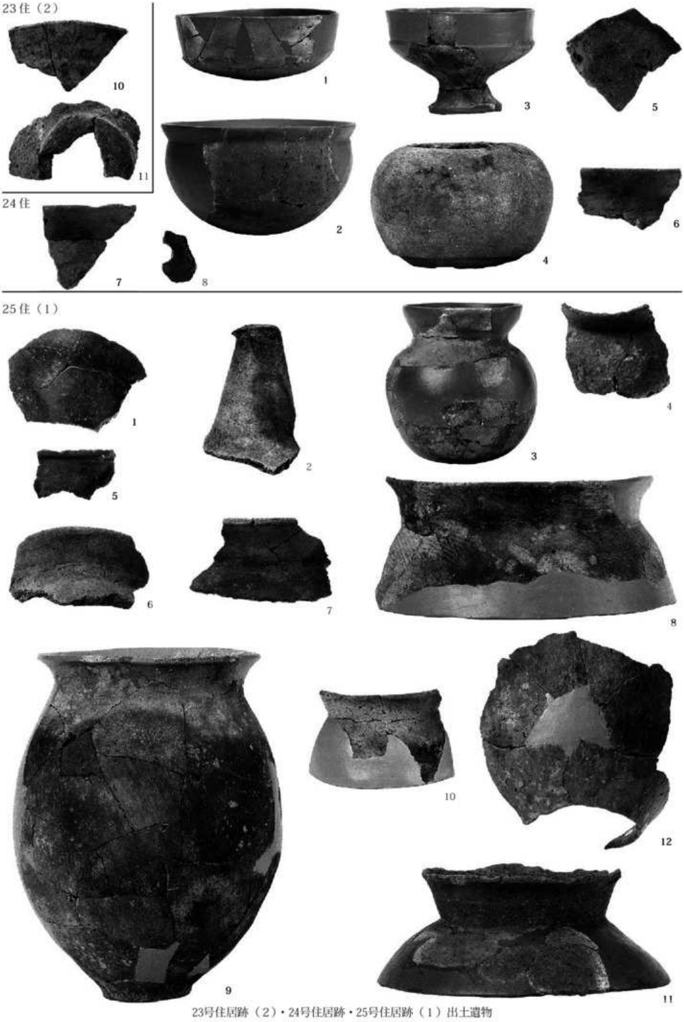
8

4

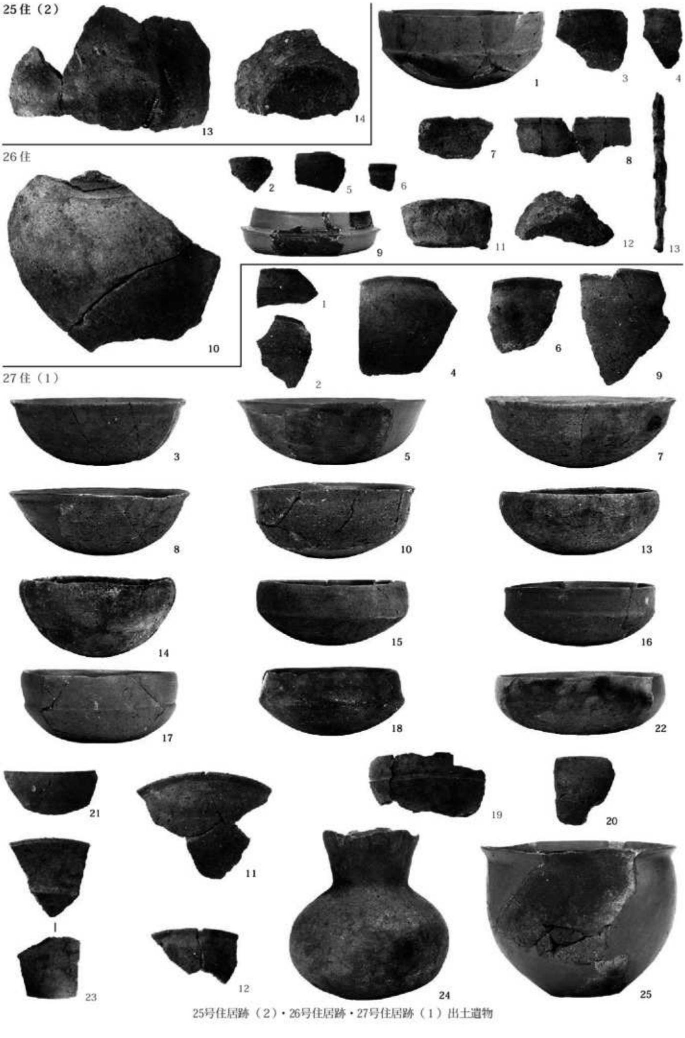
7

21号住居跡・23号住居跡（1）出土遺物

PL.50



23号住居跡（2）・24号住居跡・25号住居跡（1）出土遺物



25号住居跡（2）・26号住居跡・27号住居跡（1）出土遺物

26

27

28

29

30

32

33

34

31

35

38

36

37

27号住居跡（2）出土遺物

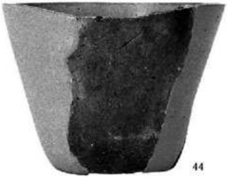
39

40

41

42

43

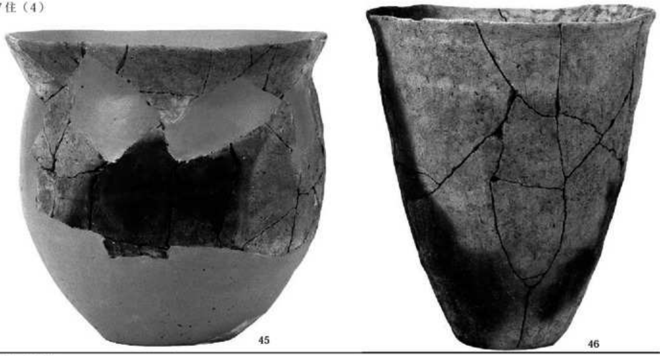


44

47

27号住居跡（3）出土遺物

27住（4）

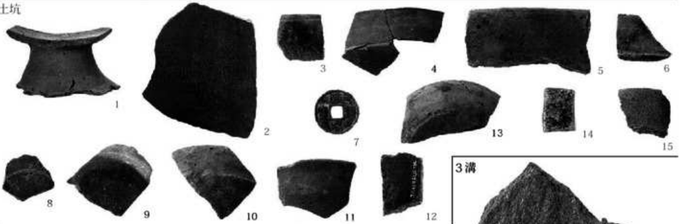


45 46

28住・29住

1 2 3 4

土坑

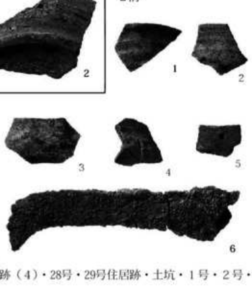


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

1溝

1 2 1

2溝



1 2 3 4 5 6

3溝

1

27号住居跡（4）・28号・29号住居跡・土坑・1号・2号・3号溝出土遺物

1方周

1

2

3

4

5

6

7

8

2方周

1

3方周（1）

1

2

3

4

5

6

7

9

1号・2号方形周溝墓・3号方形周溝墓（1）出土遺物

３方周（２）

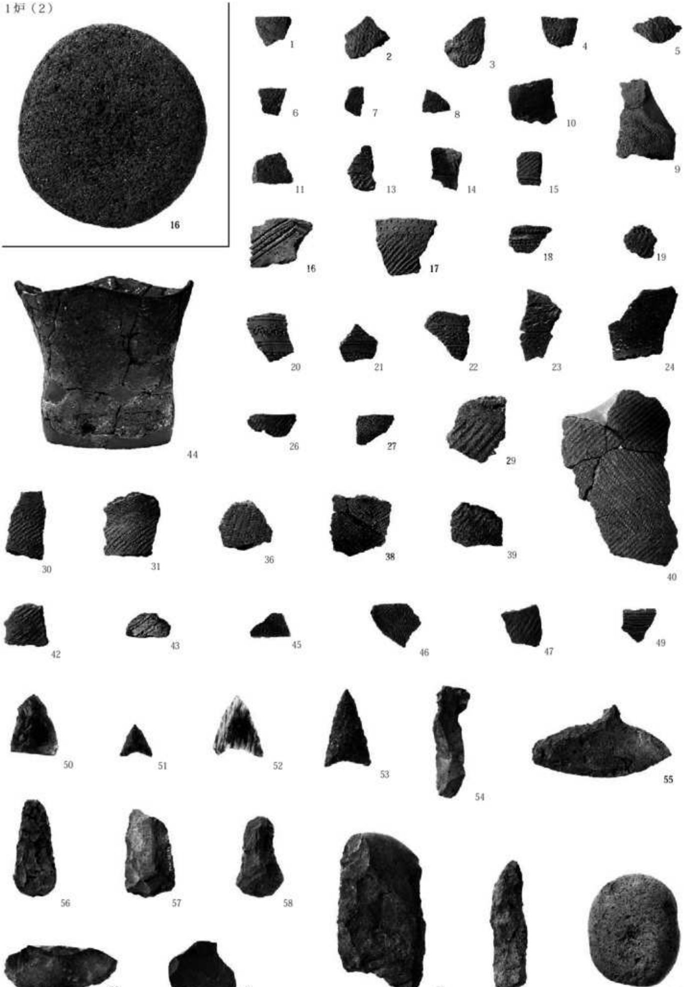
１井戸

２井戸

１道

１炉（１）

３号方形周溝墓（２）・１号・２号井戸・１号道・１号炉（１）出土遺物



1号炉（2）・縄文時代遺構外出土遺物

遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	とみだたかいしいせき
書　名	富田高石遺跡
副書名	一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）報告書
巻　次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第494集
編著者名	女屋和志雄/橋本淳/岩崎泰一/齊田智彦
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20100319
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	とみだたかいしいせき
遺跡名	富田高石遺跡
所在地ふりがな	まえばししとみだまち
遺跡所在地	前橋市富田町
市町村コード	10201
遺跡番号	00287
北緯（日本測地系）	362305
東経（日本測地系）	1390849
北緯（世界測地系）	362316
東経（世界測地系）	1390901
調査期間	20000403-20010331/20010401-20010930/20020401-20020705
調査面積	7,964.80
調査原因	道路建設工事
種　別	集落/生産/その他
主な時代	縄文/弥生/古墳/平安/中世/近世
遺跡概要	集落-縄文-土坑6＋土器＋石器/古墳-竪穴住居27-方形周溝墓3-壺棺2＋土師器＋須恵器/時期不明-竪穴住居1/生産-平安-溝3-道1＋土師器/中・近世-掘立柱建物跡5-溝2-土坑39-井戸2-集石3＋土器＋石器＋陶磁器＋金属製品
特記事項	古墳時代前期の前方後方形周溝墓1基を検出。
要　約	旧石器時代～近世の複合集落。縄文時代は落とし穴が散在。集落の縁辺部に相当。古墳時代は前期と後期に画期がある。前期では3基の方形周溝墓が検出され、うち1基は全長が24mの前方後方形である。平安時代は生産域に利用。中世の掘立柱建物跡は、柱穴に獣骨を埋めた特異なあり方である。旧石器時代は第418集『上武道路・旧石器時代編（1）』に掲載。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第494集

富田高石遺跡

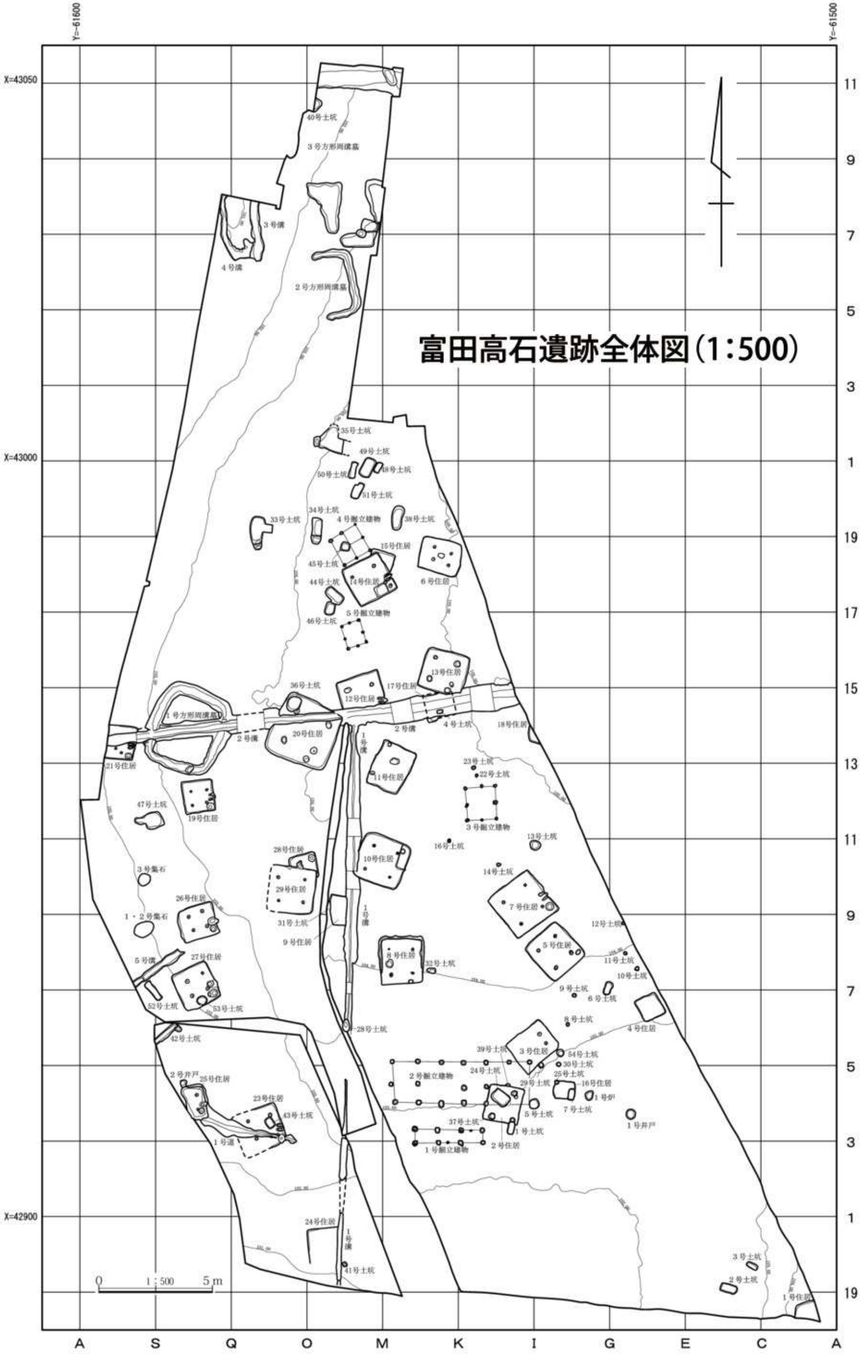
―一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その１）報告書―

平成22年（2010）３月５日　印刷
平成22年（2010）３月19日　発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地２
電話（0279）52-2511（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／上毛印刷工業株式会社



富田高石遺跡全体図（1：500）